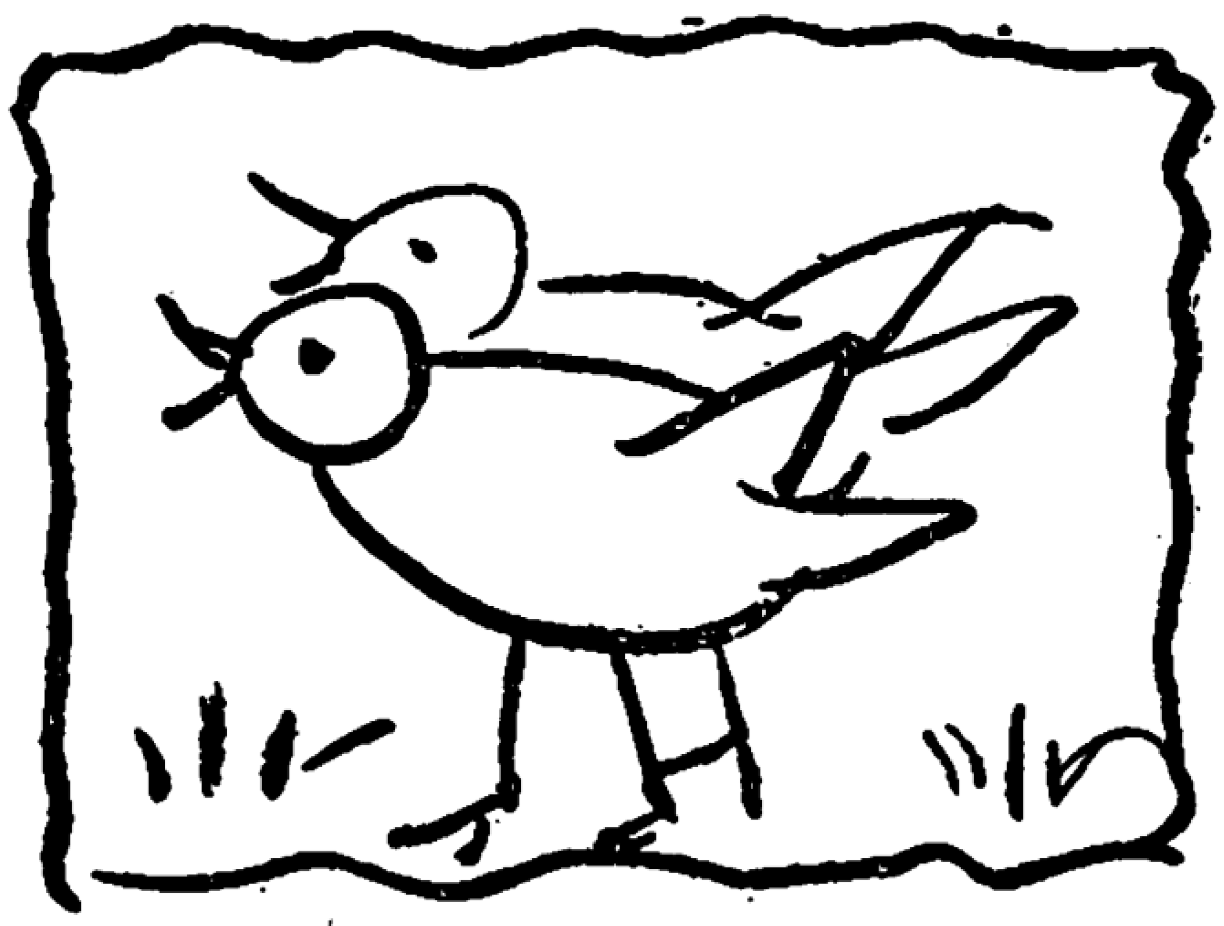
女人藝術



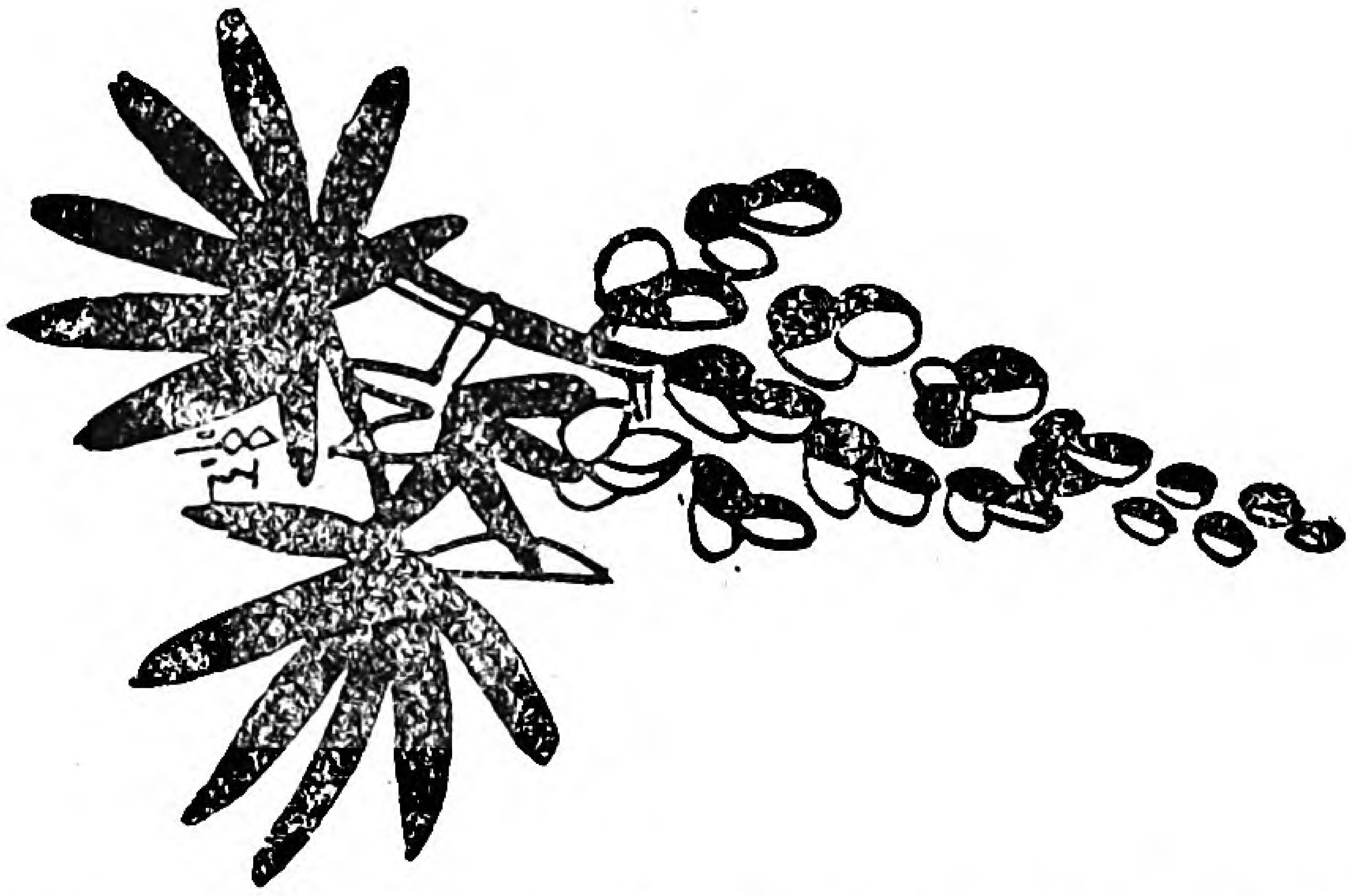

春のパラソル
今春の流行は薄色で二重張のぼかし、友禪、ドロンウワーク、絞り染應用が著しく現はれ、柄も昨年より二寸位長く、先の曲つたものが相當見受けられます。最新流行品を豊富に取揃へました、何卒御用命の程を………
地方の御註文は……
◇通信販賣係へ……
◇振替東京八八〇番
東京・銀座
松屋





女人藝術四月號 目次

——禁轉載——



實生活の一頁

『女性進出行進曲を募る』豫告

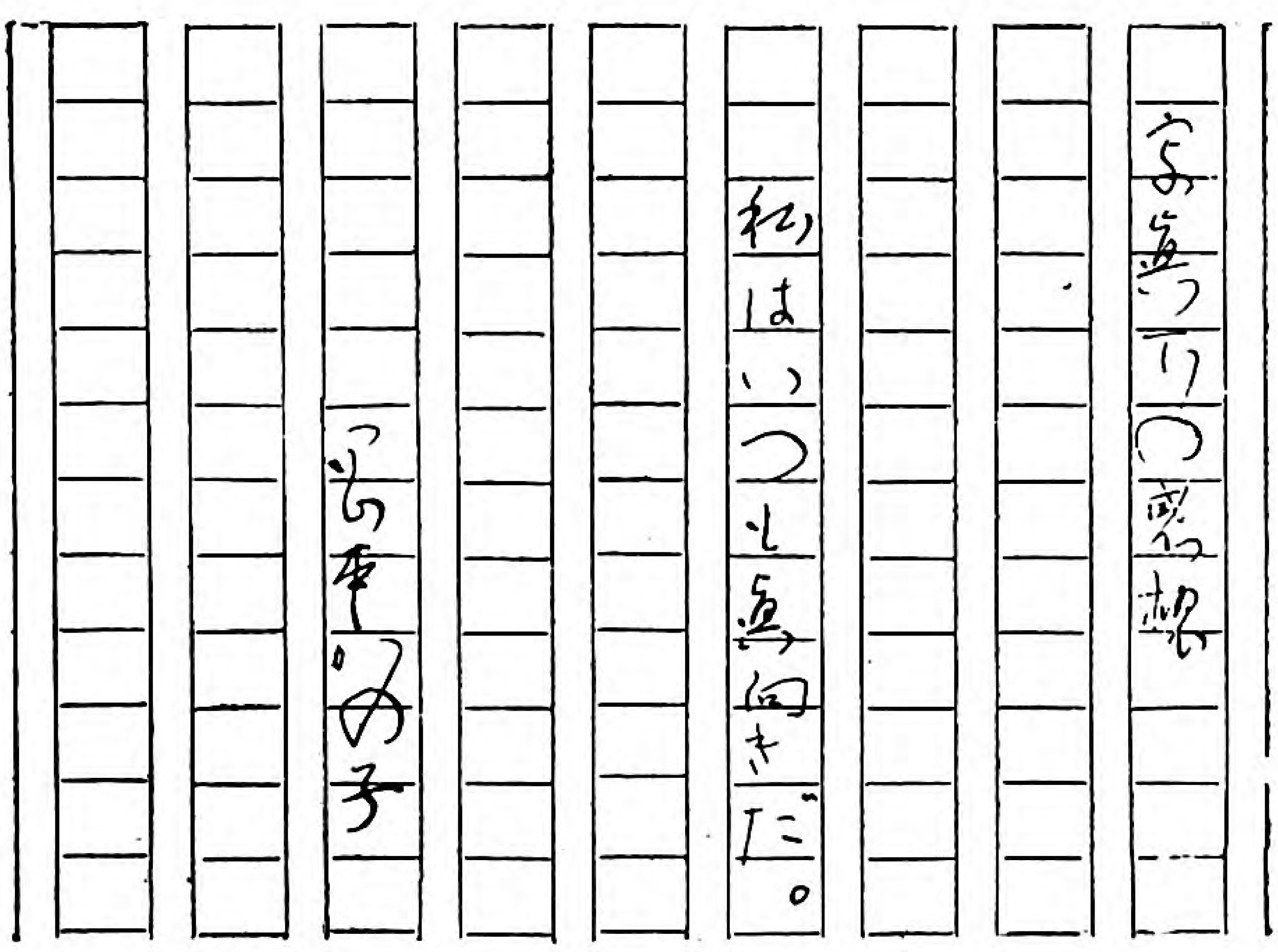
英傑秀吉

河部五郎、山本嘉一、鳥羽陽之助
澤田清、楠英二郎、葛木香一
市川小文治、高勢實、南部章三
小杉勇、三桝豊、大崎史郎
梅村蓉子、伏見直江、常盤操子
他 新舊合同オール・スター・キャスト

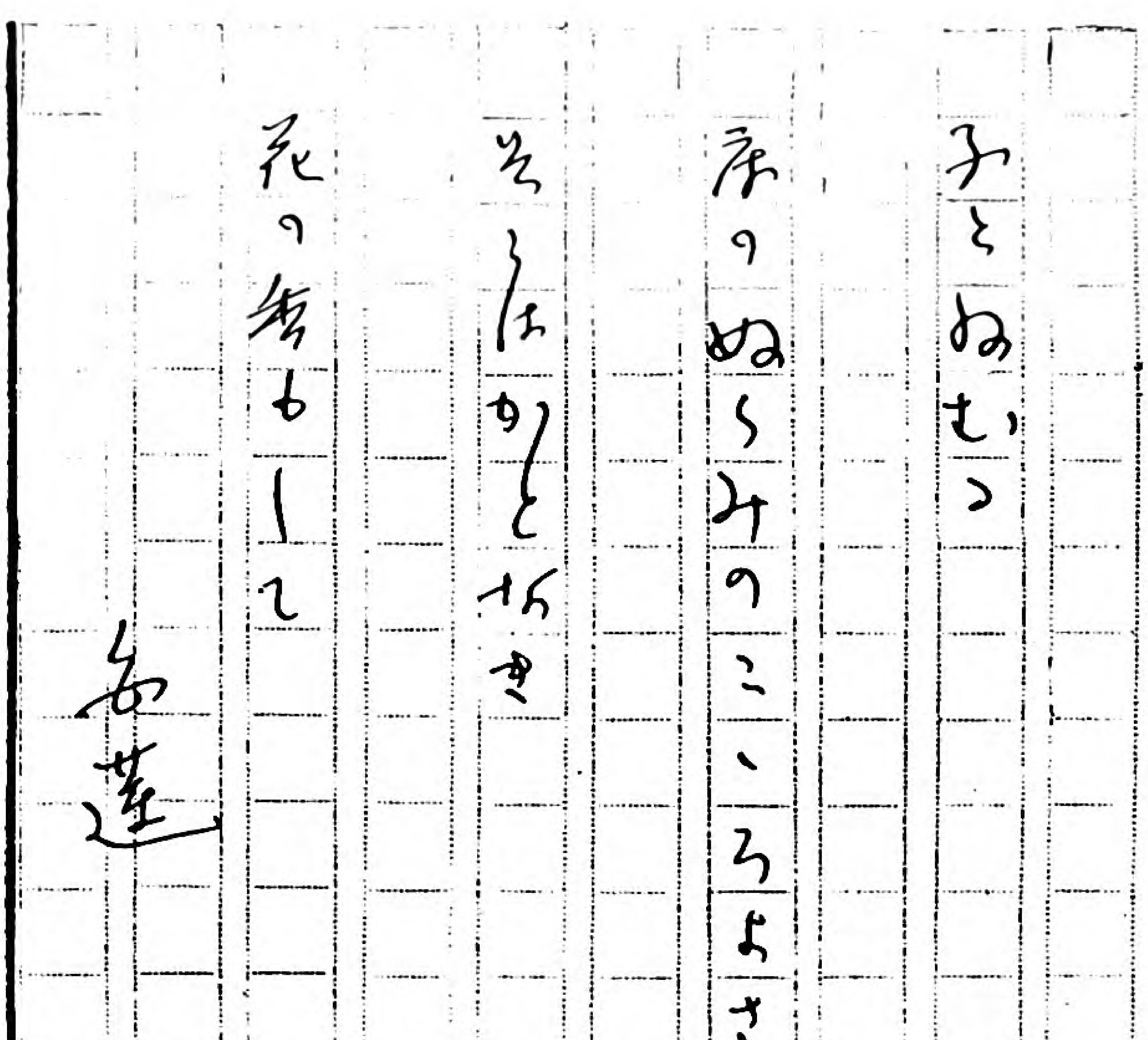
池田富保監督

日活春季大作

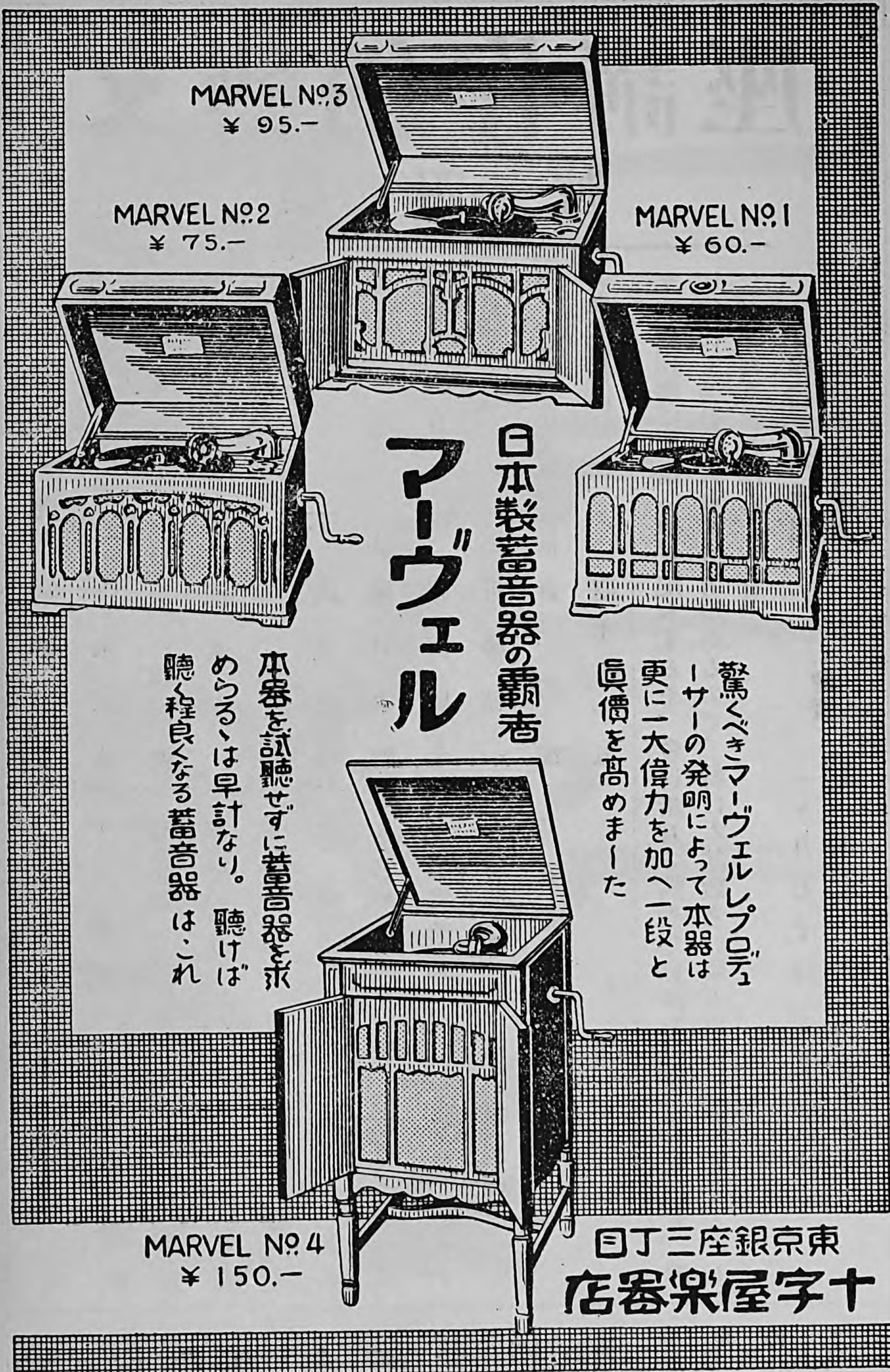








子とねむる
床のぬくみのこゝろよさ
そこはかとなき
花の香もして
白蓮


MARVEL No.3
¥ 95.—
MARVEL No.2
¥ 75.—
MARVEL No.1
¥ 60.—
日本製蓄音器の覇者
マーヴェル
驚くべきマーヴェルレプロデューサーの発明によって本器は更に一大偉力を加へ一段と眞價を高めました
本器を試聽せずに蓄音器を求めらるゝは早計なり。聽けば聽く程良くなる蓄音器はこれ
MARVEL No.4
¥ 150.—
東京銀座三丁目
十字屋樂器店



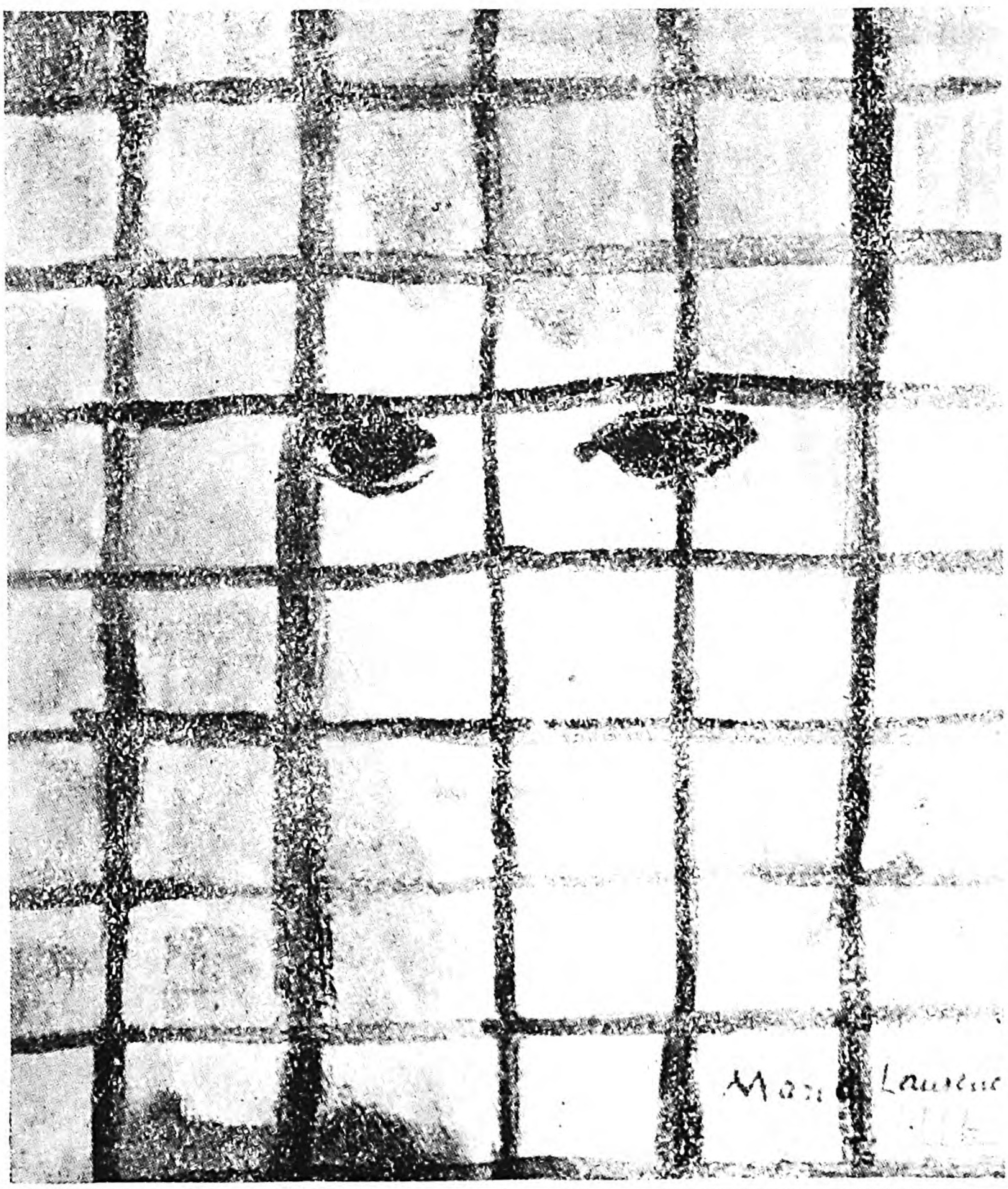
女性缺點摘發座談會、向つて左から藤森成吉、間、谷崎精二、廣津和郎、三上於菟吉、直木三十五の諸氏――レインボーグリルにて



三月八日山本宣治氏告別式後の行死——本郷通りにて

女人藝術

四月號



女性缺點摘發座談會

出席　廣津和郎
藤森成吉
谷崎精二
直木三十五
三上於菟吉

缺席　佐藤春夫
近松秋江
德田秋聲
前田河廣一郎
中村武羅夫
北原白秋

私はこのごろ女性讃美家となり、缺點摘發などは思ひも及ばず——と、コレハとにかく實は明晩關西へ出かける用事あり、五日でなければ歸京致し兼ねますから、參會は覺束ないわけです。次の機會には出席させて下さい。右御返事まで——佐藤春夫

結構ですが、二日は二日會があつて殘念乍ら出席出來ません——德田秋聲

當日は、久し振りに、秋聲氏の二日會に出席することになつてゐましたのみならず、既に十四五日前より風邪にて甚だしく咽喉を害しをり、家內に於いても、なるべく發聲を控へ居り候次第にて、或は、御免を蒙るやも知れず。もつと溫暖の候になつて御招集に應じたく存候　艸々——近松秋江

秋聲氏の會へも、今のところ分りません。

フウジ　ヤユケヌケツテンワオシヤベ　リ
マヘタコウ——電文

御懇書拜見しました。

女性の缺點摘發座談會への御招待を蒙りましたが、折角ながら私にはさうした不謙讓な男性の遊戲に加はり度く思ひません。個々の女性に對しての批判はとにかくこれを女性全體に移して果して正鵠を得るや否や、私には十分に自信を持ち得ません。また他の缺點を摘發するなど〻いふ嚴めしい資格が私にありさうに思へません。のみならず摘發といふ風の文字の內容と語感とについて愉快をもち得ない私は、少くとも散文家ではないといふことです。他が缺點と見るものにも何かの美を發見することが私たちの役目ですから、あしからず御ゆるし下さい。不盡のお詫びまで
艸々不一——北原白秋

三上　女から男を見たら淺墓かも知らんが、男から女を見ると隨分淺墓だね。

廣津　男つて隨分おつちよこちよいだ、けれどもおつちよこちよいだから仕事をするんだからね。

三上　座談會で餘り女の惡口を言ふと消してしまふよ。

廣津　婦女界なども皆消してしまふね、校正の時も、どうせ直した所で又消すと思ふから何も直さなかつた。

時雨　此處のは危くない限り其儘書きます。

三上　今井さん、吾々に非常に同等の權利とか色々の要求をして居ますね、色々難かしい學說を拔いて、唯感じて行つたら‥‥何んな譯だからと云ふ意味でなく、同等とか同權と云ふ言葉は‥‥

今井　昨日も(文藝春秋議會)そんな御話が出たですが、例へば參政權の問題でも、私大變不服だつたんです、それを得れば大變女が偉くなつたやうな氣持になりさうに思ふらしいです、さうぢやない、男の方が持つてゐるものは女も當然持つてよいと云ふやうな、人間として當り前だと云ふ考で私達欲しいと思ふんですけれどね。

三上　非常に僕は外面的な感じがする、男はもつと中から行く。

廣津　僕は、皆が欲しがるものは遣るべきだと思ふ。

三上　斯う云ふ運動ばかりではない。

廣津　それは例なんだ、何でも‥‥、今の政治を肯定する意味でとか何とか云ふ、さういふ意味で色々批評はあるが、僕に言はせると、何んしろ陽を當てるべきだと思ふ、男は陽が割合當つて居るからね。女もやはり陽を當てゝ伸びるだけは伸ばして行く。

三上　僕が見て居る範圍は、ひどく陽が當り過ぎる。(笑聲)

廣津　それは婦人ばかりの雜誌が出來上つたと云ふこともあるのだからね、併し過渡期だから、それは君極端なのが幾らも出て來るけれど、極端だつて前よりはましだ。

三上　僕は、女が仕事もしないくせにするやうな顏をするのが不愉快だ。

廣津　それは主觀的だ、今迄は仕事をさせようともしなかつたんだ。

三上　出來なかつたんだらう。

廣津　吾々、女が同等の所迄高くなつて來なかつたら、退屈でやり切れない。

三上　高くなつたつて退屈だぜ。女が高くなつたと云つても、吾々みたいな氣持で、君が言ふのを僕が感ずるやうな、さう云ふ感じ方で決して通りはしない。

廣津　併し陽を當てないと分らない。

三上　だつて、隨分當つて居る人を見てもさうだ。

廣津　當つて居ないから‥‥、今度の「女人藝術」を見てもかなりヒステリカルだよ。今迄の羞恥を棄てゝ露骨になつたと云ふ感じを見せてるだけ‥‥。

時雨　それは出來るだけ赤裸々になつてみたいと云ふ氣持です。自分でいけないと氣がつけば、誰でも良い處へ落着く。

廣津　早く氣がつかない方がいゝ。

時雨　氣がついたと云つても前に逆戻りするなんと云ふ氣遣ひはない。

廣津　あゝ云ふいゝものは、もつと氣がつかない方がいい。

時雨　いゝものを見せると云ふ氣持はないかも知れぬが、あそこ迄赤裸々になる勇氣だけでも大概の人には言へませんよ、誰でも女は優しく良く見て貰はうと云ふ氣持があつて、白粉をつけたものを見せて、眞劍のものを見せることを厭つた、眞劍を見せたから稍ゝヒステリカルと云ふ‥‥。

廣津　二十年か三十年陽を當てたら隨分違ふ

と思ふ。

今井　何でも新しい事の興り始めと云ふものは、皆こんなものでせう。

廣津　菊池の考でも、兎に角女は、家庭は何とか・・・神聖にして侵すべからずとか、婦女界式のことを言ふ、昨日もそれで、夫婦は同心一體だと云ふ、だから政治的意見などは詰り亭主を通して言へるから、未婚婦人に向つては公民權なんかを與へても、既婚婦人――妻には要らないと云ふ、其の位家庭は平和なものだと言つて居る。

時雨　それでは世の中御無事過ぎる。・・・でも今までの妻と云ふものは、可成り自分と云ふものを殺して居るんですね。

廣津　さう云ふのでなく、時々痴話でない喧嘩をしたい。

今井　賛成。

岡森　異議なし。

三上　廣津はさう云ふ點で、非常に樂天的で、非常に未來を考へて居る、僕は現代色々やつて動いて居る人を見ると、少々悲觀する、大部分、よく見てみると、吾々中學校時代に悩んだやうなものをお悩みのやうだ。

廣津　前には、中學校時代だけの悩みも見せなかつた。

時雨　だけれど、私達から男を見ても、「偉さうに言つても何だこんなものか」と思ふことがある。女の人の悩みを中學生位だとして偉さうなことを言ふやうだが・・・

廣津　君(三上氏)は言葉が旨いから、氣持以上を言ふ。

直木　昨日も政治に非常に拘泥してゐたが、さう云ふ事は問題にならない。女で、例へば則天武后と云ふやうな人がある。どれ丈け束縛されても、力ある人なら、さう云ふ議會參政とかは問題ではない、何う云ふ形式に於てでも力は出せる。

廣津　それは違ふよ。男だつて力が有る者なら皆出せると云ふことはない。力が有つたつて出せないよ。

直木　僕は假に斯う云ふ例を取る、女が婦人參政問題をヤキ〳〵して居る、政治上のさう云ふ自由を得た所で、それが直ぐ政治上何う云ふ自由になるか、女は生活上他に考ふべき事がある、性慾問題の如き、夙の昔に解決すべきことで、そんな事は何んでもない問題だ、それすらまだ、さう云ふ形式に於て破るほかに破り得ない力しか持つて居ない。駄目なんだ、もつと根本的に人間として大きい力を養はなければならぬ。無産黨があれだけの團結を以て、詰り政治的に認められて、あれで本當の仕事は何時出來るか、そんなものを得ただけで直ぐ出來る問題ではない、・・・婦人參政が唯一の方法として運動して居ることは解らぬ。

廣津　そりや色々な問題があるけれど、或人達は他のものを見ないで眞直に行つても宜いぢやないか、他の事は他の事だ。婦人公民權だけが問題ではないと云つても、他の事は其人達が考へないでそれだけを考へても宜いぢやないか、色々のものを考へるなら熱狂しない。

直木　それは悪いとは言へぬ、併しもつと根本的の大きい問題で、まだ破り切れないこと、例へば性慾問題を赤裸々に出すと云ふやうなこと、さう云ふことは考へないで參政權問題だけに躍起となる、其の態度が可笑しいと思ふ。

廣津　そりや色々のものが欲しいんだよ。

直木　さう云ふ善くなると云ふ意志、參政權が欲しいとか、さう云ふ事は問題でない、當然取つてよい、けれどももつと根本的の、女として破るべき、生活上の自由を得るとか、性慾問題の如き、簡單に破れる問題すら破り得ない、さうしてさう云ふ事だけに

躍起となつて居るのは可笑しい。それよりも前にもつとやるべき事は幾つもある、政治的自由などに行く前に、生活上に色々自由を得る問題がある。

三上　僕は、一番女の人を見て變なのは、戀人が居なかつたり亭主が居なかつたりして居る時は、非常に運動をしたり、智慧を磨いたり、知識を得ようとするけれども、何か出來ると、それがポカリと一時馬鹿みたいになつて、昔の眞面目な商家の女房よりもう少しぼんやりして、うつとりして戀愛生活などに入る、あれぢや女の人仕事は出來ない。

廣津　そりや男にもさう云ふ奴があるよ。(笑聲)

三上　それが、社會人として活動しようと云ふので先頭切つてる人もさうだ、もう少し……

廣津　保守的に攻撃して居るのか、理想境に達した所で攻撃するのか。

三上　僕は現在だ。

直木　僕の言ふのは、女がまだ男に賴つて事をしようとする、それを第一棄てなくちやならぬと思ふ。女が避姙を法律の力で何うすると云ふやうなことなしに、女が自分で避姙してしまへば問題はない。婦人參政權でも、やつぱり男の力に依らうとする。

廣津　そりや、蔓が伸びようとする時に、一寸其處にある物に掴まる位は仕樣がないよ。まだ形もはつきりしない芽生の時に、いやに完全の批評を下しても駄目だよ。さうして女の人が戀愛に這入れば有頂天になると云ふが、男にもさう云ふのがあるし、女が全部さうだとも限らない。

三上　今は少ないからね。

直木　もつと他の例を採つてみれば、政治上の自由問題でなく、色々の女に公然許された、家事とか、藝術とか、さう云ふ事でも力を持ち得ない、さう云ふ事からもつと……

廣津　今迄支配される立場にあつて體格だつて劣つて居るし、皆劣つて居る、それは陽を當てたら段々體格だつて良くなるし……

三上　體格は陽の爲めではあるまい。

廣津　それはさうだよ、ずつと昔は……アマゾンの……

三上　女は議論になると直ぐ男を敵にする。あれは解らない、女と云ふ奴――奴と云ふと失敬だが女の人達は表立つたことになると男に喰つてかゝる。イギリスの女等は、今の日本の婦人みたいに、男を、淺智慧を以て大海を計るやうな淺薄な戰法は立てない。

今井　段々良くなつて來ますよ。

時雨　喰つてかゝると思ふから違ふ。磨きをかけて貰ふので……

廣津　今の女の人の考は非常に主觀的で、忍耐がない。

時雨　それは大變缺點だと思つて居る。世の中に是から男と一緒に出て行くのにはさう云ふ點を氣をつけなければならぬと思ふ。

廣津　それは今までのさう云ふ點、例へば女に困らされたと云ふやうな風の問題だつたら、三上、君と同じだ。

時雨　そこの所が大變違ふ、男は女に苦しめられたと云ふことを言ふが、女は中々言はないから、苦しめられたことを例に採つたら何方が多いか分らない。

三上　一言にして言へば、兎に角女は舊くさい、どんな新しい女でも大抵男より舊くさい。

菊川　どう云ふ所が舊くさいでせう。

三上　男性を制しようと云ふやうな……男をやつけようとするやうな、僕はそれが癪に觸る。

今井　私も時々、自分でもこんなだからいけないと思つて反省しますが、よく思切つて

いろ〳〵經營してウンと皆を使つてやりたいと云ふやうなことを思ふ。さう云ふ感じがないとは言へない、私だけか知らんが‥

時雨 男性は解りがよくて、よく女の方の言ふことを聞いて呉れようとし、又今表立つた方は殊更女性と云ふものを了解して呉れようとして居る、表向は皆さうで、蔭では皆さうでないやうなのがをかしい。

三上 そこへ行くと僕は模範的だね。公衆の前で惡口を言つて私的になれば忽ち贊成する。(笑聲)

藤森 封建時代の影響ですよ。口では‥‥

時雨 どうしても女を同じ人間とは見て呉れない。

今井 ××人など‥‥こんな事言ふと惡いかも知れませんが、あれも壓迫されるから、いつか日本をやつつけてなにしてみたいと云ふ感じが出る、だから今まで長く封建時代に壓迫されて居たので、一度は專制政治をやつてみたいと云ふ氣持が出る。

時雨 それは違ふでせう。××のことは、本當に壓迫する。男性のはさうでなくて、ちやんと個人として認めて呉れる時より、「女なんか」と威張る時の方が愛して居る。變態性でヒステリーだと廣津さんが仰つしやつた事は、寧ろ男性に多くないかと思ふ。さう云ふ時に餘程ヒステリーぢやないですか

廣津 男は迚もヒステリーですよ。

時雨 さうでせう。女ばかり言ふ譯にはいかない。男も可成りヒコポンデリーなのが隨分ある。

谷崎 反省して居ります。

三上 そんな事は問じ題やない、唯女が本當に物を知らない癖にドン〳〵事をやるのは考へものだと思ふ。僕仕立屋なんか見てさう思ふ。女に仕立屋の名人が出ないと云ふが、男は何でも一生懸命に仕事をやる。女は、婦人雜誌など見るとよく「何とかレースお敎へします」とか、堂々書いてある、どの位の才能があるか知らんが、一寸洋行でもして來るとやつて居る。あんな簡單に出來るものなら通信敎授か何かで出來て居る筈だが、あゝ云ふものを以て安心して職業として居る、それで社會の先頭を切つてるつもりでも何にもならないと思ふ。男が外國から歸るにはもつと何かやつて歸る。

廣津 兎に角僕の言ふのは、君の言ふ意味で女は相當下らないと言ふが、下らない處が直つて欲しい。

三上 どうも直らぬだらうと思ふ。(笑聲)

藤森 藝術家的過ぎて、‥議論じやなくて‥

廣津 それでなければ大體男が困るじやないか。

三上 そりや女の人が解つて呉れゝは、僕達今より樂しくなるだらう。

直木 廣津の其の意氣がいゝ。

廣津 女をさう云ふやうにしなくて、さうして生活を面白くしようと云ふことは出來ない、女を馬鹿にしてしまつては‥‥

時雨 女の氣持を働かせて高揚させて呉れるやうに願ひます。

廣津 男、女と言つちやうから駄目だが、今迄の女が斯うやつて、‥‥貴女方の言葉で‥‥壓迫されたと云ふが、クヨ〳〵なども一生懸命に理解すると云ふことは、是は大變な事ですからね。(笑聲)さう云ふクヨクヨさが無くなつて欲しい。さう云ふ意味でそれは女の利益ばかりでない、男の利益から言つても、色々の點をもつと女全體が解放されて來なかつたら、敵はないと思ふな。君(三上氏)はせつかちだから「どうせこんなもの仕方がない」と言ふ、さうじやないと僕は思ふんだね。

今井 三上さんに伺ひますがね、女性につい

て本當に考へて、昔風の從順な女と今の人達と、どつちがお好き?

三上　そんな昔のもの、てんで欲しがつて居ないから、そんなのがグジョ〳〵と這ひ出して來たら眞平御免ですよ、そんなこと問題にしてるんじやない。

廣津　女が間違ふと大變な間違をする、男が間違へば「二二が五」とか三とか位のことだが、女は「二二が油蠟燭」と云ふやうな間違をする、さう云ふ論者なんだ、だから失望だと言ふ……。

三上　メーテルリンクのセンチメンタルなものなど、詩を讀んでるやうで、俺達の見たのと違つたものだと思つて、洋行したくなる、併し行つたつて駄目だらうと思ふ。向ふでも女は……

今井　日本の男は一體――婦人解放とか何とか口では言つても、實際家庭生活では、俺の女房だけは昔風にと云ふ、さう云ふ人を求めて都合がいゝなと思つていらつしやるやうに思ふ。

廣津　元は都合が好いなと思つて居る時もあつたが、今は都合が悪いと思ふ。

藤森　唯一般に東洋人は東洋的特徴を持つて居る、で社會的に解放すると云ふことは日本の男の責任なりとして、其處に色々の不滿なことが生れると思ふ。

三上　丁度過渡期に生れて、詰らない所へぶつかつたんだね。

藤森　それでは全く婦人の解放は出來ないと思ふ。それは非常に一般的であるかも知れんが、今の處やはり男の家長制度ですから、どうしても女の獨立權はない、經濟的に獨立出來ない、やはり……

谷崎　藤森君、何うです、今の家族制度は崩壞して差支ないと思ふか。

藤森　それはさう思ふ。

谷崎　普通の人間から言ふと、今の家庭は僕等の現狀では必要でせう。今後の家庭組織はどんな風になるでせう。

藤森　社會全體の中で、家庭を持ちたい者は持つ、持ちたくない者は持たぬ、數は家庭を持たない者が多からうと思ふ。

谷崎　男など多いと思ふ。子供が出來たら何うです。

藤森　ロシアのやうに、子供は皆國家で育てる、それで、若しも特別に、社會的方面でない自分の家で育てたいと云ふ者はやつても差支ない。それは併し原則ではない。

三上　××制度を認めてならば、婦人解放は成立たぬ。××制度を認めれば女が敗けますよ。力でも何でも……最後は今と同じになつて來る。

谷崎　今は、參政權を與へても、夫の意志に反しては投票出來ない。

三上　さうなると何うです。女の人は何う云ふ風にして投票權を持つんですか。

今井　私は、參政權を貰つたら、入れたい方に入れます。

谷崎　夫の意志に反しても出來ますか。

今井　さうね……私主人を愛して居ますから……併しより心を動かして、更に偉い人があればしますね。

時雨　私は反對、自分の思つてゐる通り投票をする。

谷崎　實際は今の形では行使出來ないと思ふ。小さい問題なら出來るが、夫が反對するなら實行出來ないと思ふ。

今井　どうしても其の場合は、離婚するか屈從するか何つちかです。已むを得ない。

谷崎　愛して居れば夫の言ふことを肯かなければならぬでせう。

藤森　詰り男子のプロレタリアが、今の世の中で、彼等が議員選擧などで爭ふのは、無產階級の參政權を得るのは、彼等の要求す

るのはもつと他に持つて來る、女もさうだと思ふ。女も參政權などよりもつと根本的の所に求めなければならぬ。

三上　僕は我儘でヒステリーでも、原稿料を中途で着服して使つたりする位のことしかしません。それで僕の家では收入支出など手帳もない、そんなふうだけれども、それで別に自由でもないらしい。だから不思議なものだと思ふですね。私は何等さう云ふ點で掣肘を加へたことはない、唯女人藝術があまりしくじると、毎月この損では仕方がないから氣をつけて呉れと言ふが、さう云ふ點で隨分女の人に、知識と經驗と色々尊敬してやつて居る積りなんだけれど、それでやつぱり偉い方は少ないやうですね。

藤森　偉い偉くないの問題ではない、生存權の問題なんでせう。生きて行くと云ふ權利は違はない筈…

三上　大抵の處では、生存權は同じになつて居ませぬか。

藤森　それがなつて居ない。三上君は割合さう云ふ點は自由的だと思ふが、知識階級でも、間接的に有形無形に色々の掣肘を受けて居ますよ。

三上　勝手元の仕事などで、實際的なことや細かい事等に煩されて、其上亭主の世話をすると云ふことは、迷惑だらうと思ふが、一方から言ふと旦那樣は、晝間働きに出て何も用がない、でも子供を放つぽり出して置く、さうして尙且つ色々の權利を主張したりするのが隨分多いでせう。僕はさう云ふ人の爲に萬斛の涙を注ぐ。可哀さうな性分だと思ふ。（笑聲）

今井　さう云ふのは副産物ですね。

三上　非常に多いですよ、貴女方の言ふ立派な思想が了解されない非知識階級の樂な奥さんは皆さうです。

藤森　さう云ふ婦人の樂さなど、些つとも尊敬を拂ひたくない。

三上　其上まだブツ〳〵言ふから腹立たしい。廣津の非常に寛大な見方もいゝ、進歩的でいゝが、今の實際生活では非常にそれを思ふんだ。旦那さんは非常に可哀さうだと思ふ。役所で上役に氣兼をして、歸つて來ると妻君から男女同權でやられたら、湯に入つてものんびり出來ない。

廣津　さう云ふのはかなはないと思ふのは違ふよ。（笑聲）

藤森　生産とか勞働とか云ふものは、男の方がやつて女が樂をして居る、消費經濟の方面では男の方が樂をして居る。

時雨　男の方が世の中に出て、可成り卑屈な思ひもしなければならぬ、さうして妻子を養ふことは認めてゐます、妻子を保護して呉れると云ふことは有難い事だと思つてゐます、けれどもそれと、女が自分自身で歩いて行けるやうなものになりたいと云ふのとは、別だと思ひます。

廣津　そりや歩んで行かなくちや困るじやないですか。

藤森　男から率直に言つて、女なんぞ扶助して行かなければならぬ義務から遁れたい、お互に獨立して…

時雨　吾々にしても、扶助されるのは嫌ですね。同じ人間として愛し合つた者同志が居るのは、是程結構なことはないでせうが。

藤森　女の人をさう云ふ點で樂させることは、本望ぢやないですか。

時雨　女自身でも「お前は力が出せない、弱いから默つてろ」と言はれるよりも、へたばるまでやつてみたいと云ふ人が澤山ある。

三上　現代の女が非知識的なのに僕は非常に失望する、知識を求めるやうな顔をして居ても、君の求めてゐることは此本を讀んだらあるよと言つても、其本一冊讀通す人は

少ないだらうと思ふ。暇は隨分あつてもだね。

廣森　それは詰り、社會的知識と云ふのは、それを成るべく與へないやうに、讀まぬやうにして、吸收する力が養はれてゐることが少ないと思ふ。

三上　女の偉い人…何の某と言はれる人達が御話しになつてゐる、大膽な立論をして堂々やつていらつしやるのを聞くと、どうもあまりよく御存じない、男は可成り書生の頃から、仲間に恥しくて出來なかつたやうな、兎に角私達書生時代でも、モーパッサンでもツルゲーネフでも、讀まないものは言へない感じがあつたが、其の羞恥が非常に少ないと思ふ。雜誌などに書いてある拔萃など讀んで、それで論じてゐる。

時雨　それは確にあります。女は恥しながら大變それがあります。

廣森　日本の婦人の缺點として、特に擧げたい、それは其の原因を考へてみなければならぬ、其の原因は、女は社會的に、知識の方で解放されて居ない、現在でも生産帶として立つて居ないから、其の考へ方が實際實生活に緊密でないと云ふことを僕は言ひたい。

三上　併し今僕の言ふ婦人運動に先頭を切つて歩かうとする人達がそれぢや心細いな。

廣森　僕は工場で働いてゐる人、組合などで色々の人を見て、尊敬しますよ。しつかりした人が居ます。

三上　僕は一體働き者が好きだから、善かれ惡しかれ働き者が居ると愉快ですね。若い女がもつと〳〵綺麗になつてもらひたい。

時雨　白粉の粉飾はうはべだけで——媚態で胡麻化すと云ふのは、困るけれど…

三上　女が綺麗でなければ最も困る、さうなつたら俺は世の中辭職するね。

谷崎　同感だね。

時雨　紛飾しない美の方が…。

三上　女の人がもつと〳〵化粧法がうまくて、今より美人が出て來れば、僕達働くな。

時雨　お化粧そのものは別です。

三上　僕は長谷川にもよく言つてることだが、絹物を着て相當贅澤をしてさうして居て生意氣なことをいふ、多少反省し給へと云ふやうなことを、長谷川一個に言はず、世間の知識的プチブル階級の婦人全體に言ひたい、又僕達氣恥かしくて言へないことを、女は進歩的に言ふ自由を、此頃持ち得たやうに思ふ。

時雨　それを投げすてよとなれば——

三上　「馬鹿、引込め」と云ふやうなことも、プライベートな斯う云ふ會では言ふが、公衆の前では…

時雨　うちで理想を述べて居る時でも「引込め」ぢや…

三上　君位威張つたら…（笑聲）

廣津　話題を移さう。

谷崎　何に移す？缺點か？

廣津　今のは缺點を數へるんでなくて…

三上　武者小路君なんかも言つたけれど、缺點を數へたつて直りやしまいし仕方がない

谷崎　退屈するのも、それは女の責任ぢやない。

三上　併し廣津はなか〳〵感心な處がある、女なんか特別に見てる。僕は逆に癇癪が起つて來るんだ。ワッーつと來る——

谷崎　物質的の意味でない今日の家庭制度に…

廣津　主張は實に持てる、それは考へと云ふより氣持の方が先だね。

谷崎　氣持からさうだと云ふ…

三上　僕はプロレタリアの人や何かにさう云ふ感じがする。傳説的に…武士道的細君なんかゞ書いた物を讀んでみても、夫の位

地を實によく理解して、身命を抛つて昔の武士の妻が…昔の女だつて一概に從順とか美德とか云ふそんなものでない、もつと根本的な人生の諒解が昔の女にもあつたと思ふ、亭主と一緒に籠城して死んだ細君が詠み遺した辭世集を讀むと、迚もその時の夫の氣持と境涯を理解して、一緒に自分が此世を棄てゝも惜しくない愛の氣持が隨分あると思ふ。

谷崎　それは個人々々の場合だらうから昔の女にだつて有つたゞらう。

今井　私もちよつとこの頃昔の武家の妻と云ふやうな、その眞似は私達迚も出來ないけれど、もう一偏味ひ直してみたい氣持が此頃出て來ましたの。

三上　斯う云ふと女性を侮辱して聞こえるけれど、昔の精進潔齋と云ふことは西洋にもあつたらしい。日本にも實際あつた、精進潔齋と云ふことで、何かほんとうに男が仕事をする時は女は近付けない、女は汚れてゐる……さう云ふと怒られるか知らないが、兎に角さう云ふ風な言葉で言つてる、さう云ふ眞面目な場合には昔の細君達、眞實に精進潔齋してゐたらしい、それは自分の位地と云ふものを個人的に考へなかつたせゐだと思ふ、亭主のする事を社會的な大きな仕事だと思つて、その時の自分の汚れと云ふやうな言葉…もう少し深い意味で夫に殉じてゐたと思ふ。そこに昔風の女の偉い所があると思ふ。

谷崎　さう云ふ風なのは今の婦人にだつてありはしないか、寧ろあるが故に困る。

今井　さう云ふものを伸ばしてもつと良いものにして行くんです。さつきのお話のやうに今の時代…良いものが破られて、新しいものがまだ出來ない、生れ出る前の少し騒々しい時代ぢやないんですか？

時雨　そんなことはないでせう。さう云ふ事を知つてる人は澤山あるんです。でも今の人は昔の人よりもつと眼が開けたから、さう御自分の御亭主ばかりを信じられない人が幾らもありはしないんでせうか？昔だつて一人や二人、何千年の歷史を有つた國ですからあつたでせうが、それは全體とは言へないんでせう、他を見る眼がなかつたから…旦那さんも無性に信じられた。

三上　今の男が望むのは亭主が良いか惡いか、それをほんとうに當てゝ貰ひたい。昔だつて自分の亭主を比較する事は出來る……今は俺に喋らしてくれ。君と議論するなら家でやる。（笑聲）そんな事は一番可笑しな事だ、昔だつて批評眼は澤山ある、今井さんは僕に肯定して贊成者だ。

時雨　私は今井さんに對して言つてるのだから、今井さんの方から何か反駁が……

今井　昔でも少かつたとして、今だつたら、一々斯う、何して行けば、偉い……と、さう云ふ婦人もあるでせう。

時雨　澤山あるでせう、乃木將軍の夫人とか……

今井　現代に求めるなら乃木さんなんかに求めたくない。昔の部類に入れて置きたい。昔の封建時代の武士の妻が、形式だけで行つても少くとも夫に殉じて、夫の一部になつてやつたやうに今の人はなかなか出來ませんが、昔の方がさう云ふ點が多かつた。

時雨　今の人は自分自身があるでせうと思ふ、ですからさう云ふ風に傀儡にはなれないと思ふ。しかし、理解した上の一致は望ましいことです。

三上　昔の思想と云ふものには、養はれて……養つて來たと云ふ所に變に偉さが入つてゐる。今の樣な物質主義でない、それと非常に違つた別の意味でのかなり徹底したものがあつたと思ふ。今の人は物質的にも徹

底しない、何にも徹底しない人が多いからグニャ〳〵してゐると思ふ。婦人運動でも藤森氏の言つた私有財産の否定論から行けば徹底しますが、それは議論でせう。今の制度でいろ〳〵言つたつて、結局男と働き比べて女が同じに働ける譯はないと思ふし、財産も得られない。

今井　昔の女の解釋は私三上さんに賛成します。無智盲目で從いて行つたんではなくて、あの人達は、物語りに殘つてゐる少くもそれ等の婦人には、もつと無智とか從順と云ふ意味でなくて、はつきりした氣持で夫の一ツの仕事なら仕事、夫の一部に働いてる。さう云ふ點は非常に賛成しますけれど、私は三上さん程現實の女に失望してゐないと云ふことで、今度は主張が別れますよ。非常に私は未來を信じ、もつと〳〵新しい時代になつて、今度はあゝ云ふやうな意味でなく夫に背く女も‥‥勿論夫に背いても人間としての何を完成すると云ふ意味で、さう云ふ意味でも兎に角失望した女を思はない。眞實のものが生れて來ると云ふことは未來に對して、女性に對して信じてゐます。決して女性に失望してゐない‥‥

三上　女の人が御自分達に失望しちやつたら詰らないでせう。

藤森　僕等も女の人に失望しないから‥‥

直木　女の人に養つて貰ひたい。默つてジッとしてゐる。

三上　辛いぜ　それも‥‥

藤森　それはよくなる事は分り切つてゐる。確にさうなるに決つて居る、立派な女が出來る。

三上　女のいろ〳〵やつてゐる所を見ると、敵對行爲と云ふことがある。敵對行爲と云ふことは人間同士には誰もあるものだが、女同士は非常に近い所から敵對行爲が始まつてゐる。男はなるたけ辛抱するでせう自分の感情は。彼奴嫌やな奴だと思つても一ツの仕事等するのに、お互に複雑なものを出して行つて仕事をしてみたいと云ふことがあるけれども――僕なんか小學校で教はつた女教員の二人か三人の人達の間でもさう云ふことが‥‥

廣津　今までにはさう云ふ所がある。

藤森　それは男は社會を對象にしてゐるけれども、女は家庭を對象にしてゐるから、一ツの家庭と違ふ家庭とは敵國を形造る。

今井　さう、群雄割據的に‥‥

藤森　僕はさう云ふ妙な感情と云ふものは、今の社會の制度の爲で女の本來ぢやないと思ふ。

三上　あれをどうかしないと男に馬鹿にされますよ。

今井　だから、それが爲に社會に出ると云ふことがやつぱり必要です、出て行かなければ社會を知る事が出來ない。

三上　女の人で大勢集つて居る人達で、自分自分卑しいながらも伸ばして行くのは花柳界の昔の制度‥‥

藤森　それはつまり家庭の女でないから、經濟的に家庭の女ではないから、社會の中にホツポカされてゐるから‥‥

三上　女の人同士は必ず何か始まつて來る。

廣津　併し男も皆壓迫される‥‥さうなつて來たと思ふね、男だつて自分だけで自由な奴はありはしないからだん〳〵詰つて來て居る、

三上　併し女性的個人主義にも困つたものだ、女同士はなか〳〵‥‥

廣津　今のその、ほんとうのお友達になるかなれないかと云ふことは確にある。それもさうさつき言つたやうに陽を當てゝ行けば直ると云ふ意味で、陽を當てる事が‥‥

藤森　さうだ。陽を當れば直る。

三上　早く當てゝ下さい。

廣津　終ひまで行つてどれだけのものになるか、藤森君の言ふだけのものになるか、それは認めない。

直木　僕は世の中の進歩と云ふことを認めない。生活を幸福にする道ではないと思ふ。

廣津　それは結局動いて行かなければならない事は動いてゐる。

藤森　兎に角今制度が改まれば無産階級は幸福になる。無産階級がどん／＼發達する事は事實で、それに依つて進歩する事は事實だと思ふ。

直木　假定すれば‥‥

藤森　定假でない、事實だと思ふ。

直木　人間の進歩して來た跡を見ると、さう云ふ事を改めても決して幸福でない。

廣津　進歩と云ふことゝ、幸福と云ふことはいろ／＼あるでせう。

直木　例へば農夫の生活を見てみ給へ、ちつとも幸福にならない、農夫々々つて壓迫を受けてばかりゐるぢやないか、昔は夜這ひに行かうと、博奕を打たうと構はないのが今は幾らかの公民權を得たから、夜這ひに行つても博奕に行つてもふん縛られる。

谷崎　それは君夜這ひが幸福ならば今は幸福と云へぬ、觀方だね。

直木　是から世の中が良くなつて行くと云ふことを信じて、現在どれ位なんだ?

三上　私の家で少しばかりの財産を整理した時に、僕は小作人と云ふ者を半分同情して半分可笑しかつた、その頃非常に早く小作問題を考へて、事實僕は小作人同盟と云ふもの、事をベルギー邊りのいろ／＼の物をその頃讀んでみた。そして土地を整理してみて氣がついたんだが、小作人と云ふ奴は懶惰で、私の家の小作人は年貢米でも一番惡いのを持つて來る、賣物にならないのをあすこでは構はないと云ふので、さう云ふ惡いのを持つて來るんだからやりきれない。そのうち僕の家が破産して地主が代つたら、他の地主になると定期的にはつきり持つて行かなければならぬので、困ると言つて泣きついて來た。その時に思つたんだが、私有財産なんて物は面倒な物だ、彼等にはつきり働かせるには、何かそれに相當した仕事を與へなければズル位するのは當り前だ――

藤森　それは當然‥‥良い地主にしろ、惡地主にしろ、小作人と云ふ者はます／＼悲慘になるし‥‥

直木　僕は、廣津の言ふ解放すればみんな偉くなると云ふが、實際の生活、現在の生活は男が金を儲けて妻子を養つてる。所が女の方では理窟は言ふが、富山縣の米騷動を起した女ほどお勝手元の仕事は出來ない――だから意志は認めるけれども、男が働いてゐる現實的の生活に對しては、女は努力しない。

廣津　しようとしてゐる人はある、さう云ふ事は君と同じ意味で言つて居る。それだから考へなければならぬと言つてるのと、是だからみんな輕蔑すると言つてるのと違ふだけで、つまりは同じなんだ。

直木　さう云ふ風で女は現實の、實際生活の問題がいろ／＼あるのに、さう云ふ意志は發表しないで、議會參政權とか、男女同權とか、抽象的の事ばかり言つてるのが不愉快なんだ。實際的の　お勝手元からでも宜いから實行に移すと‥‥

時雨　それは消費組合の事なんかも皆女は頭に入れてゐて、良いと云ふことは知つて居るんです、さうしてそれに近寄りたい意思もみんな有るのよ、けれどもいろいろ都合があるらしい。現金が無い時なんかすぐに拂はなくちやいけなかつたり、知りながら

高い物を買ふやうになつたりするので、歩み寄りが遅いんです、誰も彼も考へてはゐるけれど、荒神様のやうに幾本も手が出せないから、いろ〳〵の方面に働かなければならないので公民權の方に一つ、消費組合にもといふ風に別れてゆくのです。

直木　いろ〳〵な方面に十分に求めるのか知らんが、一方が全然出てゐない。

時雨　それは家庭と云ふものを背負つてるから――

直木　女が無力なんだ。

時雨　無力なればこそ、無力でなくなりたいので、何より團結力が‥‥

三上　プライベードの問題とパブリックの問題を一緒にすると駄目だ、併し女は團結力がない、知識的でないと言はれても仕方がないと思ふ。男同士はかなり相手を理解しやうとする努力がある。理解し、共同するけれども、女はすぐ離反し異端者になつてしまふ、味方にしても敵としても、僕達頼り少いと思ふ。

時雨　それは確に――是からの女ぢやありませんよ、今までの人の缺點だつた。

三上　今までのぢやない、今の人――(笑聲)

時雨　今のと云ふのは殘念ですから、今までのとして置きます。

谷崎　今まで及び今の――(笑聲)

三上　廣津がさつき言つたのも、菊池君の婦女界流の、新女大學と云ふやうな考へ方も、やつぱり男の人ならば、胸に手を當てたらそんな考へも出るぜ。

廣津　俺はさう思はない。

今井　直木さんのさつきの話ね、昔ののんびりした時代に置かれたら、あなた御自分は幸福にお思ひになるかも知れないが‥‥

三上　昔は暢氣であつたに違ひない。田を作るにも今年此の田を作る、來年はもう作らないで草を茫々生やして置いて土地を一年遊ばせて置くんだ、さうして火をパッとつけて、枯草を燒いた奴を肥料にして米を蒔いて置いても、それで大丈夫だつた、そんな時代に生れたら僕達だつて宜かつた。

今井　私もさう云ふ時代が好き。だん〳〵餘裕がなくなつて‥‥

三上　僕は併し非常に女好きなんだ、だから癇癪が起る。

谷崎　それは確だ。

三上　單り個人的の問題でなく、一般的に――僕はデモンストレーションなんか見ても、女の人が多いと迚も眞實らしくて愉快だと思ふ。女の人が僅か悲しげに交つてメーデーの歌なんか唱ふのを見ると、工女なんか居ると僕達喜ぶですね、唯人數は少いし、どことなく遠慮勝ちで‥‥

今井　だん〳〵多くなりますね。

藤森　それはもう當然出て來る、無論女の力の上から女工でも何でも幾らでも出ますよ。

三上　今の女の人の點で感心してゐるのは、どんなに働く人でもちよつと閑があればコンパクトを使つて綺麗になつて、僕達を喜ばしてくれるのは女が身嗜みを忘れない良い事だ、それを失くしちやつたら‥‥私達の接してゐるのは半ブルヂヨア階級の人達だからかも知れないが、プロレタリアの階級でもコンパクトを使ふ事は結構な事で、あゝ云ふ化粧の閑位、綺麗にしてくれなければ僕達働けない。

時雨　コンパクトも結構だが、頭を整理して、家の中、總ての社會を綺麗にして――

三上　兎に角智惠が足りぬ、力が足りぬ、さうして半分は男のする事に内々盲從してゐながら、口では惡賢い事を言ひ、生意氣を言ひながら、それでコンパクトを忘れたら私達立瀬がない。(笑聲)

長津　ある程度までは三上に賛成だ。缺點を竝べると云ふのは、現在さう云つて竝べてるだけなら宜いが、それは困るからどうかしたいと云ふのとそれだけの違ひ――

谷崎　ロシアの女はどう云ふ狀態でせう。全然家族制度が破壞されて居るですか？

藤森　家族制度を認めない事を原則とするんだが、今のロシヤと云ふものは、そこまで行つてゐない、社會主義の狀態に過ぎない。

谷崎　實際家族關係があるでせうか。ソビエット政府に於ける亂婚制度――あれを讀んだけれども、あゝ云ふ風になると男性が我儘になつて、女性が辛かないか、日本の家庭なんか寧ろ保護を受けてゐないかと思ふ、解放されたら非常に困ると思ふが、その勇氣が今の婦人に有るがどうか――

藤森　さう云ふ一時的混亂がある。

谷崎　いろ〳〵な男に…子供を生んだり棄てられたりして、子供は國家の管理としても、女が、母性がそれで滿足し得るでせうか？　いろ〳〵な男と別れては別れ、子供はそれ〳〵出來て、それ〳〵引取られて保護されてゐるとしても、私有財産制度で保護されてゐると思ふがどうでせう？現代の女性に伺ひたい、幸福と言へますか？

今井　私皆さんに侮辱を受けるかも知れないけれど、あつちこつち亂婚しては、是は迚もたまらないと思ひました。

谷崎　私有財産制度で寧ろ保護されてる…？

今井　だから具體的にまだ考へてないですが、兎に角もう少し私有財産制度を巧くして女性を…

谷崎　結局…

今井　それを是非破壞してロシアが果してどうだか、最後の理想はどうだか知りませんが、あゝ云ふ制度は私はたまらない。

谷崎　僕もさう思ふ。

三上　兎に角戀愛と云ふものは、惚れゝばあばたも靨でどんな美男子が醜い女に惚れるか、醜男でも美しい女に惚れられるかそれは分らないが、愛がある間は繫つて行くですよ。是は女の人が自由を主張したりすれば、女より男の方が體力が強い、男の方が憔悴が遲いですよ、經濟力も大きい、だからさうなつたら、女の人は不利益になる、老齢の女はどし〳〵疲勞して行く。

今井　だからつて現狀に滿足出來ない、是からどうしたら宜いかと云ふ問題なんですけれど、具體的にどうつて言はれると困るんです。だつてさうすると新時代の計畫をしなければならない。

三上　個人の幸福と、さう云ふ精神的や感情的の問題は分けてゐますね。

谷崎　分けてそれが巧く出來れば宜いが…

藤森　極端なものでそれを比較するならば、淫賣宿はもつと悲慘だ。

谷崎　それは日本には無論あるが、日本ではさう云ふものは特殊な階級だけれど、家庭制度全體があゝ云ふ風になつた場合女はどうするか、僕は非常に悲慘だと思ふ。

藤森　その方が女の悲慘の數が多くなる。

今井　私なんか古いからさう考へるのかも知れないけれど、子供を自分から引離されて國家から養つて貰ふなんて嫌やですね。

谷崎　今日の家族制度を破壞することは、結局女性にとつて、妻として幸福かどうか分らない。永遠の、女性の惱みではないですか？　母性として…一人々々子供から離れたら女性は隨分辛いだらうと思ふ。男より…

今井　それは男より辛いです、いろ〳〵考へるとね。平安朝時代は、大變ある點ではあゝ云ふ方が宜くはないかと思ひます、子供は母につけて、夫は通つて來るもの、あの貴族一般がしてゐた…

谷崎　平安朝は、あれは貴族生活で一般の人民はどうか分らない、貴族生活に現はれたそれが出來れば宜いと思ひますが、一般的には出來ないではないですか、男はその方ではどつちでも强味があります。

三上　どこまでほんとうか知らないが、革命後のロシアでは細君も娘も、みんな一緒に淫賣みたいな者になつて、それで平氣なんださうだ。もつとも、ロシアでは、祖母さんとか大おばあさんとかにあたる位な人たちが、フランスの革命で逃て來たりしたのが隨分あつて、みんなけいけんがあるから、さういふをりには、さうした狀態になるのは、よんどころないことだといふ、慰めみたいなものを持つてゐたとかいふからなんだが——日本みたいな國で過渡期に波亂が起つたら、力のある人が‥‥女は力の有る人が好きだから‥‥

（少時沈默）

時雨　前田河廣一郞さんから女はお喋りが一番いけないといふ電報が來ましたが、喋ることも出來ないやうな女でも淋しくなるでせう？

谷崎　さう云ふこともありますね。

直木　喋つて貰ふ方が結構。

廣津　或る時期は有るけれども無くなる‥‥

谷崎　男は車挽でも有つてる、私は是でも馳ければ何丁位は馳げるとか何とか‥‥

三上　俺は女の誇りであてられた。（笑聲）死んだ人の事を言ふやうだが片上さんがよく言つた。女つて奴は偉いもんだよ、日本ぢやまだ分らないが、ロシアに行つて、夕方ロシアの裏通りの貧民窟なんかへ行くと迚も喧嘩が多い、それがお爺さんの喧嘩は一人も無い、みんなお婆さんが喧嘩してゐる。物賣りを捉へてやつてる奴もあれば、仲間同士でやつてる奴もある。ロシアのあらゆる小說を讀んでも、惡いお爺さんは無くて、惡婆が書いてあるからね、併し斯う云ふ事はロシアと云ふ國ばかりぢやないと片上さんがさう言つた。

谷崎　君なんか喋れない方だから、それでよけいさう思ふだらう。

三上　何でも宜いから僕達を働かしてくれる女が欲しい。

谷崎　何か女は‥‥醜婦でも何か才能が有れば宜い、馬鹿でも美貌だとか云ふ風に何かあると宜いと思ふ。實生活から來た何か誇りがを有つて欲しい。

廣津　實際さう思ふね。

三上　どんな女でも誇りは有るよ。

谷崎　さうでない、無い奴があるよ、此處にいらつしやる方は皆さうぢやないが‥‥

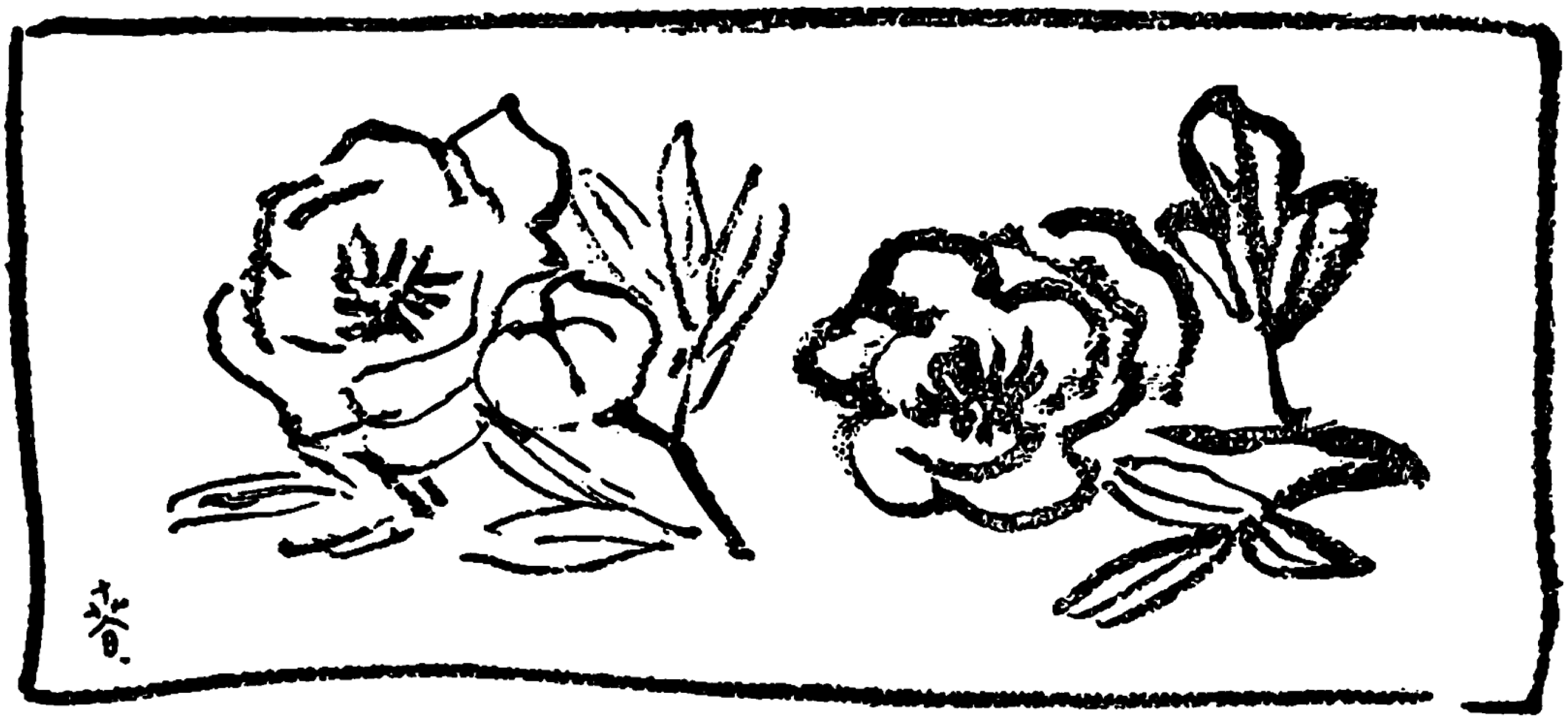
廣津　何か小說を書くと、女は決して敎へない者になる……。

谷崎　リアリズムになるから‥‥

時雨　ちやそこらで‥‥日に當て論ではじまつたから、誇位にあてられ論でお終ひにしませう。どうも有難うございました。

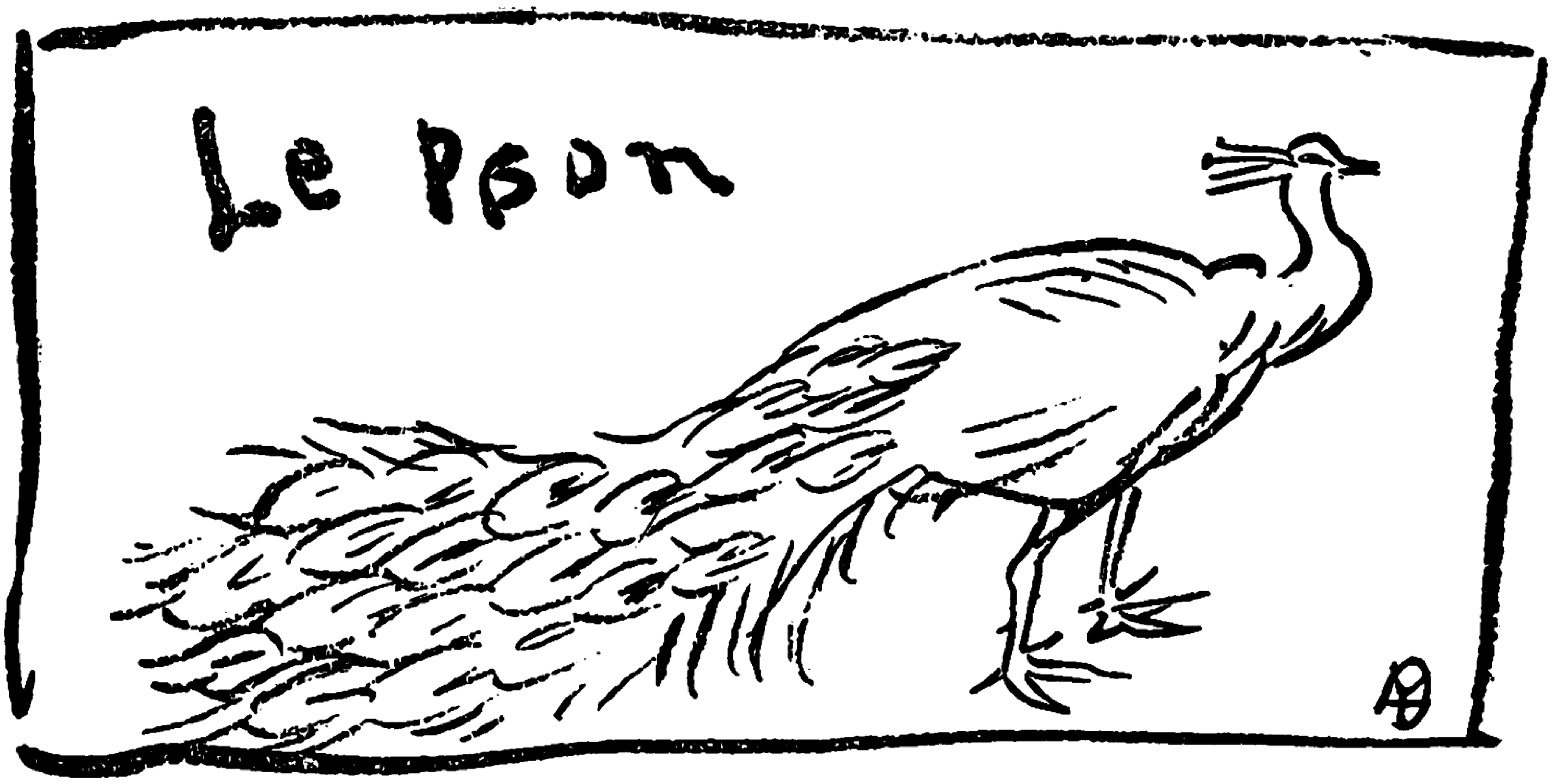
（〝2×2＝油蠟燭〟の由來）

廣津和郞氏の座談の中に、「二二んが油蠟燭」といふ珍奇な言葉が出て來ます。これの元祖は、ツルゲーネフの「ルーヂン」中に出て來るピガソフといふお爺さんが女をけなしてよく呟いたに初まります。



與謝野晶子氏 生誕五十年祝典講演會

與謝野晶子氏は近代日本が持つた、最も熱烈で優雅な「處女」であり「母」であります。彼女がその青春期に於いて歌ひ殘した、あの奔放瑰麗を極めた詩歌が、長い間壓迫と桎梏とに惱みつゝあつた全女性の憂愁悲哀の代辯が、同時に過去の我々に、自我擴張の自由と歡喜とを教へたことは何人も否定することが出來ませぬ。その上彼女は優麗な詩の世界にのみは安住せず、女性の先頭を切つて恒に思想的嚮導の役割を力めることも忘れませんでした。今後も亦彼女は十分に全女性への貢獻を怠りはせぬでせう。然し、我々が彼女生誕五十年に際し、彼女の過去の業績を思ひ出して、聊か感謝の微衷を表はすのは、當然の義務であるかと思はれます。祝典期日その他は改めて發表しますが、豫じめこの企への御贊同を祈つて置く次第であります。



發起人

岡本かの子　片山廣子　中原綾子　大倉時子　茅野雅子　山本愛子　美濃部民子　河崎夏子　千葉千歳　山名誠子　丹羽あき子　伊藤伊三郎　山本直良　高村光太郎　眞下喜太郎　平野久保　十一谷義三郎　下中彌三郎　加藤雄策

平沼亮三　三宅磐　中村作太郎　渡邊金左衛門　賀川豐彦　德富猪一郎　正宗得三郎　茅野儀太郎　竹友虎雄　梅原龍三郎　有島生馬　石井柏亭　尾崎行雄　山崎小三　小林政治　內山英保　高濱清　本美鐵三　川上賢三

三樹退三　萬造寺齋　太田正雄　高田保馬　白仁勝衛　正宗敦夫　北原隆吉　野口米次郎　新居格　關戸信次　山本鼎　薄田淳介　山內英夫　川勝堅一　藤田長和　松永周二　增田宇兵衛　西村伊作　山本實彥

鈴木利貞　江寸文三　堀口大學　佐藤春夫　馬場勝彌　日夏耿之介　下村宏　土岐善麿　廣川松五郎　太井一郎　吉井勇　田中松太郎　山下新太郎　戸川明三　森田草平　中根駒十郎

（順序不同）

主催　女人藝術社

不安・混亂の世相

——社會時評——

神近市子

一、久原氏の政見

國家に多額の迷惑をかけたものであり乍ら大臣の要職についた爲め、反對黨の爲めに蒸し返しくり返し彈劾案を提出され、いくたの不愉快な話題を天下に流布しつゝある久原遞相は、何時か新聞記者を相手にかういふ意味の談話をして發表させてゐたことがあつた。『私は日本などでも一國一政黨の政治をやつた方が、運用が圓滑に行つてよいのではないかと考へてゐる云々』

一黨派政治と云つても色々とある。ロシヤのやうにプロレタリヤ黨獨裁の政治もさうであれば、イタリーのやうなファッショ獨裁の政治もある。が、久原氏の場合はそれが後者を意味してゐるといふことは、いふ迄もないことである。

田中内閣はこれ迄存在した内閣のどれに比較しても、その識見に於いて手腕に於いて甚しく劣つてゐるにも拘らず、舊式な陰謀的策動を最も露骨に行つて、多くの害毒を國家に流して來た。反動團體のバッコ、議員と投票との買收、無法な法律の作成、無產運動の彈壓等々、枚擧に遑ない位である。そして國民とブルジョアジャーナリズムの凡てが徹頭徹尾その存在をのろひ、その倒壞を希望してゐるにも拘らず、優詔問題にからむ問責案が貴族院の通過を見てすら、尚ほその存在をつゞけてゐるのである。

それは何故であるか？ それはつまり田中内閣が日本で最も有力な財閥の絶對的な支持をうけてゐるからである。『改造』の三月號を見ると、鈴木茂三郎氏は、日本の政黨と各財閥との關係について、極めて興味ある記事を發表して居られる。

鈴木氏のあの曝露が、どの點まで正確なものであるのか、それはわたくし共には分らない。しかしあの記事が全部眞實ではなかつたとしても、今日の資本家と政黨との相關々係を想像するには充分である。田中内閣が日本で最も有力な大小財閥の支持によつて、殆んど全國的な反對をのり切り、貴族院をすら時には威嚇し時には買收してその存在をつゞけてゐるといふ事實は、これら少數資本家と政

黨とのブロックの力が、全體としてはまだ無自覺な域を脱しない全國民を凌いでゐるといふ事實を示してゐるのである。

實際資本家にとつては、國民や議會の思惑を少しも意に介せずして自己の利益を擁護してくれる政治家があることは、重寶であるに相違ない。資本家が國民の眼から見て凡ゆる非難に値ひする內閣と政黨とを擁護してその存續を國民に强たるのはその爲めであつて、現內閣に國民の憎惡が集まれば集まるだけ、彼等はこれを擁護しなくてはならないのである。

久原遞相が假りにも全權獨裁の政治的見解を發表しても國民がこれを咎めないことは、國民が政治の一般に通じない爲めであつて、日本の政治家の空前の墮落と腐敗を招致した原因もまたこゝにあるのであらう。

二、山本代議士の暗殺

舊勞農黨の山本代議士が、反動の兇刄の下に倒された。

この恐るべき犯罪の報が傳はると同時に、わたくし共の頭に來たのはこの犯罪の裏にひそむ政治的の背景についてであつた。

わたくし共は、卑怯無殘な今日の政治家どもが、自己の敵に對していかに陰險な手段を弄して來たかを知つてゐる。反動團體を指嗾し、最も劣惡な人間に金錢をまき、弱腰の議員を買收して、あらゆる社會的墮落の芽をまいて來たのは彼等であつた。

山本氏は、彼等反動政治家共が蛇蝎のごとくにおぢ恐れてゐる日本××黨と關係ありと見られたが爲めに彼等につけねらはれるに至つたものであつた。

偶然なことに、わたくしは山本氏暗殺の翌日、山本氏が豫算委員會第二分科會の席上でなされた質問の速記を抄錄してある『無產者新聞』を受取つた。

山本氏は、その質問に於いて、共產黨事件の爲めに日本の各地に收容されてゐる各被告に對する警官の××の事實を所と人とを擧げて役人に問責された。そして各地で××が被告に對して、

『この取調べに當つてお前方三人四人を××たところで、××が××けてくれるのだ。昭和の甘粕だからウンとやる』

といふ意味のことを明言したことを指摘し、『偶然の暗合としては、餘りに奇妙なことである』

と結んで居られた。

豫算分科會で、この曝露をやつた山本氏が、旬日を出ずして自身同じ白色テラアの犧牲となつたことは悼んでも餘りあることである。

山本氏を殺した敵が何人であるかといふことは、わたくし共は山本氏の上述の質問を讀んでゐると、自ら暗示されてゐるのを感ずるのである。それかあらぬか、檢事局は×××に犯人の取調べを委ねることの不安を感じて犯人を自からの手許に引上げてしまつた。數日前から斬奸狀を準備し、短刀を磨き、散髮をしてその準備をした犯人を、正當防衛であると曲辯して、直ちにそれをとり消した警官があるかと思ふと、情を知つて金を與へこれを趣かせた共犯者を庇護しやうとして盡力してゐる××もある。

敵が何人であるか、わたくし共はそれをこゝでいふ自由を持たない。しかしそれが一人の無智兇惡な勞働者ではないといふことだけは、斷言できると思ふ。

××せまつて來た。國民は進んでこの暗殺の裏にある眞相を讀むことを怠つてはならない。支配階級の逆宣傳に惑はされ、味方を敵

と誤り、敵を味方と考へてその歸趣に迷つてゐる間は、尊とい犠牲者の血は流れて止む時はないのである。

三、市會議員の改選

その腐敗と墮落とに於いて、ニューヨークと竝び稱される東京市の市會議員の選擧が近づいて來た。

今回の選擧は定期的のものではなく、市會の腐敗が明るみにさらけ出され、多數議員の檢擧を見たのが原因で、内務省によつて解散を命じられたが爲めに行はれる選擧である。であるから、その根本に於いて市會の淨化といふことが、條件であるべきことは疑ひないのである。

しかし一新さるべき候補者の名簿の中に、わたくし共は前市會をあんなにまで攪亂した舊勢力の代表者が、依然として潛入してゐるといふ事實に、驚かざるを得ないのである。

民衆は實際に一連の瀆職事件が次々に曝露されたのを見た時に、驚きの眼を見張つたのであつた。しかし時が立つと共にその興奮も去り、今日までその憤怒を持續して市議戰に當つてその感情を吐露せんとする熱心を有する人に至つては、その數は極めて少數である。

彼等が乘ぜんとするのは、この市民の懶惰である。舊勢力を代表する彼等は、長い間の經驗により民衆を知り、その弱點をつかんでゐる、彼等は精力的で執拗であつて、その野望をとげて利得の道に到達するまでは、手段と方法とを選ばない。そして市民は彼等の精力に壓倒されて彼等にゆづる――といふのが今日までの實狀である。

市氏をこんな無氣力不活潑にしたのは、云ひかへれば支配階級の去勢術が成功したのであるとも云へば云へやう。しかしこの事實を反省せずして市民の一般が再び舊勢力の餌食となり彼等の爲めにその投票を行使することになれば、東京市民は彼等一團の寄生蟲の爲めに何時までも健全な發展を阻害され、理由のない多くの負擔の爲めに惱むことゝなるであらう。

四、豫定の握り潰し

日本の婦人界にあつては珍しく殆んど全部の婦人の支持によつてその實現を期されてゐた婦人公民權の法律案も、遂に政友會の星島氏以下の軟化によつて握り潰しの運命に逢つてしまつた。最初より半ばは豫期されたことではあつたが、しかし『もしかしたら』といふ希望が今年は非常に多分にあつたか爲めに、何人も最後のドタンパまでその成行を見のがさなかつた。

これは、わたくし共にとつては、非常によい經驗であつた。わたくし共は、興論が殆んど全部婦人の政治的進出を同情支持してゐることを發見した。第二に日本の婦人が最近起り來る各種の社會的事件に刺戟され、政治的自由を熱心に欲してゐるといふ事實を發見した。第三は、この婦人と社會との一般的傾向の押へるに押へがたいことを見乍ら、支配階級が意識的にこれを抑壓してゐることを目のあたりに見た。

權利は、欲せずして與へられる時にはその效用の半ばを失つてゐるものである。權利はこれを望んで鬪爭し、血と汗との代價として得られた時に始めてその全部的の價値を發揮しうるものである。

日本の婦人は、今政治的自由の獲得を望んでゐる。たゞ彼等はその獲得の手段、鬪爭の方法を知らないまでゝある。

支配階級は、多くの制限を含む普通選擧ですら、八人の無產代議

士を議會に發見したので狼狽してゐる。最近提出された小選擧區への還元改正法律案は、その對策であつて、無產議員の選出を困難にし、反對黨の活動を阻害せんとする法律案である。

今日の政府の腹では、一度與へた普選ですら、引込められるなら引込めたいのであらう。一度與へた選擧權でさへ、その實質を拔かうとする位の反動政府が、政治的の擴大を意味する婦人の政治的參加を阻むのは當然である。

しかし、わたくし共をもつて云はしむれば、支配階級が與へたがらないからこそわたくし共は尙更らそれを欲するのである。

今年の失敗は、婦人界に有力な指導團體を持たなかつたことがその原因であつた。今年の經驗は、わたくし共にもつと活潑な鬪爭形態の必要であることを痛感させた。わたくし共がその種の團體を與へられ、全婦人界がこれを支持し協力する時に、わたくし共の目的は始めて達しられることであらう。

五、說教强盜の捕縛

久しく市民の夢を脅かしてゐた說教强盜が、とう〳〵つかまつた。幻想は幻想を生んで、どんなにか兇惡な惡漢であらうかと想像されてゐたのに、それが小心實直な一人の勞働者であつたといふことは、わたくし共に意外な思ひをさせたものであつた。

最近の現象として、兇惡な犯人がつかまる毎にわたくし共は共通の一つの感情を經驗する。

一昨年、本田少將の令孃殺しがあつた時、わたくし共はそれがどんなにか兇惡な人間であらうと考へた。しかし眞相が判明した時、社會は一樣にその窮迫した犯人とその家族の境遇に同情した。

說教强盜の場合は、それほどでもなかつた。第一に彼は久しく法網をくゞつて居り、一家は勞働者の家族として久しく相當平穩の生活を營んで來てゐた。しかし犯人が正直に勞働によつて一家を支へようと試みたものゝ、火災と病氣との爲めに破產的な狀態に陷り、思ひ餘つて最初の犯行を敢へてしたといふ自白を聞いた時、無產階級に屬し、正直な手段によつて一家を支へてゐるものであつたら、何人か彼の心情をもつともに思はぬものがあるだらう。

實際に今日の無產階級は、略々その生活の最極端まで行きついてゐるのである。餓死か牢獄かといふのは、彼等に與へられた貧しい選擇である。彼等が先づ牢獄をと選ぶのに何の無理があらう。生きんと希ふのは生物全部の衝動である。生きんが爲めには罪を犯かすより外には道がない集團があるといふことを、わたくし共は學ぶべきである。

時が來れば、善惡の標準とても全然置きかへられなくてはならぬ。その時市井の盜賊それより、墮落した政治家とブローカアとの組織的な犯罪をより以上憎むべき罪としないとは何人が斷言できやうぞ。

六、左傾學生の續出

春になつて、各學校から吐き出された多くの卒業生が就學難に惱む時が又來た。

日本の資本主義は、まだ幾分でも上向の過程をとりつゝあるのださうである。しかしこゝ數年の不景氣はよほど深刻なもので 學校卒業と同時に就職のできる者はよほどの僥倖に惠まれた人々に限られてゐるのである。

何回かのはげしい入學試驗を突破し、多額の學費を費して漸く克ち得た卒業も、何等生活の安定も前途の希望をも與へてはゐない事を發見した時に彼等の失望と家族の落膽とはどんなものであらう。

社會科學聯盟を解散しても學生監を增しても左傾學生を根絶することができないのは、かういふところにも確かにその原因があることであらう。

學校を出れば、正確に職にありつけるといふ見込みが稀薄になつた時に、學生たちにとつて卒業といふことが何の魅力であるだらう。學生たちが逐はれても脅かされても社會科學の研究を廢さないのは當然のことであつて、文部省と學校とは退學放校等の處分をすることによつて、益々多くの危險分子を製造してゐるやうなものである。

今年は、官立の大學は一様に學費の値上げをするさうである。中等敎育家の會合は、貧困者の中途退學が多いのを厭がつて、今後は卒業するまでの資力を備へてゐる家庭の子女のみを收容するといふことにしたさうである。

敎育制度が、益々有產階級の獨占するところとならうとする傾向を示すものである。かうして無產階級は、益々街頭と工場と農場に於ける敎育以外に自己の敎育はないことを覺るのであらう。

無智者のたわごと

靜　茂

わかつてる人々にはわかり切つた事に違ひない。けれ共私達、(敢て私達といふ、其の途はかなり多くの數を意味して誤らないと思ふ。)にはわかつて居ない。其のわかつてない人間の吐くたわごと御きゝ下さい。

秋晴の或日、中央線の下り列車の中で見た事のない名の新聞を讀んで居る洋服の筋骨逞しい職工風の色彩のある紳士が有つた。やがて其の紳士はすぐ前に坐して居た私に、之れをみた事がありますか、まあ讀んで御覽なさいと　その新聞を貸して吳れた。其の紙面は、獄舍からの便り、獄舍への激勵の辭、女鬪士の消息、主義者、運動家を夫に持つた、父に持つた家の慘さ、などの記事で埋まつて居た。そして次に又或講座の宣傳ビラを私に示した。此の紳士がどういふ事の爲に働きつゝある御人であるかは想像に難くなかつた。

暫して私に曰く「女の人でも隨分此の運動の爲に勇ましく働いて居ますよ。どうですあなたも一つやつてみては、尤もその爲に食へなくなるような、クビになるような職業をお持ちでしたらば御すゝめしませんがれと」

私は考へた。自分の仕事。命を捧げての仕事、正しくある事を信じてゞあらう其の仕事、それを人に話すのに、人にすゝめるのに、是程迄に、ツツマしく、要心してゞなければならない。そして此の人の爲て居る仕事は。さうした事を覺悟してゞなければとりかゝれないのが普通になつてるのかと。

斯ういふ人々の主義、仕事が、どういふ事であるのか、私達には其の眞髓は些も解つて居ない。判らない。只新聞に載る記事をみて、人心惡化、檢束、中止、公判、などいふ、事柄と、切り離す事の出來ない類の事であるらしい概念だけ與へられて居る。さうした事柄には觸れないで居れば安全であるかも知れない。知らない方がむしろ善良な女と目されるであらう。

けれ共此の世に起りつゝある大きな渦、正當なる時代の動きをも知らないで居る事が、そんなに好ましい事であらうか。

王政復古とは、維新とは、其何たるかをさへ知らなかつた彼の時代の人々を笑つた學校時代の歷史の時間が面はゆく感じられる。

私達ははつきりと知らなければならない。血みどろになつて働いて居る私達の同胞が、何を望んでゐるのか。私達は一體何を望まなければならないかを。無智なるが故の平安、それは餘りに恥しい氣がする。



新聞人となりて

山田やす子

私は以前から一つの希望を持つてゐました。それは婦人といふ特殊性の上に立脚した日刊新聞の出現であつて、編輯方針が指導本位興味本位に終始しないで意見や論議を持つた、云ひ換へると婦人解放といふ觀點から直接間接に料理した統一ある新聞の存在なのです。斯うした要求は恐らく私許りでなく、家族制度、戀愛、結婚から婦人の權利、勞働、職業等の諸問題が社會的諸條件に支配されて從來の偶像を目醒しい勢で破壞しつゝあり、それかといつて未だ新しい統一の光が射さぬ渾沌とした過度期にある我が國婦人大衆が、斯かる奇形的な社會に避くべからざる特性として產み出す幾多の悲劇の中から既に要求してゐる必要品でもありませう。婦人獨自の言論機關は何かといへば現在では月刊雜誌を數へる外にありませんが、これとても意見や議論を强調すると少數の婦人しか要求しなくなつて了ひます。婦人公論の編輯方針の變遷や女性改造の廢刊等はその有力な證査であるし、專門的記事は夫々專門的刊行物へ――と進んで來た分化作用の潮流を受けて婦人問題をも婦人雜誌から驅逐して少數專門家の手に押しやらねば承知しない狀態にあるのです

試みに雜誌の領域を御覽なさい。その大部分が婦人の啓蒙運動と殆ど無關係に、といふよりも婦人の必然に蟬脫すべき動向を麻痺させ阻止させる危險を多分に孕んで兎角の批評ある興味本位の月刊婦人雜誌が何萬、何十萬の刊行部數を以て目白押しに家庭に侵入してゐるではありませんか。其處では何か問題になるかと申しますと「如何なる手管で男に好かれるか」「如何なる方法で夫の愛を占有するか」等の新案特許が先づうら若き女性や主婦の血を湧き立たせます。生活哀史や戀愛悲話では紅の袂を絞らせ、モボモガの銀座街頭行進曲には思はず好奇の眼を刮り、變幻自在の通俗小說には一喜一憂交々至る有樣です。其處には涙の懺悔があり和合秘藥があり女優情史があり法廷哀話から人情大臣俺が大將の思想善導御說教に至るまでまことに盛り澤山です。然も雜誌が商品として賣買される限り我が國婦人が斯うした傾向の雜誌を要求してゐると見られ得るのです。

營利主義に立脚した婦人雜誌は社會面に生起發生した刺戟的興味本位の諸事件を迅速に拾ひ集め味と匂と色彩とを添へて讀者のお膳に供へます。これは或る意味で婦人雜誌の革命でありその革命の內容は雜誌の新聞化であり之等は大げさな廣告戰術と相俟つて讀者層の開拓をそのクライマックスまで發展さした感があります。今迄婦人日刊新聞の介在する餘地が無かつた重要な原因の一つはこの婦人雜誌の新聞化にあると見て支障ないでせう。然し男子本位と云ふよりも打算本位の經營者が婦人の弱點——好奇心——を巧みに營利主義に基づいて捉へやうとする努力だけでは渾沌期にある婦人の啓蒙運動は期すべくもありません。婦人が生活哀史や法廷哀話の背後に社會組織の不完全がジッと身を潛めてゐることを、戀愛悲話の裏には家族制度の偶像が、家庭悲劇の半面には婦人の地位の奴隷化が嚴然と橫はつてゐることを敏くも察知し、又鳴物入りの思想善導說敎の有難味の中には反動の及が因襲の絆を裁たんとする婦人の上にかざされてゐることを識別するには、夫等は邪魔にこそなれ覺醒の警鐘でないことは勿論です。

婦人の社會的自覺は物質的基礎に立つ社會諸條件に支配されます。その法則に基づいた進路を正確に把握してこそ婦人を政治的力にまで結集し擴大する啓蒙運動が提起されるのです。我が國のやうに婦人が男子の桎梏の下に、又金權政治の鐵鎖の中に二重の奴隷的虐使を蒙つてゐる時、何が當面最も緊急を要する問題であるかと云へば政治的に社會的に家族的に婦人の地位や生活を解決することです。我が國の婦人は未だ公民權さへ與へられない無權力者で世界の潮流から取り殘されたフランスと支那のお仲間ですが、どんな國粹的偏見を振り廻したところで世界の浪が極東の一帝國を洗はずに流れ去る筈がありません。現在の日本婦人はワイニンゲルの所謂性的分化の衰へた時代、半陰半陽の女性が橫行し女性的男子が彷徨する時代にあるためかも知れないが婦人解放運動が大きな怒濤となつて島國を洗つてゐるのは事實です。或はフェミニストの運動となつて、或は無產者解放運動の中に含まれて——。斯うした啓蒙期にある我が國婦人の要求してゐるのは、例へどの樣に現在あるが如き諸雜誌が媚を湛へてゐやうとも興味本位の雜誌から意見の新聞雜誌へ、娛樂本位から必要本位へ勇ましく進軍し征服することであらうし又さうなければなりません。斯うした婦人の言論機關に對する私の希望は最近婦人每日新聞の發刊に依つて、又同時に私が編輯長として迎へられたことに依つて一應は實現されたのですが、新聞が私の希望する夫であるかどうかは今後の問題に屬しませう。

階級の對立の外に人間としての男女の對立或は差別があるでせうか。生理的には勿論性の別と、其の性的任務から生ずる差異があります。然しこの事が直ちに人格としての男女の不平等を構成する理由とはなりません。ミルも弱い女性を強い男性に服從せしめる現代の制度を擁護する說は單なる空論であると斷定して英國の婦人運動再燃の烽火を擧げました。未だ他の制度の試みられたことのない前に婦人の服從を強要する理論的根據が何處にありませう。ベーベルも婦人が身心の才力を發展活用させ男子と同じ條件の下に產業方面では實務的勞働者として、他の時間では保姆、敎師、看護婦となり或は科學、藝術に或は行政事務に從事し聊かも他の支配や掠奪を被るものでない新社會を說いてゐます。それは戀愛關係や結婚等も同樣

で夫等は私契約として自由に任せ何等の拘束を受けぬものとしてゐます。婦人は社會人としての諸條件を完全に具備してゐるが故に又經濟的條件の必然の變遷に依て社會的に經濟的に一歩々々獨立の地步を獲得しつゝあるのです。かの本能を偏重する婦人意識說等の如きは追つつけ社會進化の軌道から拋り出される運命にあるでせう。

婦人がかく社會的に經濟的に一歩々々獨立の地步を獲得する運動は全體としての無産階級運動の中に包含され局部的には女權獲得運動に合流して進むでせう。何故なれば無産者の解放なくして婦人の解放を期することは出來ませんし、又婦人公民權參政權の獲得は無產者解放運動と切り離して考へることは出來ないからです。婦人の日刊新聞も窮極論から行けば勿論婦人大衆が資本と男子の牢獄から解放される迄の使命です。我が國の如く家族制度の崩壞が都市に於ては急激に行はれてゐますが全體から見て僅かにその端著を見せたに過ぎず、かの興味本位の婦人雜誌しか要求しない程度に婦人が家庭の殻に深く閉ぢ籠つてゐる現狀にこそ啓蒙機關としての言論機關が侵入する餘地があるのです。婦人が完全に解放されたと云ふロシアに、又政治的に婦人の參政權が擴大され來る六月の總選擧には所謂フラッパァー、ボートが實施されんとし、完全に男女同權が認められた英國に於て、婦人新聞の發展しない理は玆にあると思ひます。私は自分の希望が希望を具現して發展しやがて希望の實體が婦人解放の中に解消することを、新聞人となることによつて更に希望せずには止みません。

新刊紹介

長篇小說　毒花　米澤順子著

昨年、時事新報に當選した長篇小說で、永遠の處女と娼婦型との二つの性格を兼れた庸子を、巧みに描いた佳篇。そして彼女を廻る變態的な家庭、二重人格の男、白蛇のやうなカフェーの女、白皙の混血兒等の面目躍如として、物質的な價値を與へる。筆は地味であるが、主人公庸子が試驗場で卒倒し、それから次第に娼婦的な氣持に移り、又時としては極度に純眞な女性に還る邊りの描寫は、無理がなく厭味がなくて感服を强ひる。

殊に閨秀詩人として名の聞えてゐる作者のタッチは、我々の感覺に奇妙な柔軟性を與へ、ヴリンカの音樂のやうな長い哀愁の美を投げる。近代的な角的な感覺の尖りはないが、この變口調の澁滯なく美しいメロデーは、單行本發行の少い今日必ずや讀者の胸を捉へずには置かないであらう。（中本たか子。）

發行所　日本橋萬里閣（定價一、八〇）

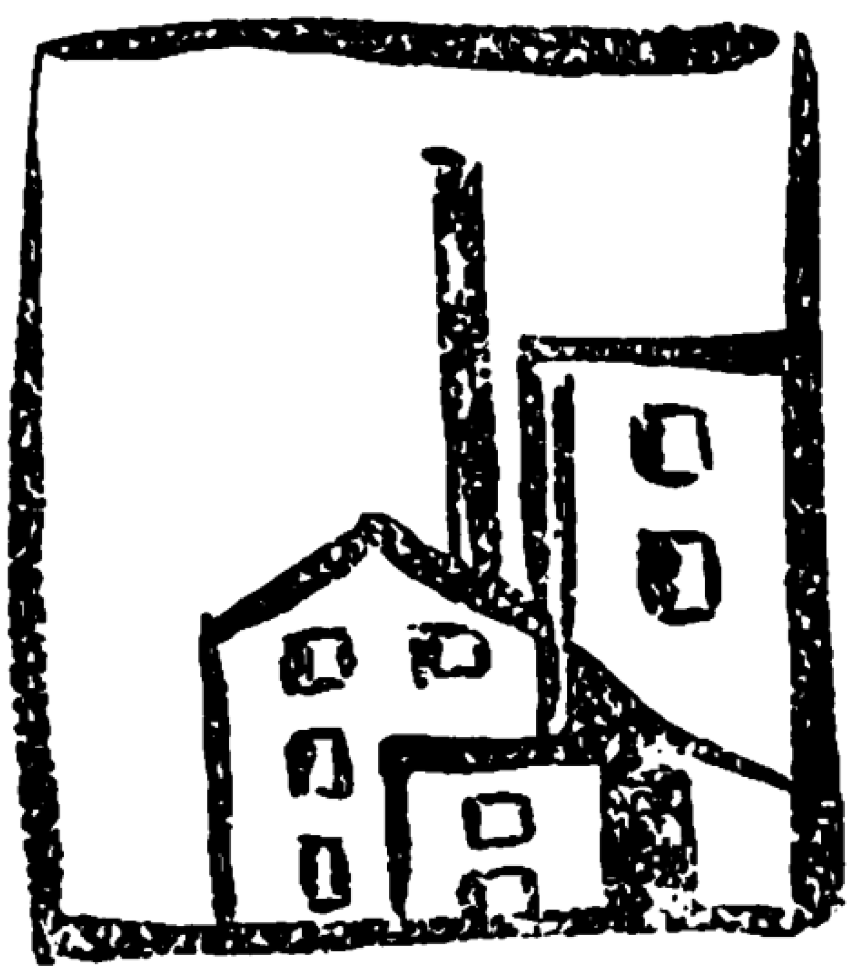
『戀の黃昏』を讀む　田中淸一著

『戀』の黃昏の時、人の心に忍びやかに訪るゝものは『死』の諦觀であり、又『美』の哀歌であらねばならぬ。戀と死との交響樂はその魅力を人の心に深く投げ込む時、期せずして美しき詩の形は選まれる。詩人田中淸一氏は常に喧騷の詩壇をさけて、ひとりしづかに詩想を練り、廣く世に認めらるゝ事速かならざるも更に意に介せざる晚成精進の人である。この『戀の黃昏』一卷にはジョルジュ・サンドとショパンとの戀を取扱つた『戀の黃昏』（一幕）又『重衡と千手の戀』（一幕）に（明日をも知れない生命じや！明日をも知れない戀じや！）といふ哀嘆の銀の韻律を調べ（何より望むものは情熱の生活、感激の生活です、惡魔に魂を賣つても僕は情熱の生活を送りたいのです）といふ近代人の殉情の金の韻律を抛つてゐる。私はこの書が讀んで種々の詩想を讀者の胸に呼び起す暗示に富んでゐる事をつげておく。（花世）

發行所　澁谷詩神社出版部

婦人解放の闘士クララ・ツェトキン女史

菊地小夜子



多栗子

クララ・ツェトキンがその五十年に亘る政治的活動の第一歩を踏出したのは、丁度ビスマルクが社會主義鎭壓法をもつて一擧に社會主義運動を粉碎せんとした今日の日本の如き時代である。彼女はその敎育をライプチッヒにあるアウグスト・シュミット——シュミットはルイゼ・オットー＝ペーテルと共にブルジョア婦人運動の基礎を置いた——の學校で受けた。クララの望は敎師に、しかも文化と人類の爲の敎師たることにあつた。

その學校は勿論自由主義的思想に基く婦人解放運動の思潮に滿されてゐた。だがこゝに於てもクララは既にその考を異にしてゐた。彼女はブルジョア的婦人解放運動の思潮の中途半端に强く反對して獨り自らの道を進み、遂に婦人の解放はプロレタリアートの解放を通じてのみ可能であるといふ社會主義的思想に到達した。更に彼女をして社會主義へ近づかしめたものは當時亡命してゐたロシアの革命家達であつた。彼等の强い犧牲的精神は彼女に深い影響を與へた。この强い犧牲的精神こそクララの全活動を貫く一條の太い線である。彼女は鬪爭に突入した。一八七八年、遂に非合法的な黨に加入して活潑に活動した。やがて、彼女はロシアの革命家であるオシップ・ツエトキンと結婚した。ところがオシップ・ツエトキンは獨逸から追放せられることになつたので、彼女はその夫と共に外國に行き、一八八二年にはチューリッヒに居た。そこで彼女はモットレルと共に非合法的中央機關との連絡、通信をやり、組織の擴張に從事した。當時、尙革命的であつたベルンシユタインと相知つたのもチューリッヒに於てであつた。その年の冬ツエトキンは巴里に向つた。當時フランスの勞働運動の波はコムミユーンの敗北によつてうけた打擊を克服して、今や再び高まり來つた。しかも尙、勞働運動は幾多の傾向に分裂して烈しく相對立してゐた。彼女はギユードによつてその基礎を置かれたマルクス的政黨に加入し、ポール・ラファルグ・ローラ・ラファルグ等と共に猛烈に宣傳的、組織的活動を遂行した。

彼女はドイツ、オーストリ、フランスの合法的、非合法的新聞に於て活動し、その間にドイツへ旅行して、特にライプッイヒの非合

法的組織で活動した。この巴里時代は彼女にとつて非常に困難な時期であつたが、彼女はその撓むことなき精力を以てよくその困難を克服した。

彼女は一八八九年に巴里で開かれた國際會議の準備と第二インタナショナルの設立に努力した。その國防會議に於て彼女はプロレタリア婦人運動の理論的基礎を確立したのである。夫の死後（一八九〇年）、彼女は獨逸に歸つて生活の苦難と闘ひながらその政黨的活動を續けた。一八九二年エルフルト大會の後、彼女は「平等」の編輯を引受け、こゝに本來の活動分野を見出した。「平等」は「勞働婦人」の後身である。「平等」は「勞働婦人の爲めの雜誌」である。「平等」は眞に活動的な婦人闘士にとつて汲めども盡きぬ知識の源泉だつた。ツエトキンはその雜誌に嚴密なマルクス主義的性質を賦與し、その立場から凡ゆる日常闘爭の問題を取扱つた。勞働運動内に次第に日和見主義的傾向の強くなつて來たのもこの時分のことである。この空氣が社會民主黨を脅かすに到るや否や、ツエトキンは敢然としてその潮流と抗爭した。九〇年代の末期に於てはベルスシュタインに對する決定的闘爭を行つた。これらの闘爭を通じてクララはローザと強く結合されるに至つた。クララとローザとの關係は、エンゲルスとマルクスとのそれを思はせるものがある。ローザをして理解的な大審をなさしめたのは、クララがあづかつて力があるのだ。彼女はローザに對して丁度、エンゲルスがマルクスに對して果した役割を演じたのである。日和見主義に對する決定的闘爭を通じてスパルタカス同盟――後のドイツ共產黨――の基礎は築かれて行つた。ツエトキンが大きな役割を果したことは云ふまでもない。かくする内、戰爭の危機は刻々に迫つて來た。かくて戰爭が勃發するや社會民主黨は、バーゼルの宣言を裏切つて階級闘爭の中止を命じた。クララはローザ、リープクネヒト、メーリング、レオ・ヨーギッシュ、ユリアン、カルスキー等々と共にスパルタカス同盟を組織し、あらゆる迫害と戰ひつゝ戰爭反對と革命への闘爭を指導した。戰爭に對する革命的行動を國際的に組織せんとしたのはツェトキンに始るのである。チンメルワルド運動の先驅をなす國際婦人會議を一九一五年に召集したのも彼女だつた。一九一五年夏、殆んど六十歲に達してゐた彼女は重病にかゝつて、止むなく數ケ月間その活動を停止しなければならなかつた。一九一七年五月、黨の幹部は彼女が二十年間育て上げた「平等」の編輯を彼女の手から奪つた。そこで彼女は「ライプチッヒ・フォルクスツアイトウング」の指導に當つた。やがてロシア革命ボルシエヴイキの勝利がもたらされた。彼女は全力を擧げてボルシエヴイキの政策を擁護した。やがてドイツに革命が起つた、クララは病苦をおして活動した。

一九一八―一九年の間にドイツ共產黨が形成さかた。

一九一九年以來、彼女は黨の中央委員會の一員として活動した。

一九二三年彼女はモスコーにあつてドイツの運動を指導し、極左的傾向と戰つた。彼女がソヴィエット・ロシアに來て以來、ソヴィエット・ロシアは彼女の故國となつた。彼女はその高齡にも拘はらず、幾多の重大な任務を遂行し、コミンタール執行委員會の一員として壯者を凌ぐ活動をなしてゐる。昨年十月その七十歲の誕生日を全世界の無產階級は萬腔の信賴と敬慕の念を以て祝福した。

まことに彼女の名は、ドイツ革命の精華ローザ・ルクセンブルグと共に永久に、先づ第一に全世界の無產婦人とプロレタリアートとに慕はしく呼び續けられるでありませう。



ちか子

機械の美感

中本たか子

1

(私は理論にかけては白痴だ。だからこれは感想的な獨斷である)

最近何方を向いても「唯物論」「唯物論」で專らだ。まるで洞窟の中で鳴る鐘を聽くやうである。餘り響きすぎて頭ががーんと鳴るだけで、却て音としての感覺は極めて薄い。併し、この「唯物論(史的辯證法的唯物論よりもつと廣義な總括的な唯物論)」こそは、古來永い間人類の藝術を風靡してゐた「唯心論」に代るべき唯一の認識作用である。では、藝術に於て「唯心論」は何故に「唯物論」と見換へられるに到つたか。それは當然來るべき「唯心論」の運命である。何故ならば「唯心論」は出すべきものをみんな出した。もはや此の上「唯心論」から我々は新しい鑛物を掘り出すことが出來ようか。なるほど、出るべきものは出た、併し、完成されるのはこれからだと云ふ人があるかもしれない。それなら、その方はその人々へお任せしよう。

だが、鑛脈の盡きた鑛坑へ這入つて失望した、若い人々の採掘力と探求慾とは必ずや別の新しい鑛坑を開くであらう。その隣に豐富な鑛脈を持つ土地があれば、それが以前の鑛坑とは違つた質の鑛物を出すとしても。

其處で、採掘力と探求慾を持つた若い(新らしい)人々は「唯心論」に失望して「唯物論」の採掘にかゝつた。この鑛坑からの報導によれば、かなり鑛脈は續いてゐるさうだ。内容は豐富ださうだ そして既に掘り出された鑛物を見れば、なるほど含有質が多く奇異な光澤に富んでゐる。そして、この鑛脈を掘つて行けば、屹度純粹なこれ獨特の鑛物を掘り出しさうである。

この「唯物論」に於ては、心靈の崇高な作用も一つの物質に過ぎない。それは客觀によつて主觀を認識するのだから。而して、これに於ては力學と物質が基調をなしてゐる。

2

今日我々を取り圍む生活の姿に眼を轉じて見よう。眼につくもの

総べてが機械である。我々の感官は遺憾なく機械に變つてしまつた。我々の生命の原料は機械が生産して呉れるものによつて保たれてゐる。かうした機械による生活の中で、それに對して人間が無關心であらう筈はない。

もと〳〵機械と云ふものは、人間の切なる要求によつて理想に近く生み出されたものである。これによつて、より大きい幸福と歡びを得よう が爲に設けられたものに他ならない。然らば、機械に對する我々の感情は如何に動くであらう。歡びを與へて呉れるものに對して、人間はそれに感謝と云ふ心持を捧げる。感謝は心靈の躍進だ。心靈が躍進する時、人間の美感が生ずる。機械が我々の欲求から理想化されて、絕大な力と歡びを與へる時、我々の心臓が如何にして躍進しないでゐようか。そして美感が生じないでゐようか。そして機械を組立てる要素たる物質と力學が、我々の美感の外に排出されようか。機械こそはまことに、力學と物質を基調にする唯物論の息子であらねばならぬ。

この人生への新參者の機械の美感は、强ち突飛なものでも排斥されるものでもなからう。そして、この新參者にあつた時、我々は理窟を考へて偶するであらうか。

此處に、秋草の亂れ咲いた上を透明な秋の陽を浴びて、すいすいと羽を閃かす蜻蛉がゐる。向ふから富士の遠影を遙かに見下して、爆音を蘇生して來る飛行機がある。その爆音をきくが早いか腦の使命も待たないで我々の胸は時めいて來るであらう。前者に瞳を注いで生命の沈潛を味ふものが沒論理ならば、後者に胸を轟す者が機械へ捧げた心靈の躍進を、理論あつてからの行動とは云はれない。(直感によらない美感は、甚だ價値の低いものである)

もはや我々の美感は、自然物へ對してよりは作られたものへ對して、より多く發せられるに至つた。生活から游離した風流的な美感は、あまりに我々からかけ離れたものとなつた。それは、生活に密接し切り離すことの出來ない所へまで、美感が肉迫して來た證據だ。例へば、自然の音響は管絃樂器の中にとりことなつた。そして、管絃樂は今や機械から生む音響に征服されつゝあるではないか。試みに我々の耳を機械の音響に藉して見給へ。交通機關の吼り、工場のサイレン、そして工場の機械の廻轉から生ずる、それらのまことに多く我々の生活に喰ひ込んでゐる音響から、種々さまざまな、そして絕大な交響樂、乃至はジャズバンドがきくことが出來よう。全くこれからは心靈の躍進を促すことの大なるに愕くであらう。若し、假令それが不快に響いたとて、その價値感情は美的感情の價値に加はるものだ。

かくて、機械の持つリズムとテンポは全く我々をとりこにしてしまつた。

3

此處で我々は、新しい藝術運動として、未來派、立體派、構成派等の力學を基調とした藝術運動の擡頭を頷くことが出來よう。彼等は機械を讃美し、機械から生ずる音響に陶醉し、機械の廻轉に瞳を瞠る。彼等が藝術に盛るリズムとテンポを誰か笑ふことが出來よう(おゝ、何と云ふ素晴しい發見だ!)

今や、組立てた鐵骨の上に伸び上つた起重機は都會の裝飾物であり、百貨店の盛大を見るは、その力學の應用にある。兵隊の美はそれの持つ唯心論的な美感でなくして、あの訓練の行屆いた機械化さ

れた運動にある。都會が田舍よりも緊張してゐるのは、それの持つリズムとテンポだ。そして都會は月や星を默殺して、代りに電車のスパークを、電氣廣告のイルミネーションを、輝かしてゐる。

映畫が今日の勢力を得たのは、何も主題がポピユラーであり、價格が低廉であり、表現が自由であると云ふこと許りに歸因するのでなく、其處に隱れてゐる力學的なリズムとテンポと廻轉にあるのだ。この頃の新しい劇が幕を排して多場ものになるのは、映畫の力學的要素に着目してその方へ傾いたが爲である。これは慥かに面白い傾向だ。歐洲では大戰後盛にレビユーが流行るときく。我國でもぼつぼつこの種の上演を見る。これに人心が吸ひ寄せられるのは、リズムとテンポがあるからだ。

テンポ――機械の齎したこれは、今や餘りに人々の心に喰ひ込み過ぎた。藝術はこれなくしては破産するかの如き狀態をさへ呈して來た。リズムとテンポ、そして心靈によつて作り出されたもの（機械的なもの）――それらが我々の新しい美感となつた。それは機械から移入した美感である。其處で我々の心靈が對象から受けた美感を再現するに非ずして、對象から受けた美感を一度心靈のレンズで反射して表現した藝術――複線的な藝術が、まことに道理に叶つた藝術となつて來た。何故ならば、その母胎機械が既に人間の欲求を理想化した心靈の複線的出現であるから。

奔馬の脚を二十四本附けた繪が現れ、「人造人間」の戯曲が生じ、「歐羅巴の滅亡」を想像した小說が出て、

「これは作りものだ。」

「自然の姿でない。」

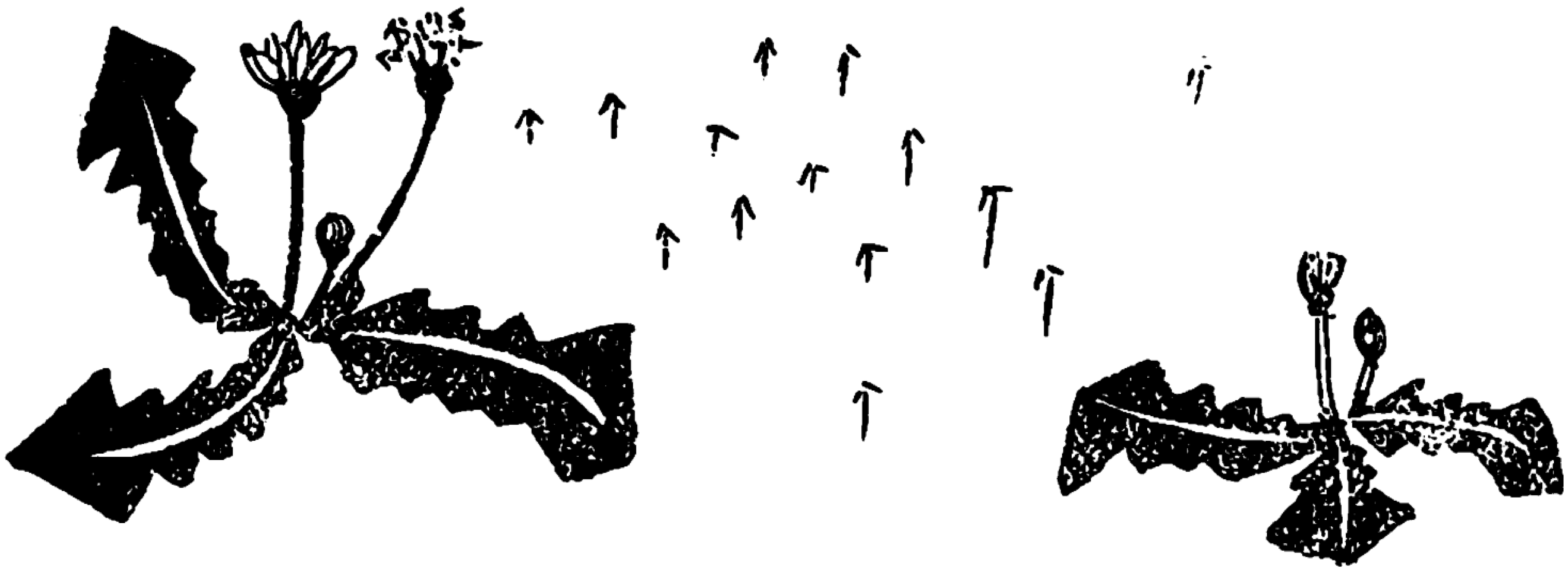
と云ふ評言があつたとしても、もはやそれは藝術の價値を低くするものではなくなつた。それは唯、その藝術の方向を示す愚かな助言であるに過ぎない。そして、この作られたもの――複線的な藝術こそは、まことに多く美感の盛られてゐる藝術ではなからうか。

4

ピカソの宣言に耳を傾けて見よう。又、アルパアトの門の側でエレンブルグは如何に幻想したか。時代のテンポと共に新しい藝術運動が生じた。複線的な藝術が誕生した。

この複線的な藝術は、これ迄の分解されたものを組立て、解剖されたものを總合し、理論よりも直感へ、說明よりも暗示へ、と形式をとる。この形式（フォルム）はこの種の藝術の生命である（何故ならば機械を考へて見れば解ることだ）

「藝術の形式尊重」の聲がこの頃大分高くなつて來た。まことに時宜に適した聲であると云はねばならぬ。



照子

ふじ七景

岡本かの子

藤花の細緒の垂りやいく手筋うち揃ひつゝ垂り足らしたり。

むらさきにひたぶる染みて藤の緒のいくもと千すじ垂り揃ひたり。

藤花の手筋がなかの一すじを手にはとりつゝ眼に寄せて見る。

こまやかに花はこぼれて藤棚の下むらさきにうちしめりたり。

鯉はねてはげしく水をたゝきたりかそけく藤は揺れやまずけり。

藤棚のむらさきこもる下にして垂り尾真白く犬は佇ちつつ。

軒の端の藤の緒の間ゆ見はるかす遠富士が嶺はけさ真白妙。



武装された蘇州(スーチヤオ)

森　三千代

白い壁の幾曲りの迷路の靜けさが、私の心の中に、
灰色の菌糸のやうに細いひろがりをしのび込ませるのです。
古風な丸窓からみる太湖石の屏風にほの明るく水影が搖れ搖れて……
靑く錆びついた水の色、枯れた蓮の傾いた莖の中に小さな嵐を聞きませう。
丹朱の柱の亭の中で、黄梅の香に咽び入らせて下さい。
靑繪の瀬戸の榻には、誰も休む人もあらぬ、
私の靴が鳳凰の模樣ある敷石道を踏んでゆきます。
何故、留園は、もう昨日のものではないのでせう。
變つてしまつた！
この靜けさの底には何かゞある。
悲鳴か、嘆息か、絕叫か。あゝさうだ、戰慄！
お聞きなさい。
　兵隊(ヒン)の銃劍の音、高く低く響き渡るラッパ。
長い曲廊の盡きた閑地に
私は震える破れ芭蕉を見、

おどろき易い調をみました。
私のなつかしい追憶、留園は銃劍で武裝されてゐたのです。
留園の古雅な建物は國民黨兵士達の宿所となつてゐたのです。

藤蔓のからんだ木橋の上。
雜草の根の午後の陽ざしに香る廢れた後園に響き渡る兵隊（ピン）のラッパ。
留園は武裝されてゐるのです。

細い石ころ道を黄包車（ワンポウツオ）は、大ごゑに叫び合ひ危ふく打つからうとしてすれ違ひます。はげしい傾斜に私は、湯氣の立つ湯麵屋の店の中へ放りこまれさうです。

壁、壁、壁、壁、
笄のやうな屋根の重なりが私の眼につぎ／＼に移つて來ます。
壁、壁、壁、壁、
汚れた、はげた、曲りくねつた壁、
白い壁、黑い壁、朱色の壁。

忽ち、蒼空の中を、
双つの塔が泳いでゐる。
赤土色のこわれた
死にかゝつてゐる古代よ！

細い枯柳のしだれた枝の下で
笛の音が聞えて來ます。
私の肩に觸れてゐる柳の枝を結んで
私は、故もなく、『誓ひ』といふことを心に浮べました。
『誓ひ』といふことは、
あの紫の房のついた笛の一すじの音色にも似て哀しく……。

打倒帝國主義
排擊共產黨
肅淸土匪
擁護中國々民黨
實行三民主義
掃除不平等條約

宣傳は、支那全土を、熱病のやうにひろがる。堀割のそり橋をかけ抜ける馬車の上から、これ等の傳單を一息に讀むのです。

天空の中に、
蘇州七塔よ、のどか。
蔣介石よ、
明日はどんなビラが代はるかを考へてゐますか。

あゝ城壁の桃色に煙る夕。
鈴音立てゝ、驢馬はもう疲れました。

城壁の高さが私を英雄にする、
みれば、蘇州城内はたゞ無數の瓦のかけらの堆積でありました。
そこに動くものは、私の心に搖れ上がる『破壞』といふ感情。
打倒!!
私はこの城壁の上に立つて
空いつぱいの旗を振らう。

朝、蘇州の菫色の空が、高い窓硝子から、線になつて光を投げる時、
三原さんが、二疋のピチ／＼はねる魚を抱えて飛び込んで來ました。
『やあ、まだお休みの所をどうも。わあきあその生きたやつをお目
にかけ度いと思ひやして』
三原さんは、喧嘩で鼻柱を毆られてから鼻が惡くなつて、わたしと
いふ所を、わあきとしか發音できないのだ、と前の日に人から説明
されてゐた私達にとつて、耳なれたわあきを早朝に聞いたわけです。

私はベッドの白い垂幕を引きあけました。Aは早速カンバスを張り
初めたし、Kも寫生張を取り上げました。
扇のやうに脊鰭をひろげる金色の豪奢な鱖魚と籠の底いつぱいにの
たくつて、鰓の所で動悸してゐる、なまずのやうな烏魚とが繪にな
つてゆくのを、『北平(ペーピン)』がパイプの先で白い灰となつて私の片足つつ
かけた支那靴の上に落ちるのも知らず眺めてゐました。

暗い街角に野雉(ヤーチー)の毒々しい化粧の顏の出沒する頃。
歌うたひ女が、胡弓引きをつれて、入りかはり、立ちかはり、私の
泊つてる利昌(リーチャン)旅舍を訪れにくるのです。
ある日、私は七つ位の少女が、口紅の濃い小さな口をあけて『十杯
の酒をすゝめる歌』をうたふのを聞きました。
　そして、AとKとは、どんぺを十個與へて髯の生えた果物賣りの
老爺を寫生したりなど。

錫の瓶に老酒は冷えてゆく……

　遠い胡弓と、かん高い歌がいつまでもつゞいて、西瓜の種の殼が
部屋中に散らばりました。
蘇州胥門の夜のこの靜けさ、
そして、こんな夜が、このまゝ更けていつたと思つたら大間ちがひ
なのです。
隅々の闇の中に何が起つてゐるのでせう。

突如、ピストルの音、一發、二發、三發、
俄かに人々の叫び、驅け出す、混亂、
出てみると、二人の支那人が手錠をはめて引かれてゆきます。
モーゼル銃をかついだ兵隊が、あとから列になつてつゞいてゐます。
　――明日は銃殺――

隅々の闇の中に何が起つてゐるのでせう。

此寺のこわれた土塀の道から
眞晝、
そり屋根の上の靑銅の武者人形が戰ふのを夢とみてゐました。
寒山寺の楓橋になぜ、兵(ピン)のつばきがひつかゝることになつたのか。

滄浪亭(ソーロンテン)
私は、この名も建物も大好きです。

私の驢馬(ドンキ)が鈴を振つて枯林をかける。
三人のドンキがそれぞれ鈴を振つて枯林をかける。
天平山の麓は、細い枝々のすゝり泣く枯林なのです。
枯林の中の一つの亭、
池の上にけ石の橋、

天平山へ上らう。
蟾蜍石、龍頭石、釣魚石、笏石、
岩に憩んで　太湖を見よう、

虎丘の塔は、雜草の中にせり上がる。
夕やけの中に火となつて燃え上がる。
粉々に散つてゆく小鳥の群がある。

私は劍池の岩石の面に刻んだ風壑雲泉の文字をよみました。
それと並んで。
歡迎福國利民的蔣主席

歡迎總理信徒的蔣主席
虎丘はあの時を覺えてゐる！
雇兵のなまぐさい血で劍池の水の色の變つた時を、
虎丘はあの時を覺えてゐる。
恐怖の、慘虐の、絕望の時に
窓々に小鳥はおびへ、
虎丘は、蘇州城外の風景の上に
一管の笛となつて鳴つたとおもへ！

革命か、
反逆か、
寶帶橋の五十三の洞門から
一つ一つ爆彈を打放さう。
むしろ旗を立てつらねた漁船よ！
支那はどこへ行かうとする？

橋の上に立つて、
流れる船の中に釣する老爺に、何が取れるかと聞いてみたら、貝殼も水底から掬ひ上げるのだといひました。商賣はどんな風だと聞けば、辛い！といふ返事。そして赤くなつた鼻の先を手ばなで擦つて、水は冷たいと。

冬！　冬！
季節も、時代も。

第二巻第四号、三十六頁から四十頁は、高群逸枝著「櫟の家にて」が掲載されておりましたが、同氏の著作権継承者の了解が得られませんでしたので、本復刻版では割愛致しました。

（龍溪書舎）



原始時代

伊福部敬子

今朝は、あけ方になつて母が厨房に立つてから、一つの蒲團で仲よく一眠りした彼等であつた。

兄は、何かしら樂しかつた。大人用の抱卷の中にくるまつて、自分より小さい者をかばふやうに枕をよせあつて眠ることは、大人になつたやうに思はれて、彼は、母に呼びさまされた時、まだ傍にお餅のやうに眠つてゐる弟の頰に、自分の頰をくつつけた位であつた。

彼等は、朝の食卓に向つてゐた。

「お兄ちやん、ゆふべ、鳥の夢が來たねえ、大きな鳥だつたねえ」

「うゝん、鳥の夢來なかつたよ」

兄は平然とパンをおしこんでゐる。弟は目をまんまるにし、怒つたやうに言ふ。

「僕、來たよ、お兄ちやんも一緒に見たじやないか、僕と同じ蒲團にねたんだもの」

「ちがふ、僕とこへ來たのは小人の夢だつた、禹ちやんと一緒にゐる前に一人で見てしまつたんだから――」

母が愉しさうに、しかしこつそりと笑つた。

「何だつて、禹彦がお兄ちやんと同じ夢を見ようと思つたのに、お兄ちやん一緒に見てくれなかつたのかい？」

と父が問ひかけた。

「うん、今度お父ちやん、一緒に見てね」

「あゝ、いゝよ」

彼等は此の頃夢を知つた。

彼等は夢をもつてゐなかつた。彼等が晝間さめてゐる間にその識域に入つたものが、睡眠中に再び神經面を刺激してさま〴〵の物象をあらはすことがあつても、彼等は目をさましてから、今の現の世界と、眠つてゐた中の世界とを、はつきり思ひ分けることが出來なかつた。といふよりも、目が覺めると、眠つてゐた間の世界はぼやけてしまつた、昨日もぼやけてしまつた、一昨日も、去年も。夢と現の區別なく、過去は一枚の白い布を漉すやうにして逃げて消えた、大きな出來ごとだけが、線も形もなく、色だけでぼんやりと白布の

上に漉しのこされて浮いてゐた。彼等には、歴史はなかつた。

いつからか、それは母にもはつきり判らない、「現在」が彼等に把握せられた。覺めてゐる今日、さめてゐた昨日、そしてその間に煙るやうなもの、夢、彼等は大人のいふ夢といふ言葉にそれを結びつけた。主觀的に彼等は夢をもつた、そして歴史が出來て來た。

彼等は黒い夢をおそれた。大人のするやうに紅茶を飲みすぎたり、寢しなに澤山のお菓子を食べたりすると黒い夢が來る、と彼等は思つてゐる。

「僕ね、今度活動の夢が來るやうにたのむんだ。」

「さう、それはいゝわね、だけど禹ちやん、そんなにパンばかりを食べるといけませんよ」

「パンばかり食べると、パンのお顔になるでせうよ」

弟は彼の信仰を述べられるのを得意氣に母の後について言つた。

彼は四つであつた。彼の兄は六つ。彼には何にも恐いものはなかつた。すべては樂しくて、珍らしくて、彼の理解をこえて複雑であつた。

彼のノートには記されてゐる。

お兄ちやん——きやうだい、男、大きい。

お父ちやん——お友だち、男、大きい〳〵。

お母さん——きやうだい、女、大きい〳〵。

叔父さん——學生、大きい〳〵。

彼は、仲のよい人とは誰とでも隨時兄弟になるのである。兄が牛乳をのんでゐる彼を待ち合はさないで遊びに行かうとすると、彼は泣きながら後から叫びかける。

「お兄ちやんの馬鹿、お兄ちやんときやうだいにならないから」

何故父が父であるか、母が母であるか、兄と自分とが兄弟といふものであるか、出生に就いては勿論知らない。彼は天から鵠にのつて來たのだから。天から來た子供が大きくなると、お父さんやお母さんは天へかへつてしまふ、そして新しい子供が天から來る。夕方寢かせられる前にふと見る空を仰いで「お母ちやん、天使は澤山ゐるんだねえ」と感嘆する。自分もかつてはあんな天使だつた、その時お月樣がお母樣だつた。僕のところへ早く鵠が新しい赤ちやんをつれて來てくれないだらうか、彼は眠る前に神樣に賴まうと思つてみる。けれども、床に入つて母の話を聞き流しながら、兄と小父さんごつこをしてふざけて、紙の煙草をくわへてゐる間に、眠りの神樣が抱きに來てしまふ。

「お母さん、赤ちやん來た？」

「いゝえ、あなた、神樣にたのんだの？」

「きのふ(過去)たのんだんだよ」

「毎日賴まなけれや駄目なのよ、子供ちやんが」

「うん」と彼。

「お母さん、子供がたのむの？　そいぢや僕が來るとき何處の子供がたのんだの？」

兄のこの質問には、母は一寸困つた。

彼はお釋迦樣が一番偉い人だと敎へられた。彼は、しかしお釋迦樣がどの位えらいのか、見當がつかなかつた。月形龍之助よりもえ

らいのかと訊いた、槍をへしまげて食べてしまふメチヤクチヤ豪傑よりも強いのかと訊いた、牛若丸よりも強いかと訊いた。母は面倒になつて、お釋迦様は死んでも生きていらつしやるほどえらい方だと敎へた。

「そんなに強いの？　弓で射ても死なないの？　そいじやお釋迦様はカネだらうか」

母は苦笑した。彼等は、腕力時代に生きてゐると思つた。

彼は父に伴れられて鎌倉にいつた。そしてお釋迦様（大佛）を見て歸つて來た。

「お兄ちやん、僕、ほんとのお釋迦様みたよ、一つばん強かつたよ」

「さうかい、そんなに强かつたかい？」

「うん、カネだつたよ」

夏の夜、檜葉の下で椅子を並べて西瓜をたべた。五六日して芽が出、絲みつばのやうな白青い足をひよろ〳〵とのばした。

「これ、お母ちやん、何に」

「西瓜ですよ、この間の夜皆で頂いたでせう、あの種子が生えたのよ」

するとと彼等は、御飯の後でもらつた葡萄の種子を土に埋めて水をかけた。蟹が柿の種子に水をかけて、水をかけて、すると話をしてゐる内に木がのびて柿がなる。彼等は大方の種子を流してしまつたほど水をかけた。

翌日兄が、庭を掃いてゐる母に

「お母ちやん、葡萄生えたでせう」

「え、どこに？」

「きのふ埋めたのよ、お母ちやんの前の所に、」

「まあ、まだ生えないわ、明日でせう」

翌日、彼が父にきいた。

「お父ちやん、葡萄生えない？」

「ぶどうを播いたのかい？」

「うん、もつと水やらうか」

「いや、澤山だらう、ほら、雨が降つてゐるじやないか」

「あゝ、さうだね、雨がやんだらやらうね」

葡萄の種子が彼等から忘られて、何日かが經つた。

「どうして生えないんだらうねえ」

「葡萄のこと？　きつと雀がつゝいたんでせうよ」

すると、兄は試事を發見したやうに、元氣な聲で言つた。野原の向ふの田甫に立つてゐる案山子が、兄の心に浮んだ。

「今度又ぶどうを買つて來たら植ゑようね、仕方ないから」彼は、大人のやうな口の利き方をすると、次の瞬間には鉛筆をなめて、武士の繪を書くに一生懸命だつた。

緣先の土を掘り返して、彼等二人が何か作業をやつてゐる。

「拜ちやんと禹ちやん、何をしてるの？」

すると彼が、意氣込んだ時の癖で、目をまんまるくして

「ねえ、蛙を植ゑてるの」

彼等は埋めると植ゑるとの區別がない。どつちも土を掘つて入れる動作だ。

「蛙は植ゑるんだつて？」

「ねえ、昨日僕がつかまへた雨蛙が死んぢやつたの、だから埋めるの、秋山さんでもらつた鳥が死んだ時、埋めたでせう？　埋めてもいゝんでせう？」
「えゝ、埋めてやればいゝんですよ、可愛相ですからね」
　やがて母が庭先をみると、彼等の作業ををへた後には、菊の花が挿され、その土の色の新しい眞中には、御幣のやうな白紙製のものが立つてゐる。それは小さい祭場のやうであつた。
「まあ。舜ちやんたち、あれは何なの？あの白いもの、」
「あれねえ、かゝしだよ、」
「かゝし？」
「百姓の畑にあるでせう、雀が來ないやうに、人のまねして立つてるの」
　母には、彼等の意圖が了解された。
　やがて生えて來るであらう土の中の蛙が、雀につゝかれてしまはないためなのである。いかにも童子にふさはしい、何と小さいかゝしだらう。
　すべてのものは土から生れる。彼等はすぐ家のうしろの原つぱに春夏秋、かはるがはる土から生えて育つて花開くものを見てゐる。百姓は種子を土に埋める、そしてお米も麥もパカン（さつま芋）も皆土から生える。
　彼等は蟬が土から生れるのを見た。
　蛇も、蚯蚓も、とかげも、土が生れさしてくれる。
　蛙も埋めておけば、きつと生えて來るにちがひない——
　母は、肩の凝る縫物の針を止め、憂欝を笑ひやぶつた。そして驚いた顔で彼女の方を見てゐる二人に言つた。
「ずゐぶん御利巧だらうね」

　彼等二人は、「所有」については別々の時代を生きてゐる。
　兄が彼の家庭におかれた時、彼は大人の中の唯一人の子供であつた。家の中にある子供のものは、無條件に彼に屬してゐた。彼は、木皿にとりわけた菓子を、急いで口の中へ押しこむ必要なんか少しもなかつた。彼の家の中の子供ものは一切が彼れに屬し、誰れもそれを侵すものはなかつた。代りに或時彼の前のビスケツトを一つ大人が摘みでもしようものなら、彼はお終まで泣いて戸棚から出して償つても、承知しなかつた。戸棚の中のものはもとより彼に屬してゐたのだから。
　けれども、弟は、その出生が既に兄の世界に割り込むことであり、分け與へられることであつた。彼には、彼の掌の上に分け與へられた菓子ばかりが彼のものであつた。彼は少しでも早く、少しでも澤山のものを自分の口におしこむことだけが喜びである。誰の所有にも屬しない筈の戸棚の中のお菓子が、どうして彼の喜びを値しよう。
　兄と弟との間に、人間が何百千年かの間に經た所有に關する考への相異を見る。
　兄がよそへ遊びにいつて、頂いた林檎を見せに歸つて來る。
「お母ちやん、よその人が僕にりんご上げたよ」
「りんご？」
「うん」
　遊びにゆかなかつた弟が、積木の城を蹴とばして走つてゆく。
「いやだなあ、僕もりんごほしいなあ」

「じや貰つて來てあげようか」
兄は驅け出していつた。やがて大きな聲でいつてゐるのが聞える。
「べーちやんのママ、禹ちやんにりんごあげなさい」
しかし、弟はかういふお禮をいつた。
「堀江さんのおぢいさん、椎の實ありがと、又ください」

彼等はつくしの原つぱに立つてゐる。つくしの原つぱは、彼等のつけた名である。光線のない、日沒前の黃影をあびて、ぎんがきの萱がその熾んな白茫をそよかぜてゐる。

　こざるこざる
　おまへのこしかけぬれてるぞ
　きりぼつしやん、ぼつしやん、ぼつしやん、おまへのこしかけくされるぞ。

草の中から彼等のうたふ聲がきこえる。

　きつねこんこん
　きつねのこ
　月夜にしつぽがもえ出した。

「お兄ちやん、電信柱の歩くのみた?」
「うゝん、みないよ、夜でなけや歩かないんだもの」
彼等は、夜更に、電信柱がドッテテドッテ、と愉快な歌をうたつて足並そろへて行軍するといふことを信じてゐる。けれども、彼等は夜を知らない。夜とは何といふ不思議な、知られざるおそれと魅惑にみちたものであらう。天に殘つてゐる兄弟の天使の瞳が、美しく輝き、黑い夢や、鍋や、眠りの神樣や、泥棒や、子供のお行儀を見に來るサンタクロースや、そのやうなものが自由に横行し濶歩する世界、それだのに、枕許の繪本とアメチヨコとは、彼等が殘したまゝの相で朝を待つてゐる!、
夜、不可思議な世界。
「禹ちやん、歸らうよ、暗くなると「寒さ」が來るから」
「うん」
「草木が物言ふ」といふ原始時代を彼等は生きてゐる——

海

村松菊枝

わだつみはなべて悲しもわきてまた瑠璃の藻秘むろ葉山の海は

海にゆかむ汝が胸にこそ抱かれむ汝の碧さ見ゆまた戀ふろ日は

こゝに來て想ひすてまし悲しまじわれに親しき海あろものを

わがこゝろやゝに空しくなりにけり海は向へろ胸ぬすむとや

せんれんに貝を拾ひつゆきてふともの佗ぬ足らへろこゝろ

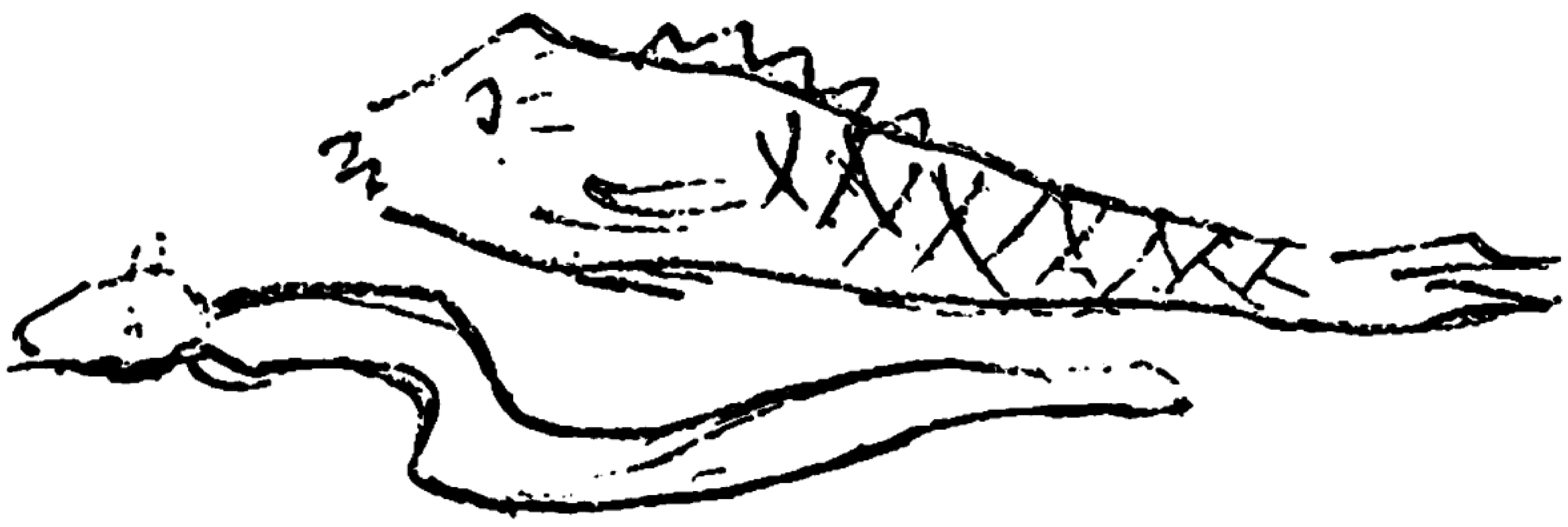
磯町に夕さり來ればあかあかと灯のまたゝきの冴ゆろ悲しも

高だかと波の音聞ゆ明方のうすらあかりにもの想ひ居り

赤いスリッパ

—放浪記—

林　芙　美　子



五月×日

私はお釋迦樣に戀をしました
仄かに冷い唇に接吻すれば
おゝもつたいない程の
痺れ心になりまする。

ピンからキリまで
もつたいなさに
なだらかな血潮が
逆流しまする。

心憎いまで落ちつきはらつた
その男振りに
すつかり私の魂はつられてしまひました。

お釋迦樣!
あんまりつれないではございませぬか!
蜂の巣のやうにこわれた
私の心臓の中に……
お釋迦樣
ナムアミダブツの無情を悟すのが
能でもありますまいに
その男振りで
炎のやうな私の胸に
飛びこんで下さりませ
俗世に汚れた
この女の首を
死ぬ程抱きしめて下さりませ
ナムアミダブツの
お釋迦樣!

妙に忙しい日だ、氣の狂ひさうな日だ。天氣のせいかも知れない、朝から、降りしきつてた雨が、夜になると風をまぢへて、身も心も、突きさしそうにキリキリ迫つて來る。こんな時を書いて、壁に張りつけてみたものゝ私の心臓はいつものやうに、私を見くびつて、ひどくおとなしい。

蒼ぶくれのした電報用紙が、ヒラヒラ私の頭に浮かんで來る。

ースグコイカネイルカ

馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿を千も萬も叫びたい程、切ない私だ。高松の宿屋で、あの男の電報を取け取つて私は眞實、嬉し涙を流して、はち切れさうな土産物を抱いて、この田端の家へ歸へつて來た。

半月もたゝないうちに又別居だ。

私は二ケ月分の間代を拂らつてもらふと、程のいゝ居座りで、男は金魚のやうに尾をヒラヒラさせて、本郷の下宿に越して行つた。

昨日も、出來上つた洗濯物を一ぱい抱へて、私はまるで戀人に會ひに行くやうにいそいそと、あの下宿の廣い梯子を上つて行つた。

あゝ私はあの時から、飛行船が欲しくなつた。

灯のつき初めた、すがすがしい部屋に、私の胸に泣きすがつたあの男が、桃割れに結つた、あの女優と、魚の樣にもつれあつてゐる。水のやうに青つぽい匂ひの流れてくる暗い廊下に、私は瞳にいつぱい涙をためて、初夏らしい、ハーモニカの音を耳にした。

顔いつぱいが、いゝえ體いつぱいが、針金でつくつた人形みたいに固くなつて切なかつたけれど…。

「やあ…。」私は子供のやうに天眞に哄笑して、切ない瞳を、始終机の足に向けてゐた。

あれから今日へ掛けての私は、もう無茶苦茶な世界への放浪だ。

「十五錢で接吻しておくれよ！」

と、酒場で駄々をこねたのも胸に殘つてゐる。

男なんてくだらない！

蹴散らして、踏たくつてやりたい怒に燃えて、ウヰスキーも日本酒もちやんぽんに呑み散らした、私の情けない姿が、かうして靜かに雨の音を聞きながら、床の中にゐると、いぢらしく、憂鬱に浮かんで來る。今頃は、風でいつぱいふくらんだ蚊帳の中で、あの女優の首を抱へてゐるであらう…と思ふと、飛行船に乘つて、バクレツダンを投げてやりたい氣持ちだ。

私は宿酔ひと、空腹でヒヨロヒヨロする體を立たせて、ありつたけの一升ばかりの米を土釜に入れて、井戸端に出た。

下の人達は皆風呂に出たので、私はきがねもなく、大きい音をたてゝ米をサクサク洗つた。雨にドブドブ濡れながら、只一筋にそつとはけて行く白い水の手ざわりを樂しんだ。

六月×日

朝。

ほがらかなお天氣だ。雨戸をくると、白い蝶々が、雪のやうに群れて、男性的な季節の匂ひが私を驚かす。

雲があんなに、むくむくもれ上つてゐる。ほんとにいゝ仕事をしなくちやあ、火鉢にいつぱい散らかつた煙草の吸殻を捨てると、屋根裏の一人住ひもいゝものだと思へた。朦朧とした氣持ちも、この朝の青々とした空氣を吸ふと、元氣になつて來る。

だが楽しみの郵便が、七ッ屋の流れを知らせて來たのにはうんざりしてしまつた。四圓四十錢の利子なんか抹殺してしまへだ！

私は黄色の着物に、黒い帶を締めると、日傘をクルクル廻はして、幸福な娘のやうに街へ出た。例の通り古本屋への日參だ。

「叔父さん、今日は少し高く買つて丁戴ね。少し遠くまで行くんですから……。」

この動坂の古本屋の爺さんは、いつものやうに人のいゝ笑顏を皺の中に隱して、私の出した本を、そつと兩の手でかゝえた。

「一番今流行る本なの、ぢき賣れてよ。」

「へえ…スチルネルの自我論ですか、壹圓で戴きます。」

私は二枚の五拾錢銀貨を手のひらに載せると、兩方の袂に一ッづつ入れて、まぶしい外に出ると、いつもの飯屋へ流れた。

本當にいつになつたら、あのこじんまりした食卓をかこんで、呑氣に御飯が食べられるかしら。

一ッ二ッの童話位では、滿足に食つてゆけないし、と云つてカフエーなんかで働く事は、たわしのやうに荒んで來るし、男に食はせてもらふ事は切ないし、やつぱり本を賣つては、瞬間々々の私でしかないのだ。

夕方風呂から歸つて爪をきつてゐたら、畫學生の吉田さんが遊びに來た。寫生に行つたんだと云つて、拾號の風景畫をさげて、生々しい繪の具の匂ひをぷんぷんたゞよはせてゐた。

詩人の相川さんの紹介で知つた切りで、別に好でも嫌でもなかつたが、一度、二度、三度と來るのが重なると、一寸重荷のやうな氣がしないでもなかつた。

紫色のシエードの下に、疲れたと云つて寢ころんでゐた吉田さんは、ころりと起きあがると、

――瞼、瞼、薄ら瞑つた瞼を突いて、
きゆつと抉ぐつて兩眼をあける。
長崎の、長崎の
人形つくりはおそろしや！

「こんな唄を知つてゐますか、白秋の詩ですよ。貴女を見ると、この詩を思ひ出すんです。」

風鈴が、そつと私の心をなぶつた。

ヒヤヒヤとした緣端に足を投げ出してゐた私は、灯のそばにゐざりよつて男の胸に顏を寄せた。燃えるやうな息を聞いた。たくましい胸の激しい大波の中に、しばし私は石のやうに溺れてゐた。切ない悲しさだ。女の業なのだ。私の動脈は噴水の樣にしぶいた。吉田さんは震へて沈默つてゐる。私は油繪の具の中にひそむ、あのエロチックな匂ひを此時程嬉しく思つた事はなかつた。長い事、私達は情熱の克服に務めた。

背の高い吉田さんの影が門から消えると、私は蚊帳を胸に抱いたまゝ泣き濡れてしまつた。あゝ私にはあまりに別れた男の思ひ出が生々しかつたもの…私は別れた男の名を呼ぶと、まるで手におへない我まゝ娘のやうにワッと聲を上げた。

六月×日

今日は隣りの八疊の部屋に別れた男の友人の五十里さんが越して來る日だ。

私は何故か、あの男の魂膽がありさうな氣がして、不安だつた。飯屋へ行く路、お地藏樣へ線香を買つて上げる。歸つて髮を洗ふと、さつぱりした氣持ちで、團子坂の靜榮さんの下宿へ行く。「二人」と云ふ詩のパンフレットが出來て　る筈だつたので元氣で坂をかけ上つた。

窓の靑いカーテンをそつとめくつて、いつものやうに窓へ凭れて靜榮さんと話をした。この人はいつ見ても若い。房々とした斷髮をかしげて、色つぽい瞳をサンゼンと輝やかす。

夕方、靜榮さんと二人、印刷屋へパンフレットを取りに行く。八頁だけど、まるで果實のやうに新鮮で、好ましかつた。

歸へり南天堂によつて、皆に一部づゝ送る。

働いて、此パンフレットを長く續かせたい。

冷いコーヒーを呑んでゐる肩を叩いて、辻潤さんが、鉢卷をゆるめながら、賛詞をあびせてくれた。

「とてもいゝものを出しましたね、お續けなさいよ。」

漂々たる酒人辻潤さんの醉體に微笑を送り、私も靜榮さんも元氣に外へ出た。

六月×日

種まく人たちが、今度文藝戰線と云ふ雜誌を出すからと云ふので、私はセルロイド玩具の色塗りに通つてゐた、小さな工場の事を詩にして、「工女の唄へる」と云ふのを出しておいた。今日は都新聞に別れた男への私の詩が載つてゐた。もうこんな詩なんて止めやう、くだらない。もつともつと勉强して、生のいゝ私の詩を書かう。

夕方から銀座の松月へ行く、ドンの詩の展覽會、私の下手な字が、麗々しく先頭をかざつてゐる。橋爪氏に會ふ。

六月×日

雨がザ……葉つぱに當つてゐる。

陽春二三月　楊柳齊作ㇾ花
春風一夜入二閨闥一　楊花飄蕩落二南家一
含ㇾ情出ㇾ戸脚無ㇾ力　拾二得楊花一涙沾ㇾ臆
秋去春來雙燕子　願銜二楊花一入二窠裏一

灯の下に横座りになりながら、白花を戀した靈太后の詩を讀んでゐると、つくづく旅が戀ひしくなつた。

五十里さんは引つ越して來てから、いつも歸へりは、夜更けの一時過ぎ、下の人は務め人なので、九時頃には寢てしまふ。

時々田端の驛を通過する電車や汽車の音が汐鳴りのやうに聞える丈で、山住ひのやうな靜かさだ。

つくづく一人が淋しくなつた。

楊白花のやうに美しい男が欲しくなつた。

本を伏せると、焦々した私は下に降りて行つた。

「今頃どこへ！」下の叔母さんは裁縫の手を休めて私を見る。

「割引きです。」

「元氣がいゝのね……。」

蛇の目の傘を擴げると、動坂の活動小屋に行つた。

ヤングラジヤ、私は割引きのヤングラジヤに戀心を感じた。太鼓船の東洋的なオーケストラも雨の降る日だつたので嬉しかつた。

だが、所詮はどこへ行つても淋しい一人身。小屋が閉まると、私は又溝鼠のやうに塵たれて部屋へ歸つた。

「誰かお客さんのやうでしたが…。」

叔母さんの寢ぼけた聲を脊に、疲れて上つて來ると、吉田さんが、紙を圓めながらポケットへ入れてゐた。

「おそく上つて濟みません。」

「いゝえ、私活動へ行つて來たのよ。」

「あんまりおそいんで、置手紙をしてたとこなんです。」

別に話もない赤の他人なんだけど、吉田さんは私に甘へてこようとしてゐる。鴨居につかへそうに脊の高い、吉田さんを見てゐると、タヂタヂと壓されそうになる。

「隨分雨が降るのね…。」

この位白ばくれておかなければ、今夜こそどうにか、爆發しそうで恐ろしかつた。

壁に脊を凭せて、彼の人はじつと私の顏を凝視めて來た。私は、此人が好で好でたまらなくなりそうに思へて困つてしまつた。

だけど、私はあの男でもうこりこりしてゐる。

私は溫なしく、兩手を机の上にのせて、白い原稿用紙に照り返へつた、灯の光りに瞳を走らせてゐた。私の兩の手先きが、ドクドク震へてゐる。

一本の棒を二人で一生懸命押しあつた。

あゝそんな瞳をなさると、とても私はもろい女でございます。愛情に飢えてゐる私は、胸の奧が、擽ぐつたくジンジン鳴つてゐる。

「貴女は私を嬲つてゐるんぢやないんですか？」

「どうして！」

何と云ふ間の拔けた受太刀だらう。

接吻一ツしたわけではなし、私の生々しい感傷の中へ、卷き込まれてゐらつしやるきりぢやありませんか…私は口の内につぶやきながら、此男をこのまゝこさせなくするのも一寸淋しい氣がした。

あゝ友人が欲しい。かうした優しさを持つたお友達が欲しいのだけれど…私はポタポタと涙があふれた。

いつその事、ひと思ひに殺されてしまひたい。彼の人は私を睨み殺すのかも知れない。生唾が、ゴクゴク舌の上を走る。

「許して下さい！」

泣き伏す事は、一層彼の人の胸をあほりたてるやうだつたけれど、私は自分がみじめに思へて仕方がなかつた、別れた男との幾月かを送つた此部屋の中に、色々な幻が泳いでゐて私をたまらなくした。

—引越さなくちやあ、とてもたまらない。私は机に伏さつたまゝ郊外のさわやかな夏影色を、グルグル頭に描いてみた。

雨の情熱はいつそう高まつて來た。

「僕を愛して下さい、だまつて僕を愛して下さい！」

「だからだまつて、私も愛してゐるではありませんか…。」

せめて手を握る事によつてこの靑年の胸が癒されるならば……。

私はもう男に放浪する事は恐ろしい。貞操のない私の體だけど、まだどこかに、一生を託す男が出てこないとも限らない。

でも此人は、新鮮な血の匂ひを持つてゐる。厚い胸・靑い眉・太陽のやうな瞳。あゝ私は激流のやうなはげしさで、二枚の唇を、彼の人の唇に押しつけてしまつた。

六月×日

淋しく候。

くだらなく候。

金が欲しく候。

北渡道あたりの、アカシアのブンブン香る並樹舗を、一人できまゝに歩いてみたい。

「起きましたか！」

珍らしく五十里さんの聲。

「えゝ起きてます。」

日曜なので、五十里さんと靜榮さんと、吉祥寺の宮崎さんのアメチヨコハウスに行く。夕方ポーチで犬と遊んでゐたら、上野山と云ふ洋畫を描く人が遊びに來た。私は此人と會ふのは二度目だ。

私がをさない頃、近松さんの家に女書生にはいつてた時、此人は茫々とした姿で、牛の畫を賣りに來た事がある。子供さんがジフテリヤで、大變佗し氣な風才だつた。靴をそろへる時、まるで河馬の口みたいに靴の底が離れてゐた。私は小さい針を持つて來ると、そつと止めておいてあげた事がある。

きつと氣がつかなかつたのかも知れない。

上野山さんは凛々と酒を呑みよく話した。

夜、上野山氏は一人で歸つて行つた。

地球の廻轉椅子に腰を掛けて
ガタンとひとまわりすれば
引きづる赤いスリッパが
片方飛んでしまつた

淋しいな…
オーイと呼んでも
誰も私のスリッパを取つてはくれぬ
度胸をきめて
廻轉椅子から飛び降り
飛んだスリッパを取りに行かうか

憶病な私の手はしつかり
廻轉椅子にすがつてゐる
オーイ誰でもいゝ
思ひ切り私の横面を
はりとばしてくれ
そしてはいてるスリッパも飛ばしてくれ
私はゆつくり眠りたい

落ちつかない寢床の中で、私はこんな詩を頭に描いた。下で三時の鳩時計が鳴る。

——日記が轉々と飛びますが、その月の雜誌にしつくりしたらのを拔いて書いてをりますので、後日、一册の本にする時もありましたならば、順序よくまとめて出したいと思つてをります。

——筆者——

地獄の反逆者
―人生記録―

松村喬子

歌子

名古屋の中村遊廓で本家榮樓と云へば、大まがきの一流處であつた。娼妓も常に卅人は居て、他の樓よりか衣裳などもズット好い物を着せてゐるといふのが主人のほこりであつた。樓主の木浦はいつも得意顔で、その長い軀を後にそらして肩を張つて、誰をつかまへてもその話を一番先か最後かに必ず云ひ添へる事を忘れなかつた。

「俺家の娼妓サン達は皆三千圓より下の人は一人もおまへん、皆粒よりで抱へておますのやよつてに。それに第一家が立派だし、建具にウンとかゝつてゐます。どこがエ、と云うたかて、俺處の家の室にはかなひまへん、まあ、之から私が案内しますよつて、見て行きなはれ、お客さんかて、家みたいな處で遊ぶ人はなんぼ得かわからへん。」

この家に用事があつてきた人は皆、そう云つて各室から湯殿まで一々說明して案内されるのであつた。この家へ來る者はだれでもが、その立派な建具、室、庭と說明につれて、益々感心し贅澤な飾りに見とれる位で、その主人の手腕に驚くばかりで、益々木浦を尊敬するのであつた。

その高價な床の飾物のかげに、どれだけの可憐な女の涙がにじんでゐるか、庭の石一つにも、娼妓の恨みの言葉が秋の、蟋蟀の啼く音に變つてゐると云ふ事は彼等には、夢にも思へない事であつた。

どんなにか今迄、現在も、無智な小羊達を搾つて得たか知れない金で、立派な大廈高樓を建てゝ遊野郎達の度膽をぬいて、得々としてゐるのであつたのに。

遊び客の評判はよかつた。娼妓の玉のよいのが揃つてゐると云ふのと、腕つこきの凄い連中が揃つてゐて、幾代か續いた古いのれんの四海波も玉川樓も長壽樓もこの新參者の本家榮樓に壓倒された形であつた。

主人の木浦は腹心の番頭佐川や山田に對つて時々話すことがあつた。

「もう四海波や長壽樓なんか少しも恐れんが只稲本だけは一寸强手だからナー」

商賣敵としてはやはり彼等も對立のプル丈けの鬪爭があつた。

親類筋の稲本樓も、本家榮樓のおかみの實兄の望月樓も、それから榮樓ののれんをわけて第一榮樓第二榮樓と名をあげてゐる所も商賣上はすべて敵同士として客を奪ひ合つてゐる。

この本家榮樓に歌子は大阪の難波新地から鞍替してきた。もう正月に近い師走の十八日に木浦は自身で行つて連れてきたのであつたが、大きな期待と樂しみを持つてホク／＼としてゐた。

「これから、一生懸命に働いて、あんたも一日も早く素人になれる樣に亦俺とこにもウンと儲けさしてもらはんナランでナー」

アー亦、この女からも、たくさん搾れるだらう、との樂しみはつつみ切れない程彼の胸の中に躍動してゐる。

彼等樓主としての第一の條件は腕つこきでよく働く女、第二が美貌であつた。

そして彼等が金を出して抱へて

きた時『働かせる』といふ事は、利益を得る、いや商品として利潤を得る事は、商人が物品を賣る事より樂な事で利益の多い事であつたから、一人の女に三千圓なり四千圓の資金を出す事は、二倍にも三倍にも利益のあがる事でどれだけか樂しみが多かつた。若し不幸にして、彼等の連れて歸つた一人の女が、的がはづれて賣れない場合は、賣れる方法を事を分て、手をかへて云ひきかせる。それは普通人の耳を掩うて聞くに忍びない事でも、平氣で當然の事として、命令的に強いた。それをおとなしく、すべてを指揮通りに働いて、體が毀れ樣と頭が馬鹿にならうと「金を借りてるから仕方がない」としてあきらめて馬車馬の樣に、只、默々として働くのが、尤も善良な、模範的な娼妓であつた。脳梅毒になつて氣狂になつても、病氣をおして無理に働いて、やせ衰へて死んで行つても、それは「仕方がない」で通つてきた。

歌子も元、大阪でおとなしく抱主の云ふがまゝに稼いできた。そして晴楽しい人氣?で廓へ花を咲かせてきた。それを木浦はよく知つてゐたから娼妓としては年も二つ三つ盛りをすぎてゐたし、顔も餘り好い方ではなかつたが四千圓近くの金を出して連れてきたのであつた。そして一年餘りは、善良な娼妓として一生懸命に脇目もせずに稼いだ。主人に口先だけのお世辭を云はれる事を唯一つの樂しみに一日も早く素人になり度い一心に、だが、借金は少しも減らなかつた。いや不思議にも、毎日働いてゐて殖えて行つた。

「どうしてこんなに借金は減らないのだらう? 働いてゐるのに? こんなことは一體人間のする事だらうか」

今迄考へ樣としては考へてはならない、おそろしい事の樣に思つていつもさけてゐた事を、フット思ひがけなく口の中でつぶやいた。

そして、ヒヤッとした。忽に恐ろしい樣な氣がして、全身に粟を生じた樣に思つた。

「それは誰の爲めにこの苦しみをしてきたのだらう。亦これから先誰の爲めにこの苦しみを續けて行かなければならないのだらう?」

このまゝで行けば死ぬ迄働いても借金は減らないで、殘つたものは腐つた體と、空つぽの頭だけだ―さうだ、私は卑怯だつたのだ、少し考へよう、いつ迄もこんな處に居て金持の肥料にばかりなつてゐるのが能ぢやあるまい。

だが、それならどうすれば、その方法は解けるのか? 新高さんは大阪は借金がよくぬけるから大阪へ行き度いと云つてゐるし、戀香さんは、こゝの樓主はあんまり慘酷だから、岐阜の淺の家へ住替へ度いと云つてゐる。けれど何處へ行つても同じ事ぢやあるまいか? 金をかけてそれが商品として、連れて歸る位の人間なら儲けるが爲めであつて、人の道でない商賣を平氣でやるのだもの、どこの主人もよく理解してゐる、あそこの樓主は娼妓にとてもやさしいと云つた處で、やつぱり、上手に働かせて少しでも多く搾らうとする氣持に變りはない。それよりか、みんなで氣を揃へて、こゝの主人に、惡い處だらけのこの家の風習や、規則を、私等にも都合の好い樣になほしてもらつた方が、よいのぢやあるまいか、皆で心を一致さへすれば、必ず主人の方でも、いやとは云ふまいから――

長火鉢の前で兩肱を火鉢にかけて自分に話し自分に答へながら、扨て誰に相談したら一番好いかと一人一人を胸に浮べてみた。

かるた

かるたは榮樓中で一番體の弱い一番皆に馬鹿にされてゐる娼妓であつた。主人はかるたの事を「家の毒蟲」だと云つてゐた。そして一番憎んだ。時たま、仲居の中でも一人位同情して彼女をかばつてやる者があれば、呼びつけて叱りつけた、娼妓の中で彼女と仲よくする者があれば、その人まで憎んだ。だから、誰もが、後の祟りをおそれて寄りつかなかつた。中には主人に忠實ぶりを見せる爲め、色色と惡口を告げに行く者さへあつた。それだからかるたはすつかりいぢけて終つて、ひがんでゐた。新しく抱へられて來た娼妓には、一々、樓の規則と共に、かるたとは決して仲よくするなと云ふ事を

云ひ渡すのであつた。

かるたも始めつから、こんな體の弱い女ではなかつた。彼女が京都育ちで、おつとりとした靜かな女らしい處は他の多くの娼妓の樣に無智な行儀の惡い言葉の惡い者の中には際立つて、優雅にみえた。面やつれがして眼のふちの黑く病めた顏にも、目鼻立の調つた上品な顏立が濃化粧でつぶしに結上げるとスツキリとした處があつた。

歌子と仲よくなつたのはもう歌子がこの樓へ抱へられて一年にならうとする頃からであつた、始めの間は歌子も主人に云ひきかされた「嘘つきでなまけ者でヒガミ根性の人」とは、決して口ら聞くまいと思つた、「第一主人に憎まれるだけでも損だから」と考へて、なるべくその人とはさけてゐた。けれども半年經ち、一年近くなる中、だん〳〵とこの家の樣子も知れてくるにつれて、餘りにも朋輩にのけ者にされすぎてゐるかるたが可哀さうになつてきた。

體の弱い人、おとなしいいつも伏目になつて自分から人をさけてゐる人が、あまりにもいた〳〵しくなつてきた、なんとなくなつかしい氣さへした。そして便所の近くのかるたの室へは、いつもその人の草履より外、竝んでゐないのが寂しい感じを強くした。

病氣で長らく休んでゐても尋ねる人もない。歌子は、何んだか急に見舞つてやり度くなつた。そして、今迄一年近くこゝに居て、碌に口もきかなかつた事を詫び度くなつた。それでだしぬけに、便所へ行つた歸り何氣なく、彼女の室をあけた。

「かるたさん御病氣は如何ですか？」

思ひがけない見舞の人、まして、ほんの朝夕の挨拶しか交した事のない人が一年近くもこゝに同じ釜の飯を食つてゐ乍ら、之と云ふ友としての言葉も交はした事のない人が室をのぞいてゐるので、かるたは只意外な氣がした。

「この女も主人の云ひ付けで、私の樣子をみにきたのか――」僻み切つてゐる彼女としては當然さう思つてゐた。誰一人として優しい言葉をかけてくれない今日、見舞に來るのは、主人に云ひつかつてゐる小町と笑福が只機械的に、言葉をかけて、樣子を探ぐつて主人に告げる位のものであるのに……

「オーキニ、別に變つた事はおまへん、どうせ私の體はもう使ひ道がおまへんのやよつてに燒なほさんとなほりませんのや」

愛想のない返事に、歌子は勝手が違つた樣な氣がした。誰も行つてゐない室だから、定めし喜んでくれるだらうと思つたのが、案に相違だつたので、あゝも慰めてやらう、こうもやさしく云つてみやうと思つてゐた言葉のやり場がなくなつて終つた。

「いけませんわネ、長い床の中の生活は、ほんとうに怠屈でせう。何か欲しいものがあつたら、遠慮なくいつて下さいれ、病氣の時はお互ひですからネ」

歌子は自分で自分自身の言葉に感激して、目の中が熱くなつた。

「エ、オーキニ」

這入れとも云はない人の室の前で、言葉が切れて、後の言葉のつぎほがなかつた歌子は、

「ではお大事に」と云つて戶をしめた。冷たい感じしか與へられなかつた中にも、どうしても歌子は憎む程の惡い人とは思へなかつた。

「可哀想に、せめて病氣の時だけでも仲よくしてあげたら、あの人だつてあんなにも、ヒがまなかつたらうに、いくら主人に叱られたつて、おなじ朋輩同士だものかばつてやるのが當然だわ、いゝわ、外の誰もが仲よくしなくとも私だけでも、お友達になつてあげ樣、」

彼女はせいせいした樣に思つた。
翌日は雜誌を持つて行つた。

「かるたさん、之讀みませんか？」

前の日に要領を得てゐるので、そのまゝ入つて頭元に坐つた。

「オーキニ」

かるたは、さう云つて、起き上つて床の上に坐つた。

「今日は大ぶん、いゝ樣におもひますのやわ、もう起きてお店へ出樣かと思つてるのですけどなー、折角少しよくなつたと思ふのに、今亦働いて、惡くしてはと思つて、今迷つてゐましたんや、だけど、オトーサン私が休んでゐるのは、まるで、ヅボラしてる樣におもうてはるよつて、それが辛いのでい

つもがまんして働いてよけいに惡くしてしもうてますのやわ」
　氣分の好い故か昨日よりは大分打解けた樣な話ぶりが歌子はうれしかつた。
「まあもう少し要心した方が好いわ、亦惡くすると何んにもなりやしないのだもの、それに、體あつてこその借金も返せるのぢやありますまいか、體が惡くて苦しむのは、自分一人だけでせう、稼がなければ借金は返せないけれど、稼ぐ時は、主人にだつて儲けさせてゐるのぢやありませんか、それに病氣になつてゐても、只で食はしてもらつてゐる譯ぢやなし、借金は遠慮なく殖やして行くし、利子はどん／＼つけて行くのだもの、決して心配しないで充分癒した方が好いわ。」
「私なんか借金は一番多いし體も一番弱いので、御主人にも一番迷惑かけてゐて、濟まないと思つてゐますわ」
　探ぐる樣な目で、歌子の顏色を覗ひながら云つた。歌子が之に對してどんな返事をするであらうか？と
「何がそんな遠慮する事がありますか、だつて體の丈夫な時は、どんなに働かせてゐるか解らないのだもの、あなただつて、この家へ來てから可なりの年月は經てゐるのでせう、その間、病氣ばかりしてゐたと云ふわけでもありますまい、今後あなたが一年間病氣で倒れてゐても、それはしかたのない事ですわ、この家の爲めに病氣になつた樣なものだもの、まして、永い間稼いで、それだけの金は充分儲けてゐるのですから」
　歌子は力を入れて話した。かるたは始めて、くつろいだ顏になつた。なんとなく、力強さをさへ感じずに居られなかつた。
「そうやわ、私が病氣で苦しんでゐるのは、私一人が惡いのぢやないのだ、無理に働かせる方にも少しは罪があるのだ、それに、みんなして、私だけが惡いと云つて私のことを、批難するけれど……」
　かるたは、一人心の中でそう考へてみた。そして、それがほんとうだと云ふ事を、ハツキリ意識した。そして急に、この歌子だけが友達の樣な氣がした。そして、この人なら、キツト私を友達にしてくれそうにさへ思へた。歌子はその時廊下で小町が誰かと話してゐる聲を聞いた。
「いやな奴に見つけられたナー、亦何んとか云ふにちがひない。」
　かるたと友達になる事を前日は堅く決心しておきながら、やつぱり、年增で奧の氣に入りの小町に見付けられる事は、恐しい事の樣に思へた。
　急に歌子がだまりつこくなつたので、かるたもそれと察した。
「歌子さん、小町姐さんがそこに來てゐやはるよつてに、あんたが私の爲めに、いやな事いはれると、いけまへんよつてに、歸つとくれやす。」
「いゝわ、かまはないわ、だつて、朋輩同士が病氣見舞にくるのに、何が惡い事あるもんですか、若し、そんな事で何か云へば、私だつて云つてやりますよ。」
「でも私の事で、あんたにまで、迷惑がかゝる樣では、お氣の毒ですさかいに」
　歌子も強くは云つたものゝ心の中では、心配でならなかつた。
　かつてかるたの室の前に竝んだ事のない、他の女の草履があると云ふ事は、必ず、珍らしい事にちがひなかつたから。まして、歌子の草履なんかがある事は彼女がこの家へ來て半ヶ年間の中、小町としては始めてみる事であらうから。今にも小町がヒヨツコリやせた、頰骨の高い顏を出しはしないかと云ふ不安が歌子にはあつた。けれども虐げられきつてゐるかるたに對して、その弱身をみせるにも忍びないで、廊下に充分氣をつかひながら、何かしらかるたと話をしなければ惡いとも思つて、話材をあれか之かと探してみた。
「この本の中の小說で、とても好いのがあるのよ、そこを讀んで御覽なさい先月から續いてゐるの、なんでしたら、その方を先に持つてきますからお讀みなさいナ」
　今迄、かるたの枕許においたままの雜誌をとりあげて、頁を開き始めた。
　廊下での話聲は細くなつて、二人竝んで、通りすぎる足音が、遠くの方へ消えて行つたので、歌子はホツとした。

「歌子さん今の中に歸つて下さい、亦引かへしてくるとうるさいから。私の方へきて小町姐さんが、「歌子さんは何しにきたの」と尋れたら、私、手紙を書いて頂いたのだと云ひますから、あなたも、そう云つておいて下さい」

「さうれ」

歌子は、返事はしたが、すぐ云ひ足した。「私かまはないわ、本當の事云つても、實は御免なさいれ、始め、こゝの家に來た時に、あなただけが、一人ぼつちで、誰とも餘り親しくしてゐない樣だし、いやに人をさけてゐるので、變な人だとは思つてゐたのですが、別に氣にも止めないでゐたのです、けれど、外の人も何も云はないし、今迄あなたも餘り口をきく機會もなかつたので、私から出しや張る事もないとおもつて、そのまゝに來たのですが、あなたが長い病氣でかうして休んでゐらつしやるのに、誰一人見舞にくる人もないので、何かなしに私來てみ度くなつて、きたのですが、之からも、チヨク／＼やつてきますから、仲よくして下さいナー」

さすがに、主人から行くなと云はれてゐるとは云ひ得なかつた。

「あら、私からお願ひし度いのですけれど…私と仲よくして頂けば、亦御主人にあなたがきつと、惜まれますわ、私の室へは誰もが行つてはいけない、仲よくしてはいけないとチヤンと云ひきかせてある事も私よく知つてゐるのどす。それは、今始まつた事ではおまへんもの」

彼女の目には涙が一ぱい溜つてゐた。歌子だつて充分知つてゐる事だつたから、それ以上云ふ事は出來得なかつた。

「たとへ、主人にどんな事云はれてゐ樣とも私キツト仲よくしますから、あなたも仲よくして下さいナー」

「オーキニ、オーキニ、その御親切は決して忘れまへん。」

かるたは、頭をさげた。

榮樓が大阪の飛田で店をやり出した頃その時代の彼等樓主仲間の娼妓の相場としては、番外の高價で岐阜の大垣で流行つ兒の二十二になつたばかりの彼女を、樓主は甘くだまして、鞍替させてきたのであつた。始めの間こそ、かなりチヤホヤして大切にしたし、彼女が體も丈夫で客もたくさんあつたので、さ程辛いとも考へないで、主人のおだてにのつて、一生懸命に働いてゐたが、人の體には限りがあつた。まして慘酷な勞働である、不規則な睡眠と放縦な日常、夜中でもなんでも物を食べる惡い病癖は不知不識の間に體中を蝕んでゐた。そして、年を重れるにつれて、體が弱くなつて、現在では、一度××××ば、二三日は苦しむ程こわれてゐた。充分な醫療はおろか、少し氣分が好いとすぐ客をとらされる。

それが度重なつて、今、このむごい有樣になつてゐたのであつた。主人の橫暴な仕打は充分皆が知つてゐた。けれども、主人の前ではまるで、一縮みで、一言一句が、御無理御尤でゐなければならない者ばかりであつた。

歌子も、かくれながら、かるたの室へ出入はしてゐたが、決して、それ等の事に無關心ではなかつた。主人に呼びつけられて何か云はれる事は恐ろしい事でもあり、他の娼妓に對して、恥しいとさへ思つてゐた。それでも三月位は主人の方でも知つてゐるのか知らないのか、まだ一度も歌子を呼びつけた事はなかつた。歌子もかるたと仲よくする外は一生懸命に稼いで來たからでもあらう。

然しいつ迄もその無事は續きはしなかつた。二人が室を出入するのがだん／＼公になると同時に、歌子は休みも多くなつてきた。客も一人二人と少くなつてきた。今迄めつたに夜張店に坐つた事のない彼女が張店に居る方が多くなつて行つた。いつも張店に坐つてゐる人の顔振は定まつてゐた。小町、笑福、愛之助、小花、若浦、彼女等はもう皆、好い年增であつた、普通なら子供の四五人もあつて一端のおかみさんであるべきのに、こんな處に居るから、いつも、のんきらしい事ばかり云つてゐる。幾つになつても、子供のいゝ樣な事ばかり云つてゐるから、こどもしと云ふのだと、ある時仲居のお梅が、歌子に話した事があつた。若浦と小町は、もう殘りの香も失せた四十に一つ二つ足りな

い位の人達であつた、骨と皮ばかりで、どう見ても娼妓と云ふ感じは與へられない程、年增であつた。顏の皺深く白粉はつけてゐるけれど、そして、若い娼妓と同じ樣に、呑氣な話ばかりしてはゐるけれど、彼女達もやつぱり哀れな一人であつた。この人達も今でこそ若い人達に全盛を奪はれてゐるが、十年昔から、この榮樓に居てこの榮樓の繁榮の爲めに骨身をおしまず稼いだ、忠實な人々であつた。

榮樓が大阪の飛田へ來る以前、難波の大火で財を無くし、娼妓の數もへつて、沒落しかけた時もう一度金儲けをし樣として、僅かの元手で、娼妓を抱へてきた時、小町も愛之助もゐた。そして血みどろになつて主人の爲めに稼いだのであつた。榮樓は間もなく、日の出の勢で五ヶ年間の間に多大の金を殘した。商賣にかけてはぬけ目のない木浦は、飛田遊廓が寂れかけた時、名古屋の遊廓が中村へ移轉するのを知つて、大阪を引き拂つてこの中村へ移つたのであつた。その時はもう、大阪で稼いでゐた娼妓の大半が、五ヶ年の契約の期間が餘す幾月もない者ばかりであつた。

「借金は始めと少しも變らない位皆殘つてゐるが、年が明けて歸る者があれば、大損害を蒙る、それに、亦新しくこのたくさんの娼妓を抱える樣なれば金が要る、之は一つこの全部の娼妓を何等かの方法で買收して、おとなしく連れて行く事にしなければいけない」

木浦は飛田を引拂つて名古屋へ行く事にしてからは、急に娼妓に對してもやさしくした、そして、扱て移る事になる前に、ほんの僅かの金を皆に與へて、名古屋で改めて、五ヶ年間の延長申請をさしたのである。さうして、すべてに成功した彼は充分の自信を以つてゐた。僅か飛田の五ヶ年間に三拾萬以上の財産を殘したと云ふ。そして中村遊廓で、立派な家を建てゝ、どうにかこゝで落付ける樣にと、たくみな商法で客を引つけてゐた。彼の計畫通りに、客は毎日どの店より一番來る樣になつて、僅か二ヶ年の間に、中村でも五指の中三番目位に數へられる樣になつてゐた。

名娼妓權兵衛さん

蒸暑い夏の夜は堪えられない苦惱の夜であつた。外は散步の時節で輕いゆかたがけで、打水の步道をブラ〳〵と步くには何よりの頃だのに、こゝ榮樓の娼妓達は相變らず每晚着物をキチンと着て帶をしめて、張店へ坐つてゐなければならない。少し行儀惡く足でも出してゐると、主人の木浦が、ヨチヨチと片方の足が不自由なのに出てきて、

「娼妓さんはそんな行儀の惡い事ではいけまへん、松の位の太夫と云つて、お行儀をよくしてゐないと、お客さんは買うてくりやはりまへんぜ」

と皮肉を云つた。

夏がれで店は寂しかつた。宵から客は二三人しか上つてゐなかつた、表を通るヒヤカシの聲も聞えない位で、張店では昔の惚氣を云つてる人や、トランプで「待人」の占をやつてる者や、客にやる「絽ザシ」を一心に刺してゐる者等、思ひ〳〵に何かしらやつてゐた。

扇風機で凉を入れてゐる帳場の方にも山田は揚帳へ書きいれる事がないので、手をつくねて時折張店の方をのぞいてゐた。こんな夜は主人の機嫌が非常に惡かつた。そして第一番に當り散らすのは、金をかけてない仲働きの女中や、使步きだけする豆衆であつた。豆衆は三人共十四五で一人は、デブデブ肥つてゐた。一人はやせた細長い、少女であつた。一人は體は小さい十二三位であつたが一番頭の好い子で誰もが可愛がつた。それで、皆、名前を呼ばずに、デブ豆、ホソ豆、チビ豆と呼んでゐた。一體にこの家の主人からが娼妓の名もろく〳〵本當に呼ぶ事はなかつた。一人一人ニックネームをつけてゐたから。

主人の御機嫌の惡いのを見て、三人共オヅ〳〵と小さくなつて、臺所の片すみに坐つてゐると、案の條大きな聲は先づ豆衆に落ちてきた。

「豆サン、第一榮樓へ行つて旦那ハン居やはるか見とおいなはれ。若し居やはつたら一寸すみませんが來とおくれやすと云つて、呼んどいなはれ」

「ハイ」
三人は一せいに立ちかけた。
「一人でエヽのや、そんなに三人も行つてどうする」
三人で行くつもりはなかつたけれども一寸でもこの氣づまりな空氣の中からのがれ度い爲め誰もが出て行き度かつたので、我れ先きに立ちかけたのであつた。
「デブ豆さん、お前行つといで」
「ハイ」
奥で一番お氣に入りのデブ豆が行く事になつた。
店の方に二三人のヒヤカシ客らしい足音がした。仲居は、しきりに客の袂をつかまへて陳列してある寫眞の前で押賣をやつてゐる。
ウキンドの中にある品物を見る樣にして、客は盛んに批評をやつてゐる。客は、遊び慣れた男とみえて、一寸店へ入つた時の空氣で、今夜は寂しいか、景氣が好いかを感じてゐるらしく中々上らうとはしない、こんなひまな晩は、仲居の云ひ出した値の半分も出さなくも濟むので、一錢でも安く遊ばうと云ふつもりだ。
寫眞の陳列場のすぐ裏が張店である。客と引子の應答はよく聞えてくる、歌子はその話を聞き乍ら泣き度く思つてゐた。
「こんなにヒマな晩を安くして、一人でも、數多くあげた方が、お前とこの得やないか、こゝの家は餘り高くとまりすぎるから、いかんのや」
名古屋言葉のお竹はむきになつて辯解した。
「何が高い事あらしすか」
「他の樓は今から十圓だつたら、どこでもあげるが。」
「お前さん何云つてりやしす、まだ九時になつたばかりだワエーモ、いつもなら、之から二十圓もらはんと帳場で通りやせんだが、今夜はこんなにヒマなもんやで十七圓にとくんだわーも」
「何と云ふ掛合だらう？之が人間を一夜の賣買する言葉だらうか」
歌子は今更ながら悲しいと思つた。さうして一向にかけ合は定まらなかつた。
棒鱈と云ふニックネームを主人から頂いてゐる小花、いつも主人にまけない位商賣にかけては、やかましい御かみの説明する處では、小花は、この榮樓でも押出しの好い、緻線の好い方の一人であつた、一寸三味線を持たせても、撥捌の好い音を聞かせる、賣れなくてはならない一人であつたのだけれど、なぜか中以上に出た事のない女で、その名をもらつたのだそうだ東京つ子の小花は醉拂ふと、いつもたんかを切つて廊下を歩いたけれど、醉が醒めると、小心者で、かげべんけいであつた。
惡氣のない、友達にはやさしい女で、歌子は、深水の畫の女の樣な感じがするといつも云つてゐた。
彼女も、よく賣れないと云ふので、店の寂しい時は呼びつけられた方であつた。
「今夜あたり亦キットお説教が始まるぞ、酒の肴に」
と誰にともなく云ひ出した。
一生懸命トランプをやつてゐた花扇は、
「二時間も、あのおやぢさんの前へ坐つて、聞かされたんぢや、ほんまに、やりきれないやうナー」
「何、唄でも聞いてゐる積りでゐたら別に何んともあらへん、私等もう毎度の事で慣れてゐるさかいに平氣やワ、ア、亦か位なもんでア、おやぢの叱言を一々氣にしてたら、壽命が縮まつてしまふ」
パルチザンのニックネームの小波が云つた。この時亦、主人の聲が今度は小さく聞えた。
「豆サン、一寸歌子さんを呼んどいで」
「ア、今夜は私の番らしいわネー」
なんとなくギクッとした。つとめて、皆へは笑顔で云つたのだけれど、その顔には、いつもの晴々しい處が見當らなかつた。
皆も「いよ／＼始まつたナー」と云ふ顔付で一せいに歌子の方をみた。
「歌子さん旦那ハンがお呼びだす」
チビ豆も何んだかよく心得てゐるらしくいつもの樣な元氣な調子はなかつた。
「ハア、今行きます」
朋輩の誰かゞよく呼びつけられてゐるのは、覗いたけれど、彼女自身が呼びつけられるのは始めてゞある。
おそる／＼帳場へ入つて行つた。そして閾際へ坐つて一寸頭を

さげた、そこには大きな臺付の火鉢が据ゑてあつて、白い本セルの腰卷き一つに、クレープのシャツ一枚の、そして顔は、アルコールにやけて赤黑く目ばかりギョロギョロした主人と、その側に昔緻縲好みでもらつたと云ふおかみが明石の粋な藍格子の着物で坐つてゐる。火鉢の上には、酒をついだ湯のみと、朝日の煙草が竝べてある、酒を一口で呑んでから、横柄に「まあ、も少しこつちへ入んなはれ」

と云つて腮をつき出した。

「ヘイ」

と云つて坐つたまゝで心持ち膝を進めたが之から何を云ひ出されるかと云ふ不安の爲めに面をあげる事すら出來得なかつた。

「實は一ぺん、あんたに聞かうと思つてゐたのやがどうも此の頃は目立つて、成績が惡いお商賣がでけん樣になつたがどうしたんや、もちつと勉强してもらはんと俺家かて困ります。第一大阪の奴等に對してもちつと景氣の好いところをみせつけてやらんとあんたの意地が立たんやらうと思ふがナー大阪で歌子さんと云へば知らん人もない位お商賣の出來た人や、南地中でも指折の人やつたのに、こつちへ來ても、つい二三ヶ月前までは勉强して客もよう來てゐたのに、この頃になつて、なじみのお客さんもパツタリと來なくなつたそんなに急に客は落ちるものやおまへん、だけどナー普通にしてつき合つてゐたのぢや、お客と云ふものは長續きしまへんで、まゝわしが云ふ迄もなくあんたは外の娼妓さんと違つて、そこいらはよう承知してなはるやらうが……客の取扱ひ方やもてなしは充分知つて、腕も人竝以上の腕を持つて、惜しい事だすナー賣れる體を持つてゐて賣らんのやでナー」

如何にも惜しいと云ふ樣な目付で歌子をヂロリと眺めてから酒を一口呑んだ、

酒のさかなに娼妓を呼んで叱言を云ふのであつた。

「第一この頃あんたの仲よくしてゐる人が皆惡い、賣れん奴とばかり仲よくして居なはる名前はこゝで一々あげんでもあんた充分解つてゐなはるやらう、まして、かゝるたなんか家の毒蟲や!! 店は賣れんわ、病氣は一人前以上してゐるわ、それも大して惡くもないのに店を休んでゴロゴロ床に就いてゐるばかり、アリヤ、ツボラ病やよつて、醫者にかけても癒るもんやおまへん。あんな奴とつき合ふとろくな事あへらん。必ず賣れん樣になる、そりや奇妙なもんだす」

一寸言葉を切つて朝日に火をつけた。

歌子は下をむいたつ切りだまつてゐる、聞いてゐるのか外の事を考へてゐるのか。だが木浦は、そんな事にはかまはずに、まだまだ話す事がたくさんあると云ふ風にみえた。

「それからこの頃本屋が出入してゐて、あんたは婦人公論なんかとつてゐると云ふ事やが娼妓さんに學問は要りまへん、そんなもの讀むと、いらん事や理窟ばかり覺えてお商賣のさまたげになるばかりだから之からは讀まん樣にしてもらはんとナ——なあ、山田。」

と後ろの机の前に坐つてゐる山田にさう云つた。

「今度本屋が來たら出入はならんと止めてくれ」

そして亦すぐ歌子の方へ向きなほつて、善良な娼妓としての敎訓を竝べ出した。

「あんたも知つなはるやらう、こゝに居た權兵衛さんを。あの人はほんとうに偉い人やつたナー、どんなにお店が寂しい月でも、五十本のお花はかゝさなかつた。どんな客でも、振る樣な事はなく裏のかへる樣につとめてゐた。それで銀行の重役に落籍されて、今では奥さんに出世して女中の五人も使つて氣樂に暮して居やはるのや、時々俺家へも來てくれるがダイヤの大きな指輪をさして着物は別誂への好いものを着込んで來やはるが、なかなかの甲斐性もんやつた、それから第一榮樓では若浦はん見なはれ、家の若浦はんは割烹博士であかんけれど、第一の若浦はんは五ヶ年間一番ばかり、二と下らなかつた人や、日々お客さんに小づかひをもらつて、借金は自分で働いたので返して廢めたから、事務所から、褒美と賞狀を頂いて歸らはつた、あの人なんかも、權兵衛さんと一緒でどんなにお客に無理な事云はれても聞いてゐ

た。そりや、買ふ者と買はれる者やで、少し位の辛捧はせんならん。そして、若い客には若い樣に、一度×××××二度三度とこつちから押しつけて勉强してみなはれキットお客は來ますさかいに、私も之で永い年月この商賣をやつてゐますさかい、そんな事は娼妓さんよりはよう知つてます。一度私に欺されたと思つて私の云ふ事をきいてやつてみなはれ、必ず、元の通り、よく賣れる樣になりますさかいに、そして本家榮樓からも、事務所から褒美を貰つて出て行く位の人があつて欲しいもんや」

歌子は涙が出るのをどうする事も出來なかつた。主人の方では、それに氣がついて餘り長い時間叱言を云つたからだらうと思つて、少し言葉をやわらげて云つた。

「では解りましたナー、之から少し勉强して元の歌子さんの名を取りかへしておくんなはれや、もう行つてもよろしいわ」

歌子が涙を出したのは、決して木浦の思つてるやうな意味ではなかつたが。

（つゞく）

讀者通信

私達の歩める路はあまりにも弱き女性としての課程を續けてきたのです。傳統的因習に强く束縛され現實とあまりに離反せるあやまれる道德の抑壓を受け男性主體の文化により支配せられた私達の生活は何ゝ蹂躙せられてゐた事でせう。

併し時代の流れは現在の如くに女性も街頭に出で、又は工場の中で各々眞劍なる經濟戰線に生きる事を要求せられ餘儀なくせられる狀態にある時私達はいつ迄も弱き女性の名に滿足することは出來ません今や私達は長き間連續せる强制的集りより目ざめ破りて女性の存在を闡明に描き自己の强き主張に生きなければならないのです女人藝術は私達女性の存在をあく迄も主張せんとする私達の眞によき指導的先驅の集りである事を希望いたします。

女人藝術の指導に力强く步む私は少さき私の村に十一名の共鳴者をうる事が出來ましたそれは女人藝術により自己の主張に生きんとする貧しきながらも意志の發露です私は今後もより多くの共鳴者をうる事に努力する考へです。

最後に記者樣一同の努力と奮鬪を一心より祈つて居ります。

藤岡みちを

「女人藝術」は每號愉しく拜見いたして居ります。

故國を遠く三千哩常夏の國ボルネオの高原に單調そのもの丶樣な生活を繰り返してゐる私達にとつて讀書は唯一つの樂しみです。

特に藝術味豐かなその上現代の進步的女性の主流をなす貴誌には思想的に啓發される點も少く御座いません。

椰子の樹蔭で「女人藝術」を中心に語り會ふのもこの頃の私達の樂しみの一つになつて居ります。

一九二九・二七。

ボルネオにて　柿崎しげ子

私は女人藝術を發刊と同時に拜讀してゐます、それについて私の感じた事を云はして下さい。女人藝術は男性に對等して堅實な女性の本を作りあげて頂きたいとおもひますが時間の淺い爲でもありませうが今のところでは女文學者のひまな遊びのやうに見えるところがあります。中に平林たい子樣宇野千代樣といふ方の創作が見えますが他の雜誌に見える作品とは大分異ります。田舍に師なくして困つてゐる無名の人々を女人藝術によつて見出して導いてやつて頂きたいとおもひます。

藝術といふものは文に藝術味さへあればよいといつても、プロレタリヤ階級のみじめさをあまり自潮し皮肉つてゐます。もつと眞面目に書いてよいとおもひます、文藝春秋がブルショア階級のもの許り書き女人藝術がプロレタリヤ階級のもの許り書くのもい丶對象です私は此のプロ階級もブル階級もあらゆる階級の中から藝術といふものを味ふやうな人の多くなるをいのります。

そしてだん／＼に論文、思想、文、歌に、無名の多くの人々の教導をして女性の自覺を促し、女性を救ふやうにお願ひいたしたいと思ひます。

東京市外　神田　貴榮



或公娼の手記

竹内てるよ

信二さん。

じきにかへつてくるからと、あなたの出てゆかれた後、もう三十分はたつたでせうか。わたくしは大人げなく涙ぐみながら、生れてはじめて味はふ、深い靜寂にじつと目をつぶつてゐます。

近頃よくない私のからだでは、心のはり切つて來るときはかなり苦しいのです、まるで調子の狂つてしまつた心臟は、いのちの上をよつぱらいの足どりのように、おぼつかなくよろめいてゐるのでせう。打つゞく貧乏に、灯もつかない、火もない部屋の中に、なつかしいあなたの幻を胸にしてゐると、おぼろげに判る人間の生甲斐、そうしてそこに出發する電螺のような、一つの力をかんじます。

いま、あなたに別れてゆかうといふこの間ぎわになつて意志は何のために、何のはたらきをするためにこんなにも熾烈に燃え上るのでせう、屍に等しい敗殘のからだをのりこえて、烈しく熱い、人を愛さうとする自分の氣持、全生活をかけて、過つた制度への反逆に生き切らうとするこの胸一ぱいのもの

信二さん。

私は、私達が共倒れになるのをふせぐために、さうです、あなたの貧乏を少しでも樂にするために、けふとほいところへ行つてしまふつもりでゐます。

あなたがおかへりになつて、私の冷たいからだをごらんになつたならば、あなたはどんなに悲しくお思ひになり、又早まつてくれたとお泣きになるでせう。それは判りすぎる程判つた事ですけれど、でもその悲しみは決してあなたから、あなたのお仕事へのエスプリを消すことはないと信じます、たとひその悲しみが目の前をまつくらにしようとも、それでくづ折れてしまふあなたではないことを私ははつきりと信じることが出來ます。さうです、これは私達の個人の問題であつて、現在の貧乏があなたを消耗してゆくことは、廣い意味ですべての人間の爲のことだからです。

あなたは、末永く生きてゐて下さらなければなりません、あなたはまつすぐに生き切つて下さらなければなりません。わたくしはまだいろ〳〵の點で勉强が足りなくて、あなたの仰る社會問題もあなたの仰る正義といふことも十分に判つてゐませんけれども、併しこの世の中にはお金のありあまる人もあり、又食べるのに事かく人々もあることをようく知つてゐます。ひとりの人は樂をしたり、温くおいしいものを遊んでゐても食べることが出來るのに、一人の人は一日中汗にまみれて働いても、とうてい食べてゆくことさへ出來ないのをようく知つてゐます、これはほんとうに何故でせうか?

信二さん

私は、東京の北隅の工場町に、小さい駄菓子屋夫婦を親として生れました。その頃の記憶はみんな忘れてしまひましたけれど、死んだ母親を棺に入れたとき、父親が男泣きに聲を揚げて泣いたのをおぼえてゐます、それは私の五つの時でした。お人よしの父親は、間もなく店をたゝみ、わづかな太物を背負つて行商の旅に、小さい私を伴れて出たのでした。住みなれた工場町を、ふりかへつて、ふと

心細くなつた私が、「ちやんや、どこへ行くんだい」ときゝましたら、「とほいところへ行くんだ」と父親は答へました。私達は、野にねむり、畑にねむり、文字どほり旅あきんどとして、九州のはてまで歩きました。私が七つの年、父親は四國の或小さい安宿で、たつた一日わづらつたまゝかへらなくなつてしまつたのです。私は、ほんとうにたゞ泣くばかりでした。宿の小母さんに引とられて、十三の年まで小女をしましたが、孤兒のことですからほんとうにずゐぶんみじめにされました。十三の年に、土地の遊廓に賣られて、今年でもう十三年、あちらこちらと住替へをしたり人にだまされたりして、あなたにお目にかゝるこの夏まで全く人間らしい生活などは一日だつてしたことはありませんでした。

　その間に、ずゐぶん大ぜいの男の人も相手にしましたけれど、この世の中で人をたよるなどゝは、ほんとうに下らないことだとしみじみ思ひました。孤獨に泣き、その涙をまた自分で拭き、けつとばされた石ころのように、されるにまかせてゐた私の生活、純潔などゝいふものは何でせう、純情などゝいふものは一體何をいふのでせう。一切のものに絶望し一切のものに背を向けた私は、たゞ來る日も來る日も、目の前の欲望にすべてをかけて、たゞ生きてゐるにすぎないくらしをしてゐたのでした。

　信二さん。

　あなたが、突然にも私の前に來て下さつたことは私にとつて一つの大きな驚きであると共に、とりかへしのつかない私の一生の總決算でもありました。

　あなたにはじめてお目にかゝつたとき、私はこの世の中にこんなにも親切な、そうしてこんなにも淸らかな男の方があるのかと思ひました。あなたのお話しになつた一言一言は深く私の胸の中に埋もれてゆき、そこから何か新鮮なものが芽を出しはじめるようにさへ私には思はれて來たのです。

　永い間、ふみちらかされてゐた自己を、或時驚ろいて見なほすような、そんな氣持になりながら、私の心は、一歩一歩自分への正しいものを取り返し、前へ進み初めたのです。

　信二さん。

　生活への嫌惡が來ました、金のために、さらされてゐる自分が、つくづくいやになりました、私はあはてゝ自分の着物の裾をかき合せるように、烈しい恥かしさを知つたのです。

　あなたを、あの靜かな山莊の家におたづねしたのも、漸く自分の生活を少しばかり築きはじめた頃でした。

　あなたは、私を純潔だと仰つて下さいました、あなたは私をすなほだと云つて下さいました。あゝ私はそんなもつたいない言葉を、どうしてきくだけの幸福を持つものでせう、私は、この世の中での最も汚れ、最も惡ざまにされていゝ人間です、私は初めつから、あなたにこんなにも愛されていゝのかとさへ、自分を疑ふことがあります。

　私が、永い責苦のためにすつかり痛められてもう再び立つことが出來なくなつたとき、あなたは御兩親に反いて私を救ひ出して下さいました。そして、私のだめに安らかな家をこしらへて下さいました。家、家、ながい旅の生活や、つとめの生活の間、私は、自分の家といふものを、ついぞ知りませんでした、私は、安心してからだをよこたへる家をどんなにほしいと思つてゐたでせう。さうして、いまそれを得ることが出來たのです。あなたによつてすつかり準備された、郊外のしづかな家に、愛にあたゝかい布團を頂いて、つかれはてたからだをよこにしたとき、私の涙は止まりませんでした、一生のつかれが、みんな出て、私は一週間ばかり夢中で眠りました。

　目がさめて、枕許に、あなたのすがたを見出したとき、私はそれがほんとうかしらと自分で疑つたほどにうれしかつたのです。

さうして、それからの生活、あなたの本箱には、私が且て見たこともないような御本がたくさんにありました、その中には、私がいつも不思議に思つてゐる多くの社會事實に、立派に解決があたへてありました。私にとつては、不幸な私一人のことかしらとあきらめる氣持にまでなつたことが、みんなこの世の中の人間が造つた過失なのだと、はつきり書いてありました、私はうれしくて、ほんとうにむさぼるように本をよみ、又、うるさいほどにあなたにきゝたゞして、漸く心の眼が開いて來たのです。

信二さん。

私は、さうしていくらかの事が判つて來るにつれて、可愛そうな私達仲間のことが思はれて來ます。私達が、お金で賣られてゐるのは、ほんとうに貧乏なためです、私達の親はみんな持つてゐるものをはじから賣つて、終いには娘までも賣らなければ食べてゆくことが出來ないのです、私は、この世の中に決して娘を賣るために育てる親達のないことを、身を賣られてうれしい娘のないことをようく知つてゐますが、賣らなければ生きてゆけないこの世の中を一體どうしたらいゝかと度々考へてゐました。偉い婦人達が集つて、公娼廢止などゝ云つてゐられるやうですけれど、この世の中が今のような制度のまゝでつゞくかぎり、とうてい女の人が賣られないですむはづはないのです、今のままで、身を賣らないためには、お金持に生れてくるより他に、方法はないと思ひます。

信二さん。

あなたと仲よしになつてから、わたくしは、みんなが安らかに食べてゆけるように、みんながせめて日日の生活に追はれないように、いつかその日の來ることを信じることが出來るようになりました、私は、私の不幸を、すべて忘れることが出來ました。あなたの持つていらつしやる信念が、たとひどんなに烈しい壓迫をこの世の中では受けようとも、正しい、當然なことであるとようく判りました。

私達、わけもなき虐げを負はされ、一生の間日の光も見ない人々の爲、あなたが生命をかけてゆかれる事を、あなたは何にも仰いませんが、ようく察しることが出來ました。

信二さん。

それで、私は、あなたにお別れしてゆかうと思ひます、あなたは私をつれて、生活と戰つて行かれる以上に、なさらなければならないお仕事が、うんとあります、若いあなたのその生命をかけて、あなたの進んでゆかれるべき道は、多くの人間のためのお仕事です、私は病み、さうしてあらゆる汚れに傷いて、もう再び起つ事の出來なくなつた今、あなたの貧乏を少しでも輕くする事を希つたのです

信二さん。

さようなら、あなたは、私の屍の上に立ちあなたの信念を更に深め、一個の私ではなく多くの私、一生の間をたゞ、みじめに生き、生命かけた一つの愛を得ても、その愛をよろこぶべき境遇をさへ持たない、多くの人間のために戰つて下さい。私は、いま、心の底から、静かに燃えて來る意志をかんじてゐます、私はいま、水のように冷静な理知が、自分に働きかけてくるのをかんじます、私は希望を持つて死んでゆくことが出來るのを、うれしくうれしく思ひ、私達、よこしまな制度のモデルを、全き人間生活の中に生かして下さるため、あなたの今後の生涯を生き切られること、そのことの光明に合掌します。

たとひ私の一生がどんなにみじめであつても、それが何でせう、今後に私のない社會が來ることを、まつすぐに信じ、心ほがらかに私はあなたにお別れいたします。

最後にのぞみ、あなたの私にあたへて下さつた深い愛、私の多くの仲間に對する意志、そのよろこびを明かにするためにこの筆をとりました、さようなら。

長谷川春子女史の渡佛を送る會

鏑木淸方氏の門に學んで獨自の境を歩み出した長谷川春子女史はかれての希望とほり佛蘭西へ繪畫修業の旅に出ることゝなつて、三月四日の夜東京驛から、賑かな見送りの裡に立つた。神戸から乘船して、マルセーユへ着くのは四月も半すぎとなる筈である。滯佛は約一ヶ年の豫定で、それから歐洲各國を繪行脚して歸朝されるのはいつごろにならうか。

春子氏は昨年の秋東京朝日新聞社の樓上に最初の個展をひらき、女性としては稀にみる個性的な作品を公にした。女史が今度の行を送るために二月廿二日の夜、大阪ビルのレインボー・グリルに於て女人藝術の今井、生田兩女史を初め若い者ばかりが主催者となつて、送別會は開かれた。

長い船路の、しかも女性の獨り旅である。送らるゝ人も送る者も共に潑剌とした元氣だ。會するものの四十三人、三上於菟吉、時雨兩氏をはじめ菊池寛氏から石川三四郎氏、内藤辰雄氏、埴原久和代、太田菊子兩女史などゝいつた顔ぶれ、直木三十五氏、週間朝日の翁久允氏もある。變つた顔では横光利一、池谷信三郎、犬養健、中河與一の諸氏が揃つてさながら新感覺派、若くは形式主義者の人達がずらりと並んだ觀があつた。

先づ今井邦子氏のユーモラスな挨拶に初まつて、直木、菊池、三上、翁などの諸氏がとても機智に富むテーブルスピーチで滿堂を笑ひゆるがす。送られる長谷川春子女史はいつもの鋭い舌鋒をおさめて、さすがに羞みを微笑の中へかくしながら俯向いて殊勝らしく聽き入つてゐるのも面白い、會を閉ぢて席を立たうとした時ふとピアノの音で「螢のひかり」の曲譜のメロデーが流れてきた。すると菊池氏は「おい、みんなして送別の歌をやらうぢやないか」と呼ぶ。

興味あることは春子氏は畫壇の人でありながらその夜集つた顔ぶれを見ると、畫壇の人々よりよほど多く文壇人が見える。その上思想家もあれば雜誌編輯者もあり家庭の奥樣もあるといふ風に、異色ある會であつた。遠く海外へ去る人を送る――それには少しの感傷もなく、すべてが明るい談笑のうちに運ばれるといふ。これも時代の相を語るものであらうか。

當夜の聽きもの、

直木氏曰く「中條、吉屋がいつたが、それよりかまあゝましか?」

菅忠雄曰く「吉屋氏と二人でパりを歩くところはさぞ凄いだら

ほしいもの

資本	女人藝術社
色よい返事	若杉鳥子
死場所	時雨
テニスコート	神近市子
猫	甲斐仁代
赤い家	城しづか
長い黒髪	八木秋子
美名	生田花世
飛行機	素川絹子
ユーモア	山川菊榮
戀愛	尾崎翠
原つぱ	高群逸枝
小倉	川島つゆ
レターを入れる手箱	小金井素子
ニューストツキング	平塚雷鳥
蛇	たか子、幸子
サンマ、サンマ	高橋鈴子
未練	長谷川春子
サロン	よさ、[illegible]子 [illegible]子、[illegible]子
コンパクト	堀江かど江
ちやぶ臺	林芙美子
牝牛	松田解子
パラソル	松本惠子
エンゲージリング	戸田豐子
酒	[illegible]山仁代 ちか子、英子
ステツキ	今井邦子

う。」——だから、先月號忠臣藏に一日がはり清水一角が乗りこなすか、大いに期待してゐる。」

三上於菟吉曰く「畫家だとも思はない、まして美人なんぞとは思ひもしないが小さい黒ん坊を抱てくるといつただけはうなづける」

石川三四郎氏曰く「男なんぞ連れて歸つたら、日本男子の恥辱だから一歩も陸へはあがらせない。」

今井邦子曰く「あたしを狸だといつたが、この悍馬をどんな英雄

時雨曰く「知らないうちに船まできまつた。此分ではもうパリかなと思ふ時分には、ドイツでビールを飲んでイギリスでビフテキでも食べてゐるでせう、少しはさびしくなつたかなと思ふ時分にはもう私の前へすはつて、線香花火のやうなすさましい氣焔をあげるでせう、恐ろしいことです。」



神戸埠頭にて　長谷川春子・高橋鈴子

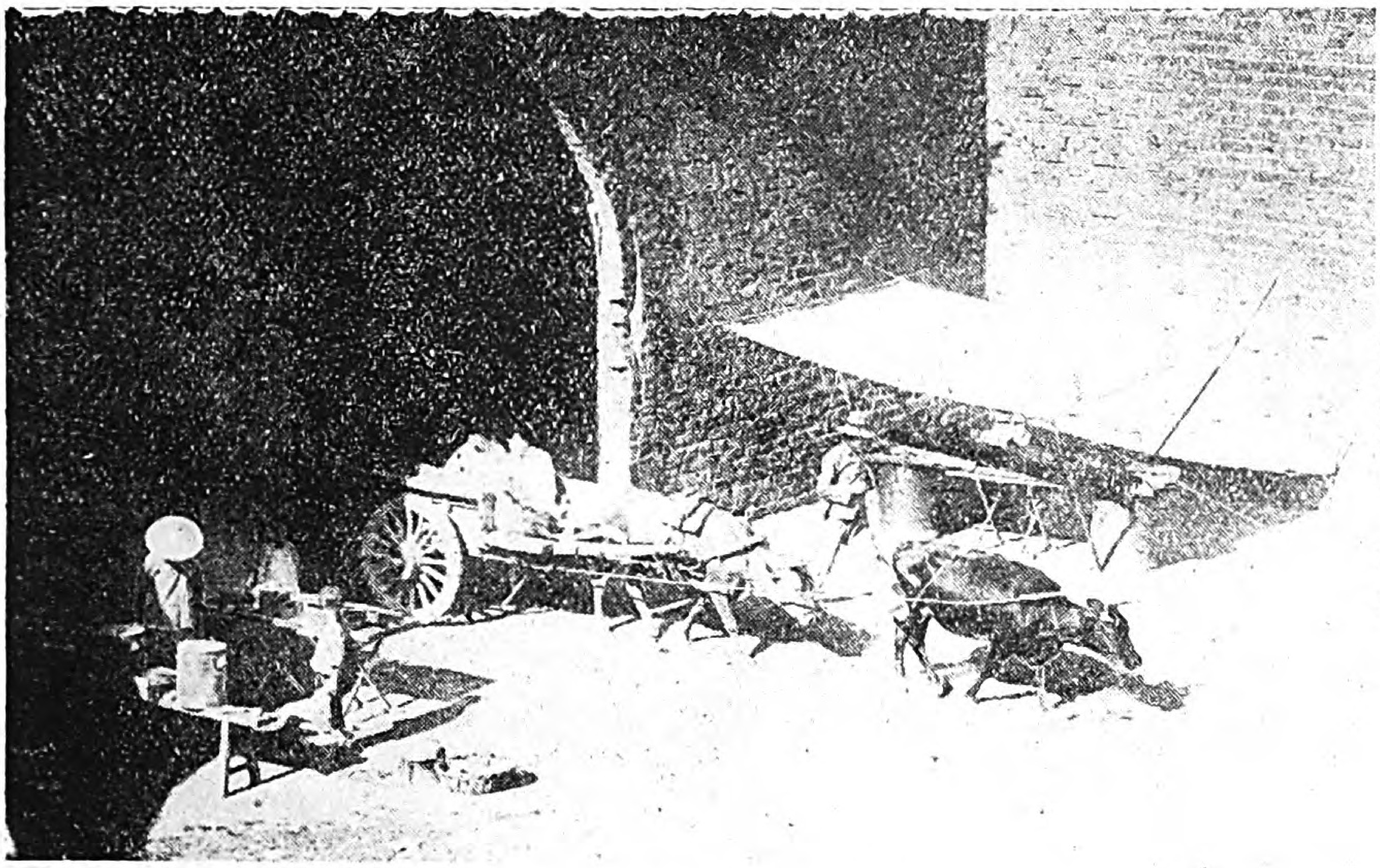
埠頭にて——

高橋鈴子

限りなき透明の蒼空に
潑溂と、躍る線のひらめき
そは
女性一人を乘せた Kiva 號の旗
『君の長途にあらしあれ
たつまき起れ
船覆がへさず
舵折らざる
そのあらしを、たつまきを』
大きな變化、感激から
コムポーズされる
君の非凡な藝術の誕生を
飛躍を、開拓を
祈りつゝ『思ふ』
『君よ、さよなら』
『お別れだ、さよなら』
『しつかりと』
力をこめた堅い握手に
四つの瞳の睨み合つた
そして二人は
船の上で息を呑んだ

一九二九・三・六

自動車	女人藝術社
寫眞機	三宅やす子
蓄音機	宇野、三津木
香水	よさ　しづか 幸子
ピアノ	望月百合子
ヴヰオリン	中本たか子
若返り法	藤村、秋聲両先生に進呈
生がへり法	近松秋江
マンドリン	戸田豐子
コッテージ(別荘)	女人藝術社
オペラバッグ	小寺菊子
妾宅	生田春月
健康	全部
エネルギー	松井綠子
オートバイ	小池みどり
タイプライター	英美子
口紅	長谷川春子
貞操錠	山田順子
五錢の大入袋	尾上菊子
可愛いゝ入齒	與謝野晶子
鏡臺	平林たい子
職業	永島暢子
ふらんす人形	深澤紅子
私一人への愛情	眞杉靜枝
頬紅	窪川いね子
二十までの女	菊池寛
パン	伊福部敬子
ホーセ	里見弴
鈍刀	直木三十五



柿賣るや金州城の大通り――虚子

満洲路上交錯曲 (2)

新妻伊都子

花嫁

文字通りの花嫁さんを見ました。

日本のお芝居に出るお姫様が、挿して居るような美くしい前かんざし、お姫様のは金ピカですが、此お百姓のお嫁さんのは、桃色と白の染分けで、押合ひの櫻花、黑い髮の毛の髷より、はるかに大きい此花かんざしが、地味なあたりの景色のなかに、美くしく浮き出るのでした。

カメラの中に一寸失敬しようとレンズを向けると、氣まり惡るそうにではなく、恐ろしそうに、よた〳〵と家の方へ逃げてゆきました。

美くしい花かんざし、それはつまみ細工や高價な造花ではありません、まあ、お祭りの提灯の上に挿す花、お會式の萬燈にさげる藤の花、紙で出來た單純な造化、造花と云ひ得ない程のものを想像なさればよいわけです。これはお嫁にゆきたてのよそほひであらうと思ひます。

花かんざしが出ましたから、序にもひとつ加へませう。今度は、お婆さん、皺くちやの、白髮あたまへ小さい、赤い花かんざし一本、これは〳〵お年寄の花嫁と、早合點してしまつたのです。日本ならさしあたり、氣印か、さもなくば頼母子講の御連中とみるところですが、これは又こうした意味があるのです。

赤い花かんざしと夫の存在、まづ、お連合が健全で居る證據を見せて居るわけなのです。

何と日本のおばあさん達も、若返り法として、やつてみたら如何でせう!、

地獄極樂

お盆の十六日、地獄の釜の蓋もあくと云ふ

日、私は子供の頃よくお寺で、地獄極樂の掛圖を見せられたものでした。
お閻魔樣の舌抜き、罪の有無を見る淨玻璃、針の山、血の池、等々、赤鬼の恐ろしかつた記憶が金州へ來て思出されたのでした。
こゝの天齊廟と云ふお寺に、日本のそれと全く同じ、地獄の有樣を示した木彫の人形があるのです。大きいのは人間より大きく、それより小さいのなど、數多くならべられてあります。石臼に挽かれて居る辮髮の男、締木にかけられて悲鳴を上げて居そうな女等た見ると、人の形をして居るだけに氣味が惡くなつて來ます。
お賽錢をあげると、坊さんがお鐘を一つポーン、これは本尊樣に收入のあつたことを知らせる爲なのだそうです。
地獄は見終つたのですが、極樂が見あたりません。きくと、お隣のお寺へいらつしやい。何處を探しても優しいお地藏樣のお姿はなく、相變らず金ピカの佛樣が並んで居ました。
地獄の沙汰も金次第、支那では死人に必らずお金を持たせてやる風俗があるのです。日本でも三途の川の渡り賃に、六銅錢を持たせてやりますが、支那のは更に現實的です。お金さへあれば地獄で役人の地位が買へるから、苦しまずにも濟むと云ふのだそうです。
無産者は地獄へ行つてまで、虐げられるのが現代ですね。

後架

一番弱つたのは後架でした。勿論日本人街を離れてのことですが、立派な飲食店、こゝなら大丈夫と、便所へ行きましたところ、開けつぱなし、たれながし、おまけに、豚ちやんがブウ〱云ひながら傍へ來るのですもの、用など出來るものではありません。
お次は一流のデパート、何うしても便所のありかを敎へないのです。私達は相談して、もう一度きいてみました。ようやくのことで友人は用をたして來ました。報告によると、便殿は綺麗でありましたが、壺のなかへさせられたので、實は溜ると下まで持つてをりなければならないから、一寸敎へしぶつたものとみえます。
其次は或る處の女子師範學校、例によつて後架へ御案内を願ふ、斷髮の先生が先にたつて、かなり遠くまで連れていつて下さいました。いざはいらうとすると、申譯ばかりの半分の戸が、掛けがねもなく、おまけに先生が傍に立つていらつしやる、少々氣まりが惡く、ためらひながら用をたして出てくると、お隣にはいつた、將來先生に成らうと云ふ女學生が、開けつぱなしに、前向きになつて、しやあしやあ、なある程。
さて手を洗ふところはと、見まわして居ますと、先生すゞしい顏をして、その雪でお洗ひなさい。——その日は丁度吹雪で、夜にはちよつと積つて居たのでした。

皮はぎ

朝鮮と支那と堺の
あの鴨綠江
流す筏はアリヤよけれども‥‥

安東や新義州には澤山の筏がついて居りました。それらは百七八十里奥から、二三ケ月もかゝつて流して來るのだそうです。勿論雪や氷にとざされる頃には、通行は出來ませんから晩春から夏にかけて、ほんの短い間に流し出さねばならないのです。
筏の上には十人位、寢られる寢室と、大きな炊事室があります。中には雞を飼つて居るのもあるそうです。一つの筏に八人から十人位乘り組で居るのですから、大きいものです。
さて勞銀ですが、勿論親方が大部分を取るのでせうが、先づ、冬中使ふ鹽と、冬着の一枚も買へて、金五圓も持つて歸ることが出來れば、大成功だそうです。時には、鹽を買つてしまうと、二ケ月の勞銀が空になつてしまひますので、やむなく、百七八十里の道を、鹽を背にして徒歩で歸るそうです。こうして運ばれて來た材木は、鴨綠江の鐵橋近くの兩



見世物―カラクリ

岸に、數かぎりない位、つけられて居ます。その材木の上に、女や子供達が澤山集つて來て、彼方にも、此方にも、何やら材木の上を探して居るように見えるのです。

即ち此人達が『皮はぎ』なのです日本には『追はぎ』と云つて、人の着物を剝ぎ取つてゆく者がゐますが、これは材木の皮をはぎ取つてゆくのです。此皮を何にするのかとお聞きに成るなら、それは燃料にするのだとお答へします。

群鳥の如くに、滿洲の地へ押寄せてくる山東の移民達は、空地さへあれば、アンペラで蒲鉾小屋、トタンや板でバラックを造り、そこに住ひ、燃料などは叱られないかぎり、無斷で頂戴出來得るかぎり、あさつてゆきます。

これが安東に居る『皮はぎ』で御座います。

泥棒市場

說敎强盜でおびやかされて居るところへ、泥棒市場なんて文字は穏でありませんが、まあ、泥棒の市が立つのではありませんから安心して讀んで下さい。

大連名物の一つ、露天市場のことを、誰が泥棒市場などと云ふ、いまはしい名をつけてしまつたのです。

こゝは支那人街の盛場で、古道具屋、新古金物店、古着や、古雜貨や等々の、何百軒とある商家や、露天商人を中心に、丁度淺草の奥山あたりと同じように、飮食店やら、見世物やら、はてはいかゞはしき家が何十軒もあるところなのです。

或る者は申します、こゝで堀出しものをすると、とんだ金儲けが出來るとあつて、毎日尊い時間を費やして、目を皿のようにしてあるく人があると、若し盜難品がまぐれて市場にさらされて居ると假定してみても、それをあさりにあるく人の心は、やつぱり露天市場に泥棒市場の名をつけた、水心のある人で御座いませう。

露店の飮食店に豚のはらはたが、、、、埃にまみれて賣つて居るのも恐縮しますが、それを買つて立食ひして居る人を見ますと、實に人間ばなれした感じがします。

『ジャングイ進上〱』――こうきこえるのです――と雲をつくような大の男が、地面に平蜘蛛のように頭をすりつけて物乞ひするさまは、憐と云ふより氣味が惡くなります。一人に與へると、どこから寄つてくるか、すぐ

五人十人とたかつてきます。

夜にいりますと、市場の方はひつそりとしてしまひますが、それに反して花柳の巷は賑つてまゐります。こゝは三流、四流のものばかり、それよりも、まあ、十數年前の十二階下が思ひ出されます。素見にざれ言を云ふてゐるらしき人々の群が、街を滿たして居ます。

流しがやつて來ました。

日本ならさしづめ新内か聲色、さもなくば柳か野崎のさわりと云ふところでせうが、これは月琴、胡弓、笛、他の樂器二人、都合五人一組で、はやり歌らしい輕い曲を彈いてきました。彼等はまるで客など問題でないように、錢を乞ふでもなく、錢をもらつても、もらはぬでも、一曲彈くと、さつさと次へ行つてしまひます。

銀座をアップ・エンド・ダウンするモガ・モボ達に、此流しをきかせたら、さぞやさぞかし、支那のジャズを聽いたと喜こぶところで御座いませう。

支那のジャズは滿洲の澄んだ空氣に、遠くまでひゞいてまゐります。私達はそれを後にしながら、アカシヤの並木――街路樹――の間を、鈴をならしながら、カッポ〳〵と驅ける馬車にゆられて、歸つてまゐりました。

此愛すべき馬車よ、三人乘つて、かなりの道程を二十錢であつたことよ。(4・2・20)

甲府講演會豫告

兼て計劃されてゐました本誌講演部が成立した事を、本號でお知らせすることの出來るのを悦びといたします。

(講演部聯盟の氏名はいづれ發表いたします)

さて、其第一回地方講演は左記のごとくでございます。

四月七日。甲府市に於て。

山梨日日新聞社及開發社後援。

講演者　今井邦子、生田花世。堀江かど江、永島暢子、中本たか子、八木秋子、望月百合子、長谷川時雨、素川絹子。城しづか（舞踊、尾上菊子）

時刻其他の詳細は追て山梨日日新聞にて委しく發表いたします。

此機會に信州諏訪、松本、長野、上田等をも一巡したい希望もあります。同地の愛讀者諸氏の御聲援を願ひます。

一八八二年より一九二八年迄に 私の觀た日本の女性

神戸女學院　スザン、エ、ソール



田中てる

私は知識程度の如何に係はらず、外見、例へば元ブラ、教會、公けの場所で人目を惹く風采、香しくはない風評を撒き散す、所謂モダンガールと名付けられた新らしい女性について委しくお話しする事は出來ないのです。それは私自身の長い經驗は、主として普通の健全な學生の中に限られて居りましたから、また今所謂モンガールと呼ばれる女性について考へるより、未來の、將に來らんとする新らしい日本の眞の女性に最大の信仰と、尊敬を持つて居りますので。

日本に最初にまゐりました時——過去四十五年前の日本の娘さん達——、丁度本校が創立八年目の誕生で、と言つて、校舍が全部建築を終つた時、社會の批評が、ざつとこんな嘆かはしい言葉を射放れたのです。

——男の樣な外輪に歩く女學生をみるがいゝ、嫁に行つても、良人の後から歩きもしないで、夫婦でございと肩を竝べて歩きたがるだらう、西洋人の妾になら立派なものだ。

侮蔑と嘲弄の眼にこんな豫言まで加へられてゐたのです。日本全國に廿五個位の女學校があつたのでせうか、數年後五十哩の遠距離に女學校建設の提議を私が企てた折も、無論、勢よく不賛成を唱へられました。

二人の卒業生が出ました、彼女等は、これは傳へられた話ですが男學生の服裝でなら男子の學校へ入學して知識、卓見を錬磨、習得する事が出來るだらうと、言つたさうです。二つの高等師範以外の專門學校程度の（女性の）教育は皆無だつたのです。知識慾の旺盛な極少數の女性は、アメリカ、英國、東京まで留學したい慾求に驅られたものゝ希望の實現は、到底困難でした。

「不謙遜なる女性」

これは最初私が日本に來た年、卒業論文を讀んだ話です、參列の聽衆に後を向けて、卒業論文を讀みました。翌年は前を向いて、讀み、その翌年は七八寸の低い壇上で讀む事を許可されたのです。後——前——壇上、この三階段の過程を蹈まねばならぬ程、女性の手で記述された論文にさへ、輕蔑の或物が潜んでゐた、或劇場で說教會のあつた時、四五人の私の學校の生徒がオルガンに合せて讚美歌を合唱し終つた時も、「不謙遜なる女性」といふ誹謗をあびせかけたのです。論文と言ひ、合唱といひ到底誹謗の意味を解する事は出來ません。

田舎から來た富豪の三人の令孃は奥庭以外の外出をしない爲に履物を持たないと私に話して呉れました。

十五歳（滿で數へたものだらう？）位で結婚の爲に學校を退校して行つた。居殘り組の生徒の父兄は「老孃の悲哀」の危機に瀕してゐると、恐怖と狼狽とで學校へやつて來ました。勿論、單獨で旅行をするなんてたとへそれが歸省にしても——。

其頃の生徒（當時女性の代表ともみるべき）は一番よく吐かれた言葉は「仕方がない」「力がない」この感嘆詞以外何もなかつたと記憶して居ります。自發心、獨立心、など持つた女性が居ないのに不思議があるでせうか？



で私は現代の女性の一大進歩、向上は、自信と自力が顯はれて來たと言ひたい——あらゆる困難、あらゆる失意に遭遇しても、脫出する道のある事を知つてゐる、また必要な道を發見し、また適宜に道を作り出す能力さへ事實彼女等が持得たのです。

……

體格の進歩も非常なもので、四十五年前の女性の貧弱さの例を擧げてみるとプリン、モール、カーレツの古い卒業生の話に、——日本に居た時、最良の體格が、プリン、モールの入學試驗の時は百七人中の終りから三番目であつたと……

一週一度は散歩する生徒の足力が、到底私と竝行しなかつたことは、御想像がつくでせう。服裝の點もあつたと思ひます。長い着物に重い廣い帶を締めてゐましたから。文部省の女學生體力增進といふ名目の下に一年一回の運動會が指定されたのも此頃です。

學校卒業以後の女性の爲に、家庭以外に開かれた門戸が少かつた事——全國敎育會の年會に於て、小學校敎師が男子一〇〇に對する女子六、中等學校敎諭男子女子、半ばだつた樣ですが、現時は男子中等學校にさへ女性の姿を見る事が出來ます。

書記、速記者、ホテル、ステーションの女性の活躍は目覺ましいものと見ます。先月東京に參りまして、乘合自動車の女車掌が如何に能率的に活動してゐるかをみて驚嘆したのです。そして大いに感じた事は、古來の日

日本の女性の傳統的禮儀謙讓の德も微塵に失はれず女らしさを害はず仕事についてゐた事でした。

　申上げた以上は四十五年前に夢想だにされなかつた今日の女性の進歩でせうか私は臆病で萎縮した女性から、新らしい女の新らしい特長が暗示されてゐた樣に思へるのです。此の變化が急激ではなく時代に順應する力と自信とは新らしく開かれた門戸と自然步調を合せて進みましたから、時としては力が機會を待ち切れず何かの形式で表現された時もありましたが。

　古い道德と風習の標準と敎訓とは今日の女性には何等の滿足も與へずに、新らしい世界の中に自分等を判然と見出して居ります、がこの新らしい自由は多くの怖ろしい誘惑をもたらして或者は無經驗の爲にそれに陷りました。そんな理由であの過渡期に於ける誘惑は、新らしい生活と仕事の樣式を受け入れようとしてゐる女性に突(ワッと)した事は云ふ迄もないのです。

　それが所謂モダンガールとでも言ふのでせう。

　最後に一般の日本の女性が、彼女等の若い豐富な生命の中に、湧き立つ最も人間的なものを認めます、その衝動は或ひは未だ鍊磨されない無智のために、過失を作り乍らも、その母やその祖母が所有したものより、より廣き見解と、よりよき熟練を以て、よりよき光輝ある世界を生産したい欲望だと思ひます。又最も眞實なものです

　この數週間の中には私は多くの古い卒業生を訪問する機會を得ました。妻となり、母となり、實社會に出てゐる者を見ましたが、この新しい日本に決して卑しい恥辱な奉仕はして居りません。

　て現代の若い女性もそれ以上のよき働きを準備してゐると云ふ事を深く、強く、堅く信じます。

　御國の爲に、家庭の爲に、故國の爲に、ひいては又他國の爲にも。

紅玉

根城美子

紅玉に似るはかなさよあか〳〵と燃ゆれど固く冷えたき心

さめ〴〵と戀のざんげに泣く人へ言葉かはさず茶などまいらす

御僧は若く在せば珊瑚なる珠數のあかきがいたくなまめく

我母は老い給ひけり我をせむる言葉に涙いたくまじり來て

舟底椅子

原田宮恵

此の子はも夜はゐねずになりにけり病みの寢床に母とれしより

我肌にまろ手ふれつゝねるくせは此の子病みつゝ覺えたるらし

子の病みの稍に癒る夕かも舟底椅子のゆれのたのしく

女人聯盟へ御加入下さい

女人藝術は愛讀者の皆様と親睦をはかりますために**女人聯盟**を設けました。別にむづかしい規約はなく誰方でも自由に加入が出來るのでありまして、月極讀者は直に聯盟員であることは勿論ですが、直接購讀者でない方でも御申込になれば名簿に記入いたし聯盟員になれます。どうぞ右の愛讀者劵にお名前を御記入の上皆様奮つて御加入下さいませ。御加入の上は左のやうな方法によつて聯盟員の皆様と本誌との親睦を増し御便宜をはかる事にいたします。

一**通信部**　讀者のために通信の便を設けました御感想などお寄せ下されば紙面のゆるす限り本誌通信欄へ掲載いたします。

一**支　部**　五人以上の愛讀者のあるところでは支部を設けることが出來ます。支部へはいろ／＼便宜をはかり直接購讀者のために販賣の方法も講じます。

一**講演部**　本社には種々の方面の女性が多勢をりますから地方聯盟員の御希望によりましては喜んで講演に出かけます

一**質問部**　東京における學校、職業方面、圖書その他のことで御質問がありましたら調査の上お答へをし尚ほ交渉の便をも圖ります。

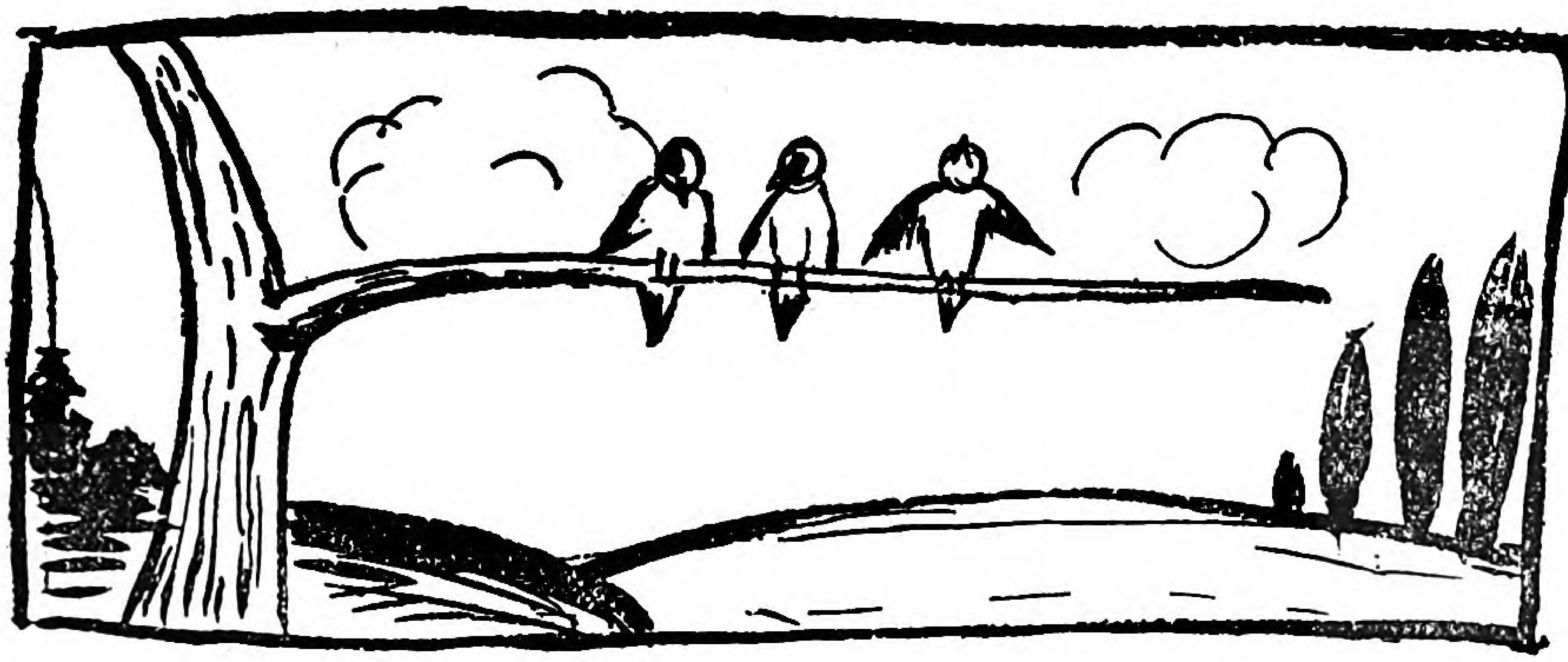
女人藝術は私達全女性の文化のために貢献せんことを希うて生れましたところの、女人ばかりによつて作られる唯一の雜誌でございます。日に月にめざましい進歩のあとを示してをります女性の歩みにつれ、この女人藝術も常に些でも時代の思想感情に先んずる所がなければなりません、そしてこの女人藝術は小さくとも決して私器ではなく全女性の公器と思つてをります。それで皆様が女人藝術についての御忌憚なき御感想や御希望を伺ひ度く存じます。どうぞ左の欄へ御記入の上本社へお寄せ下さいますやうにおねがひいたします。

愛讀者劵

美點と感ぜられる點	缺點と感ぜられる點	希望

住所

氏名



[illegible]子

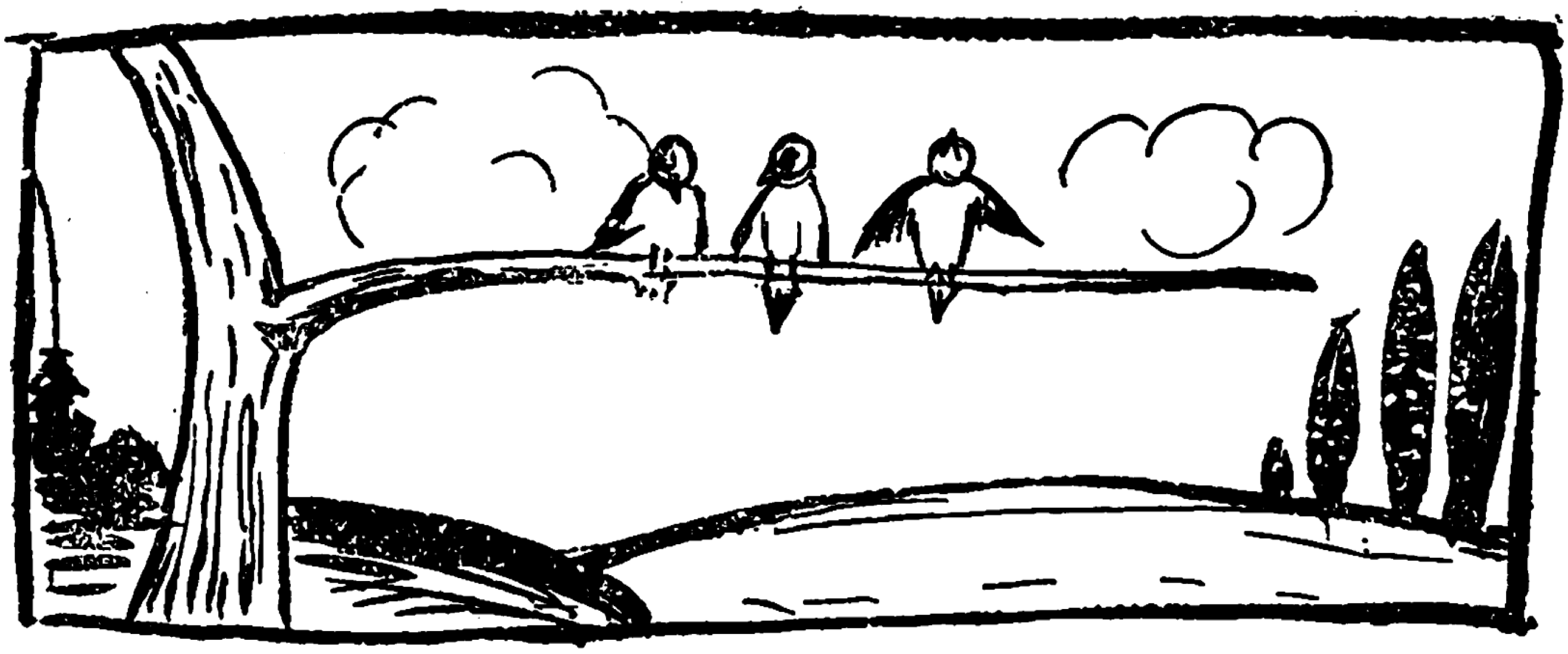
鳶

英美子

故郷の、山の麓の公園で
私は始めて、鳶といふ鳥を
傍近く見た。

澄み切つた蒼空に圓を畫いて
悠々として舞ひ遊ぶ
あの、鳶――
砂濱の貝殻を啣えて
天高く舞ひ昇り
中空から大石をめがけて
落とし碎くことを知つてゐるといふ
その鳶が、體をすぼめて
小さな檻に飼はれてゐた。

腰を蹲めて檻をさしのぞいたとき
私は、鳶の眼の愛くるしさに駭いた。

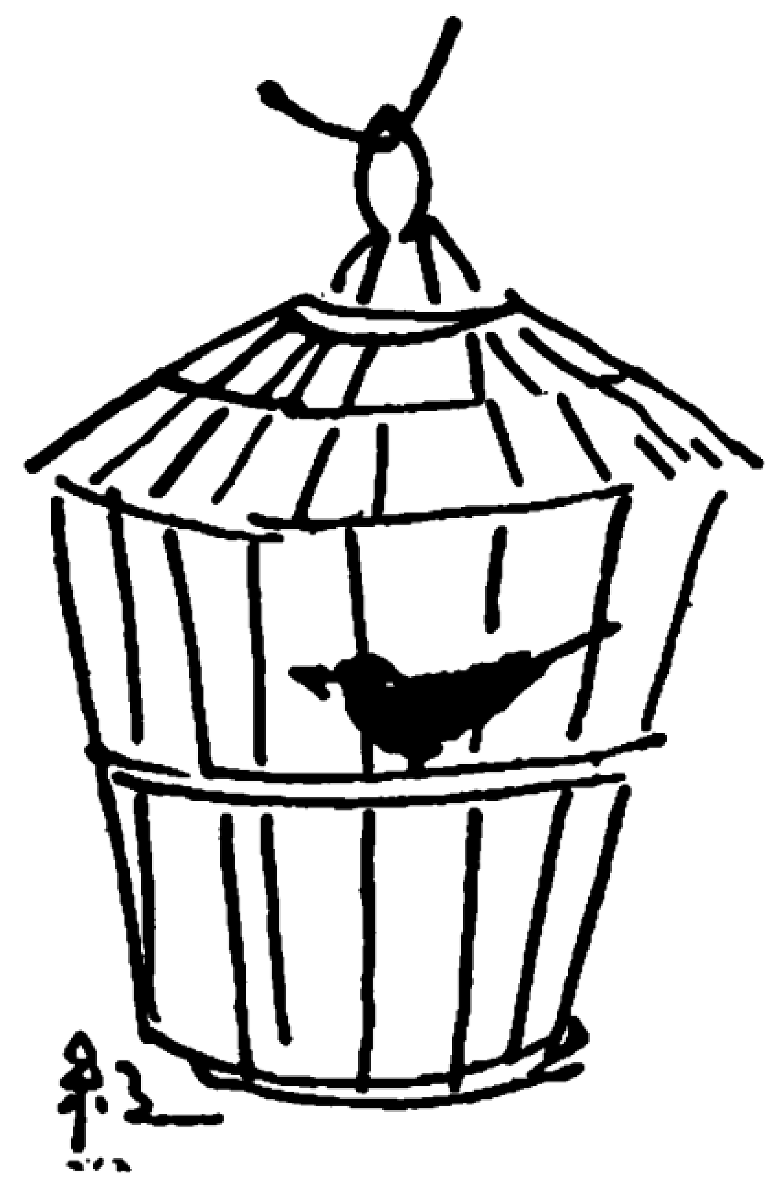


常に、宏大無邊の青空を
自由濶達に翔けめぐる
この鳥の瞳が
思ひがけない程の素直さと
人なつこさとを湛えてゐるのに………

空では
鳥と餘り變らぬやうに見えた鳶は
斯うして傍でみると
鳥とはまるで違つたふくらみのある翼を有ち
おほらかな憧がれと鷹揚さをもつてゐる
ぎすぎすしたところのちつともない
つぶらな可愛いゝ瞳だ。

私は、しばらく鳶の眼をみつめてゐるうちに
何とも知れぬ哀愁と
吾々、人間の非情さとを耻じる念が
この鳥の前に充ち溢ふれて來た

鳶は
斯うして小さき檻に入れて
地上のさらしものにするには
あまり氣高かすぎる瞳をしてゐる。



長流記（その九）

山田邦子

次ぎの日に三田雨光氏は時間をたがへず佐千子をたづねて來た。淺黒い顔、廣い額、その額に濃い頭髪がすさまじく萱のやうに靡いてゐた。目は細くやさしげなのだが口元にある微笑が優しい感じを與へるよりは却つてすきのない感じを人に與へる、それは大原白夢氏の應揚な、豐かななつかしみある詩人ぶりにくらべて三田氏は又何といふ迫つたすきのない鋭い感じを人に與へる詩人であらうと、佐千子は當時日本の詩壇に相並んで輝く二人の詩人を心に比べて感慨深かつた。

初夏の頃で佐千子は用意しておいたさくらんぼを皿に盛つてお茶に添へて差出したが、住みなれた三疊のたゝみの汚れがよけいに目についてうら恥しい思ひで美しい色のさくらんぼを盛つた皿をその上においた。

「實にいゝ色ですね、僕はさくらんぼを見ると實に惚れ〲してしまひますよ」

さう言つて三田氏はさくらんぼのずゐを指先でうごかした、美しいさくらんぼの玉は三田氏の手のなかでくるりくるりと廻つてゐた。

「幾年か前に貴女から手紙を頂いた事がありましたね、あの時は實に失禮してしまつて‥‥」

佐千子はサッと顔を赤らめて過去の手紙のなかに現れてゐる幼稚な自分の姿を恥ぢた。

詩の話、詩壇の話、神樣の話にまでも話は進んでいつた。けれどその底には何となく前の問題が實在の姿を長く横たへてゐるやうで、前の話は空虚に響いてくる！　こんな話をわざわざ手紙をよこしてしに來たのではないだらうといふ感じがする。佐千子は昨日手紙の返事を出してからとやかくと思ひまどうて、もしや‥と三田氏が急に會見を申込んで來た心持を獨斷的に推定して一寸愉快になつたり、いや〲そんな事はない、と自惚心を打消してみたりしてゐたが、三田氏に逢つて、その人の底を割らない話ぶりを聞いてゐるとだん〲自分は落ち付いて來て、よしんばどんな思ひがけない問題を持ち出されやうと、吃驚もしなければ、由井氏との結婚に動搖

を感ずるやうな事はなささうな氣持になつてしまつて佐千子は大詩人の前で一時カッとのぼせ上つた心が全く平常に復してしまつた、

「外を少し散歩してみませんか」

三田氏はにこやかに佐千子を誘ふた、佐千子はすぐに賛成して身仕度をすると机のひきだしから赤い財布をとり出してふところに入れた、そのなかには故鄕の和田峠の中腹に山林を守つて薪炭を賣り出してゐる頑固な大叔父が佐千子の上京以來始めて手紙をよこして親にそむいたのはよくないが此上は立派に成功せよといふやうに書いた手紙に添えて爲替にもくまないで、もう此頃滅多に出てこなかつた古い五圓の大きなお札を入れてきたその大きな五圓札――今の十圓程もあつた――がたゝんで入れてあつた。

二人は日比谷公園のなかをいろいろと話しながら歩いた。

「貴女のお父さんはH市の市長だつたんですつてね、貴女は何故信濃に居たのですか」

佐千子は自分の身の上をざつと歩きながら話したりした、三田氏は始終にこやかに聞いてゐた。

「一緒に夕食でも出來るといゝけれど……今日は生憎金がなくて」

落ち付いた聲でゆつくりと三田氏がかう言つた、佐千子は自分がてれたやうに

「お金なら私が持つてゐます」とあはてゝ返事をした。

「さう、持つてゐますか…じや鴻の巣へ行きませう」

三田氏は急に足をいそがせて佐千子の先きに立つた。もう夕暮の遠く見渡すかぎりの空には蜘蛛の巣のやうに電線が浮き上つて美しい空の夕やけの色に染つてゐるかのやうにさへ思はれる景色であつた。人や電車やあはたゞしく動いてゐる大通りから、小網町の河岸通りにまがつた頃にはあたりはもうとつぷりと暮れ入つて蝙蝠が時折目の前をひらめいて夕闇のなかに姿をかくした。

「どうしたんだらう、鴻の巣の外燈がついてゐない……」

獨り言の樣に言つて三田氏はとある家の暗い扉を押して入つた、佐千子は鴻の巣の名は兼て聞いてゐたが、華やか相に文士の出入する鴻の巣といふ有名な家がこんな暗い小さい物寂しい家とは思はなかつたから一寸驚かされて立つてゐた。間もなく三田氏は出て來て。

「こゝの家では白木屋橫丁の方へ引こすさうですよ、それで今日から商賣を休んでしまつたんださうです……でも有合せでよければ二品ぐらゐで夕食を出すさうですから」

さう言つて三田氏は佐千子を導いていつた、土間も暗く二階へ登り口も暗く別に人が出迎へるのでもなく左手の勝手元らしい方からビフテキでもやくらしいはげしい油のにほひと音があたりに人の居るのを僅かに語つてゐる樣な森とした家であつた。三田氏はかまはずにずんずん二階へあがつて座敷の障子を明け、粗末な木のテーブルの前に自分で座ぶとんを持ち出して座つた。

部屋は天井が低くて電燈の光も五十燭はない光であつた。開いた障子の外はすぐ河岸になつてゐてそこにはいくつものもやひ船が並び、船からは燈や煙が動いて見えてゐた、小供は船から陸に渡してかけられた板橋を渡つて嬉々として遊んでゐる……佐千子は此ほんとうに珍らしい風景を我を忘れて眺めてゐた。

「ここの子供は毎朝學校へ行く時には矢張りあゝして船から板橋を渡つて行くのでせうか」佐千子は岸河をのぞきこんだまゝ物に憑かれたやうに誰れにともなくとひかけた。

「それは橋を渡つて行くでせうよ」三田氏は一向さうした不審を感

じないやうに佐千子の方を見て笑つてゐた。

「いらつしやい、一寸使に出てゐたものですから失禮しました」

三十位に見えるさう美人ではないがニコ〳〵と愛想のよい女中が上つて來て頭をさげた、それが鴻の巣のお花さんであつた。お花さんは佐千子を一度でおぼえてしまつてその後會などで時々鴻の巣へ行くと愛想よく「長田さん〳〵」と世話をしてくれた人だつた。

二品程の皿にポンチの盃が運ばれてやゝそこらの空氣がくつろいできた時に三田氏は話しだした。

「で、貴女は此間叔父からきくと結婚なさるとかいふ事ですがそれはほんとですか」

「エヽほんとですの」

「それはどういふ方ですか」

「さあ…一寸…とにかく藝術家ではありませんの」

「それで貴女は滿足してゐらつしやいますか？」

「エヽ」

「さうですか……僕はね！」

三田氏の口元にすきのない微笑がチラリと動いた、佐千子はもう三田氏の言ひ出さうとする心持が何であるかを知つてしまつた。そして心で、あゝやつぱりそれだつたのですか、…貴方も申込をなさるのですか…でも貴方のは出發點が一寸異ひますね、氣の許せないプロポーズ…それは何に原因するか分らないけれど兎に角貴方は今まで私に申込をした若い人々のやうに私に戀をしてそれが花に寄る蝶のやうないつ考へだしても自然な美しさのある…たとへ私が其戀を受け入れなかつたにしろ…正直さのある、人のよさのあるさうした人々の、戀を出發點としたプロポーズとはどうも出發點が異ふやうに思はれますね、貴方は今までは私をたゞ自分を崇拜した文學少女として充分見下して考へてゐらつしやつたにすぎない、何故といつて今迄私に申込をした人々のやうに戀して申込をなさるなら…尠くも私に興味を持たれたなら、今日まで私をお訪ねにならない筈はない、私の上京は一二の雜誌で明であるし、獨立して婦人記者となつてゐる事は叔父さんを通じて御存じだつたはずであるし…然し私はさうした私の存在が詩人三田氏の心をひかなかつた事に不服を言ふ程自惚てはゐない、たゞ私が女の自立生活に戰ひ疲れて結婚に方向をかへやうとする今日に及んで突然に現れてプロポーズする心持になぜなられたか、まさか私が地方都市ながら市長の娘と分つて急にそんな心におなりになつたのでもあるまいが……その點多少の疑點がある…そんな風に疑つては惡いかな……でもあんまりわけの分らない觸れる處も領ける處もない突然のプロポーズではありませんか…。しばらく話のとぎれた處で佐千子の心にはかうした思ひがぐる〳〵廻つて相手の心を解しかねてゐた。

「その結婚は貴女の力でもうどうする事も出來ないのですか…どうにかならないかなあ…」

三田氏は終りの句をやゝ駄々をこねるやうに言つて自分がこれ程に言つたら飛ぶやうに引かへして來るだらう彼の女を期待してゐるやうだつたが佐千子は笑つてそれをきいてゐた

「僕はね、叔父から此間の晩貴女の話をきいて貴女がいろいろ苦しんでゐらつしやるのをきいて、僕の力でどうかならないかとそんなやうに考へてお手紙を上げたんです」

用心深く自意識強く彼の女の方からとびこんでゆくのを待つてゐるとも見える三田氏の言葉は同じやうに用心深く自意識の強い佐千子

の心を次第に冷靜にしてしまつた。
「ポンチをいま一杯のんでもいゝんですか」
三田氏は思ひ出したやうに佐千子にきいた。
「エヽどうぞ御遠慮なく」三田氏がお花さんを呼んで勘定を言ひつけたのはそれから間もなく後であつた、佐千子は山の大叔父から送つてよこした一時代前の大きな五圓札を出してお花さんに渡したそしておつりのなかゝら二十錢の銀貨を出してテーブルの上においた
「これはどうしたのです」
「お花さんにあげませう」
「そんな必要はありませんよ……こんな事をしなくていゝんですよ。貴女がそれを置いてゆくなら僕はそれでポンチを今一杯のむ」
さう言つて三田氏は降りていつた。
佐千子がコートを着て降りていつた時には三田氏はほの暗い土間のテーブルの上にポンチの盃をおいて奥に居る主人と話してゐた
「三田さん近いうちに鴻の巣の唄を一つうまく作つて下さいね」
寢ぼけたやうな聲で主人は言つてゐた
「よし、うまく作るよ」外にはいつの間にか烈しい雨が降つて、夜は可成り更けてゐるらしかつた
「三田さん雨が降つてゐます、傘を持つていらつしやい」
親切なお花さんは別に出た二人を追ふやうに二人の傘を持つて來た、三田氏は蛇の目の方の傘をとつて外の方をお花さんに渡した
「いえ、そちらの方にそれをあげて……」
とお花さんがまご／＼してゐると
「野暮な事を言ふね、かうして行くよ」
サッと三田氏が傘をひらいてそれを佐千子にさしかけると相合傘になつて歩き出した、佐千子もおもしろさうに足をすゝめた。お花さんの元氣な笑ひ聲が愛想よく夜の闇をぬつて消えた。
舊時代の人がきいたり見たりしたら深夜の町を相合傘が歩いた事はそこに暗い想像をめぐらすかもしれない、然しもうそこにははつきりと一つの新時代は來てゐた。事實二人はかうして手さへ握らないで電車通りで別れてしまつた。
家に歸つた佐千子は氣がゆるんだやうになつてしばらくは床にも入らずにぼんやりと机によつて電燈をみつめてゐた
――まあ私は今、自分がその氣にさへなれば曾てあくがれの藝術家と結婚する事が出來る、あんなにも有名な、あんなにもすばらしく崇拜した三田氏とさへ……」
さう思つて我にもない夢のやうな笑が口元に浮んで來た。
……でももう今の私はあゝゆう人たちにあくがれて夢中になつて飛びこんでゆく心持はなくなつてしまつた。あえて由井氏を夢中になつて戀してゐるのでもなし由井氏でなければならないといふ心持でもないのに……然したゞあれ程も自分の夢見てのぞんでゐた世界がほんとうに一度自分の前に開かれたことを自分はながく感謝しやう
佐千子はふと昔よんだ舊約のなかのモーゼの終りを思ひ出した。モーゼがあれ程も夢見てあくがれて四十四年も荒野をさまよふた末に乳と蜜との流るゝカナンの地をネボ山の上から唯一べつしてエホバの惠に感謝して永遠の死についた、その先驅者の歩みを何となく心に思ひ浮べて日記をとりだしてそれにしるした。
モーゼに一べつを許されたるカナンの國よ、かゝる人の運命よ！
今宵雨降れり……

實生活の一頁

五錢の大入り袋

舊劇女優　尾上菊子



先月の末邦樂座で觀た「モン、パリ」の中で「樂屋生活はある一面非常に敏感でまたある一面大いに鈍感でなければつとまらない」と云ふやうな意味の言葉を耳にしました。事實「モン、パリ」の中にさう云ふ言葉があつたのかそれとも說明者のその場かぎりの入れことなのかはつきりしてゐないが私はとにかく「まつたくそのとほり」とひどく同感しました。

その外見と同樣に種々な性格の人々の特に多い歌舞伎の樂屋へ大してかけはなれない境遇、そして同じ年頃のどこか服裝の好みまで一致する人々ばかり集つた學校生活からとびこんで行つた今の私には、例の言葉は金言に近いものかも知れません。

自分の眉のひき具合、着物の着こなし、舞台の上でのあるき方に對する先輩の御注意は云ふまでもなく、あんまり皆からみとめられてゐないやうな人が、一寸した場合に何氣なく敎へるともなく敎へてくれる事の中には、大變爲になる事が時折ひそんで居ります。

またその反對に私に對しての下手な皮肉、いやみな言葉を耳にする事もかなりあります。たとへば私が「この着物の合せ方少し變じやない？」と何氣なく云つた言葉に對してさへすみの方で「御當人がなれなきやうまくゆくもんか」とうすわらひをまぜた聲がする。近頃は漫性になつて鈍感にかまへてゐるせいか、それとも云ふ方でもはりあひがなくなつたのか大變平穩です。私の月給はなか〳〵皆樣の注目らしうございます。

月の末に（多く舞臺けいこの日）次の月のをわたしてくれます。それも誰が名つけ親かは存じませんがお菓子代と云ふ大變凝つた可愛らしい名前がついて居ります。まあ胃病にならない程度にお菓子が食べられます。でもマロングラッセなんかじやほんの二日分があやしいくらゐしか買へません。

どなたでも同じでせうが自分のはたらいてとるお金で買つたものは大變うれしいものです。今月分はフタバヤに大變感じのよいてごろなハンドバックがありましたのでもうそれに變つてしまひました

このほか滿員ですと「五錢」入りの大入ぶくろを二枚もらひます。大變これは感じのよいものです。小さいお金だけにおもしろいだらうと思ひますので、ずつとためて居ります。今に何か有益な事に使用します。

そして一ケ月連日滿員ですと堂々水引のかゝつた「あたり祝」がわたります。この日は皆「自分がゐたからこそ大あたり」と云つたやうな顔してにこ〳〵してゐます。（合計金高は御想像にまかせます）

樂屋の禮儀習慣にははじめのうちは大變なれなくて變でしたが、近頃では、初日、樂の日に主な方々の御部屋へ、機械的に「おめでたう」を云ふ事もおぼえ、入口の智慧坊主のやうなものを到着板の自分の名の所へさすこともわすれなくなりました。

今私が樂屋で一番好きな興味のあることは顔をつくる事です、こてぎれのした髮をかきあげ、したぢをかけてさてやりはじめやうと鏡臺にむかひ、プーンと白粉の香がすると大變よい氣持です、眉のつぶしもなかなか大切で、下手にすると四本眉が出來て客席から見えないかとびく〳〵します。眉のふとさ目はりの強さ、なか〳〵巧く行きません。また一寸たやすく出來ない處に面白さもあります。夢中でやり終へてさて寫眞にとつてみるとかなりつよくひいたはずの目はりがちつともきいてゐなかつたり、着物をきる前の少しひまなとき鏡をよくみるとどうやら眉が古風でなく變にモダン風だつたりするのに氣がつきます。さう云ふ場合「あしたこそ」とまたあしたをたのしんではなれます。

舞臺は初舞臺の時（もしくはもつと小さい時のをどりのおさらへ等の時）からのんきなせいか今の所はびく〳〵した事はありません。唯とき〴〵はつとするのは踊つてる間は、腰元なら腰元らしいふりがありますので無事ですが例へばこしかけて他の方のをじつと觀てゐます時などいつの間にかふだんの自分にあまりにもかへりすぎてゐるのに氣のつく事があります。

自分の役もすすみ、白粉をおとしてお迎へののりものにのるとさほど大役をしてはたらいたのでなくても、やつぱりほつとします。

賑かな夜の町、時には終電車のさみしい響をきゝながらいつも考へるとはなしに考へること。うかぶとはなしに頭へうかぶのは。

「自分ながら氣持のよいようにうまくなつたらよいなあ」

「もつとうんと力をだしてやれる折があるとよいのだがなあ」と。

家の中の女

人妻　林田寂子

アカシヤの梢を渡る風も木枯めいて、二重硝子の窓の透間からも盜風が入つて來る。月の影さへ見えず、如何にも陰氣そのものゝやうにどんよりと曇つた重たい空が、地上を覆つて居るやうだ。

和子は本から眼を上げて、時計を見た。針は、十二時廿分を示して居る。

靜かに立上つた彼女は、造作の惡い風呂へ入つて行つた。冷え切つた空氣に、ブル〳〵ッと身ぶるひをするのであつた。

『一週間も風呂に入れなかつたぞ。』一日をきに鬚を剃る夫のためにたてる御風呂が、何かの都合で二三日休んだ時の言葉を思ひ出した。

お湯の冷めない様にと、和子はもう三度も石炭を足しに來たのだ。

子供の寢んで居る間にと少し難かしい本を開いて一心に讀んだところは一二頁。子供に添乳をしてやつとねさせて又六七頁。夫の歸つたベルの音に、和子は愛そよく出迎へた。夫はアルコールの醗酵したやうな熱い呼氣をふう／＼出しながら、妻の手傳ひで胴衣と着更へた。

風呂から上つて來た夫は、ムズ／＼と動いた子供を抱き上げて『萬歳をしてごらん。』『拍手をしてごらん。』とまだよく眼も開けないのに藝をさせた。眞夜中である。今子供を起したら…と和子は頭の中で考へたけれど、折角機嫌よくあやして居る夫のなすにまかせて見て居た。

子供はほんとうに眼を開いてしまつた。今度は寢ようとする父を子供が邪魔を初めた。隣室では姑や小姑が寢んで居るので起さないやうに氣兼をしながら、子供を肩にのせてすかすのであつた。

『ボン』とボン／＼時計が二時半を報せた。知らず／＼の間に和子の頰に、二すぢの涙が流れた。何が悲しいのでもなく憎いのでもない。四邊は深々として姑の齒切りの音が時々靜寂を破つて聞こえるばかりである。

去る日!!　途上で和子は三年ぶりで舊師に逢つた。其時の老人の師の言葉は

『隨分瘦せなすつたな』

といふのである。自分でも瘦せた事は意識して居ながら、他の人から云はれた時、新しい力となつて考へられるのであつた。晝は姑と子供に仕へ夜は又夫と子供のために、自分の身の休まる暇もないのだもの。瘦せなくてどうしやう。朝は早い老人より前に、夜は時を知らない夫に子供に。それでも何とかして暇を見付けては勉强し度い心持…

時には家族制度の日本も憎んだ。時には男を否子供さへ怨むやうな事もあつたのだ。

　　男といふ不可解なもの
　　　怪物が
　獨り世の中を支配して行く。

又時には過去のブルジョア的生活が腹立しかつた。經濟的獨立がないために此の様にまで女が屈從しなければならないのだ。コロンタイ女史の『赤い戀』ではないけれど、どうしても立派な、安心して子供を托し得る所の出來ない限り、家の中の女は救はれないのだ。

時代は移る!!

姑に從はなくてよい時になつたなら、私は今迄の生活を揚棄しやう。そして私の考へが實行出來るやうになるだらう。今はその準備の時なのだ。下へ深く根をはるやうに。

和子は輝かしい希望を見出して子供と一緒に寢具の中に入つた。

『チン／＼／＼』三時はほどなく告げられた。

曉の霧

電話交換手　白井澄子

壁一重隔てた交換室からは險しいナイトベルの音に交つて美子の聲がきこえ、時折市内の方であらう癇高い聲も交つて朝のしづけさを破る。

S市の大通公園に面した石造二階の一隅にある交換局の、休憩室娯樂室食堂寢室を兼ねた四十疊敷程の部屋には、交換室につゞく一坪の草履ぬぎ場の外は、白とは名のみ垢によごれた薄い布團にくるまつて、二十幾人の若き女性が靜かな夢を結んでゐる。

壁近くに寢てゐた縫子は癇高い聲にふと目を覺した。誰か明けたのであらう、すぐ側にある窓は半ば開かれ十月の霧を含んだ冷たい空氣がまた明けやらぬ紫色の窓からスースーと吹き入る。縫子は本能的に時計を見た。五時過ぎ。縫子は半ば身を起し隣にねてゐる靜子の顏をそつとのぞき込んだ。微かに笑んだ顏は凄いまでに美しく呼吸は少しも亂れて居なかつた。半ば解かれた髮は靜かに頰をなでてゐる。調つた鼻、つぶらな瞳、小さな紅い唇、總ては縫子に取つてなつかしいものであつた。

縫子はそつと身を引き寢着のまゝ、布團よりぬけ出して窓によつた。霧を含んだ冷たい空氣は心地よく肌をなぶる。公園には今を盛りとサルビヤが眞赤な花びらをこの朝ぎりの中にもはつきりと見せ乍ら何處までも列を造つて續いてゐる。エルムの老木。アカシヤの並木もすつかり紅葉し殊に獨立敎會の赤煉瓦をからんだ蔦かづらは、青黑い屋根との調和を美しく見せた。曉の光りはエルムの葉をかすめて上りはじめた。何といふ美しい景色だらう。

ぢつとみつめてゐる縫子の瞳からは喜びとも悲しみともつかぬ熱い涙が長いまづげをあふれ頰を傳うて下におちた。

「再びかうしてこの窓から自分はこの景色をながめることは出來ない。この局舍とも今日限りだ」始めて知る別れの淋しさは只涙となつて頰を傳ふばかりであつた。

「馬鹿あれ程喜んでゐたくせに。」ぢつと唇をかんでみたが涙は少しも止まらなかつた。

曉の色は段々濃くなつて來た。

「又泣いてるのね、昨日あれ程約束したのに。」

いつか靜子が後に來てゐた。

「地下室に行きませう誰かに見られたら惡いから」二人は無言のまゝで地下室に下りた。

晝尙ほ暗いこの部屋は彼の女等の洗面室に當てられてゐた。十燭の電燈が只一つ高い天井につるされてゐる。隅の長椅子に腰かけた縫子は何時か泣き止んでゐた。電燈の鈍い光りが涙のあとを淋しく照してる。

幼なくして父を失つた彼の女は何等蓄へとてない母のため弟妹たちのために高等小學を卒へると直ぐ母の手元を幾分でも樂にすべく交換手に志望したのであつた。十五の春から十八の秋まで、日給四十錢から七十五錢の今日まで忍從的な生活はつゞいた。一度交換局の門をくゞるとそこには只監督の命令があるばかりである。如何なることも監督の命令は守らなければならなかつた。オールドミスの監督は隨分彼の女等を虐めた。コードの持ち方が惡いの、應答の仕方が遲いの、受話機の掛方が惡いの、切斷の仕方が惡いの、應答遲延、切斷遲延等々の事故は遠慮もなく成績簿に記されその度に部長は彼の女等に大惡事でもした樣に告ぐるのであつた。

餘り大きくなかつた縫子は遠い所をつなぐ時、忙がしい時は隨分

氣をつけてゐても矢張り命令通りには出來なかつたし、加入者の中には交換手泣かせも少くはなかつた。

　應答の仕樣がおそかつた爲め加入者より申告された時、主事の前に呼出され叱られた事も縫子には再三な事であつた。その度に縫子は主事のいやに出つぱつたのどぼとけの側の赤黒い小さなあざを見つめ、心ではクックックと笑ひ乍ら、これから氣をつけますとわびるのであつた。

　この若い主事に戀してゐた女監督があつたがこの女監督は主事の事を若樣若樣と呼んでゐた。縫子は心の中で「男のくせに、おべつかでいやに靑白い、營養不良で女の樣な奴が若樣か。」と輕蔑しながら色々な送物をする女監督が哀れでならなかつた。

　こゝに務める人の半數は六年を卒業したばかりで家のために働かなければならない人達であつた。十年に餘る生活を三十幾圓かの俸給につながれ、少しの不滿もなく、八時間乃至十二時間以上の勤務に從つてゐるのである。かうした人の底意地の惡い事は一通りではない。

　小學敎員をしてゐる從姉にすゝめられて、尋正を受けた彼女のパスしたのは春のことであつたが、別に敎員をして見ようとも思はなかつたのでそのまゝになつてゐた。所が今度從姉が結婚する事になり、學校を止すについて、縫子を後任として推薦してくれたのであつた。

「局なんかより小さい生徒の中に生活するの方が面白いわ若し縫ちやんさへよかつたらやつて見てはどう」從姉がすゝめてくれた時彼の女は泣き度い程うれしかつた。俸給の差もあつたが、受話機や送話機を取り去り得ることがこの上なく彼の女を喜ばせた。

　可成自信はあつたが初めての事ではあり、不安の中にも、母校であるのを唯一の賴みに承知してしまつた。忙がしい就任を前に勤務の都合で今日まで務めてゐたのであつた。

「縫さんが行つて仕舞ふと私ほんとに淋しいんだが仕方がないわ、縫さんのためだもの、それに私ね春になつたらKと結婚する事になつたの。卒業してからと思つたんですが、Kのお父さんが大變惡いんですつて、それで私の方も急いでゐるらしいの。」

　靜子はつぶらな瞳から涙をほろ／＼とこぼし、じつと縫子の顏を見守り乍ら暗い地下室で語るのであつた。あの美しい瞳が幾度縫子のために涙を流してくれた事であらう、赤い唇は幾度なぐさめの言葉をかけてくれた事であらう。あのふつくらした美しい手は。未だ乾き切らぬ縫子の瞳からは泉の樣に涙があふれ出た「貴女の幸福を祈るわ。」「私もよ」二人は抱き合つて暗い地下室で泣いた。時も處も忘れて。

　人のけはひに二人は立ち上つた。入口のドアが開いて現業服を着た白い顏が内をのぞき込んだ。「まあこんな處に居たの。さつきから隨分さがしたのよ。七時すぎてゐるのに、早く來て場所につかなきや急がしくて駄目ぢやないの」

　意地惡な監督はバタンとドアーをしめて行つてしまつた。

「それぢや行きませう。」「えゝ」さつき下りた階段を無言のまゝで二人は交換室へと登つて行つた。

好きでやる踊師匠

をどり師匠　若柳吉登代

私は生れつき踊りが好きで、六つの年からお稽古を始めました。十六の年までつゞけましたが、女學校へ入つて學科が段々むづかしくなつたので、やめました。父の考へでは、これからの人間は女でも一ぱし何か職業を持つだけの力をつけておかなければいざといふ時困ると云ふので、私はお茶の水高等女學校からすぐそのまゝ高等師範部へ入る豫定でした。處が私にはどうも高等師範なんて云ふのは性質に合ひませんので、上野の音樂學校へ入ることになりました。音樂の敎師にでもなれば、食べるには困らないつもりだつたのです。けれど學校を出ると、何もすぐ敎師になる必要もなかつたのでそれから奥さん仕事のお稽古だの、子供を育てる眞似ごとだのして幾年か經ちました。その間は至極無事でしたが、家庭に不幸が起つて、私は數人の子供と共に空手で世間へ投げ出されてしまつたのでした。この時、私が女學校に入つて踊を止めると同時に始めた畫の先生(野口小瀕女史)が頻りに畫をやれとすゝめて下さいましたが、私はどうも畫も好きですが踊りの方が倘いいと思つたのです。それで坪内先生に御相談に上ると、『それはいいだらう。ぜひおやりなさい。』といふことで、それから名を取らなければならなくなつたわけです。先生が誰を師匠にして名を貰つたらいいかと考へて下さつた結果、私が子供の頃二年ばかり敎はつたことのある花柳德二郎さんのお父さんがいいといふことになりました。そこで二十年目位で再び弟子入りして、何しろその頃芋の尻つぼをかぢるやうな生活狀態だつた私は、迚も二年も三年も稽古してやつと名取りになるなんて余猶はないので、すぐ名前を下さいつて賴んでみたんです。すると花柳さんは、前はすぐ名前をやつたこともあつたが、名前をやつてしまふと、それきり來なくなつたり、いろ〳〵不都合なことがあるので、今は、三年も稽古をしなければ、名前をやらないことになつてゐると言ふのです。三年どころか三月もまだるつこいと思ふ私はそこでまたいろ〳〵と智慧を絞つた揚句、若柳壽童に賴み込んだのです。この人は私が前に踊つたのを見たことがあるといふので、『貴女ならば』といふのですぐ名前をくれました。この時程嬉しかつたことは、後にも前にもあんまりありませんね。私はこの師匠には心からありがたく思つてゐます。かうして私は三十六歲から再た好きな踊を踊り出したのです。その翌年には師匠の代稽古で大阪の堀江の遊廓に行きました。それから數年たつてから再びこの堀江の演舞場の主任として私が行くやうになり、今も倘、月の半ばはあちらにまゐります。私の稽古は關西は花柳界が主で、東京は家庭のお孃さん方が主です。花柳界の人達が稽古に熱心なのは勿論ですが、家庭のお稽古でも、親が好きなために、無理に子供に稽古させるといふのではなく、子供さん達が自分から好きで稽古するといふので、皆熱心で愉快です。從つて勞が少くて效果が多い道理です。ですから商賣が辛らいと思ふ處ではなく、私にはまことに嬉しいのです。

併しこの商賣は、呑氣な性分でなければ出來ません。體が丈夫でなければならないことも勿論です。併し好きなことをやつてゐれば體は自然に丈夫になります。私なんか好きだもんですから體もこの通り大夫で、踊を大恩人と思つてゐます。また立派な博士がくつつ

いてゐてくれるやうな心强さをも感じます。

大阪には年中行事に、春の踊と、秋の温習會があつて、堀江の春の踊は木の花踊といふのです。これは年々そこの演舞場の主任が振付をすることになつてゐて、私は大正十三年の春は始めてこの振付をしてみました。始めは樣子が分らなくて隨分冷汗をかいたものです。けれど、踊の型は大抵きまつたものなので、少しなれゝば大したことではありません。踊をみせるといふより寧ろ目先を變へるといふ方が大切なのです。

私は前にも言つた通り、經驗は淺いし、生へぬきの踊の師匠ではないしするので、人にきくことも、師匠に就て話をきくといふことも稀ですから、見ること、聞くこと、讀むことが勉强なのです。活動寫眞はよく見ます。殊に西洋物を選んでみます。形の上の變化を見たいためです。音樂をきくより、活動寫眞の方が利益が多さうです。ダンスも見ます。ダンスは日本在來の踊にはすぐそのまゝ取入れるわけには行きませんが、踊の構成上の研究には迚も役立つて面白いものです。日本の踊は勿論いつでもいいものは見に行きます。役者の踊上手の中では、一番六代目が好きです。併し六代目の踊をそのまゝ眞似てみたところで、あの通りいい踊が踊れるわけではなし、それに舞臺上の踊と、普通の部屋で踊る踊とは大變ちがひますから、私なんか、いつも六代目をみると『あゝいいなあ！』と醉つてしまふばかりです。

月の半ばを東京で、後半を大阪で暮らす私の生活は忙しい。時々暇があつて好きな踊が早くみられるやうになりたいなあと思ひますが、忙しくつても、生活に張りがあるのと、もひとつは自分の藝が少しでも上達するかといふ樂しみがあるのとで、まあ長靴をはいたやうな生活をつづけてゐるわけです。

舞踊の趣味が盛んですから好きでさへあれば、踊の師匠といふ仕事は婦人の職業としていいものと思ひます。

神經質な敎へ子

大谷藤子

無感興な疲れきつた眼を、かの女は先程から本の上に潑いでゐた。無意識に、ページは幾度かめくられた。

痩せた神經質さうなかの女の敎へ子は、唄ふやうにスラ〳〵と長いことを讀み續けてゐるのであつた。かれは多分、この家庭敎師の前では他の誰の前でよりも、自由な伸び〳〵した心になれるのであらう。

かれは最初、それは一年あまり前のことであつたが、暫らくは、かの女を怖れて何時もおど〳〵と落ちつかなかつた。そして少しでも間違つたり忘れたりしたことがあると、この上もなく恐ろしいことにでも出逢つたかの如く激しく狼狽して、直ぐに眞赤になつて身を小さくするのであつた。そんな時、かれは全くどぎまぎして、かの女のどんな優しい言葉も、どんな親切な訂正も、決して正しく聞くことが出來なかつた。かれは身を縮めたまゝ、なす術を知らないのであつた。

かの女も亦、さうしたかれを見出す度に、自分がかれに對して何か罪をでも犯してゐるかのやうな重苦しい憂鬱に、屢々耐へがたく

なるのであつた。そして、かの女は不自然なほどの愛撫をもつてかれに接することによつて、かの女自身の重苦しさを救ひ、それから彼の心を自由に自然に解きほごさせて行かうとした。

間もなく彼は、かの女が決して怖い先生ではないことを呑みこんで了つた。かれの心の一方で、まだ遠慮と固苦しさが脱けきらないでゐるうちに、一方では我が儘と悪戯と其の他あらゆる子供らしい彼の性情が、露骨にかの女の前へ次第に平氣でむき出されるやうになつた。かれは、かの女が父よりも母よりも嚴格でないと思ひこむやうになつて來た。かれは、もはやかの女の前で以前のやうに魔胡ついて火のやうに眞赤になつたり、おど／＼と泣き出しさうな顏をしたりするかれではなくなつた。

かれは勉強の厭な時は、かの女の姿を見るとソッと家を脱け出して遊びに行つたり、病氣だと噓を吐いて怠けることを覺えた。

そんな時、かの女は默つて靜かに玄關から引き返すのであつた。

かの女は、かれに對して何事も云はなかつた。かれを不自然なほど愛撫することに、些の變化だも見せなかつた。かれの其の小さな心があり／＼と動き變り行くのを感じつゝ、併しかの女は靜かに以前のまゝのかの女であつた。

かの女は、かれが自分に對して、切角、自由な氣持を持つやうになつたのを破らうとは思はないのであつた。それは自由と云ふよりは、寧ろ、我がまゝと名づくべき彼の態度かも知れなかつた。併し、かの女は彼に嚴格な先生と思ひこまれて、絶えず恐る／＼小さな心一杯に困惑しつづけてゐる彼を見るよりは、そしてかの女自身までが其の前で得體の知れない憂欝に心を暗くするよりは、かれが思ひのまゝを勝手に振るまつて呉れる方が倘遙かに安易さであるやうに思ふのであつた。そしてかの女は、かれが嘗つてかの女の前で、小さな心にあらゆる注意深い要心を遠慮とを忘れなかつた頃、かの女自身も亦、さま／″＼な心遣ひをもつて、かれの要心が不必要であり徒らな心の浪費であることを悟らせるために心を碎いた頃と同じ意味で、かれの現在の一切に決して自分が批判がましい氣持は持つてゐないこと、只、自分にあるのは彼のすべてを受入れる親しさと愛だけであることを、かれの心にシッカリと信じきらせ疑はせまいとするために、嘗つての如く、倘、心を碎き寧ろ彼の機嫌をとつてゐるかのやうなかの女自身を見出すのであつた。

かの女は、かれに對して只一言のことを尋ねるのにも心を使つた。かれの悪戯に、かれの氣儘に無關心であることを、かれに思ひこませるために、かの女は考へるのであつた。

かの女は、極めて自然な氣持をもつて、それらの感情に從つた。とは云へ、これは決して芳ばしい結果を持つものではなかつた。かれは何時か、かの女は困らせることに興味をさへ感じだしたかのやうに、かの女の言葉には些も耳を傾けない彼となつてゐた。

かの女は、次第に彼を怖れるやうになつて來た。かれと向ひ合つた時、かの女には意味の知れない苦痛が感じられた。

今は、かの女にとつて彼を敎へることは、新たな意味で重苦しい憂欝なのであつた。

次第に、かれの勉強は好結果を持たなくなつた。

かの女は、自分の知つてゐる何事をも、かれに分ち傳へることの出來ないやうな自分を感じた。それは或時は、力ない空虚そのもののゝやうに泌々と顧られるのであつた。それは又、ある時は限りない焦燥と苛立ちとなつてかの女の心を混亂させるのであつた。

かの女は、本から目を放して、かれの方をチラとぬすみ見た。
痩せてはゐるけれど、何處となくガッシリとした兩肩を心持ち張つて、かれは卓の上に半ば身を乘り出してゐた。
かの女は不思議な彼の姿を始めて見出したやうに、今度は、しげしげと彼を凝視した。
かの女と語り、かの女の前で惡ふざけをしたりする時は、其のどこにも子供らしさの溢れてゐるかれであるのに、かうして眞面目でゐる時のかれは、もはや子供らしさから漸く脱け出やうとしてゐるかのやうな姿を感じさせた。
かの女は、微かな驚きに打たれた。
かれは、もう嘗つてかの女が始めて其の前に立つた時の、一年あまり前のかれではないのかも知れなかつた。それは、當然すぎることなのであらう。
成長なのだ。……かの女は、さう心で呟やきながら、何とはなく微笑んだ。
そこには不思議な新鮮さがあつた。かれの我儘も無邪氣さも、漸く長い習慣が引きづつてゐる尾のやうになつて了ふ時が來やうとしてゐるのかも知れなかつた。
突然、かの女は或ることを思起した。
「この子が、あの人に可愛がられてゐるのだつた」
かの女は嘆息した。「あの魔性女に……」
最近のことであつた。
かれが一人の女に手を引かれて、ある小さな横町を小走りに歩いて行く後姿を、かの女はふと見かけたことがあつた。その女が、近所の曖昧屋など〻結びあつて或る怪しげな生活をしてゐると云ふ、町内でも評判の女であることを、かの女は一目で知つた。
それから彼が、其の女の住所である小意氣な造りの家へ馴れきつた足どりで、出入りしてゐる姿を、かの女は屢々見かけたのであつた。
かれが其の女に買つて貰つたと云ふ學校用品や、運動具などを嬉しさうに彼女に見せたことも度々であつた。
かれは何時か、其の女や周圍の人たちの使ふ甘つたるい粗雜な言葉を、馴れない口調で自分の言葉の中へ挾んでは眞似て得意がつたりするやうになつた。そして、それは最近、殊更ひどくなつてゐた。
併しそれは、かの女に特別な感じを與へるものではなかつた。只、かれに對する一時的の影響を恐れたのみで、それとても注意すれば直ぐにも阻止されるものと思つてゐた。
子供らしい彼に、どれほどの考へがあるだらう！ かの女は、さう思つた。
併し今、かの女は恐れた。
意味の知れない不安さが、不思議な强靭さをもつて、かの女の心を暗く閉ざした。
「あの女に愛されて、それからどうなるのだらう？」
かれの心の底までが、その微妙な隅々までが、耐へがたくかの女には氣がかりになつて來た。
かれは無邪氣である。けれど それが永久に續くものと、どうして云はれやう！
かれから無邪氣さを、子供らしさを奪ひ去つて、かれが今まで夢にも知らなかつた世界へ導き入れやうとするのは何ものであらう。

かれは、何も知らずに導かれて行くだらう。
誰も彼も、さうして成長して行くのだ。そして悔と哀しみを知るやうになるのだ。それから‥‥それから終つて行くばかりだ。
「けれど――」
と、かの女は考へ續けるのであつた。
子供らしい彼を、どんな世界へ誘ひこまうとしてゐるのか。
美くしいものゝ手に導かれてさへ、人は美くしくのみはあり得ないものだ‥‥。
「あの有名な魔性女に、純な心の鍵を摑ませたら、どんなことになるだらう？」
かの女は、再び嘆息した。
今、かれの心を最も支配してゐるのは、あの女であらう。――かの女は、さう心で呟やきながら、思はず頭を打ち張つた。
父も母も、かれに力を感じさせるには、あまりに馴れきつた存在なのだ。血や肉のやうに‥‥それは重大なものでありながら、離別が來ない中は其の重大さに氣づかないほど馴れきつた存在なのだ。けれど、あの女は彼にとつて珍らしい。その一事が、かれを支配する。
あの女の跡を、かれが無意識に辿つて行かないと、どうして云はれやう。
「では、自分はそれに就いて、どうしやうと云ふのか――」
かの女の心は、直ぐには何とも答へることが出來なかつた。
かの女は長い間、哀しげに彼の方を凝つと見てゐた。
突然、かれは讀みかけてゐた本から何氣なく眼を上げて、かの女を見た。そして二人の視線がパッタリ合ふと、かれは何故か、何時になく狼狽して、慌てゝ目を伏せると颯つと火のやうに赤くなつた。
が、それも束の間であつた。
かれは瞬間、卓の上の本を勢よくパッとかの女に投げつけた。そして素早く扉を明けると、走猿のやうにヨロ〳〵と廊下へ飛び出して了つた。
かの女は驚いて思はず立上つたが、其の時は扉が荒々しくバタンと閉まつた時だつた。
かの女は、かれを呼び留めやうとはしなかつた。いつも、さうしたことが結局、徒勞に終つたことに馴れきつてゐるのであつた。
かの女は靜かに、其邊を片づけると、そのまゝ玄關の方へ出た。
誰にも逢はなかつた。廣い邸内は森と靜まりかへつてゐた。かの女は逃れるやうに門の外へ出て何となく吻つとした。


若柳吉登代氏

アヤ子

行き倒れの女

碧静江

それは身の毛のよだつ景色でした
腐爛したおりものは倒れた女の股間を這ひ出て
ベットリと裾をよごしてをりました

神様
女が死にました
時代に劍を抜き放つた女
女は食へないから賣淫をした
永いこと　お客の肩骨にしがみついては
　憤怒を心臓へとめり込ませてゐたが
絶えまない獸的な作業の下で
膨れ上つた唇が
やつつけられた階級を背負つて山蛭のやうにはだかつた
明晰な意圖で賣淫した女の五體をかき摧つて

數知れぬ男が金で買つた恍惚の嵐に身を顫つたに違ひない
散々に食ひ荒された殘りを啜り合つて
お互ひの生身へ寂寥の熱氣を叩き込んで痛んだ

だが　再び女には愛も恍惚も慰安も來ない
再び！　再び！　再び！　再び！

骸骨の山におつぼり出された碎けつちよろの
女の形と及先きをからんだ鎖の微笑

——兄さん
最後の日　そろそろと兄に押されてやつて來た
キヨロキヨロと眼を据へた男は
支へて居た妹の身體がガツクリと落ちると道路に倒して飛び退いた
——兄さん
毒と病に腰骨まで腐りかけた瀕死の妹と
慘ましい相談をして行つた淫賣婦の家族は
夕暮れの人垣の中で除々に解體する「行きだふれ」の「見せもの」の向ふを
背を裂いて馳けぬけた
——兄さん

みちづれ

ヴィクトオル・マルゲリット
望月百合子 譯



第一章——四

『やあ、よくいらつしやいました』とピエール・ルポオは言つた。

事務机の中央に立つて、彼はその濕つぽい手で、まだ熱つぽいアニックの手を握りしめ、いたわるやうに撫でた。ロンシャールの家で會食をして來た彼は、やゝ赤味がかつた顏をしてゐた。名代の料理だが、重たい！アニックを見て彼はやつと元氣を取戻した。而もほんのりとした醉心地で。

『悉皆よくお成ですか？髮が變つて、大變よくお似合ですよ』

數日間の就寢と、頭を繃帶して部屋にとぢこもつてゐたことで彼女の震盪と傷は完全に癒つた。只額の生え際に赤い傷跡が殘つてゐるだけ……彼女はそれをロープと同じ色のリボンでかくしてゐた。

彼は、すらりとして健やかな彼女に見惚れた。二度、見舞のために彼女のアトリエを訪れた彼は、常着のしつくりと體についた柔らかな線で現はされた彼女の肉體の、忘れ得ぬ記憶を持ち歸つたのであつた、欲望の焰は通じ易い。そして彼女自身もその羞らひと混り合つたある快感を感じたのであつた。……最初の時はポオルとブルウサ夫人がゐたし、二度目にはマドモアゼル・アルディとアメデエ・ジャクマンがゐたので、何も仄めかすことは出來なかつた。彼は柔らかな房々とした黃金髮の卷毛をつまみ上げた。

『すぐこれも消えるでせう！』

『傷跡ですか、……えゝ……だけど決して忘れはしません』

苦々しい力のこもつた調子が彼をびつくりさせた。畏てゐる彼女を見るまでは、彼は彼女を共働者以外のものとして見ようとはしなかつた。即ち彼女は俸給を貰ふ部下で、而もその地位よりもづつと餘計に、彼の極度の理智や性格全體が、彼女を遠くに庇護してゐたのであつた。ルボオは、己惚れからあらゆるものに優越の影を持つ平凡人間の一人であつた。殊に女性に對してさうであつた。

彼女は、アニックに危險を感じて、その危險を制限することを知つてゐた。だから不本意ながら、彼はこの祕書に對しては、あまり露骨な媚を愼んでゐたのであつた。この愼しみを、自分自身の感情に騙されたアニックは、確かな愛情からの敬意だと思つた。ピエールはいつも彼女を欲しいと思つてゐたが、彼女には少しもそんなことは疑へなかつたのだ!かうして、屢々相異する意見に對する鬪爭性の要求と、同時に、優しい性質の反動(彼女が最初感謝してゐた態度に飽きて)とで、少しづゝ、役割が顚倒して來た……彼女は彼を征服し、獲得しようと思ふやうになつた。

只——尊敬せずに愛することとの出來ない彼女には——ルルダルの事件に次いで速かに、メレットの話から惹起された心配を解かねばならなかつた……

彼女は彼がびつくりする程嚴かな樣子をしてゐた。

『何んの恨みです!だつて、貴女を打たうとしたのぢやないぢやありませんか……』

『だからつてよくはありません』

『だから私もあの馬鹿者を批難したんですよ。彼が惡いのは勿論です。だが最强者の法律は社會の意志ではありませんからね。その通用にはより多くの才智が必要なのです』

『私は力をお籍りしたいのではありませんわ。私は……』

彼は自分のしたいと思つてゐたことを早く切り出したいので、彼女の言葉を遮ぎつた。彼等は政治を論議するためにここにゐたのではない。

『お默りなさい、可愛い憤慨屋さん。そして貴女のことを、貴女の計劃に就て貴女の內的生活に就て、話して下さい……』

彼は彼女の怒つた顏と輝やいた眼とをからかつた。彼はまた彼女の手を執つて、いつもとは異つた妙な樣子で、皮の深々とする長椅子の方に引張つて行つた。彼女は引張られる儘になり乍ら言つた。

『私には計劃なんかありません……併し貴方は?ルルダル夫人はどうなさいました?もう長いことお會ひにならない?』

彼は闖入者を拂ひ退けるかのやうに激しい身振りをした。

『いいえ……それが貴女に何の關係があるんです?』

彼等の心は各々に高潮して來た。そしてある隔たりを置いて、互に相手の心を讀まふとしてゐた。彼は噓を言ふ方が都合がいいと思つた。そして後になつても古い情婦を何彼と使ふことが出來るために表面は何んでもないことにした。

『御承知の通りシモンヌは私にとつて、あの女の夫に對すると同樣、友達であるに過ぎないんですよ…もうずつと以前から、それは誓つて！友達？それでさへもない！仕事仲間…』

彼は嘲けつて見せた。

『仕事仲間の婆さん！』

彼女は疑り深い眼でぢつと彼をみつめた。彼は證據立てるやうに言つた。

『貴女とシモンヌでは！　あの皺と、あの脂肥りと…だがあの女はそんなこと何んとも思つてやしないんですよ！　ねえ、私には新らしい…もつと熱情的な、もつと若々しい感情が必要なんです……あゝ！　若し貴女が……(そして彼女が身を防いだので…)貴女を抱かして下さい！　どんなに樂しいか！　私は澤山お話があるんです…』

彼女は彼の心の底を察した。そして息づまるやうな熱を感じた。併しローザの幻が(この同じ腕に不意に抱かれた彼女の前に)非常な强さで現はれた。彼女は彼の腕から逃れようとした。

『どうしました？　氣を惡くなさつたの？　……私は私を愛してくれる心を欲しいのです、貴女の心のやうに純な心を…』

アニックは大膽な手で摑まれてゐる體をもがいた。彼は喘ぐやうに言つた。

『愛し合ひませう、生命は短い！』

彼女は激しい勢で彼の手を離れた。

『いいえ。放つといて下さい…仕事をしませう』

彼はぶり〲して卓子に歸つた。そして投げつけるやうな調子で言つた。

『御勝手に！…貴女には何んでもないでせう…これは、多分……(彼は倚子に腰かけて、一ッの訴訟記錄を差出した)墮胎女ジャラヴァの事件です…少しばかり記錄をとつて置きましたから、讀み返して、タイプライタアで打つて下さい…いい記事になります』

彼女は默つてお辭儀をすると、窓際の自分の席に就いた。そして直ちにタイプライタアの蓋ひをとり、紙を整へて仕事にかかつた。神經質な指が敏捷に動く…幻がふと婆の手を休ませた。

命令的な聲が訊ねた。

『何かいけない處がありますか？』

今まで彼女がその男性的なアクセントを愛し來たやゝ嗄がれた聲、そしてローザの愼ましい耳に、同じ唄を囁やいた聲！…ありふれた句々の中にも假裝の抑揚を見出し、「放蕩及び不倫なるこれ等の母達に對して…』の中にも雄辯術の侵入を見出す、喜劇役者の聲だ。僞りの道德、彼女はその不調和から、愚弄的な假面を見分けたと思つた。

彼女は卒直に言はふとした。同時に、彼女が知つてゐると信じてゐた平常の顏が、假面で、眞のピエールは博愛主義の假裝をした卑

しい男ではないかといふ恐れが不意に彼女を激させた。
『貴方は私を本當にばかだとお思ひになるでせうけれど、このジャラヴァは、豫審判事の報告では、證據不十分で、母親にだけ罪を負はせて免訴にしようとしてゐます。問題になつてゐる墮胎では、産婆は、確かに忌はしい藥を賣り、墮胎をすゝめた人間ですけれど……』
彼女は眞面に彼をみつめて待つた。彼は要心深く言つた。
『けれど？』
『父親に比らべれば大して惡くはありません。何故なら、自分の子供を認知することを拒むやうな情ない人間は……』
彼は急所を刺されて、びくりと眉根を寄せた。勿論夢にも彼女が彼の厄介な事件を……あの小間使とそれからの出來事を知つてゐるとは思はなかつたけれど。それだから狡猾に、こつてりとした皮肉を言つた。
『私はいつも確實なのは母性だけだと言ふことを聞いてゐるが』
彼女は彼が祕してゐるあらゆるものに、その嘲弄的反對に、びつくりしてぢつと彼の顏をみつめた。
『とにかく貴貴はアッペル紙上で度々その反對のことを仰有いました』
『考へること、そして書くこと！　それや選擧目錄みたいなもんですよ』
『私は貴方を懷疑的な方だと思つてゐました。けれどこの點ではさうではありませんね』
彼は彼女の卒直さが危險に思つた。
『よし！　ぢや議論しませう。子供を認知するには尙確かに……』
『あら！　若し豫審がこゝでそれだけの努力をすれば、父親に對してそれ位の推定は……』
彼はすぐローザがうるさくつきまとつた最後の試みや歎願を思つた。そして激しい聲で、きつい眼をして言つた。
『吾々はいま墮胎事件に直面してゐるんです。それが問題だ！幸ひと父親の探索は法律には關係がない！……それに一體どうして父親の探索をしますか……醫者といふ醫者は、血統の連續といふ漠然とした證據が信じられなくなつてゐることを言ふでせう。たとへば指紋のやうな、或は骨格の類似とか――まあ、どつかの嬰兒に就て檢べて御覽なさい！――だが、貴女は法律を勉强されたのに！……『これが、法律上の結婚が指定する處の父である』……と云ふ言葉の通り、結婚以外には、許された父はないのです。――何故なら認知さるべき父親も、推定さるべき父親もないからです……（彼は笑つて、そしてきつぱりと）……認められ得るのは子供、子供だけです！この信條には尙、自認ばかりでなく、責任者の輕信が必要なのです！……』
彼女は仕事を止めてきいてゐた。彼はつゞける。
『誘惑に對する法律を作つたらどうです？……猥行罪の法律は惡い

ものだから、それやいいでせうさ‥‥貴女は實生活の代りに十分クラシックを御存知でせう。ふん！ラブレエからフォンテエンヌまで、そして針が一寸動いただけでもその穴にどんなに硬い糸をも通せないつてことを知るんでさ‥‥そこで？』

彼の顔は不意に赤くなつた。幻影の仄めきと同時に、アニックがこの亂暴な話から受けた動揺の色を見たので。彼が打算的愼しみを放棄して話したのは始めてゞあつた。思ひがけない抱擁の幻や‥‥この同じ誘惑的長倚子の上に、淫らにむき出された肉體の白さや‥‥あらゆる女に對する輕蔑や、同時に、彼女に對する惱ましい慾望が――かうしたものの凡てが彼の頭に熱風のやうに燃え立つた。

彼は一切の愼しみも、良心も失つて、双手を擴げて、慾望に向つて突進した。彼の前には、最上の餌食がある。マアルが岩室の奥に持つてゐた白い獸が。彼女は呆氣にとられて彼を見てゐた。

『どうすることも出來ない力だ！　私は貴女を欲しい！‥‥もう二年も貴女を欲しがつて來たのに‥‥私には言ひ出せなかつたのだ‥‥‥今日は、貴女が寢てゐられるのをみてからは‥‥』

『何んですつて？』

彼女は立ち上つた。そして、生命の底まで同意して彼にやつてしまはふとするか、恐ろしさの餘り彼を突きのけたり、ひつかいたりするかさへ分らない程顚倒してしまつてゐた。彼は彼女の頭を押えて、唇を探した。彼は狂人のやうに切れ〲な言葉で言つた。

『アニック、可愛いアニック‥‥唇を、體をおくれ‥‥お前は私の快樂だ！』

やさしさには自ら投じようとしてゐる彼女も、暴力には激しく反抗した。彼は彼女を抱きしめた。けれど彼女は顔をそむけて、貪慾な接吻を拒んだ。そして思ひがけない力で起ち上つた。彼女はもう彼女の胸のあたりを探つてゐる手を拂ひのけ、毛深い手首をひどくねぢつた。彼は酒の醉がさめる時のやうに、どんよりと覺醒るやうに見えた。彼女は憎惡に滿ちた嘲罵を浴せかけた。

『亂暴者！　亂暴者！‥‥お放しなさい！　厭な男だ』

一瞬にして、信じ切つてゐた幻の人格が崩れてしまつた。そこには敵對する二つの意志、主人と奴隷の永遠の對立より他なくなつた。彼女は自由になつて、性的激情に熱中したこのあらゆる時代の憎むべき暴君をみつめた。無理に强ひるなんて、全く奇怪な、不正なプリアプだ。

これが、人間か知ら？　否、狩獵場の猿だ‥‥太古の森林の奥の人間の祖先だ！‥‥彼女はもう彼を恐れなかつた。けれども、彼女は文明人としての誇に威脅されて、再び火ともされたこの原始本能に全身を震はせた‥‥これが彼女を助けた主人、彼女の好きであつた人間であつたか？　彼女は、いま長倚子の上に、ぼんやり倒れこんでゐる、襤褸切れのやうな體の中に、何にもさうしたものを見出せないのに、我れながら驚ろいた。侮辱され盡したピエール・ルボオ

はどう身をつくろつていゝかを知らなかつた。

　彼女は自分の卓子に就いて書類を整理した。一分間もすると鼾聲が聞えて來た。彼女はこんな絲の外れたあやつり人形のやうな男を愛さうとした自分に呆れて眺めた。整理が濟むと彼女は一通の手紙を書いた。それは彼が他の祕書を求めるといふ手紙だ！‥‥それがすむと立ち上つて帽子をかむつた。物音で眠つてゐた男は當惑氣に眼を開いた。

『何をしてゐるんです？』

『私は出かけます』

『こゝにゐらつしやい、でなけれや、決して許しやしませんぞ！』

『仕方がありませんわ、どうなさらうと仰有るの？　私はローザではありませんからね‥‥』

と彼女は嘲けつた。

『分らん！』

　どうやら非難らしいので、彼の濁つた眼は動搖した。

『ローザ？　それは一體何の話です！‥‥‥』

『もうお忘れになつたんですか？』

『分らん、私には』

　彼は敵意を籠てぢつと顏を上げた。彼女は簡單に言つた。

『イヴリンに手紙をお出しなさい‥‥モルヴァル家の小間使だつたローザ・ブランシャールさんに‥‥あの女が貴方の御記憶を新らしくするでせう‥‥さよなら』

『ローザ・ブランシャール？』

　彼はこの名前を始めて聞くやうな振りをした。彼女はふり返つて言つた。

『あの女はついでに貴方の子供の樣子も知らせてよこすでせう』

　彼は數秒間呆氣にとられてゐた。それから怒りで息づまるやうな調子外れの聲で怒鳴つた。

『貴女もか？‥‥何んといふことだ‥‥そんなことを言つちやいかん‥‥』

　後の祭りだ。無言の自由が、彼の困惑と怒りから打ち消し難く、受けとれた。アニックはいまはもうそれを確信する。ローザは嘘を言つたのではなかつた‥‥彼女は輕蔑の力でやうやく自分を抑制しながら閾の上に立つてゐた。開かれた扉の後に、下僕の影が映つた。彼はきゝ耳を立てた。

　世俗的風習は何よりも强かつた。ピエール・ルボオは禮儀正しく身を屈めた。アニックは平凡に

『さよなら』と言つてしまつた。

　彼女の後で、『今度こそ騷動があつたのだ！』と、玄關まで送つて來た下僕は笑ひをこらえ乍ら扉をしめた。ルボオはぶら〳〵し乍ら部屋の扉をパンとしめた‥‥

　アニックは不意に、非常な孤獨を感じて、今度こそ、涙が迸つた。

その時彼女は街に出てゐて、通行人達が、けげんさうに振返つて行くのに氣がついた。彼女は頰を拭いて考へ直した・・・・小さな悲しみと大きな教訓だ。彼女は欺されてゐた。それは彼女自身の過まちだ。經驗が彼女の未來に役立つやうに！・・・・彼女は勇敢に未來を見つめた。そこにはもつと大きな心配ばかりだ！・・・・

自動時計が三時を打つたので、彼女は五時にポオルと會ふ約束がしてあるのを思ひ出した。彼女は店にポオルを迎へに行く筈になつてゐた。彼女は時間がくるまで誰か友達と一緒にゐたかつた。その間にマドモアゼル・アルディと會ふことは出來なかつたので、彼女はクレベエル街のブルウサ夫人の處まで行くことにした。

幸ひにブルウサ夫人はゐた。アニックは彼女の敏捷な思慮と卒直な親切とを愛した。この親切のかげに、彼女の最も憐れみ深い心がある。若くして寡婦となり、熱愛してゐた一人の子供を失つたブルウサ夫人は、二十年以來、女權論に日々献身的努力をして來た。そして彼女はフランスの爲に、國際婦人評議會の書記の一人であつた。

同時に、彼女はオートイユの婦人救濟所を監理して居り、それは、彼女自身の財產に、彼女が完全な理解の下に共同生活をしてゐる友、ゼロノフ畫伯の財產が加はつてからは絕えず擴張された。彼等の間の唯一の喧嘩は、彼が彼女に結婚を要求することであつた。けれども自由の味をしつた彼女は、さうした讓歩はしなかつた。彼女は犧牲は無駄だと思つた。世間體などは猶更ら無駄だと思つた。二人共金持ちなのだから、彼等のこの安穩に、結婚が更らに何を加へただらう？

政治には獨特な革命思想を持つミッシェル・ゼロノフ公は、歐洲大戰より何年も前から、ツアのロシヤには未練もなく、その巨大な富を正金に換えてフランスに移住したのであつた。・・・・それから――到所ボルシェヴィズムに依つて占領された――國を變へて、幸福を見出したことを彼はいつも喜んで來た。

ブルウサ夫人はアニックを歡迎した。彼女はアニックの勇敢さを尊敬してゐた。併し一目見ると言つた。

『熱があるのぢやない？　どうしたの、その顏は？　・・・・それに、あれ程の打擊を受けた後、もう外出するなんて？・・・・きつと貴女の薄情な主人がそんなことをさせるんだね？』

アニックは肩をすぼめ乍ら言つた。

『全くさうですわ、若しあの人と絕交しなかつたら』

『え？　ぢや新聞の編輯長の友達ではなくつたと云ふの？・・・・もう友達ぢやないの？え〻？』

『祕書でさへもないんですよ！　私はいまルポオさんと永久にお別れして來たんです・・・・』

彼女は一切を、メレットの物語りから獸的暴行まで殘らず話した。彼女はこの年上の友から本當の慰さめを與へられるやうに思つた。そして汚れを洗ひ落すやうな氣がした。

『何んていふ男でせう！　さう云ふことは當然だつたのよ！　第一、私はあの男をいつまでもづうづうしいと思つて見てゐましたよ‥‥そのローザに心配しないやうに言つてやつて頂戴よ。幸ひに、オートイユの婦人救濟所があるんだから』

『えゝ、‥‥私、今夜マドセアゼル・アルデイに書きます‥‥‥この機會に貴女にメレットを御紹介出來たら、私はどんなに嬉しいでせう‥‥あの女は貴女の御事業に敬服してゐますのよ。そしてそれをよく知りたがつて居りますの』

『さう、私もその先生にお目にかゝるのが愉快よ‥‥私はもう貴女を通じてその女を愛してゐますよ』

貴家が靜かに、巨人のやうな步調で入つて來た。彼はその伴侶者の快活とは全く反してゐた。併し彼は——その美しい靑い眼と、白髮まぢりのブロンドの豐かな髯と、いかつい肩とは——彼女のやうに卒直と健康とを呼吸してゐた。彼はアニックとブルウサ夫人の手に接吻した。

『見てゐて御覽なさい！』とブルウサ夫人はアニックに言つた。そして彼に『ピエール・ルボオをどうお思ひになつて？』と言つた。

『惡漢さ！』

『ほら、こんな考へよ！』とブルウサ夫人は叫んだ。

ゼロノフの後ろにもう一人他の顏が現はれた。その顏はアニックを認めて、晴れやかになつた。彼は親しげに叫んだ。

『若し私が待つてゐたら！』

『お知らせすることを忘れたが、アメデエです！さつき民衆劇場の前で出會つてね、丁度そこからこの人が講演を終えて出て來たものだから。そして私はこの人にキュビストの運動の話をいやでも聞かせようと思つて引張つて來たのさ』

アメデエ・ジャクマンは眞面目に辯解した。もう少し簡單な繪の方が好きには好きだが、彼はあらゆる藝術形式が、生活に從つて、進化することを認めない程偏狹ではなかつた。寧ろ進步を避けがたい形勢として過信する傾向さへあつた。

『停滯は、死點だ。それはあらゆる派にとつて悲しむべき危險です』と彼は熱情的な聲で言ひ出した。『飛躍に依つて、革命に依つて、前進するのです。そしていかなる運動でも結局崩壞するのです。自然の不變性は最もまことしやかな逆說です。過去に結びついたある‥‥』

アニックはそれを聞いてゐるうちに、常のやうな愉快な氣持ちを取戾した。本能的に彼女は比較した。どうしてこの自由なそして愉快な人よりもあの偏狹なピエール・ルボオを選んだりしたのだらう？それはジャクマンのやゝ百姓じみた卒直さのためだらうか？　彼の魅力を殺ぐあのソクラテス風の髯の中の微笑や、やさしい眼とは反對な、何か重々しい態度のせいだらうか？　ルボオのあゝした處を見た今日は、彼女はこの善良と力との結合した人の魅力がよく見分けられた、併しその力は正しい理想を以つた力で、彼女が今襲撃さ

れ、未だ全身に恐れが殘つてゐるやうなあの横暴な力ではない。
鈍重だが執拗なゼロノフは最初の話題に歸つて訊ねた。
『一體どうしてルボオ氏が問題になつてゐるのです‥‥若し私があんまり卒直に言ひすぎたなら、アニックさんかんにんして下さい‥‥君もね』と彼はジャクマンの方に向いて言つた。『多分君も僕が言つたことを聞かれただらうから‥‥君もやはりあの男の友達だと思ふが‥‥』
『精々、關係者と言ふだけですよ。僕の母はあの男が自分のために盡力してくれたものだから、賞めちぎつてゐますけれど、御承知の通り僕の家族の考へと、僕の思想とは‥‥』
『さうです。まるで晝と夜のやうなものね』
とブルウサ夫人が言つた。
『そしてマドモアゼル・ランベエルも御承知の通り僕は決して貴女の‥‥‥御主人を賞めたことはないのです』
彼は、裁判所へのアニックの發足を助けたルボオを羨むやうな言葉を皮肉にぼかした。アニックはあらゆる點で彼の氣に入つてゐた。定つた女がない彼は、それに仕事に專心してそれまで女を欲しいとも思はなかつたが、アニックを知つてからは、時として『彼女だつたらどんなに幸福なみちづれになるらだう‥‥』と考へる事があつた。
併し彼は、彼女の自由結合の思想を知つてゐたし、また彼自身、自分の趣味に適ふやうな女に出逢はなかつたためか、結婚のことはかつて考へたことがなかつたので、『何んといふいい妻‥‥』とまでは思はなかつた。現代思潮とは反對に、彼もアニック同様 愛し合はずに結婚することが出來るとは考へなかつた。‥‥併し彼をして社會主義者たらしめた眞摯な飛躍にも係らず、生へぬきのブルジョアである彼は、獨立した女を妻として考へることは出來なかつた。少くともアニックが獨立した女であることを誇り、そのまゝ止ることを欲する點までの自由獨立は考へられなかつた。
屢々、彼等は話してゐるうちに、議論を始めた。そしていつまでも次のやうな結論で終るのであつた。『貴女は理論として平等をお認めになるんです‥‥けれど心底は！‥‥』とアニックが攻撃すると、彼はこの揶揄の下にかくされた非難をきいていら立たずにはゐられなかつた。『貴方も他の人達と同じですわ！‥‥地主ですもの！』
地主！ 彼女の暗示に基づいて、親子關係に就ての概要を以て、古い法典を全然覆へす程大膽な法律の提案を準備してゐる彼が！
彼は彼女を見た。そして『御主人』と言ふ言葉をきくとさつと赤くなつた顔をみてびつくりした。同時に、ブルウサ夫人は眼でアニックに向つた。彼女はうなづいて言つた。
『えゝえ、お話しなさいな‥‥ 貴女の御主人もジャクマンさんも私のお友達ですから、はつきりと私の‥‥（彼女はやゝ苦つぽくアメデエの言葉をそのまゝ）前の主人の性質をお知りになつてもいい客ですわ』

プルウサ夫人の話をきいた二人は、各々の性質に從つて反感を現はした。ゼロノフは笑ひ乍ら兩手を摩り合せて『いやはや、何と云ふ色魔だ！』とおどけた風に言つた。ジャクマンは、默つて顏をしかめてよくアニックが言ふ『熊のやうな風』をしてゐた。

ローザに對する誘惑と放棄とよりも、彼は一層、この亂暴者の汚らはしい欲望のために却つて新らしく女性としての風貌を加へたやうな彼女に對する無禮のために憤慨した。暴行のことを思ふと、彼の心は苦痛で引締まつた。かうして、この苦々しい話から起る消し難い幻影に依つて、彼は自分が嫉妬する程愛してゐたことを知つた。

アニックは彼が默り込んでしまつたので、びつくりして彼をみつめた。肉の快樂を知らず、まだかつてどんな不思議な流れが男女の間に流れ得るかを感じたことのない彼女は、どんな感情に、殊にどんな複雑な官覺にアメデエが捕はれてゐるか知ることが出來なかつた。またこの瞬間に、自分の心の中に、最も順調な、そしてあらゆる人間行動の中の、最も立派な行動の自然の純潔さがどんな變化を受けてゐるかも分らなかつた。

けれども彼女は、彼の苦しげな表情をみて、彼が彼女自身と同じやうに憤慨してゐることを知つた。併し彼女はその本當の原因を知ることは出來なかつた。『この人は何を考へてゐるのだらう？私が媚びて誘惑したのだと思ふだらうか？‥‥』自負心と、友情的な辯解の必要のために、――何故なら彼女は常に誰にも自分の正しさを疑はれたくないと思つてゐたから――彼女は言つた。

『若し私が、ともかくもあの人に信じさせて‥‥』

彼は非難を籠めた疑問點を打つた。

『貴女の同情を？』

彼女はあはてゝ自分を解剖してみた。ほんたうだ、彼女の心はその價値もない男に傾いてゐたではないか？‥‥彼女は同時に、アメデエの言葉と、その包まれた意味とをよく考へてみた。嘲るやうなこの言葉は何を意味するのだらうか？その答を彼女は彼の眼の中に見つけた。そしてびつくりして、感動した。

そして最後の言葉の惡感さへも、否みがたい愛情の輝やきのやうに思へた。彼女は友情に滿ちた卒直な眼をみた。そして何の不快もなく、そこに告白の苦しみと、祈願の熱情的な惱みとを見出した。彼女は默つて微笑した。心から心に、閃めきが無意識のうちに通つてしまつた。彼等の中にいかなる焰が迸り出ようとするかも知らない間に。

『ゼロを呼んで下さい！ そしてポルトを言ひつけて下さい‥‥まあ！ まあ！ 靜かにお茶でも飲みませうよ‥‥』

『でも姉が待つてゐますので』

『まあ！ まあ！ まあ！‥‥でも今度だけはお二人とも是非引止めますよ』

アニックは讓歩した。彼女にはこの親切な家で、これ等の一番親し

い友達と會つてゐることが愉快だつた。本當のところ、マドモアゼル・アルディの母のやうな愛情を他にしてはこの人々だけが彼女の眞の友達だつたので・・・・

アメデエも喜んで彼女と共に止つた。彼等は互に努めて何も言はないやうにしてゐた。そして顔を見合ふことすらも避けた。

無頓着の様子はしてゐたが、既にもう深く共鳴した彼等は、生命の陶醉に赴くまゝになつてゐた。彼等の二つの生命が唯一つに溶け合ひ、もう既に彼等が氣づかない間に、お互の生命から出た絲が一本一本、唯一つの生命を織り出しつゝあるまたとない瞬間だ。

プルウサ夫人が便利だと云つて好んで使ふ楕圓形の大形金屬盆の上には、菓子皿をかこんでグラスが並べられた。ゼロノフはピアノの前に立つて、一本の指で鍵を叩き乍ら、嗄れ聲で唄ひ出した。綿のやうな空が擴がつてゐて、微温い風が、歎息と、相寄る心とを吹いて過ぎた・・・・

畫家は唄つた。

夜か？　晝か
影は進むのか退くのか分らない・・・・
鳩は夕映の中に舞ふ・・・・
私の心は重い・・・・・・これが戀か知ら？

春の灯の下

小林富美子

こころにもあらむかぎりの媚態をつくしてや見む春の灯の下

さくらんぼ浮きたる酒のあまきよりなほこのこころ胸をとかすも

はなやかに笑みて踊れる人多しこころいつしかものを思はず

ワルツの音につれて踊れば足どりのわが心ゆくかなしきかたへ

吾が前のひとの腕などこころにもなくてはかなし今宵踊りつ

をどり場をいでゝ立ちたる停車場のこゝまで聞ゆるジャズの音あはれ

乳やめし子はあはれもよ目をとぢてなほも乳ぶさをもてあそびつゝ

みたりの子いねしづまりぬこの部屋に音をひそめて炭つぐわれは

六號閑文＝社中日記＝

二月十日　社人九人今井邦子氏宅の晩餐會に行く、出ろわ出ろわの御馳走にお腹の皮も伸び切つて、みんないい氣持になつて歌を歌ひ出す。生田花世のたよりない巡禮娘そこのけの巡禮歌に皆そゞろ哀れを催ほす。堀江かど江の佐渡おけさいつもの通りの眞面目な顔で調子の少々違つたのを歌ひ通す。濟んでから又一つ貞淑な笑顔でにこりとして「之先日憶えたんですのよ」はいい。今井邦子ポーランド語の讃美歌を歌へば令孃恥かし相に「あらいやだわお母樣又そんなもの」しかしお母樣は決してそんなものではないつもりらしい。小池みどり去年の夏大磯の松並木で歌ひ覺えた「君と別れてヤツコラヤノヤ松原行けば」を歌ふと皆すつかり好になつて我も我も「君と別れて……」で時計を見ろと十二時すぎ皆電車がなくなつたと大騒ぎ。

十二日　肉體と惡魔の試寫を三柏ビルに見に行つた。編輯室に歸つてから素川きぬ子何かぶつぶつ云つては首をひれつてゐろ。何かなつて少々變だぞと思つてゐろとやがて「君と別れて」を明瞭に歌へろと云ふ。妙に氣に入つたものだなと感心すろ、皆も大火鉢のふちで柏子を取りながら「ヤツコラヤノヤノヤノヤツコラヤノヤ」と大きな聲でやり出す。姫御前のあられもない、外を通ろ人は驚いた事だらう。

十六日　他の人は皆休み、時雨女史と小池みどりの二人片づけ病に取つかれて編輯室の大掃除、皆は女の癖にそりやあちらかす、で、「之もいらないあれもいらない」と紙屑籠の中に飛込まさす。やがてあゝ綺麗になつたと見まわした時雨女史「之で何か見つからないと素川さんが又何處へやつた何處へ行つたとさわぐんだから」ほんとにそうですさわぐんです。

二十一日　文藝春秋三月號の社中日記の中の「女人藝術社々長鈴木氏亭……」の言葉をみつけた小池みどり、何だ用心棒のくせにと憤慨する。抗議書を出すことにする。

抗議書

一、鈴木氏亭

右の者「女人藝術社」社長ノ名ヲ僭用致ス由此段實正ナラバ卽刻首ニ致スベク但シ用心棒ニナラ從前通リ採用仕リ候左樣御含ミ置キ下サレ度申入候

昭和三年二月二十一日

女人藝術社
社中日記代表小池みどり

文藝春秋社社中日記執筆者殿

二十二日　長谷川春子の渡佛送別會、テーブルスピーチの物すごさ氣の弱い人達なら氣絶する事受合ひ。この日文藝春秋社に抗議文を持つてゆく、そして大草實から抗議文拜受なるものを貰ふ。いづれ社中日記で返事はすろといふ。

二十三日　夕方から三月號の發賣廣告のビラを撒かうと云ふ企も四谷署で許して吳れないので駄目、集つた連中の憤慨すること、でも淀橋署で明日なら許すと云ふ。中村屋の印度のライスカレなるものでお腹を作つて珍らしく歩くと云ひ出した社長さんを先頭に一行十人新宿から淀橋署までテクル。

二十四日　ひどい〳〵風の中を新宿通りでビラを撒く素川、中本、林、生田、小池の五人、寒いこと寒い事、手の先も足の先も覺えがなくなろ生田花世先づ落城して中村屋に逃げ込む。こんな寒い日に街に出ろものもあろまいと思ふのにずい分な人出だ。女の人は何故あんなにすまさなけりやならないのかと思ふ。こんなにおすましにならなくたつて貴女の事を素敵だと思ふ人はありませんよと云ひたくなろ。小池みどりもとのムサシノの掘さげられた地の下から吹き上げてくろ冷たさを增した夕暮の風の中で「死ぬう」とどなつた。中本たか子「之から失業したらビラ撒に雇はれろ」と豪語してゐた。餘程ビラ撒が性に合つたと見える。

二十五日　女人藝術社宛で鈴木氏亭に神戸の方から葉書がきた。いたづらつ兒の大家さんすつかりよろこんで「君之に長の字をつけて文藝春秋に送つてやりたまへ」「字が下手だからだめ」「それでは僕がしてやらう」そこで社長鈴木氏亭になり當社にはかゝろ社長見當らず候間御廻送申上候。

二十六日　三月號のビラに君よ聽かずや春のプロローグ!!とすてきな文句を情熱家八木秋子が書いておいたら、オヽ!我聽きたし春のプロローグを切に!いと切に!」ビラの裏に書いて送つて來た知人があつた。そしてどうぞ一部見本をと。そこで發送部長淸水の舞臺から飛降りろ氣で一冊送ろ事にした。夜市村座であつた平凡社の菊池寛全集の講演會を利用してビラ撒きをした。

全女性進出行進曲を募る!!

――すでに女性は重き足枷を蹴放して、暗き心の牢獄を脱出した。今やわれ等の前にあるのは陽光雨の如く降りそゝぐ街頭である。轟音耳を聾する工場である。屹立して天空を摩する思想の尖巓である。あらゆる人類に伍して、われ等はすべての生き動くものの世界へと前進する。友よ、かかる時われ等の爲めに、讃め、勵まし、歡こび、突き進ませる「歌」がなければななぬ。疲憊して路傍に仆れた「母」と「娘」とをも蘇へらせる「歌」がなければならぬ。激越にして而も優雅に、燦爛として而も素朴に、裸らはにして而も賢こき「歌」がなければならぬ。本社が「女性の歌」を偏ねく募る所因はここにある。

全國同性の寄稿を待つ!

I 應募者女性に限る

II 歌體隨意、但し群集の合唱に適するもの

III 締切　昭和四年五月十日

IV 薄謝　金貳百圓・附屬賞品・圖書券・改造社・新潮社・文藝春秋社・平凡社（寄贈）

V 應募歌は七月號（女人藝術一週年紀念號）誌上にて發表

VI 當選歌詞は作曲を附し、全國女學校、及工場に寄贈す。

VII 作曲者の選定を讀者の指定に待つ。各自推選せる作曲者氏名を別行規定の欄內に記し投票を乞ふ。

選者は知名なる各階級の女人を網羅す。

女人藝術社

全女性進出行進曲	
推薦作曲者氏名	推薦者 住所 氏名

春日閑語

◇五十年後

時雨

もうそろ〳〵自分の大きらひな年齢になつて生るのが嫌なのに、五十年後を書けなんて、せめて、逆轉しての五十年なら新らしく生れるといふまだしもの樂しみもあるけれど――仕方がないから、一番編輯室で若い小池さんの未來でも考へて祝福してやりませう。この五尺四寸のみどり子は大きな七十二歳になつて、髮の毛が濃いから馬琴著「爲朝」の島の阿公のやうな白髮嫗になるでせう。十人の子が十人づつの孫をつくり、またその孫が十人づつ加算したのを膝許にならべてかうせう。とても遲れてゐたものさ、あの時代は庵見制限なんてやかましく言つたが、お前たちこんなに增へておめでたい。

素子

私は三十になつたら死ぬ積りですから、今から五十年も經つた時分には、極樂の長老樣になつて、菩提樹の下で金色の陽にあたりながら……とこゝまで一息に話したら、傍から社長さんが横槍を一本、

――お釋迦樣でも產むんでせう――

實は私は他の事を考へてゐたのですが、それも素晴らしいなと思つたので、早速そういふ事にしてしまひました。よく聞いてみたら、支那の畫が何かに、菩提樹の下で摩耶夫人の

日本橋

時雨

――事實談がはやるからの思ひつきでもない。といつて半自叙傳といふものだとも思つてゐない。あまりに日本橋といへばいなせに、有福に、立派な傳統を誇られてゐる。が、ものには裏がある。私の知る日本橋區内住居者は――いはゆる江戸ツ兒は、美化されて傳はつたそんな小意氣なものでもなければ、洗練された模範的都會人でもない。かなりみじめなプロレタリヤが多い。といふよりも、ほろびゆく江戸の滓でそれがあつたのかも知れない。私はただ忠實に、私の幼少な眼にうつつた町の人を記して見るにすぎない。もとよりその生活の内部を知つてゐるものではないし、面白くもなんともないかもしれないが、信實に生てゐた一面で、決して作つたものではないとだけはいへる。はなしが段々隣區へ移つていつても、他分この題名のままでつゞけるであらうと思つてゐる。

一應はじめに町の構成を說いておく。

日本橋通りの本町の角からと、石町から曲るのと、二本の大通りが淺草橋へむかつて通つてゐる。現今は電車線路のある石町通りの方が街の本線になつてゐるが、以前は反對だつた。鐵道馬車時代の線路は兩方にあつて、淺草へむかつて行きの線路は、本町、大傳馬

袖からお釋迦樣が飛び出してゐる名畫があるので何も私がお釋迦樣を産み相だといふのではないのださうです。



◇ みどり

五〇年後の時雨女史、果して百歳の老女となつて極樂の小鳥の一ぱいゐる中で湯上りの蕩然とした時の樣なお顔で後から入つて來る人達を眺めながら「あの娘は女人藝術を讀んで居たかな」とつぶやいて居られるだらうかそれとも『今死なして吳れ――死に時が遲れた――』と云つてゐるから、五〇であの世に逃げ出すとして、あの世で又一つから年をつて年頃になつて美女で鳴らして、素川さんの生む筈のお釋迦樣をうならせる、いや、だけど五〇年後だから又今の樣におばあさんにな

町、通旅籠町、通油町、通鹽町とつらなつた問屋筋の多い街の方にあつて、街の位は最上位であつた。それがいまいふ幹線で、淺草から踊りの線路を持つ街の名は淺草橋の方から數へて、馬喰町、小傳馬町、鐵砲町、石町と、新開の大通りで街の品位はずつと低く、德川時代の傳馬町の大牢の跡も原つぱで殘つてゐた。其處には、弘法大師と圓光大師と日蓮祖師と鬼子母神との四つのお堂があり、憲兵屋敷は牢屋敷裏門をそのまま用ひてゐた。小傳馬町三丁目と二丁目、通油町と通旅籠町の間をつらぬいて大門通がある。

そこで、アンポンタンと親からなづけられてゐた、あたしといふものが生れた日本橋通油町といふのは、たつた一町だけで、大門通りの角から緑橋の角までの一角、その大通りの兩側が背中にした裏町の片側づつがその名を名告つてゐた。私は嚴密にいへば、小傳馬町三丁目と、通油町との間の小路の、油町側にふぞくした角から一軒目の一番地で生れたのだ。小路には、よく、瓢簟新道とか、おすは新道とか、三光横町とか、特種な名のついてゐるものだが、私の生れたところはただ新道とよばれてゐて、この道筋だけが五町通して、兩側の大通りと平行してゐた。

面白くもない場所吟味はやめよう。以下、私の記憶のままで、年月など、幾分前後したりするかも知れないが――

しかし、アンポンタンの生活がはじまつたのも、かなり成長してからの眼界も、結局この街の周圍だけにしか過ぎない。で、最も多く出てくる街の基點に大丸といふ名詞がある。これは丁度現今三越吳服店を指すやうに、其當時の日本橋文化、繁昌地中心點であつたからでもあるが、丁度、通油町の向ふ側の角、大門通りを仲にはさんで四ッ辻に毅然と聳へてゐた大土藏造りの有名な吳服店だつた。ある時、大傳馬町四丁目大丸吳服店所在地の

つてゐるかもしれない。しかしあの世で新らしく一つから年をとつてゆくとすると、この世を少しでも早くさよならと出て行つた人があの世では先輩になるな、それでは私の方が一足お先にさよならして、「そんな事ではどうする、だめだめ」とおこられた樣におこつてみたい。之はなかなかすばらしいぞ。

◇　たけじ

極樂へまで籍をもつてゆくのもいやだし、といつてまた以前の此世の地獄へ生返つてゆくのも、折角死んだのに癪だし、まゝよ一服三途の川邊でと、六道の辻の柳の下で、ちよつと七十年ばかりボンヤリ考へこんでゐたら、いろんな人に逢つた。ある日前方のはうからとても大きなみどりこが四ン這ひではつて來た。全く私は化物かそれとも何かえたいの知れない動物だと思つた。そこの河原は七ツ迄位の小兒ばかりが、ショウツカのおばあさんに守られて、幼稚園のやうに遊んでゐるところだから、あたしが危ないと思つたのに無理はない。よく見ると裟婆で別れた時廿二歳の小池孃―　はて不思議、して見ると七十年も前別れたきり、あたしの目はもうろくしてしまつたのか彼女の姿は年をとつてゐない。お下げの髮を逞しく振りふつて勢猛に匍けるやうに這つてくる。ハアハア言つて眞赤な顔をしてゐる。私はもう七十年の立枯れで柳の幹に同化してしまつたと見えて、脊つぽ

地名が、通旅籠町と改名されてをり、大丸に長年勤めてゐた忠實な權助が、主家の大事と町札を書直したといふ大騷動があつたといふほどその店は町のシンボリカルになつてゐた。

問屋町の裏側はしもたやで、といふより殆ど塀と奥藏のつゞき、間に非常口の小さい出入口がある。女達がそつと外出をする時とか、内密の人の訪れるところとなつてゐる。だからとても淋しい。私の家は右隣りが絲問屋の近與の奥藏、左側は通りぬけの露路で、背中は庭の塀の外に井戸があり、露路を背にした大門通り向きの幾軒かの家の、雇人たちのかなり廣くとつた共同便所があり、それを越して表通りの足袋問屋と裏合せになつてゐた。

左横の大門通り側には四軒の金物問屋――店は細かいが問屋である、この邊は、鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春と、其角がよんだ句にもある、金物問屋が角並にある大門通りのめいぬきの場處であるから――其他に、利久といふ藥袋屋、べつこう屋の二軒が變つた商賣で私の家の角にほんとに小さな店の、ごく繁昌する、近所で重寶な荒物屋があつた。小さな店にあふれるほど品が積んであつた。

煩さくはあるが、もすこし近所の具合を言つておきたい。荒物屋の隣角――あたしの家の筋向ひに横つぱらを見せてゐる、三立社といふ運送店の店藏は元祿の地震にも殘つた藏だときいてゐた。左横に簀がついてゐて木の戸があつた。内には繩や筵が入れられてあつたが――その向ふ角が、立派な土藏づくりの八百屋、後には冬は燒芋屋になり、夏には氷屋になつた。その店の燒芋はすばらしく大きかつたので、遠くからも買ひに來た。他處では見られないことは、この家、この店土藏だけの住居で二階が住家であり、小さな物干場へは窓から潜り出してゐた。芋屋の並びはほとんど金物問屋ばかり、火鉢ばかりの店もあれば金だらひや手水鉢が主な店もあり、襖の引手やその他細かいものの上等品ばかりの店

く、煙つぽく、ニヤニヤしてゐるのだけれど彼女はフンと鼻息もかけてくれない。體は大きうても他の子供と同じやうに賽の河原の小石を拾ひだした——一つ積んでは父の爲——どうも子供らしくない聲だ。二つ積んでは母のため——はいいが、三つ積んではでクスンと笑つた。「ところで怒りんぼ先生どうしたらうれ」と、その三つ目の小石を私の胴つぱら目がけてカチンと投げた。私は屹驚して飛上つたが、先方は氣がつかずにあの白い齒を奇麗に見せていつた。「よし來た。今度は私の方が年が上になつたよ九十幾歳だかられ、大きに小言をいつてやらなければ——」

あたしは恐しいので、柳のしんにいよ〳〵煙のやうに入りこんだ。しようつかのお婆さんが冷たい目で笑つてゐた。

◇　かど江

豫想といふものは、高遠な希望になればなるほど現實に裏切られやすいものであるから、私は自分の希望とは反對側の豫想をいつてみれば、十年後に起るだらうと思はれる第二の世界大戰がこぢれてしまつて、世界はてうど日本歷史の戰國時代を大きく廣げたやうな野蠻時代をいつまでか辿つて、そのために人類は急激に減少してしまふだらう。一面には、非常に發達した科學的武器による戰爭のために激減するのと、一方にはさうした戰爭に送り出すために子供をつくることを厭やがるために人類は激減してしまふであらう。そ

もあり、刄物ばかりのとても大きな問屋もあつた。銅、鐵物問屋はいふに及ばない。大門通りも大丸からさきの方は、長谷川町、富澤町と大呉服問屋、太物問屋が門並だがここいらにも西陣の帶地や、襠地などを扱ふ大店がある。

荒物やの正面向ふ角が兩替屋で、奇麗な暖簾がかかつてゐて、黑ぬりの〔⊙〕かういふ看版に金字で兩替と書いたのが下げてあつた。そこの家は黑い前掛けをかけた、眞中から分けた散髮の旦那と、赤い手柄の細君がゐる奇麗な小さな角店だつた。その隣りが酒屋の物置と酒屋の店藏で、そのさきが煙草問屋、つゞいて大丸へむかつた角店の佛具屋の庭の塀だつた。

あたしの家の眞向かふに——三立社の尻に此邊にはあるまじいほどささやかな、小さな小屋で、首を振りながら、終日鹽せんべを燒いてゐるお婆さんがあつた。その隣家はこんもりした植込みのある——泉水などもある庭をもつた二階家で、丁度そこの塀を二塀ばかりきりとつて神田上水の井戸があるのを、鹽せんべ屋のお婆さんが井戸番をしてゐるやうなかたちだつた。あたしの家の裏の井戸は玉川上水だつた。

その二階家は「炭勘」といふ名の——炭屋勘兵衛とでもいつたのだらう、鼈甲細工屋のになつてゐたが、黑い三巾の垂れ暖簾に∧炭の白ぬきのれんが、鼈甲屋とは思はせない入口だつた。尤もそこは靑柳といふ會席料理だつたのだそうで、炭勘はその後から前へ進入したのだ。お茶屋があつたからといふわけではなからうが、その隣りに阪東三彌吉といふ女の踊りの師匠が居た。その側に、私の父の俥をうけもつて、他に曳子を大勢おいてゐた俥宿があつた。

なんで細かく此處まで書いたかといふに、前にも言つたやうに、私の家のならびは、窓ひとつもない、塀と土藏裏と、荷藏ばかりつゞいてゐるその向ふ側であるからで、俥宿ま

して結局、繁殖率をもつとも多く示す民族であること、無智であることゝを條件とする民族が世界統一をしてゆくであらうが、それは恐らく、日本民族とかスラヴ民族とかいふものではなくつて、十年後から引續いて起る戰爭による他國聯合のためと、交通の發達のために促進させられる雜婚による一種の新民族かもわからない。そしてその新民族の世界統一の結果は恐らく、いはゆる資本主義社會でも、いはゆる社會主義でもない、いはゞ第二の封建主義的社會が現はれるであらう。でも、豫想は常に兩面からしなければならないがこれはその一面からしたものに過ぎない。

◇　しづか

三十三の死を願つてゐる私。だから五十年後にはとつくに生れ代つてゐよう――但し次の世には素晴しい魅人に生れたいから、母が胎教をするやうに、死ぬ時は美人の繪と彫刻の中に埋れて死ぬの。――まあ、さうしなくても、人間がみんな悧巧になるから、總體的に今よりきれいになつて、背だつて、みんなすらりとして來る。そしてみんなが健康になつて、女だつてお百姓でも羊飼ひでも、平氣で出來るやうになる。重農時代がやつて來る生活難なんてなささうだ。私は北海道で牧畜と農業。冬になると、働けないからみんな勉强する。春になると、遠くから飛行機だの風船だのゝ便りがしきりだ。

――けふ、スペインの踊り子たちが、赤い

での町並は二間半たらずだが、そこからぐつと培も廣がつてゐる。それが、何故かといふと、三誠社といふ馬車を扱ふ大きな運送店があつて、その前身が、傳馬町の大牢の、咎人の引廻しの馬舍だつたといふのだ。町巾が其處だけ廣がつてゐるのが妙に嫌な氣持ちにさせる。俥宿と馬舍との間にかこひをして草を植え、植木棚をつくり、小さな祠を祭つて、毎朝表通りの店から散歩にくる老旦那もあつた。

アンポンタンが三ッか四ッの時、額の上へ三日月形の前髮の毛をおいた。それまでは中剃り（頭の眞ン中へ小さく穴をあけて剃つてゐること）をあけたおかつぱで、チヂッ毛とおやつこさんをつけてゐた。（チヂッ毛は頭のボンノクボに少々ばかり剃り殘してある愛敬毛、おやつこさんは耳の前のところに剃り殘したこれも愛敬毛）そのほかは靑く剃りあけてゐたのへ、小さいお腕を伏せて、恰好のよい三ケ月形を剃り殘したのだ。その時向ふのせんべやのお婆さんが、剃刄をあてるのに動かないやうにと、おせんべにするふかしたしん粉をもつて來てくれて、あたしの祖母が、狆を拵らへて紅で色どつてくれた。それに味をしめて、さかゆきをするたんびに、おせんべやの店へとりにゆくと、首振り婆さんは、私の家の門の櫻の木の上へ出そめた三日月を指さして、

「のん、のん、此處にも、あすこにも。」

と、あたしの頭を指で押して、空をも指さすのだつた。

お婆さんの息子は車力だつた。あたしは鹿の子絞りの紐を首の後でチョキンと結んで、緋金巾の腹がけ（金巾は珍らしかつたものと見える）祖母さんのお古の、絽の小紋の、袖の紋のところを背にしたちやん〳〵こを着せられて、てもなくでく人形のおつくりである。

――ある時、（妹でも出來た時かも知れない）理髮店ではじめて剃つてもらつた時、私ははじめじぶくつたが、あたしを抱いてゐた女中が大層機嫌がよかつたので、しまひにはあ

風船に乘つて來るんだよ。
——あゝ、あたしの夜會服がもう今度の飛行傾で着く筈。素晴しいのよ。ルイ朝時代のやうに、スカートが大きくて、羊が五十匹かくれる位。
——あゝ、今晩はパリから全世界中繼放送があるんだ。チャーミング女史のヴァイオリンソロだつたね。
——あらく、羊が、五十二卷四號の女人藝術を喰べちやつた……

◇

花 世

五十年經てば……かう思ふとすぐ私は、自分は死んでると思ひましたわ。萬一その時まで生きてたら大變だとも思ひましたからね。さて私なるものは死んでる。樂しい死だ、靜安の欣びはもう絕對的なものとなつて、社交や家庭に自分を生かしきる、あの惱ましい人間哀樂は心をとほざかり『女人藝術』がかうあつてほしい、ああであつてほしい、と自分一人の責任ででもあるかのやうに、苦勞をしよいこんでもだもだする、さういふことからも解放されて了つてるんです。ユクワイですね。

五十年の後には、女性の大半は男性のやうになり、男性は女性のやうになり、男女の結合離散はそのテンポの早いこと今日の自動車での乘降のごときものがあるでせう。時代にそはないものの死滅、消亡はもつともつとすみやかなものとなるでせう、しかし私はもう

たしまで悅んで膝の上で跳ねた。職人はたぶん女中の頸をおまけに剃つてやつてゐたのであらうが、あたしがあんまり跳るので、女中にもなんしよで、ひよいと、あたしのお奴を片つぽとつてしまつた。あたしは猶更よろこんだ。機嫌のよい女中におぶさつて歸つてくると、すぐおせんべやの首指りお婆さんに見せにいつた。ただ笑つて、よろこんで指で毛のないあとを押し示した。

「あらまあ、お供さんが片つぽおちて——」

お婆さんは齒のない口を一ぱいにあいて笑つた。だが、この人は直きなくなつて、おせんべやは荷車の置場に、屋根と柱だけが殘されるやうになつた。竹であんだ干籠に、丸いおせんべの原形が干してあつたのも、その傍に、あたしの着物を張つた張板がたてかけてあつたのも、その廻りを飛んでゐた黃色の蝶と、飛び去つてしまつた。

角の芋屋がまだ八百屋のころ、お其といふ小娘が店番をしてゐた。ちいさい時、神田から出た火事で此處らは一眢になつて、みんな本所へ逃げた時、お其は大溝におちて泣き叫んでゐたのを、あたしの父が助けあげて、抱へて逃げたので助かつたといつて、私の赤ン坊の時分からよく合手をして遊ばせてゐてくれた。だが、先方も正直な小娘である。店番をしてゐる時、無錢でとつていつたら泥棒となれと敎へこまれてゐた。あたしはまた、お金といふものがある事を知らず、品物は買ふものだといふことをちつとも知らなかつた。他人のものも自分のものも、所有といふことを知らず、いやならばとらず、好きならばとつてよいと、辨へなく考へてゐたと見え、ばかに大膽で、げじけしをおさへて見てゐたが、急に口へもつてゆかうとして嚴しく叱られたりした。その時も、お其の店の赤いものに目がついて、しやがんで二つ三つとつた。お其はだまつて見てゐたが——たんばほうづきが幾個破られて捨られてもだまつて見てゐたが、その儘歸りかけると、大きな聲で、

知らない將來の日本人よ。わがなきあとに幸福なれ、一人の人間として。

◇　芙美子

飛行機で一寸買ひ物にでも行ける時代になつてゐるかも知れないし、又此間の地震の百倍、千倍、一萬倍の奴がグラグラと來て、地球をどこかへ吹き飛ばしてゐるかもしれない。

私自身は……七十幾つまで生きるとして、私の姿を考へたら、少し憂鬱になつてしまつた。少年が目につくだらう。皺くちやだからお化粧も出來ない、よぎなく七十幾ツまで生きなければならないとしたら、わづらはしい一切に別れをつげて、巡禮して歩きたい。だが、腰が曲つてゐては箱根の難所も骨かも知れない。それよりも生きのびてゐる若い時の戀人の顏が見ものだと思ふ。

あゝ七十幾ツまで生きるとしたら、噴火口へ飛び込むつもりだ。だが油が乘つて七十幾つで佳作を書いてゐたならば、美しい山の頂上に白い家を建てやう。五十年先！私が子供だつたら、面白い空想をするが、私は人生半ばに達してゐる。お婆さんにならない内に一生懸命戀をしやうと思ふ。

◇　秋子

まづわたくしは、薔薇の花ビラのやうな額をもち、グラスに滿ちた葡萄酒のやうに新鮮であるでせう。はろばろと見かすむ畑は共同農場、色とりどりの布を頭にかむつた人たち

「盗棒、盗棒、盗棒——」

と喚きだした。もとより、あたしもお其にかせいして、盗棒となつた。諸方から人が出て來たが盗棒はゐなかつた。するとお其はあたしに指さして、

「盗棒！」

と言つた。幼心にはづかしさと、ほこらしさで、あたしもはにかみながら、

「盗棒！」

とあふむがへしに言つた。みんなが笑つた。あたしの祖母がお褄をとつて來て、巾著からお金を拂ひ、お其にもやつた。八百屋の親たちはしきりにおじぎをした。

おせんべやの首振婆さんが私を抱へて歸つた。お其も遊びについて來た。間もなくべつたら市の日が來て、晝間から赤い巾をかけた小さな屋臺店がならんだ。こんどはお其があたしの後について、肩上げをつまんで離れずにゐた。祖母や女中が目を離すと、コチヨ〳〵と人ごみにまぎれ込んで、屋臺のものをつまむので、そのたんびにお其はハラ〳〵したのだらう大きな聲で祖母をよんだ。祖母はニコ〳〵して後から拂つて歩いて來た。

お其のうちは八百屋をやめて燒芋屋になつた。店の大半、表へまで芋俵が積まれ、親父さんは三つ並べた四斗樽のあきで、ゴロゴロ〳〵、水泥の中の薩摩芋を棒で掻廻はした。大きな、素張らしく美事な燒芋で、質のよい品を賣つたので大繁昌だつた。三ッの大釜が間に合はないといつた。近所が大店ばかりのところへ、遠くからまで買ひにくるので、いつも人だかりがしてゐた。一軒のお茶受けにも、店の權助さんが、籠をもつて來たり、大岡持ちをもつてくるので、一釜位では一人の注文にも間にあはなかつた。忙しい〳〵とお其はいつて、鼻の横を黒くしてゐた。で、私の遊び合手は、私をも釜前につれていつた。

と樂しい勞働を終へて、自分たちの家へ歸つてきます。太陽がさんらんと耀いてゐる。と、綠の芝生を前景とした階段に早くも歸つてゐた彼が立つて手をふり、私たちを招いてゐるではありませんか。鈴のやうに躍りながら私はとんでゆきます。いそいで勞働服を着かえ、水色のレースが微風にゆらぐ應接間へと靜に出てきます。まあ、彼は——そこであたしたちの胸へやさしく、美しい花束をなげかける。歡びのこゑが一とき家の中へ漣のやうに溢れました——香り高い紅茶、聰明な機智とユーモアの流れる健康なことば。たれの眸も五月の空のいろ——。

彼の友人がカーテンをあげてはひつてきました。私たちはそこで仕事をはじめる。科學の研究に從ふものは別室へ——わたしは一ばん好きな油繪のカンヴアスを取りあげる。髮の毛をそつと撫でると青春のおもひが、繪具のやうに匂つてきました。もちろん——この私は十七八年まへに甦つた新しい人間で、すべてに慣れないいまの私はいつか死んでしまつてゐるのです。

◇　帽　子

いくら反動勢力が躍氣となつたつて、その頃は既に革命の擾亂は過ぎて、勞働者農民の社會は、着々と建設の途上にあるだらうな。若い頃に心に寒さを以て見た權力階段の我儘な贅澤さや橫柄なお巡りさんの面や、デパートメントストアの飾窓の見本の樣な令孃や、

冬などは、藥の上にすはつて、遠火に暖められてゐると非常に御機嫌になつて、芋屋の子になつてしまひたかつた。だが、困つたことに家の構造が、角の土藏なので、煙のはけばに弱らされてゐた。住居にしてゐる二階の上り口へまつすぐに煙筒をつけて、窓から外へ出すやうにしてあつた。だから、二階の梯子はとりはらはれて、あたしたちの暖つてゐる頭の上を、猿梯子をかけて登つてゆく、物干場は、一度窓から出て、他家の屋根に乘り、そして自分の家の大屋根にゆく仕かけだつた。

「賣れすぎて損をするつて」

とお其は告げて、あたしの父を笑はせてゐた。父の晩酌のお膳の前に座るのを、あたしより前にもつた特權だと、この小娘は信じて疑はなかつた。

お其が私を紹介した買物のはじめは、角の荒物店だつた。足許の箒だの、頭の上からさがつて來てゐるものを掻きわけて、一間たらずの土間の隅につれてゆくと、並んでゐる箱の硝子蓋をとつて、中の駄菓子をとれと敎へた。當ものをさせて、水繪——濡らしてはると、西洋畫風の蝶や花が、刺靑のやうに腕や手の甲につくのを買はせた。で、彼女は一生懸命にお錢の必用と、物品購買のことを說ききかせて、かういふ細長い、まん中に穴のあいてゐるのが天保錢で、それに丸いので穴のあいてるのを一つつけると、赤く光つた銅貨とおんなじだと、繰かへしていつた。でも、あたしにはあんまり必要がなかつた。それよりも、お其の紹介で友達になつた子たちが、自分の家の裏庭でとつた、蝸牛を燒いてたべさせたりするのを、氣味がわるくてもよろこんだ。

この子供仲間は、男の子も女の子もみんな顔色がわるかつた。どの子も大きな眼をして瘦せてゐた。小僧さんかお附きの女中がゐるので、それらの眼をしのんで、こつそり集るのを、どんなに樂しみにしてゐたか知れない。だから裏から裏と步いた。村田——有名な

仕事にあぶれた勞働者、さては貧乏にいぢけ切つたお内儀さん達の交響樂は街から消えて社會をとび廻つてゐるのは、輝かしい日光と健康な肉體、個性的な趣味にあるが、懸隔のない服裝、威信と見榮のために道路は一部だけよく作られぬ代りに、全體によいだらう。家屋は二三人の家族のために尨大な敷地と建築費をとらないので、六疊に二家族なんて悲慘な狀態は、革命と共に消しとんでしまふだらう。人々は働く事と知識とに喜びを持ち、勞働の巷からは、我が世の春を歌ふ音樂が聞える。大厦高樓は言ふまでもなく、人民の公會堂、病院、子供の遊び場、娛樂場となるだらう。いゝな。そして勿論私達の座有銘は働からざるものは食ふべからず。反動の砲火に消えなかつたら私の命は、隨分多くの波を刻んでゐる。その時私は、昔のまんまの世の中だつたら、今頃は爺ちやんと一緒に死れがしに扱はれる養老院に送られてみじめな目を見てるだらうと爺ちやんと話し乍ら、もう批評價値のなくなつた低い鼻や出つ齒の顔を笑ひで埋めて、ピチ〳〵した近所の子供達のお守りの役を受持つてゐるだらう。だが待てよ、死んでたら？私は死んでも社會はさうさ。

◆

百合子

テレビジョンが發達して、何處にゐてもどんなに遠隔な地のものも見えもするし聞えもする。只電波の波長を合せさへすればいい。さうなると芝居も、見世物も今の社會組織て

化粧品問屋──の裏を歩くと、鬢附け油を練る香ひで臭く、そこに居る蝸牛もくさいと言つた。鍛冶七──鍛冶もしてゐた鐵問屋──の裏には、猫婆がゐるといふことなど、いつの間にか大人よりよく知つてしまつた。

猫婆さんは眞暗な吹鞘場に──その家も大かた鍛冶屋でもあつたのであらう、大溝が邪魔をして通り抜けられない露路奥になつてゐたので、そんな家のあることも、そんなお婆さんの生てゐることも、ほんとに幾人しかしりはしなかつた。ただ猫だけが知つてゐて、宿無し猫が無數に集つてきてゐた。いつもお婆さんの廻りは猫ばかりなので、猫ぎらゐなあたしは、お婆さんの顔の輪格もはつきり見知らなかつた。

「まだ生てるよ、顔だけあつたもの。」

なぞと、覗いてきては子供たちはいつた。

土のお團子などをこしらへてゐる時に、坊ちやんの一人が目附けだされて、連れかへられやうものなら、その子は家へかへるのを牢獄にでもおくられるやうに號泣した。殘されるものもみんなさびしかつた。なぜなら、歸れば其子におしおきが待つてゐるからである。なぜ表へ出て、あんな子たちとお遊びなさいましたと──それはまた、各自の身の上ででもあるからなので──

あたしもよく引き摺つてゆかれて、お灸を据えられたり藏の椽の下に抛りこまれたりした。さうした窮屈な育てられかたをするのはお店の坊ちやん孃ちやんがたで、自由な町の子も多くあつた。それがどんなに羨ましかつたらう。そしてその多くの町の子たちが遊びの指導者でもあつたのだが、彼等はよく裏切りもした。あたしの祖母が、あたしの遊びに拔けだしたのを嚴探中、その子達の仲間の一人にお小遣ひをくれると、あたしは直ぐにつかまへられた。逃げでもすると、その子達は追つかけ追ひ廻して、意地惡くとらへて祖母に

は興行が出來なくなつて、こゝにも革命が起る。それから更らにテレビジョンが發達すると、人間がお互に話をし合はなくてもお互の心がすつかり分るやうになる。だから腹黒い人は『自分の心が他人に分らない工夫』を講じなければならない。

人間を幸福にする科學の發達は、その半面それ以上の破壞力を以つて人間生活をかく亂せしめ、大變動を惹起せしめる。昔、奇蹟を行つたものは神祕力として非科學的なもの、如く思はれて來た。併し未來の奇蹟は科學の發達に依つて行はれる。その第一に發達するものは電氣で、人間がこの電氣を濫用する結果、その電氣の量に比例して、地球の表面には降雨量が增す。そしてやがて水は地球の全面を掩ふに到る。同時に地球は加速度的に冷却する。從つて地球面の水は氷となり、玆に再び地球面は氷河時代を招來する。この時、地球の住民も、その住民の文明も凡て滅びてしまふ。そしてやがて再び地球が原始狀態で甦へる。この時、一人生き殘つた（飛行機で火星に避難して）私は再生の地球上のイヴになる。誰か火星まで飛行機を飛ばし得る自信のあるアダムはゐないか？

◇　郛子

五拾年後の世界を空想すると何よりも先づ第一に産兒制限が徹底的に行はれるだらうと思はれます。：：何と言つても人間の幸福はせんじつめれば經濟的如何の問題にその大半はかゝつてゐる以上、その經濟問題を痛切に

突き出した。何にがそんなに遊んではいけないのだらう？　遊んでいけないのより、許可をうけず外へ出るから、それがいけない。では許可をうければゆるしたか？　なんの、

「いけません、おとなしくお家でお遊びなさい。」

である。時たま、家中の御機嫌のよい時外へ出して遊ばせて貰う。鬼ごつこ、子をとろ子とろ、雛一丁おくれ、釜鬼、ここは何處の細道ぢや、瓢簞ぼつくりこ――そんなことをして遊ぶ。

子を奪ろ子とろは、親になつたものの帶につらなつて大勢の子がゐる。人とり鬼になつたものが、どうにかして末の、尻尾の方の子をとらうとするのである。親になつたものは兩手をひろげてふせぐ。鬼は、あつちこつちと、兩側を狙つて、長い列が右往左往すると虚を狙つて成功する――その時分、人淩ひが多くあつて、あたしの從兄も夕方さらはれていつたのを、父が木刀をもつて駈けていつて、神田辨慶橋で取りかへしたといふ話もあるので、そんな遊びもしたのであらう。夕方になると子供を外に出しておくのを危險とした。そんな事で、外出もやかましくいつたのかも知れないが――

釜鬼は、塀や壁を後にして半輪を描き、鬼が輪の中に番をしてゐて、みんな下駄を片つぽづゝ奥の方へ並べておく。それを、チンチンモガモガをしながら輪の中へ取りにゆくのである。大擧して突進すると鬼が誰をつかまへやうかと狼狽る、それが附目なのである。下駄が、一ッ二ッ殘ると、それからが駈引きで面白く興じるのだ。

――瓢簞ぼつくりこ――つながつてしやがんで、兩方に體を搖つて步みを進めて、あとの後の千次郞と、唄ひながらよぶと、一番後の子が、返事をして出てくる。問答がある。

雛一丁おくれは、ずらりと子供を並べておいて、賣手が一人、買手が一人、節をつけて唄ひ問答する――

生み出す處の人口の無際限な増殖は早晩、軍備縮少以上に大問題となり、今から五十年もたつた頃には之が世界の重大な條約となるかもしれません。

例へば米國のやうな天惠の豐な國では一人が五人までを生む事を許され日本の如き倭少の國は二人或は三人と定められ年々それによつて、日本の人口が増しすぎたと、米國だかソビエツトロシヤだかさういふ國ら苦情が出る、又一般社會では産婆が四人目かの子供をひそかに産ましめたと言つて檢事局へ引かれるやうになるかもしれません。

◇

たか子

すべてはスピードと電氣の世界。交通機關は速力を二倍に縮め、電飾廣告が映る窓明りでプロレタリアは讀者が出來る。

人々の會話體は電報文に改り、名詞だけが欣然と尻尾を振る。

太平洋横斷飛行は朝飯前だ。日曜に銀座で滿足しなかつた伯爵夫人は、次の日曜にはブードウエイでダイヤ張りの夜會服を輝す。

サーカスでは自動車が宙返りをし、各工場ではロボツトが充滿し、マネーキンガールは飾窓で三代の戀を重ね、活動館はハリウツドからの電送寫眞で直ちにスクリーンを染める

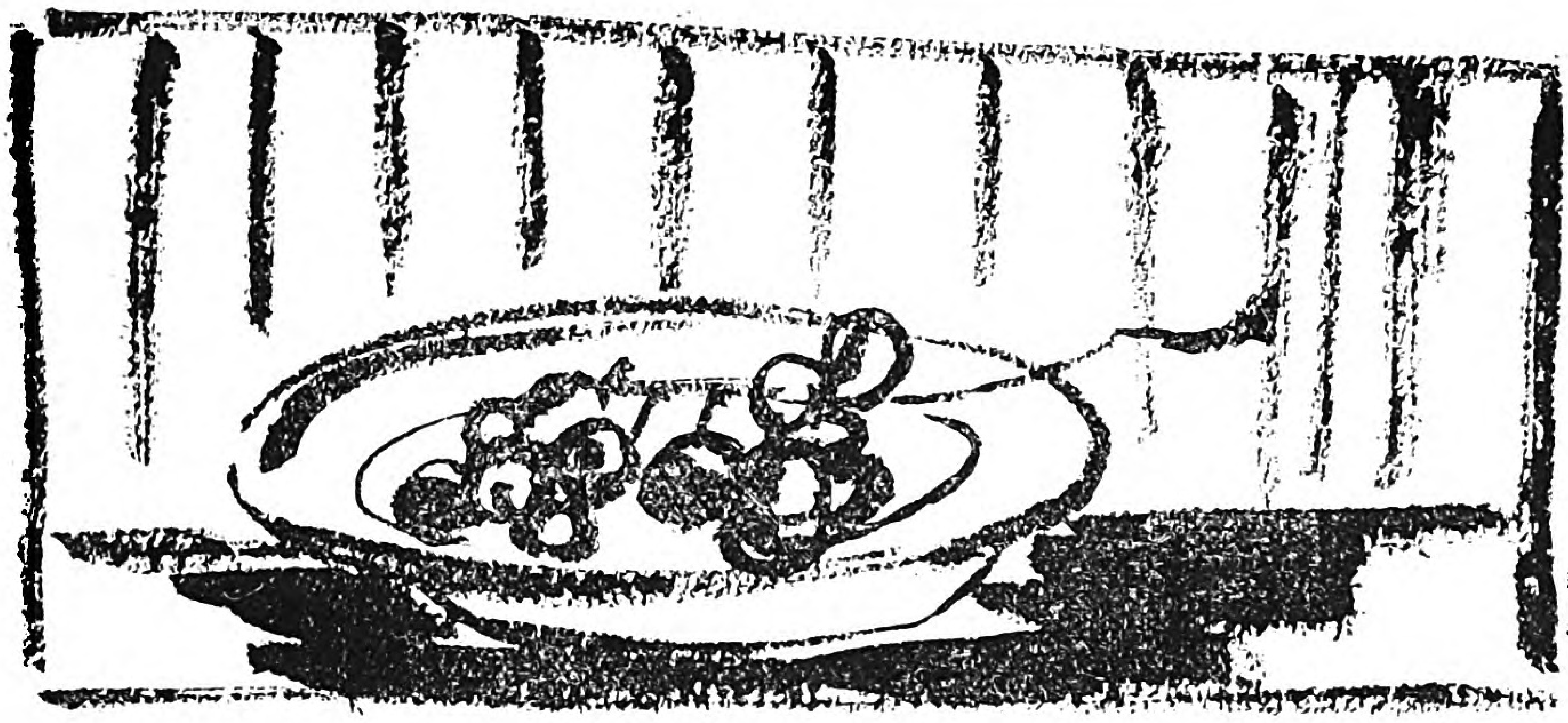
子供の養育は國家の擔任する處となり、男と石女には重税がかゝる。戀は唯、夜なさればならぬことより他には法律が許さなくなる。そして男は、徴兵と××の相手としてより他には、女にとつて必要がなくなる。

ひな一丁おくれ、
どの雛目つけた。
この雛目つけた、いくらにまけた。
三兩にまけた、なんで飯くはす？
赤のまんまくはしよ。
魚をやるか？
鯛魚くはしよ。
小骨がたあつ、
噛んでくはしよ……

ここは何處の細道ぢやも唄ふのだ。二人の鬼が手を組んで門をつくり袖を垂れてゐる。袖の後に一人の子が隱されてゐる。訪ねてくるものが、まづ唄つて鬼がこたえる。

ここは何處の細道ぢやく
天神樣の細道ぢやく
ちつと通してくださんせく
御用のないもな通されぬく
天神樣へ願かけにく
通りやんせ、通りやんせ。行きはよいよい、歸りはこわい――

袖があがる　訪ねるものは通つてゆく。こんどは隱された子をつれてくぐりぬけるのに鬼共はいやといふほどなぐらうとする。さうさせまいと走りぬけるのだ。（つゞく）



泰子

吹かれた呼子

開地敏子

雨風に變色した『動物愛護デー』のポスターが、黑板塀に傾いた儘しがみついてゐた。それは大通に添つたS家の構大な邸宅をめぐつた、裏手の長家に通ずる一間足らずの一條の路に、日の光を完全に遮つてゐる高い長い塀であつた。

紅葉の紅い葉つばが、風に裏表を見せてゲラ〱笑ふ傍には、家賃の延滯を執拗に督促し歩く家主の顔に似た澁柹が、溫かさのない骨つぽい枝に、我世顔に赤く熟してゐるのが、塀の下を通る人々には氣づかれた。

幾日も降り續いた雨がカラリと晴れると、靑く澄んだ高い空が、廣々と塀の内に擴がつて、すが〱しい秋が身に泌み初めた。

梶川英作は、巡査敎習所を出ると、××署詰を命ぜられ、若妻と共に、その露路裏の長屋を借り受けて住んでゐた。

今日も一日の勤めを終へた彼は、その塀の陰について大通りから右手に曲り、一丁程南の長家に歸つた。

『今……』

立てつけの悪い、格子戸をガタゴト動かすと飼犬のデユテイが、白い尾を振りながら飛び出して來た。とそのあとから妻はエプロン姿を表はした。

『お歸りなさいまし、お湯にい、　　　います。……それともお先に……』

『お腹は空いてゐるが……　さあどちらにしようか……』

梶川は帽子と帶劍を妻の手に渡しながら小首を傾げて、ともすると妙に子供つぽい嬌態をする妻を見やつた。

背にかけられた着物に手を通すと、手拭と石鹼箱を提げて戸外にポイと出た。

東隣の區役所の書記が微笑して言葉をかけた。西隣の××會社の事務員も歸つてゐるらしく、家の内から聲が聞えた。お互に薄給の不滿を、或る見榮のために噯氣にも出さず、資本家と勞働者の中に窮屈な生活を維持してゐる仲間だつた。

梶川は露路を出るまでに電燈會社の計算係の歸宅するのにも摺り交はした。

湯屋の番臺の上の時計は六時を二十分廻つてゐた。浴槽の中には上役の目を恐れる神經質な勤め人達が、一日の頭の疲れを洗ひ流してゐた。

『やあ、……』

何時の頃からか挨拶を交はし始めた退役少尉が梶川を見ると挨拶した。

『今晩は、おそうございますねえ、』

『一寸、娘の家で碁を打ちすぎたものですから、はッ、はッ、はッ……』

少尉の笑ひに感電したやうに梶川は笑ひながら、

『お樂しみがあつて結構ですね、私なぞ何も趣味がないので弱ります、』

『いや、いや、當節は趣味の興味のつて言つちやおられない事になりましたさうですから、何にしろ、世渡りがむづかしうなつて來たものですねえ、』

少尉は白い數の少ない髯を手拭で撫で下ろしながら感慨深さうに言つた。

『世の中が複雜になつて來たやうですから、私たちも苦しみますよ、』

『何んにしても、大和魂を傷けることを平氣でする奴等が澤山出て來たのだからね、日清日露の戰だつて、日本全國民が共力して打突つたものですに、今日此頃と來た日には、出兵反對だ、やれ軍國主義破壞だのつて、出征軍人の意氣を悄沈さすに勉める輩の在る狀態に憤慨させられますよ、』

『全くねえ、日清時代から見れば、日本人の思想も隨分違ひましたから、』

梶川は少尉の言葉に同感はもてなかつたが、反撥するには餘りに熱情と誠意が少尉にありすぎた。

『警察官もえらいでせう、』

『今晩は、』と言はれて少尉は頭の禿げ上つた老人の方へ話を轉じて行つた。

脫衣場に出た梶川は、仕切りの大鏡に細い體軀の姿が寫し出されたのを見て、自らが自らを虐げてゐるやうに思へてならなかつた。

家に歸ると食卓の上に夕餉の用意が整へられてゐた。妻は電氣の下で縫物の手を休め、大きな束髮の頭を上げて立ち上つた。

梶川は足座をかいて夕刊を擴げた。

『何も變つたことはないね、』

梶川は煙草に火をつけてポカリとふいた。

『さあ、かたづけませうよ。』

『ふむ。』

梶川は食卓の前に坐つた。庭の箱にゐるデユテイが、しきりにキユウ〱と食物を欲しがつた。

『飯をやつた。』

『いいえ、あとからと思つてますの、お魚の骨があるから。』

彼は皿の魚の肉をのぞいて、

『先にやつたらどう？……』

と骨をおしやつた。

妻は飯を與へに庭に下りた。鎖につながれた犬は、妻の手を見上げてカチヤカチヤと鎖の音を立てて尾をふつた。

『お坐りして、お坐りをしてッ……』

妻の叱りたしなめるのに、我武者羅に食物に飛びついてゆくデユテイに彼は食卓の前で怒聲をはりあげた。

『あたしの小言を、どうして聞きわけないのでせう？』

食卓に戻つた妻は恨らめし氣に言つた。

『甘いからだよ。』

『だつて隨分叱るんだのに……デユテイつて男と女との見境ひがつくのか知ら。』

『そりや解るよ、それに叱るときには叱る、可愛がるときには可愛がる、と區別をせないぢや。』

梶川は二杯目の飯に茶をかけた。

『今日も、大變甘つたれるから鎖を一寸ほどいてやつたの、さうしたら、仲々歸つて來ないのよ、困つちまつて、表に出て大聲に何度呼んだか知れやしないわ……』

『はなしちやいけないよ、もし人を噛まうものなら』

『でも朝から晩まで、一間足らずの庭に鎖でしばりつけられてるデユテイも可愛そうよ。』

『そりや、殺生だが、仕方があるまい……其處を彼奴はつけ込んで甘えるんだよ。』

彼はさう言ひながら自分の現在の生活がデユテイに等しいと思はずにはゐられなかつた。一條の鎖によつて、食ふことには不足は感じないが、そのために束縛を感ずることは否定せられなかつた。

『年がら年中あんなに縛られてゐちや、デユテイだつて死んだが増しよ。』

『………』

妻の言葉に返事をしない彼は、（それでも死ぬより好いだらう）と云ひたかつたが、さういふ心持が益々自分等の生活を墮落へ導びいてゆくようにも思はれて恐ろしかつた。

食事を終ると彼は新聞を讀み、妻は裁縫をした。

平凡な彼等の生活はさうして續けられてゐた。

黒板塀の中の紅葉の葉が散り初めた。

さうして秋が深まつていつた。

全市の野犬狩デーが三日間にわたつて行はれることになつた。梶川は犬殺しと一所に郊外から、細い露路へと歩きながら、その監督をするのだつた。

針金の輪をもつて、放たれた犬を、少しの餌で誘ひ寄せながら、

犬殺しが、苦しさうに吠えるのをしめ上げると梶川は『又、一匹』と表面手柄のやうに見てゐなければならなかつた。絆纏を着た二人の犬殺しは、逃げようとでもする犬があれば、鞭でピシャリ〳〵と毆りつけ、半死狀態に至らせて車上の金網の箱に投げ込むのであつた。

『おい殺すんぢやないよ。』

打擲の鞭を受けて苦しむ犬の姿を見ると梶川は犬殺したちに注意をした。

『これ位のことで死ぬもんぢやありません』

犬殺し達は無爲な愛情のやうに鞭をなほふり上げて捕へるのであつた。

それは二日目の晝近い頃、一切れか二切れの白雲が青く澄んだ空に流れてゐた。

梶川は町端れの白い路を、砂埃りを立てながら野犬を積んだ車を引く人足の後から歩いて行つた。車の上の金網の箱には、人を恐れて縮こまり、折があれば何んとかして脱出しようとする捕はれた犬が三匹も居た。

白に茶の斑點のあるのや、狐のやうな顏した犬や、尾のプッツリと切れたのが、梶川の眼には愛憐を訴へる樣に映じた。

彼は家を出る時そつとポケットにしのばせて來たビスケットを與へたが、毒でも與へられたように見向きもしなかつた。

露路の多い大通りに來ると人足は舵棒を下ろして四圍に目をむけた。と突然・靑物屋と煙草屋の小路から黑犬が飛び出して來た、と思ふと、人を見た犬は驚いて、その小路へ慌てゝ走り戻つた。

『それッ……』

犬殺しは決して見脫さなかつた。も一人に目くばせをすると小路の入口に逃すまいとがん張つた。知らせられた一人は小路の逃げ路を塞ぐ爲めに、走つて反對側に立つた。

『來いよ、來いよ。』

食物を如何にも與へる樣に左手を翳し、法被の下の右手には針金の輪を握つて攻め寄せた。

黑犬はすでに相手を見分けたのか、恐しく口を開いて、「ワン、ワン、ワンワン。』と吠えた。命を乞ふ泣聲も多分にその内にはふくまれてゐた。

『ワワン、ワン、ワワン。』

黑犬はしきりに號泣した。大通りの車の橫手に立つた梶川は捕はれる犬に對して救ふ術を知らなかつた。野犬でも愛犬でも鎖でつながれない犬には、同樣に放たれた野犬として捕へなければならない職責だつた。

けたゝましい犬の鳴く聲が、『キャン、キャン。』といふ聲に代ると、蚤でも押えられたやうに無慘に針金にしめ上げられ、身をもがき苦しむ犬が彼の前に引きずり出されて來るのだつた。

『とう〳〵黑もやられたなア。』

梶川は箱の隅を齧る犬の悶えを聞くと又、次の犬を捕へに車の後から歩いて行つた。

『これは、うちの犬です、鑑札を受けて有るぢやありませんか。』

捕へられようとする犬の前に立つて、躍氣になつて答辯する飼主の聲を聞くと、梶川は不知不識に犬殺しの前に立つて

『鎖を解かない樣にして下さいよ。』

と言ふのだつた。そうして『はいッ』と小聲に、飼主の影から吠え叫ぶ犬に一片のビスケットを投げ與へて、その犬を早逃し又次の町

に去つてゆくのであつた。

婦人共立保險會社の建築用地は枯草の茫々と繁つた廣場だつた。傾いた圍(かこひ)の破れ朽ちた板が大通の路傍に轉がつてゐた。

二匹の犬が、西に走り、東にかけて追ひ合ひをしてゐた。どうして生えたのか、痩せほけたコスモスの枝が縺れて、小さい花をつけてゐた。犬は横になり、重なり合ひ、噛みつき合つて嬉々としてゐた。青い空の下の草原に犬の戯れる風景は、自然な豐かさに滿ちたものだつた。梶川が深々と呼吸をしたとき、犬殺したちは犬にせまつてゐた。

『莫迦ッー』と怒鳴りたい氣持になつたが、彼の體を縛り上げた無形の鎖がピヨイと引いた。

『職務だつたのか、』

梶川は、廣場の向ひ側の湯屋の煙筒を見上げた。思ふまゝに飛ぶ煙の自由さが望ましかつた。視まい、聞くまいとする犬の吠え音が彼の神經に針のやうに突き進んできた。

『ワンワン、ワワン……』

彼が我を忘れて廣場を見たとき、茶毛の犬は無慘にも捕へられてゐた。草を撫でて通り過ぎる風の下には、も一匹の犬の姿は見られなかつた。

『チエッ、忌々しい、毆らないから逃げちまつたよ、』

『いや、いや、とても素早いから手にのるものか、』

捕へた犬は箱に投げ入れられた。

『おい、飯でも食はうよ、』

二人は草原に腰を据えた。

『旦那、晝でせう。』

梶川は言はれて、布呂敷包から重箱を出して飯を始める二人を見下ろした。

『後でするよ、ゆつくり食べたらいゝよ、』

圍(かこひ)の外の路上におかれた車に近づいた。『動物愛護デー』のポスターがその横手の板にも殘つてゐた。網の中には死刑か救助を待つ五匹の犬が戰慄してゐた。梶川はビスケットを一掴み投入れてやつた。

梶川は驚いた、何時の間にか『デュティ』が箱の中から彼を見上げるではないか、顏の長い、體全體の茶毛なデュティが、染め忘れたやうな白い尾(を)を振つて、クンクンと甘えかゝる。

『朝から晩まで、一間足らずの庭に縛つておくのも氣の毒だもの、』

妻の言葉が電流の如く、彼の頭をかすめた。

『鎖をといてやると仲々歸らないのよ、』

とも妻はいつた。家から十町程の距離しかない廣場にとらへられた理由も彼にはうなづかれた。

梶川は再び箱の内を凝視めた、キユウキユウと犬は甘えかゝつた。

『デユテイ……』

梶川の手は箱の蓋を取り去つてゐた。五匹の犬が一散に廣場に躍り出た。そうして凱歌をあげた。彼の潜在意識が犬達を自由にした。

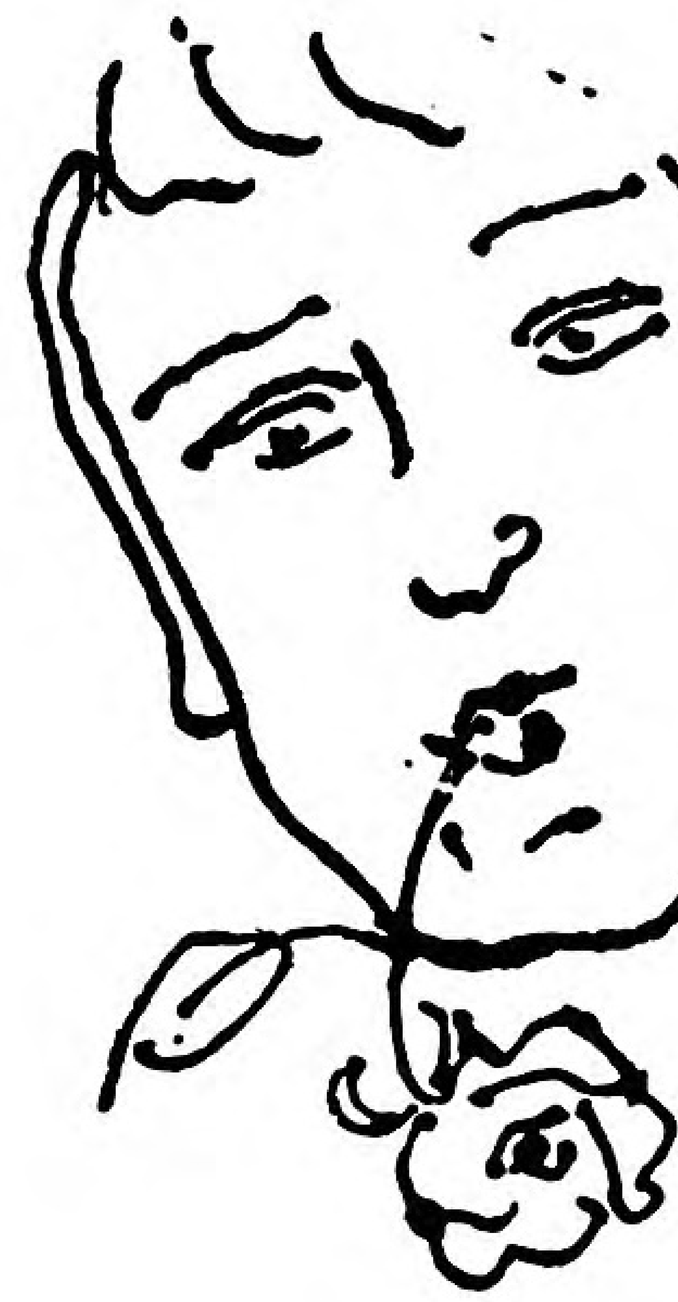
『しまつたッ、』

梶川は無暴を自責する暇もなく呼子笛をピーピーと吹き鳴らした。

犬殺し達は吃驚して塀の内から箸をもつたまゝ車の傍に飛び出して、梶川の顏を見つめた。

空は青く高かつた。(完)

熱田優子



失敗した女

白石清子

「御覧、この通りちやんと陽があたつてるぢやないか――」

眞面目に針を持つた指さきで疊の一點をさしてみせる叔母にニッとして笑ひかへすと、大人しく肯きながら口ではうらはらな素氣ない調子だつた。

「御あまり物を頂戴つてわけなのね、有難い仕合せよ」

疊の薄汚れの目立つのを被うてそこら一面に置き散らされた白絹、紅絹の、ちぎりすてられた眞綿の屑の、投げ出された角箆の色と影とが冷たく沈んで、縫物に心をうちこんで今きいた言葉さへ忘れてしまつた様にみえる叔母の膝もとから、ほんの一寸ばかりの處にほんのりと匂ふ陽の色だつた。

ぽんやりと手持無沙汰に角火鉢に凭れて、その隅の一點をいつまでも凝視めてゐると、遠いところからでも流れて來る様な迂濶さに呟きめいた叔母の聲を聞いた。

「エ、何?」ぴくつとして捻ぢむけた顔を他意なく眺め返すと

「何でもないよ、餘りポカンとしてるから一寸ひやかしてみたゞけ……」

「ホラね、あそこの硝子窓ね、あれから反射するのよ」

言ひかけてやめた叔母の言葉にまつはる、わけの判らぬ不安を自分自身でも急いでふり拂つてしまはうとして、彼女は突拍子もない聲で喋舌り出した。その指さした疊の隅の色ももう褪せて心細く部屋の中に夕闇にちかいものが漂ひ初めてゐた。

「今日は何處歩いて來た?」こつちを見ずに問ひかけられると彈き

返す樣に

「何ていふの、Kの通りを一寸右へ入つたとこに御社があるでせう、傍に學校のある――」

「あゝ、權現樣だらう」

「草臥れてよ、ガッカリしてあそこの御堂の緣に平太ばりこんぢまつたの」

さういひ乍ら、話さなくとも好いものをと口の下から悔むのだつたが、くさ〳〵とする心持がつひ彼女にほんとの事を告げさせてしまつた。

「無茶だよ、あんたは――」

低くやりこめてをき乍ら叔母の細めた眸が姪に靜かに注がれた。不安がその蒼黃いろい廣い額いつぱいに流れてゐた。

「でも、もう平氣よ、一ぺん思ひ切つて遠出しとくと後は、割にスラ〳〵ゆくと思ふの。疲れたつて少しの間休みさへすれあぢき直るんですもの、こんなもの、一つは氣の持ち樣なのね」

いつぱし物わかりの好い口をきいて彼女はクスリとした。焦れて、焦れてベソを掻きさうになつて大息でこの二階まで歸つて來た先刻の自分が情な〳〵想ひ返されもすると同時に今自分で言つた「氣の持ち方」がチクリと胸に刺つて我乍ら氣まりわるくもなるのだつた。

二度三度絲をとほしかねてゐるのを見付けるとつと立つて電燈を點けた。足もとがまだよろ〳〵として賴りなかつたのを强ひてふみこらえると、そのまゝ表通りに向いた腰高窓へいつて框に凭れて外を眺めるふりをした。そんな詰らない仕ぐさを彼女の心が何より嫌つてゐながら、そゝけた髮に櫛もいれない叔母の汚れきつた白髮がひどくみじめで、その傍にヒヨロ〳〵してゐる末梢神經痲痺症の自分が必要以上に醜く汚らしく感じられて、唾をはきかけてやりたい憎惡の念に驅られると、恁うしてウッソリして外でも見てるより他に紛らし樣も思ひつかなかつた。

シユ、シユ、と絲をしごく音がして合間に取りあげる小鋏の鈴がチリ、チリと鳴る。

「朝からこれで羽織が二枚――」私かに窓枠に全身の重みを凭せかけて彼女は考へる。

「結城の長着の上の方がもうぢき仕上がる。下着が、でもこれから夜になるのに出來るんかしら」

どうにもならぬ事を危ぶみながら考へてゐる背後から叔母のグッタリした聲が呼びかけた。

「晩ね、カツでもとらうか」

「氣ばるのねえ、たんと稼いだと思つて――」笑ひかへし乍ら彼女はすぐ苦いものを味つて眼を外らした。其處に叔母の疲れてドンヨリした眼の色を見、凝り切つたらしい肩を叩く左手のふるえを見のがさなかつたから。

「出來さう、もう一枚?」

ソロ〳〵と叔母の近くに戻ると愛想顏に訊ねたが幾分はぐらかす樣な調子さへ含めてゐた。

「あゝ」肯定とも否定ともつかぬ吐息をして煙草をふかしながら、すぐ思ひかへして威勢よく「出來(でか)すんさ、何でもかでもやつつけちまふよ」

「何卒私たちが御米にありつけます樣に、明日つから餓ぼしになりませんやうに――」

「フゝゝゝ」

たまらなくなつて吹き出した叔母の眼に涙の光つてゐるのを充分承知してゐながら、なほをどけやめずに彼女は叔母に向つて手を合せるとせがむ眞似をした。

「千松は嫌やでございます、御腹が空けばひもじうございます」

あぶなつかしがる叔母に「大丈夫よ」と手を振つてみせ、その辨やう〳〵の思ひで急な階子段を下りると、棟つゞきの、板戸一つで境された隣の店の料理口から顏だけ突つこんで彼女は十五錢の牛肉を買つた。

内儀さんの黒い爪が牛肉を竹の皮に包む傍で、いゝ加減汚れた白い上つ張をひつかけて亭主がジユー〳〵とフライパンに煙をたてゝゐた。ムツと鼻に來る生あたゝかい油つこい臭氣に顏をそむけながらムツツリとして渡してくれる竹皮包みを受けとる、何がなしのバツの惡さに「サイナラ」と要にもない挨拶をしてバタンと板戸をしめた。

「今日はあんたが御臺所かね」

階子の上り口、五疊の妙な部屋のうす暗い中にチンマリと坐つて長火鉢の猫板に置いた厚手の湯呑を取り上げながら家主の老婆が咽喉にからむ樣な聲を出した。

「大分仕事に急がれてるんだね」

何となし彼女は猫の感じのするこの老婆が氣に喰はなかつた。六十をこしてゐる彼女は未だに每朝鏡臺の前で丹念に髮をとかしつけぬき襟に着物を着て、いつも柔かものゝ半纏をその細く尖つた兩肩からずりをちさうにひつかけてゐた。煙草をつまむ指さきに青白く伸びた爪が牙をといでゐさうな不氣味さをうす暗い中に閃めかした。

「せつせとやつてますわ。お蔭樣でこの四五日馬鹿に忙しいんですの」

せいいつぱいの御世辭を老婆のもの欲しさうな顏にふりむけると、殊更に太儀さを誇張して彼女は階子をミシ〳〵いはせて上つて行つた。

あり合せの、みんな少しづゝ殘つてゐる馬鈴薯やにんじん、玉ねぎなどをチビ〳〵きざみこんで一つ鍋に入れると半分はたつてしまつた湯をチラと覗いて、鐵瓶を下ろし代りに火鉢にかけた。

「何だい、御馳走らしいね」

「エヽ、いゝものよ、樂しみにして御仕事なさい」

鼠不入をあけると味噌の小瓶からある丈の内容をしやくひ出して鍋に入れた。カラ〳〵と底をこする杓子の音が叔母をふりむかせた。

「せはしいぞ〳〵」叔母が肩の凝りを振り落さうとする様にユラユラ左右に上半身をうごかし〳〵呟いた。

「御米も要るし、御味噌の瓶もからつぽだし――」

「けど、ありがたいものね」しみ〴〵として彼女は呟いた。

「かうして仕事があるんですもの、私一人だつたら今頃どうしてるんかしら」

「又始まつた」眉を思ひきりひそめると、叔母の調子もきびしくなつた。

「それが不可ないんだよ、あんたは。ちやんと親がある癖に自分から背中をむけて拗ねてるんだから――」

何時もの事ながら、叔母によつて云ひ古されてゐる事ながら彼女には痛かつた。默つて唇を嚙むと、何氣ない振で鍋の下の炭火をほぢつてゐながら、もだ〳〵する心持を抑へかねつゝ眼瞼のあたりが熱くなるのを感じた。

「ほんとは、これ、豚だとおいしんだけど――、嫌ひでせう、叔母さん？」

「豚はどうも、ね」上の空で答へながら何か考へこんでゐて叔母はそれつきり針の手を止めず彼女の方も見やうとしなかつた。突き離された心持に淋しさが泌み出して來るのを紛らし様もなくぼんやりと又窓によると、視力の弱つた眼に町を見下ろした。月が出てゐるらしかつた。又今朝ものゝ影がサッパリ彼女には見えなかつた。唯一樣のうす暗がりの中をチラリ〳〵と人影がくろく朧氣に往き來した。眸を凝らしてヂッと一處を見つめてゐても對ふの家の尾根が地に下ろす影が見出だせなかつた。モヤ〳〵とくもり薄墨いろにかすんで覺束ない視野だつた。夜盲といふ程のものではなかつたが彼女の視力のよわりはこゝへ來てもう二週間、脚の方は段々きく樣になつたのに仲々恢復しなかつた。

てもなくかつがれて空つぽな心でフラリと歸つて來た親の家で、失業した父の老苦に皺んだ顔の下に、彼女のしびれた四肢が甲斐のない反抗をし、憎まれ口をきいた。

「叱言は決して云はない、言はれなくとも好くお前自身に知つてる筈だ」

ニンガリとして云ひ切つた父の前にうなだれ乍ら彼女は離れて來た男の淺黒い長身を想ひその女のつぶらな瞳(ひとみ)とゆたかな黒髪とを視た。もう一度歸つてゆきたかつた。どんなに踏まれても罵られてもこゝは戻つて來る家ではなかつた――想ひながら俯き、彼女は刻々にしびれてゆく四肢の氣味わるさに戰いた。

終日持つてゆき處のない、だるい體を持てあつかつて火の氣なしでは寒さを覺え出した二階の小部屋にくすぶり、よみたくもない本

の頁を徒らに繰り、この二月の間の記憶をボツリ〳〵とノートに思ひ出し書きをしながら、彼女は一錢の收入も得やうとしなかつた。出來なかつた。まともに坐る事も出來ない軀では、思ひ切つてやつてみやうかとさへ思ふ「御仕立物」の貼紙も表に貼り出す勇氣がなかつた。

あらむ限りの、つてを求め、日がな一日歩きまはつて職を探し喘いでゐる父の傍から、默つて冷い眼に彼女の滑稽な起居の動作を眺めてゐる義母の視線から、コソ〳〵と背を丸くして逃げ出して、彼女は叔母のゐるS町にやつて來た。父から何かと事情を話し「賴む」といふ手紙が叔母あてに來、やがて彼女の僅かの着替への品が小包みになつて屆いた。

叔母は手紙について一言もしなかつた。

「少し拗ねすぎてるね、あんたはもつと素直な方だと思つてるんだけど――」それはまるで父の手紙が幾分大袈裟だといふことを仄めかしてゐる樣に聞えた。

「離れないで、何が何でも無茶苦茶にしがみついてゐればよかつた」

今でも時々さう思ひ出すと、矢も楯もなく男の許にはしりたくなる心の誘惑を抑へるのは可なり辛い事だつた。ぐん〳〵引きよせ、身うごき出來ぬまで身ぢかに抱きよせて置いて、抱きながら冷酷な囁きを敢てする男に、いつまでも惹かれてゐる自分といふものゝ愚かさはこの上のないものだつたし、二度とかうした馬鹿らしい感情の浪費は繰返すまいと唇を嚙み〳〵決心したのだつたが、根の危ふいグラ〳〵する彼女の心はたやすく「ある時の記憶」に搖り起されフラ〳〵と迷ひ出す。

鍋のふきこぼれる音に慌てゝ振り向くと片手に裏地の白絹をつかんだまゝ片手で蓋をずらすと、中を覗いて

「おいしさうだね、さつま汁かい」

叔母は物しづかに此方を見やつて

「火の傍へおより、少し寒さが增した樣ぢやないか」

妙に叔母の眼とかちあふことを恐れ、伏目になつて火鉢の傍に戻つて溫い湯氣のたつ鍋の中を見るともなしに眺めてゐると、細かに切つた野菜がところ〳〵に肉片をうす黑く漂はせてブツ〳〵と煮えかへり、上つたり沈んだり動きまはるのが可笑しかつた。

「おもとちやん、來てるらしいね」

階下からキシ〳〵ひゞいて來る若い女の聲を耳にして叔母が獨り言みたいに云つた。

「よく來るのね、暇人だとみえて」

ふと口にしたのが少しならず皮肉じみて響くのを氣にして彼女は繕ふ樣に叔母にほゝゑみかけた。

「おねだりなんでせう、いづれ？　階下のお婆さんこの頃無盡が當つたんですつてね――」

「フヽ」叔母は鼻音で笑ふと鋏をカチヤリと投げ出した。一休みも

せず下着の分の布を裁板の上に擴げかけるのに慌てゝ聲をかけると、も一度鍋の中を掻きまはしといて彼女は小さな食卓を火鉢の傍にひろげた。

「ね、明日の朝パンにしない？　久しぶりで食べたくなつちまつた――」

何氣なしに彼女が言ひ出した。こつちもさも虚心らしくうけて「御番茶でパンとしやれるかね、いゝね、ハイカラでさ」他意なく二人は笑ひ合つた。和やかなものが二人の間に流れてゐるのを感じ張りつめた心持に仕事をよろこぶ叔母の氣持に通じ合つた。甘へきつて何事も任せ切つてしまへる姪の安逸さが穏やかにしづかな沈默をかもし出した。二人は何氣なくポソ〳〵の食パンを白砂糖で咽喉に押し込むことを豫想する一方、それにも増してけふ一日の叔母の手さきが産み出すべき報酬をにこやかに算へてゐた。

階下から借りて來た夕刊を讀んできかせ乍ら彼女の注意は時々新聞をはなれてあてもなくウロ〳〵した。

小説を讀み講談をよみ、つゞいて社會面に眼をうつすと、其處に政府の大官がどうしたとか恁うしたとか、大きな活字を竝べたてた後はいつも同じ放火殺人、竊盗、それらのありふれた、それでゐて恐ろしい出來事ばかりが續いてゐた。ふと彼女の眼がある殺人をした女の記事に惹かれた。急いで走りよみし乍らワク〳〵する心持が新聞を持つ手をふるはせた。同じ樣な、ザラにある事件だ、さう一口にけなしさつて、自分自身の味つて來た事も、所詮かうした三面種にしか過ぎないのを口惜しくも實感しなければならぬのを、今更めかしく悟りはするものゝ、彼女には新聞の女の狂亂的な行動にある羨望の念のうごくのを否みえなかつた。

これ丈の熱情はとても望めない自分であり容易に冷める興奮であると見て、いゝ潮時につゝぱなしてしまつた彼の賢明さがまともに肯かれた。と輕いユーモラスな氣分に、さうしたクライマックスを一歩よけて通つた自分の戀がまるで子供の玩具みたいなものに想はれ出して、叔母が針の手を止めて、チラリ〳〵こつちを見るのも氣付かぬふりに、新聞を膝の上に擴げたまゝ彼女はじつと坐つてゐた。叔母の手がさう急がしくないならば今すぐにも自分の阿呆らしい戀の失策をあけすけに話し出してしまへ相な氣持だつた。

横丁にむいた窓の下で又大扁屋の屋臺が止まつてゐるらしくポソ〳〵話す聲にまじつてパタ〳〵と混爐を煽ぐ團扇の音がしてゐた。

（一九二八、一二、二〇）



默る

八木秋子

麟子は芭蕉のしたに立つてゐた。芭蕉の葉は大きくかぶさるやうに青々と揺れてゐる。右手の人さし指に手なぶりに巻きつけた手帛をほどいて、汗ばんだ襟あしをすうと撫でると、眩しさうにカラリと晴れ渡つてゐる空を仰いだ。風呂場の白壁を下の方から肥つたやもりがチロ／＼斜にひさしの方へ匍つてゆく。

風呂場――五右衛門風呂の――は離室(はなれ)の横についてゐる。離室から渡り廊下をまたぐと本堂の須彌壇の裏手で、陽のさゝない埃つぽい物置になつてゐて、經机のこはれたのや古い長持や、葬式の時だけにつかふいろ／＼な佛具が散らかつてゐる。草履をはいてその間をとほりぬけると高い本堂の椽に出るのだが、雨のかゝるにまかせた濡椽はふるび腐りかけて、燕の白い糞がおちてゐる。

やもりを廂まで見おくつた麟子は、誰か書院で話してゐる聲が、父と叔父のそれであることにふと氣がついた。こんなことは珍らしい。

H市でさゝやかな代書の店を市役所の前に出してゐる曾我清吉は、生れ故郷のこの村に娘をつれて歸省して、妹が梵妻となつてゐるこの寺の離家に逗留してけふで四日にもなるが、義弟である住持は、清吉が碁をうてないのを知ると――それよりもほかの氣持から義弟の應對を妻にまかせ自分はいろ／＼の口實をつくつては村の壇家へ碁うちに出かけて寺を留守にした。父の清吉がはるばる娘をつれて歸つた要務といふのは、麟子とかねて約婚者であるこの寺の息子の健一との間にはつきりした話をつけるためであつたから……。

清吉は住持に會ひたがつてゐるくせに、面と向ふと他人行儀な窮屈さで對手まで固苦しくさせるやうなものだつた。「うち割つたはなしが……」といふ段になると崩した膝まで立て直して妙にギラ／＼光る、物を窺ふやうな眼つきで、ぎごちない漢語をつかつて話し出すといふふうに――

「田中さんの內閣もいつまで續くものですかな……」

住持は鋏をひろひあげて爪を切つてゐる。

「民政黨の少壯連が倒閣運動だとかつて騷いでをるんだが――」

「ものになりますかなあ。そこの裏の太田が村會に出る運動をしちよりますよ。」住持はちよつと頤をはねて見せた。

「寺の本堂を貸してくれといつて大勢來ましてな、私もどの派に偕すといふ譯にもゆかず苦しい立場ですよ」

父はわざと眼をみはつて膝をすゝめるやうにした。「ほほう、さうですか……」

「どうも忙しくて。これから法事ですよ」和尙は立ちかけた。

「それは、なか／＼……」

袈裟をかけて庫裡の方へ行く和尙のうしろ姿を父は、怨めしさうな眼つきで見おくつてゐる。麟子は芭蕉の下で苦笑しながらその橫顏を見てゐた。すぐそばの無花果の下をくゞつた田舟が、積んでゐる織り莫蓙のはしを石垣でさらさらと擂りながら田川を流れて行く。

蘭の濃いにほひがあたりに漂うた。

「麟子、麟子！」叔母のこゑが離室（はなれ）でしてゐる。彼女はくるりと袂を飜して風呂場の白壁から顏を覗けた。

「おまへそこにゐたのかい。さ、上つてこれでも食べんか……しよことないやろ。」

胸のとこに菓子鉢を抱へて、やがては健一の嫁になるはずの麟子を見た。麟子は口が重く、それはかなり意固地なほどに見えた。

「それも無理はない、阿母さんが異ふんやもの、あたりまへや……」

叔母は姪に對する好意から獨りで頷いてゐる。

「麟子、きて、わしと一緒に臺所をせえや、氣詰りやないかお前一日中家にばかりゐて。」

「うん、うん、叔母さんに手傳へや。」父も叔母のあとをつけて氣を引立たせるやうに小さなこゑで吩咐けた。だが、直ぐ叔母は橫を向いて溜息をついた。

「この娘は、よつぽどいぢけとる。まるでみんな腫ものに觸るやうにせんならんやないか。」默つてさつさと洗ひものをして、そのまま境内のすみの鷄舍の前に行つて獨りになりたがる麟子の後ろ姿を見送つた。

――親の躾方が惡いんやないか、あんまりひどすぎる――そんな叔母の眼は、更めて淸吉の上に注がれた。

「なあに、お島、若い娘は喋言れんくらゐがええのや、家さえ持ちあ直きに心配せんでもベチヤクチヤいふよ」

どぎまぎしながらいひ譯する淸吉だつた。しかし、お島は不安さうな瞳を離さなかつた。さつきからの兄のわざとらしい氣構へがお島の神經を重くしてゐた。

「健一も官吏になるんやらうから……お上手口する嫁は要らんのやけど。」

妹はむつつりして言つた。そして心では思つた。――こんな陰險な親爺さんよつて麟子もさつぱりせんのやろかいな。

すると思はず口が滑つた。

「わしの好みやと、もつと活潑なのが好きや。まあどうやろあの着物の柄といひ、帶の締め工合といひ……まるで婆あみたいやないか。どこに一つ娘らしい可愛氣つてあらへん。」

淸吉はにがい顏をした。

「お島にや子供の敎育のことは判らん。」

さういつて吐月峰(はいふき)をぽんと叩いて煙管をおいた。

「健一が早う歸ればええのに、何をしとるんやろ。格別氣にせえへんけど……」

「あんさん何う思ふとるの？麟子を見とるとあんまり陰氣や。花婿を待つとるといふふうな氣になれへんのやらうかいな？」

お島は庫裡に行つた。流しの上で殘飯をあさつてゐる雄鷄を追ひ拂ふと、煤けた狀差しから健一の手紙を持つて來た。

「健一が不服らしう云ふてよこしとる。麟子が皆目健一の手紙に返事せんちうて……」

「ええよ、手紙など見んかて……」

そのくせ、やがてお島が庫裡の方へ立つて行つた間に、淸吉はくる〱卷いてある卷紙をひろひ讀みした。

「のうお島、健一かて哲學にかぶれとるのや、人生がどうのかうのつて、年齡ばかりいつてもてんから子供やな……」

それには應へずに妹は夏蜜柑の皮をむいた。

「似たもの夫婦や、は、は、は……」

淸吉は歪んだやうに笑つた。こゑを落してつけ加へた。「麟子もちやが、健一もしつかりせんと困るのう。」

「健一のことなら心配せんでもよろし。男一匹やさかいな。」

かういひきつた。しかしいつか愚痴になつて隣村から農民運動をやる男が出てから、寺の田地の小作料も何だかんだと減らされて、

いくら官費の學校とはいへ子供たちの學費が大抵ではないなどといふのだつた。話は麟子から遠のいてしまつた。

「お島、東京へもう一遍電報を打たうや、健一に早う歸れて‥‥」

「さうやな、麟子に驛まで行つて貰はう。もうとつくに試驗も濟んだはずや、ほんまに何しとるんやろ。」

濟吉は立ち上つて椽端にでて氣のない背伸びをした。

――わしも早う歸らんと月末の勘定にさし問へるんやがな‥‥

寺の境内を出た麟子は、村へ歸るために父から叱るやうにして厭々買はされた短い大根みたいなまがい水牛の柄のついた流行洋傘を陽に向けてかざすと、白く乾いた人通りのない田の道を、電報打ちに驛の方へ歩いた。

道ばたの溝で、田に水を落すために水車を踏むでゐる村の人がふり向いて麟子を見てゐた。水田の上に白い五月雲がぽつかり浮んでゐる。

彼女はそのそばを俯向いて、空氣草履から上る白いほこりが煙のやうに水田に舞ひ擴つてゆくのを、凝つと瞶めながら歩いた。

「こんなセルのよそ行きの恰好で、妾は何のために村へ歸つたのだらう〳〵」

田の中に働いてゐる人達を見ると、自分を憫みたいやうな、眞直に向いて歩けない氣がした。田水を切つたり、茄子の苗床をつくつてゐる忙しい村を、青白い顏の女がパラソルを翳して通つてゐる。濟まない感じだ。泥まみれな手甲や脚絆で田の中にゐる女達がみんな自分をみてゐる。――

「誰が、だれがこんな着物をきて歩きたいものか。」

寺の古びた白壁は城廓のやうにどこまでも水田を續らせてつゞいてゐる。村の農家は小さな、黒く煤けた柱の傾いてゐる藁屋ばかりだ。麟子は、ただ廣い水田ばかりの平野の、向ふにこんもりと紫色に盛り上つた山の裾をめあてに、埃をあげて歩いた。

――電報を打ちに行くのだ。そのことが彼女の心を重くした。健一が歸つて來る。そして麟子を見る。お島は麟子に不滿をもつてゐるけれども、健一さへ愚圖つかなければ凡てはずる〳〵片附いてしまふだらう。

「片づいてしまつたなら、叔父や叔母や父は、みんなそれぞれの違つた思惑から顏を見合せて擽つたい笑ひをわらふのだらう‥‥」

道のそばの溫もつた田水の中で、泥をはねながら泥鰌がうじようじよしてゐる。

「わたしはなぜ默つてゐたのか? なぜ初めにきつぱり嫌だといひきらなかつたのだらう。」

さう思ふと悲しかつた。從兄妹といふ一つの方便の結婚! それもふたりの心持を碌々確めもしないで、叔母と父とがすつかり御膳立をしてくれた。しかもどうだらう、叔父も叔母だつて決して自分

に好意を持つてもゐないぢやないか。

叔父と叔母は父の方から「麟子を健一の嫁に貰つてくれないか」といはせやうとしてゐる。――どうも風變りな娘で、ほかによい貰ひ手もあるまい。といつた思はせ振りな好意から……。

父は父で――ひとり娘の麟子で惜しからうが、どうか一つ嫁にくれないかと向ふから頭を下げて來るのを、待ちあぐんで心の中では苛々してゐるのだ。

麟子はすべてが自分を中心にしてつくり出されてゐる雰圍氣を思ふとペッと、唾でも吐き度い氣がした。

――親から夫へ…妾はいままでたゞの一度でも自分自身の生活を持つたことがあつたらうか？ああ、いやだいやだ、健一さんなんか、問題ではない！

麟子はふつと自分に女性としての魅力が缺けてゐる事を考へて、水のやうな淋しさが湧いた。

――どうとも、なるやうになれ。

しかし、その下から、綺線なんていつたい何だ！――よし、そんならみんなですつかり御膳立てをした最後のどたん場で、見事にそれを覆してやるから！

熱く、反撥してくれるものをあたまに感じた。だが、と麟子は自分に訊いて見た。

――一切の妾の不幸はみんな、妾が默つてゐるところから生れるのぢやないか、どうして私は自分の思ふところを卒直に、人に語れないのだらう。

幼い時から壓しつぶされ通して來たせいだらうか、食べもの、事から着物の柄の見立てまで父がしてくれた。男の人とは勤め先でも口を利いてはいけない。小說など讀むことは以ての外だ――。まるで妾は意志も感情も持たない道具のやうに、たゞ働きつゞけて、してくれるまゝに面倒臭いから默つて來た。

默らせられたんだ。壓制は絕對だから………

わたしは自棄になつた。ひねくれた。その妾を瞶めて自分ながら怕ろしかつた。その時わたしの性癖はどうともならない深みへずるずるはまつてしまつてゐた。それから脫れやうとする自分を妾は冷笑した。

思ひきつて拈くれてやれ！

拈くれてひねくれて自分自身を虐めるのだ。滅びるんだ。そしたら父や繼母が今更のやうに周章て出すだらう…態を見ろ！　暗い陰慘な惡魔の復讐だ。

そこの田には村の人の姿も見えない。灼けた白い道だ。麟子は額の汗をぐいと拭ひあげた。襦袢にじつとり汗が泌みてきた。

水田を渡る生溫い石灰くさい風が、激しい胸の動悸を吹いた。くら〳〵しながら機械的に足を運んだ。驛が見えた。

山脈の裾を汽車が喘いで來る。驛の廣場につんである豆粕肥料に

蒼蠅がまぶれついて味噌の臭がした。

麟子はせまい待合室に這入つていつた。短いホームに村の人が二三人立つてゐた。裾よりべつとり汗のでた脚にまとひついた。麟子は待合の長い木のベンチに腰を下して倒れさうになる自分の體を支へた。

……汽車の賃銀表が呆やり眼にはいつた。すると手が帶の上から財布を押へ、洋傘が手から離れて三和土の上に倒れた。

汽車がホームにはいつてきた。

明け放した窓から旅客の暑いけだるい顔がばちばち扇子を使つてゐる。麟子はふらふらと立ち止ると、よろけるやうに出札口の方に行つた。

「義姉さんやないか?」

霜降りの汗をしませた中學生が、ばらばら村の方へ改札口を出る中から、健一の弟照俊が麟子のあとから聲をかけた。

麟子はわあつ! と譯のわからない叫聲をあげたい氣持だつた。笛をのこして汽車は出て行く。

「何しに來てるのや?」

彼は帽子を脱いで白い覆布で額を拭いて薄笑ひしながら尋ねた。

麟子は默つて電信の受付窓に行つて頼信紙を出した。そして、唇を嚙みしめながら白い埃の上る乾いた道を村の方に歸つた。照俊は不機嫌な麟子の方をちらりと見ながら、學校友達と一緒に歸らなかつたことを後悔してゐた。

「照俊も一緒やつたのかい?」

庫裡でお島は洗濯物に糊をつけてゐた。麟子は叔母をさけるやうに離室に行つた。父が煙草盆を横にしてうたた寢をしてゐた。渡り廊下の廂にかけてある風鈴が思ひ出したやうに鳴つてゐる。

帶をとつて平常着にきかへると、張りつめてゐた胸が堪えられなくなつて、涙がほろほろ頰をこぼれた。

衣摺れの音で眼をさました父は薄眼をあけて、起上ると胡坐をくんで煙管を吸つた。脂のやける陰氣な音がヂヂと音を立てた。

「麟子、何うしたのや?」

麟子は小さな聲をあげて泣いてゐた。

「何うしたのや、云うて見い、阿父さんやないか、遠慮いれへんがな、何や?」

父は立ち上つて麟子のそばにきて、默つてゐる彼女の肩を搖ぶつた。

「何や、げんのわる……寢入ばなを起しくさつて、阿呆かい。」

いひすてゝ庫裡へ顔を洗ひに行つた。

部屋の中は暑かつた。叔母は渡り廊下まで來たが、ぎごちない離室の空氣を感じて、好奇的な瞳を投げながら庫裡に戻つた。

父が歸つてくると彼女は疊に俯向いてゐた。
「私、自家に歸りたい……今晩でも立たう。」
「何いふのや、健一も戻らんのに。」
「わたしは歸ります。」
「根つから子供やな、お前は……よつしや判つた。健一が歸り次第わし等も逗留うち切りや、早う歸らんとわしもあかんわ」
ぎよつとした父は、自分を誤魔化すやうに、歯のぬけた口をあけて空笑ひした。
「健一さんとも嫌や、誰とも結婚したうない。」
「今頃になつて何言ひだすのや、まあええわ、儂に委しとき、あんじようするさかい。」
「嫌です。」
「嫌とは何や、親に刄向うて、も一遍云うてみい阿呆が……誰が金つかうて此所にきとるのや。みんなお前の爲やないか、ええ加減にせ。」
「ほつといて下さい。」
「ほつとかれへん。また何でやな、けつたいな今頃になつて愚圖々々と……ええわ、氣を鎭めえ、あたらんかてええ。」
「いゝえ、妾は、これから自分ひとりで何でもやるんです。干渉しないで下さい。」
父は落付きを裝ひながら莨を煙管につめた。
「ひとりでやれるもんならやつてみい。どうして食へるかい。」
「働いてゐるから……」
「うん、水道會社の事務員か、働いとる働いとる大きな口きかんでええ。お前の勘定は一文も自家で使うとりやんせのや。みんな嫁入仕度に這入とるんや、阿呆が。」
「妾、ブルヂョアと異ふわ。いい着物も欲しうない。たんすに寢かしとく着物なんて、妾、賣つて欲し！」
「それで世間が渡れると思ふか。何や。」
「渡れへんでもわたる、妾もう恐れへん。戰や……そんな壓制と戰ふのや、恐れん。」
「そやから儂が本を讀ませんといふたのや、生意氣になるよつて。麟子……儂にや權利がある。わしは儂の思ふやうにする、默つとりやええ氣になりくさつて……」
「父さんには判らんのやろ。妾のこまかい氣持が。父さんは何やろ？妾がいま健一さんと一緒になると都合わるいやろ、それは家の足にならんて云ひはるけど、妾が勤めとるんで自家助かる位のこと、妾かてよう知つとる。父さんは妾と健一さんを結びつけといて、二年か三年したら一緒にしたろといふ考へだつしやろ、妾はその考が嫌です。親の吩附やからて默つとれへん。妾はもつと自由な生活が欲し。世間なみの夫なんか嫌や。親が勝手に決めたやうな——妾は決心したのや、容赦せえへん。戰ふのや、何もかもと戰ふのや！」

「……莫迦！」

耳許で大きな罵聲がきこえたと思つたら、瞬子の膝をいやといふほど、飛んできた煙草盆が打つた。鼠色の灰が疊に散らかつて、吐月峯が轉がつて椽から下に落ちた。

太田勘吉の家から、藺を織る機のコマの音が、ぼんやり耳に聞えてきた。

その翌日の午後、健一が村に歸つてきた。無理に日本髮を結はされた瞬子は、自分の心がかたく武裝しやうとしてゐるのを感じた。洋傘をさして迎へに驛へ行く途中、叢の蜥蜴を叩いて柄を二つに折つてしまつた。

父は怒るかはりに、――柄を修繕すればいゝ。と、氣を兼ねるやうにいつたきり默つた。

健一の背廣の姿がホームに立つた。改札口に並んだ肉親や瞬子の田舍びた顔を見ると、落付きを失つて、變に不機嫌な表情だつた。

「こんなに大業に出迎へるなんて……みんな來ないでもいゝぢやないか」

息子は最初に不平を鳴らした。頭髮が油でカッキリ分けられどことなく都會のにほひがした。

どやどやと驛を出て、水田の間の乾いた道で、健一は照俊とならんだ。みんな汗をふきふき歩いた。蝗が跳びそこねて、道に落ちたりした。珍らしさうな面で健一は立止つた。お島は追ひついて、息子の歸省がおそいために心配してゐたことや、新任地はどこかとか、暑いから上衣をとつた方がいゝなどゝ、少し昂奮しながら話して歩いた。

肝心の瞬子は、桃割のあたまに埃が灰色の化粧をし、汗ばんだ鼻のさきを赤く光らせながら一ばん後ろからついて行つた。叔母は時々振りかへつて瞬子を健一とならべて歩かせやうとしたが、彼女はしつこく默つて知らん顔してゐた。盛り上つた胸の下で、橙色の帶がぎごちなく皺ばんでゐた。

清吉は何度も健一に追ついて會話の仲間入りをしやうとしたり、バスケットを持つてやらうと話しかけたが、健一はいやに叮嚀な言葉づかひでことはつてゐた。

叔父は法事に行つてゐなかつた。

自轉車に荷物をつけた照俊をさきに、みんなは寺に歸つた。ぐつたりするやうな暑さの日だつた。寺の境内で石工が墓石をきざんでゐた。

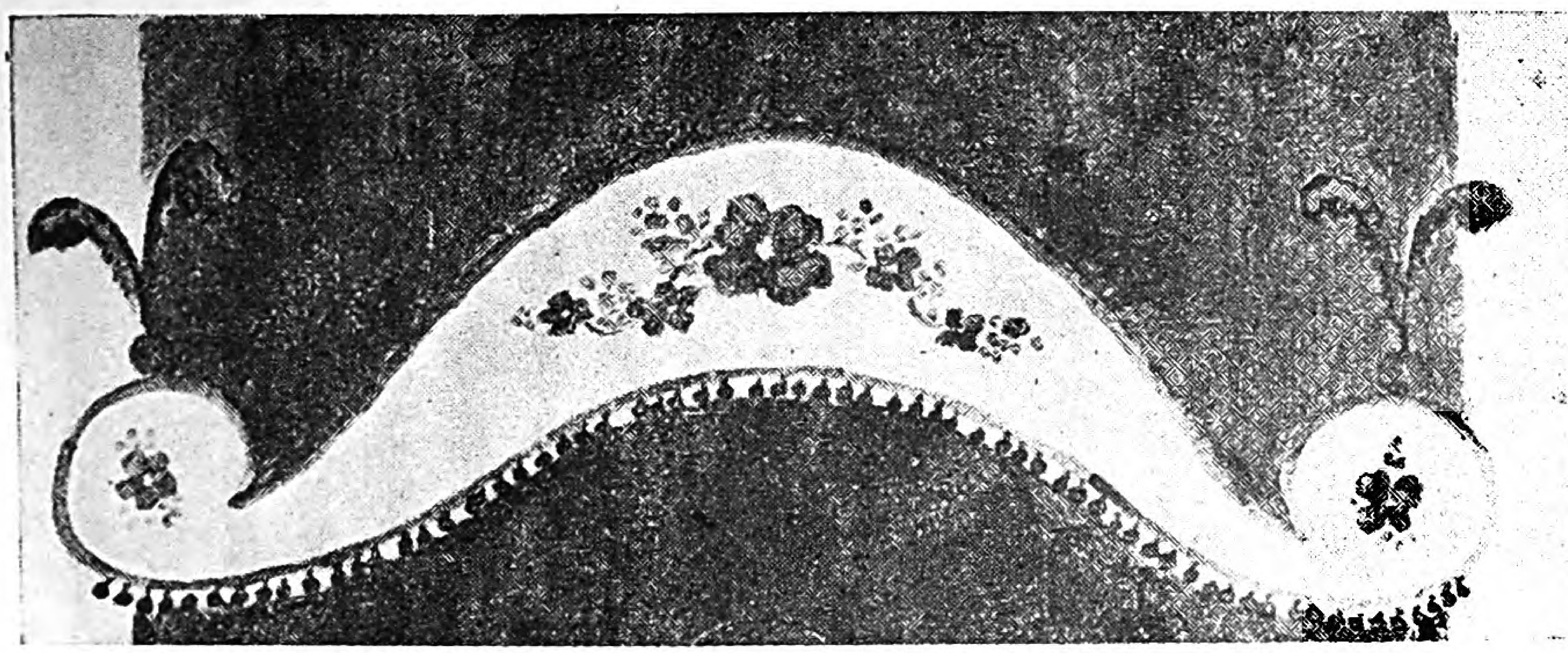
風呂がわいても健一は、ぐずぐずと行李の中のものを取り出したり、脱いだ服を叮嚀に疊んで見たり――釜場で照俊が煙さうに燃しながら猿又一つで何度も兄を呼んでゐた。

風呂場の上にさし出てゐる松の枝から、ぼつてりとした毛蟲が落ちてきた。瞬子は離室の窓から首を出して、土の上にペッペッと唾

を吐いた白ちやけた唇の色だつた。
芭蕉の葉の上の空は光りがうすれて、夕雲が出てきた。その頃、書院に食卓を出して家族はそのまわりを圍んだ。
「お上人は？」
「まだ歸らんの。」
清吉はその方が窮屈でないらしい。
「健一、いつぱいやれ！　お祝ひぢや。」
「學生の時とはちがふんや、世間に出たのやけ、叔父さんの相手してうんと呑め、よう」
物入りだからええ加減にした方がいいと、さつき臺所で注告した健一をお島はおずおず見上げた。そして麟子にいふのだつた。
「麟子、とりもちが悪いのう……」
「銚子はかう持つのが方式やて、ほら、かう……おつと、と、と、と、こぼれるよ。」
末子の小學生が可笑しさうに顔の朱らんだ叔父を見上げてゐる。
「酒を買つたの？判らないな、そんなにせんでもいいつて言ふのに」
健一は盃を下にをくと母に言つた。
「ええ、判つた。そんなこと言ふなてや…　機嫌よう酔うてくれ。なあ清さん。」
酒に弱い父はとろんとした眼で合點々々した。健一は斜に座つた麟子の腰のあたりへ時々眸をなげた。そして、夜の想像が彼の神經をゆすぶると、ぐい〳〵とつゞけて盃を干すのだつた。
「麟子もひとつどうや？　ちつとはいけるやろ、お祝ひ酒やさかい……」叔母が窪んだ眼のふちを染めて麟子にずり寄つた。
「……………わたし、ちつとも呑めん。」
膝を噴めてゐる麟子は頰に健一の瞳を感じながら、ぢり〳〵と近づいて來る怖しさにこゝろが慄へ、おほごゑに何か呼び出したい氣持だつた。
「や、お上人が歸られたのやろ……」
叔母は庫裡に行つた。書院にきて突つ立つたまま叔父は健一を見た。健一は座り直した。
「ええよ、飲めのめ……」
そして庫裡に引つこんで、柱時計の下にある火鉢の前に座つて、ぽんぽん煙管を叩いた。健一も立つた。
「は、は、疲れたやらう……ふうむ、東京もそない暑いかのう、ふうむ……」
そして叔父は茶をのむで土間に下りた。
「のんさま、折角、みんな揃つとるのやから……用はあとにしなさつたら。」
「ええよ、儂は儂ぢや。遅うならんうち歸つてくる。」
自轉車をガタつかせて黄昏の境内に消えて行つた。お島は臺所に立つて茫やり考へてゐた。

「阿母さん、叔父さんが呼んどるが‥‥」
座にきて見ると清吉が酔つて、茶碗を箸で叩いてゐた。子供がキヤツ／＼囃し立てゝゐる。健一は猿又一つになつて、默つて酒をぐい／＼のんでゐる。脂ぎつた額に筋が浮いた。
「よし、阿母さんがひとつ、お前の卒業祝ひに三味線をひかうえ。」
息子からの盃を一いきに飲み干すと、叔母は立つて行つて暗い押込から絃のきれた古ぼけた三味線をとり出してきた。
「麟子、聞きい、叔母さんにもこないな藝が有るのやぞ――」
唇を歪めて、乾いた皮膚の幅の廣い平首を曲げて、低く爪彈きしはじめた。
「安來節や――あらえつさつさと‥‥」
小さいこゑで唄ひ出した。
夕明りが薄れて暗くなつて來た。照俊が臺所から臺ランプをさげてきて灯を入れた。灯がちら／＼動いた。
「お島、こんだお博多節をやれや。」
「ええかい麟子、こんどはな‥‥」
杯をなめて、叔母は笑つた。眼を細くして少し膝を崩したこの梵妻が灯の中に、ぼんやり浮び出た。
――高い山から谷底みればあ‥‥
水田では蛙が啼きはじめてゐる。
麟子はそつと立ちあがつて、暗い離室へ行つた。

暗い夜だ、星が光つてゐる。
ばたばた夜目にも白い水田の道を歩いた。足もとは晝のほてりで氣味のわるい暖かさだ。麟子は洋傘をつかんで山の裾の小さな灯をめあてに急いだ。何も考へられない。――拔け出して來たのだ。
「九時の上りに間にあへばよいが‥‥」
水田の上を早い螢がすい／＼飛んでゐた。



くに子の自殺　二幕

辻山春子

時。春

所。或る大都會に續いた田園小村

人。母　五十二三才

かつ子　二十八九才

龍夫　二十五六才

くに子　二十二三才

——第一幕——

大小二つの室、下手の大きい室は茶の間、上手の小さい室は箪笥等ある納戸、茶の間の奥は臺所へ、下手は座敷と玄關へ通じる心持、春の夕方。奥の臺所で母が夕食の支度をしてゐる音がきこえる。

間

母登場　チヤブ臺を出して茶椀、皿等をおき、臺所から、鍋等を運ぶ、又臺所へ退場。

かつ子玄關から登場。

かつ子　只今。

母の聲　かつ子かい。

かつ子　ええ。

母の聲　早かつたね。

かつ子（納戸へ行つて袴をぬぐ）　お母さん、くにさんはまだなの。

母（登場）　まだだよ。

かつ子　あの人は此の頃毎日遅いやうね。

母　學校が忙しいのだらうね。

かつ子　さあ、どうだか（下手の座敷へ退場）

母　かつ子、わたしは一寸八百屋まで行つて來るからね。

かつ子の聲　さう、行つてらつしやい。

　母、臺所から退場、かつ子、手に一通の封書を持つて登場、火鉢の前に坐つて裏がへし裏がへしためらつてゐるが、ついに封を切つてよんで行く、段々不快な表情になる、下手で音がする、かつ子あわてて手紙を懐に入れる、

龍夫（玄關から登場、洋服である）　只今。

かつ子　お歸り。

　（龍夫又座敷へ退場、荷物をおいて直ぐ出て來る、納戸へ行つて着物と着かへる）

龍夫　お母さん。

かつ子　お母さんは買物よ。

龍夫　困るなあ、僕は急ぐんだが……

かつ子　又何處かへ行くの。

龍夫　何處へも行きやしないけれどおなかがひどく北山なんだ。（チャブ臺の前に坐る）姉さん、僕に御飯をよそつて下さい。

かつ子　お母さんは八百屋までだからもう一寸待つてらつしやい、あたしにはお菜の都合が分らないから。

龍夫　チョツ、唯つげばいいのだらう（そこらの新聞をひろげてみる）

かつ子（考へこむ）

龍夫（ふとかつ子の顔を見る）　姉さんの研究課業は何日だつけねえ

かつ子　昨日よ。

龍夫　ほう、もうすんだのか、批評はどんなだつた？

かつ子　分つてるぢやないの――あたしはいつだつていい方よ（何だか上の空である）

龍夫　そりやさうでせうとも、姉さんは優良訓導だから（笑ふ）課業位お茶の子さい〳〵だらうさ。

かつ子　ねえ龍夫さん、あんたくにさんの此の頃の態度を變に思はない？

龍夫　さあ――なぜ。

かつ子　だつて、どうも變だ。

龍夫（憮然として）えつ――では、では。例の病氣が出たのだら

うか。

かつ子　え、――(意味が分つて一生懸命に)違ふつたら、そんな事ぢやないの。

龍夫　さうか――(ほつとする)

かつ子　なぜそんな事云ふの。

龍夫　いや――何だか此の頃くに子の顏色が靑白い樣だのに姉さんが變だなんていふものだから、ふつとさう考へたまでさ。

かつ子　さう、でもそんな事ぢやないわ。

龍夫　ぢや何?

かつ子　毎日學校の歸りはおそいし、それに何だかよく出歩くやうぢやない?

龍夫　さうかな。

かつ子　今日だつてまだ歸らないわ、學校は一番近いくせに――

龍夫　しかし遲くつたつていいさ。

かつ子　いいえ、よくないわ、若い女だもの、毎日日が暮れて歸るなんて。

龍夫　戀でもしたのだらう。

かつ子――(龍夫を見る)

龍夫　いいさ、戀する位――

かつ子　まあ、何て事をいふの――あたし達はそんな危險に近づいてはいけないのよ。

龍夫　しかし戀位しなきや生きて行けないよ。

かつ子　そんな事があるものですか。

龍夫　少なくとも僕は生きて行けないな。

かつ子　でもそんな危險に近づいて、のつぴきならない樣になつたらどうするの。

龍夫　のつぴきならないつて結婚の事だらう、僕はそんな氣持にならない樣に戀が出來るから――

かつ子　男は出來るかも知れないわ、しかし女には結婚のともなはない戀なんて考へられないものよ。

龍夫　さうかな。

かつ子　あたし達はそんな火遊びはしてならないものよ。

(臺所で音がする、いつの間にか電氣がついてゐる、母登場)

母　おや、龍夫もお歸りだつたね。

龍夫　ええ、さつき。

母　くに子はまだかい

かつ子　まだよ、困つてしまふ。

龍夫　お母さん、早く御飯にして下さい、僕はおなかがぺこ〱なんだ。

母　ぢや、先にしようかね、(皿にお菜をつぐ)

かつ子　(チヤブ臺の方へ來て椀に飯を盛る)毎日陽が暮れて歸るな

んて隨分ね。

母　どうも困つたものだね。

龍夫　――(無言で食ふ)

(かつ子と母も箸を取る)

母　これ、少し酢が强かつたね。

かつ子　いいえ、おいしいわ。

(下手で音がする)

くに子　(登場) 唯今

母　お歸り。遲かつたね。

くに子　ええ、忙しかつたものだから(納戸へ行つて袴をぬぐ)

母　さあ、御飯をお上り。

くに子　ええ(チヤブ臺について箸をとる)

(間)

龍夫　お茶を――

母　(茶戸棚から茶筒を出してキユウスに入れる)

龍夫　(茶をのんで楊子で齒をせゝる)

かつ子　(箸をおく)、御馳走樣。

母　くに子、お茶をかへてあげようか。

くに子　いいえ、もう澤山。

母　(箸をおいて頭を下げる)

かつ子　くにさん、あんたの學校は今何か研究でもやつてるの、

くに子　なぜ。

かつ子　でも、あんまり毎日歸りが遲いから。

くに子　學校全體としては別に何もないけれど――

かつ子　さう、ぢや明日からも少し早く歸つたらどう、若い女が毎日日が暮れて歸るなんて考へものよ。

くに子　だつて仕事が多くつてさう早くは歸れないから、(落付かなさうに食事をすます)

母　學校もなかなか忙しいだらうね。

かつ子　いくら忙しくつたつて、さう毎日遲くなるものぢやないわ、あたしだつて同じ仕事をしてゐるんだもの――とにかく明日からもう少し早くお歸んなさい。

くに子　けれど自分のクラスを少しでもよくする爲には、今のあたしにはしてもしても仕事がすまないのよ。

かつ子　いくら仕事が多くつたつて毎日々日がくれるまでする必要はないわ、まして若い女がそんなぢや近所の手前も變だし――

くに子　姉さんはまるであたしがいたづらでもしてる樣なふうに仰有るのね。

かつ子　さうでなければ幸だけれどね。

くに子　そんな事はまるでないわ、あたしは今自分の仕事に全身を打込んでるの、自分のクラスの五十人の子供達の、一人一人の個性を、どうしたらより素直に、より大きく延す事が出來るかつ

一生懸命なの、それより外にあたしの興味をひく事はまるでないわ。

かつ子　そんな風だつたら安心だけれどね、どうも變ね。

くに子　なぜなの、姉さんこそ變だわ。

かつ子　それぢやとにかく明日からなるべく早くお歸んなさいよ。

くに子　いやよ、するだけの仕事はしなきや歸らないわ、あたしは別に悪い事をしてるんぢやないから。

かつ子　くにさん、あんた、本當に悪い事はしてないの。

くに子　しつこいのね、あたしは自分の天職に忠實なだけの事よ。

かつ子　生意氣な事ばかり云つてさ、――藪を突つついて蛇を出すものぢやないよ。

くに子　生意氣ですつて、何故よ、あたし達は敎育を天職として働かうつて誓つた筈だわ。

かつ子　あんた、それを覺えてるの――いたづらしてる癖に――

母　かつ子、もうお止しなさい。

龍夫　姉さん、大ていになさい、くに子が本當にそんな事してるかどうか分りやしないでせう。

かつ子　いいえ、あたしは證據があるから云つてるのよ。

くに子　どんな證據があるの、遲く歸るつて事は證據にならないわ

母　これくに子、お前ももうお止しなさい。

くに子　だつて姉さんがあんまりな事おつしやるから。

かつ子　あんまりかあんまりでないか自分の胸に手をおいてよく考へてごらん。

くに子　そんな覺えはありません、疑ふのも大ていにして頂戴。

かつ子　くにさん、ぢやこれは何です、(懐から封書を出してくに子につきつける)

くに子　(のぞきこんで)まあ、あたしに來たのを、(ひつたくつて取る)姉さん、あんまりよ、失禮な――(泣く)

かつ子　それでも悪い事はしてないつて云ふの、しかも友達には打あけてる癖に親兄姉にはかくしてさ、ほんとにずるい人ね。

くに子　(泣きながら)　人の――人の――なんで、なんで人の手紙をだまつて破くの信書の祕密を守らないなんて――野蠻人――惡人――

かつ子　くにさん、罪人つて誰に云ふ言葉、あたしはあんたの姉よ。保護者よ、肉親の間にまで法律を持出していいの。

くに子　分つてるわ――罪人――畜生――。

母　くに子つたら――

龍夫　くに子、落付いて話さうぢやないか。

くに子　(身もだえして泣く)しらない――しらない――あ、あんまりだわ。

(間)

かつ子　手紙をだまつて破いたのはあたしが惡るかつたわ、でもあ

たしはくにさんの身を氣づかつたからよ、ふみあやまらせたくなかつたからよ――あたし達は人とは境遇が違ふ筈でせう。

母　（背をさすつてやりながら）ねえくに子、泣かないで姉さんによく事情を話してごらん。

龍夫　さうさ、くに子にも考へがあつてした事だらうからね。

（間）

（くに子の歔欷少ししづまる）

かつ子　くにさん、あたし達には恐しい病氣の遺傳があるのよ。

龍夫　姉さん、分つたお話はお止しなさい。

かつ子　いいえ、分つてる事だから云ひます、あたし達はいつ體が腐り始めるか分らないのよ――まるで爆彈を抱いてる樣なものね

（泣く）

（母も泣く）

（間）

かつ子　だから兄弟三人で約束したでせう、結婚しないつて――誰だつて忘れる筈はないわね。

（間）

龍夫　忘れやしないさ――しかしそれが不自然だつて事は姉さんもみとめるだらう。

かつ子　なぜ不自然なの。

龍夫　なぜつて――戀をするつて事は、いや、もつと正直に云へば性慾つてものはどうする事も出來ない人間の本能なんだからな。

かつ子　性慾つてものは、そんなにあたし達の生活の大部分を支配するものかしら、あたしにはさう思へないわ、そんな事は敎養と意志とで充分抑へて行けるものよ、少くともあたしは今まで抑へて來たわ。

龍夫　その點姉さんには感心してるが――しかしどうも男と女とは違ふらしいな。無論一人一人によつても違ふ事だらうが――

かつ子　もつと大きな目でみればそんな事はどうだつて出來る事よ、あたし達の持つてる遺傳がどんなに悲慘なものだか考へてごらんなさい。あたしはたしか七つ位だつたけれどはつきり覺えてるわ。お父さんがおなくなんなすつた時の事をね――病氣はまだひどくは出てゐなかつた樣よ、でもそれを大變恥ぢて自殺なすつたのよ、どんなにみじめなものだつたか――お父さんは自分の體に出たその負擔を背おひきれなくつて、まるで氣狂ひのやうになつて毎日お母さんをいじめてらしたわ。

母　かつ子――

かつ子　いいぢやないの、云つたつて――あたし思ひ出すと身慄ひしたくなるわ、お父さんは自分の體が腐つてしまふまでたえきれないで、とうとう自分から命を絕つて解決なすつたのよ、それ程みじめな氣持が他にあるかしら――あたしはこんな悲慘な氣持を自分の子孫に與へたくないの、絕對に――いつ病氣が出るか分ら

ないつていふ、それだけの不安すら、あたしにはたえられない程だもの。

龍夫　その不安は僕だつて同じだ。

かつ子　だからあたしはどう考へたつて戀だの何だのつてそんな火遊びみたいな事は出來ないの――あたし達はそんな人並の幸福はうけられないのよ。

龍夫　しかし、だからつて全然そんな事に近づかないで一生過す事は出來ない。

かつ子　出來るわ。

龍夫　出來ないさ、不自然だ。

母　若いうちはなかなかねえ。

かつ子　そしたらあんたは三人の約束にそむくの。

龍夫　そむきやしないさ、そむかなくつたつて男には社會制度が賣春を許してるから、唯、女の場合がね――僕には分らない。

母　一生一人身では無理だからね。

かつ子　そんな意志の弱い事で約束が守れるもんですか、女にはそんな妥協點はないのよ。

龍夫　しかしくに子にも何か考へがあるだらう、ねえくに子。

くに子　（うなづく）

母　ぢや姉さんによく話してごらん――可哀さうに若い身空でねえ――

かつ子　お母さんたら、そんな事云つて困るぢやないの。

母　だつてさ――とにかくまあくに子の考へも聞いてやつてごらんよ。

かつ子　ええ――ぢや、くにさん話してみて頂戴。

くに子　ええ――姉さんすみませんがあたしに結婚を許して下さい

かつ子　ええ――まだそんな事云つて、あんたはお父さんの様な悲慘な運命を自己の滿足の爲に愛する子孫に與へてもいいの、いいえ、子孫だけでなく社會に對してそれでいいの、あたし達のきたない血潮の流れに淸い血潮の人まで引入れて、それですむかしら、恐しい冐瀆だわ。

くに子　姉さん、もつと先まで聞いて下さいつたら、結婚したからつてあたしに必ず子供が出來るときまつてはゐないし、又ぜひ作らねばならない事もないでせう。

かつ子　結婚したら子供が出來るものと考へるのは當然ぢやないの

くに子　いいえ、避姙法だつてあるわ。

かつ子　まあ――しかし萬一にも出來ないとはかぎらないわ。

くに子　大丈夫だわ、でももし出來たとしたつて、現代の醫學は母體に何等の影響も與へないで解決してくれるわ。

かつ子　あんたはそんなまどろつこい、恥さらしな事をしてまで結婚したいの。

くに子　分つてゐるわ、そしてそんな事は決して恥さらしな事でも

何でもないわ。

かつ子　まあ何んてきたない――くにさんあんたの體はもう汚れてるのね、だからそんなはづかしい事も平氣で云へるのよ。

くに子　姉さん、何て事を仰有るの。

かつ子　いけない、決して結婚する事は出來ません。

くに子　いいえ、あたしはします。

かつ子　許しません。

くに子　姉さんに何の權利があるの、いらぬお世話です。

かつ子　いらぬ世話だつて――馬鹿な（思はずくに子を突く）

くに子　あつ（倒れる）

母　まあ、かつ子。

龍夫　姉さん。

かつ子　（立上る）なんて恥知らずな、きたならしい人だらう、勝手になさい、あたしは知らないから（荒々しく下手へ退場）

くに子　（起きる）勝手にしますとも（泣く）

（間）

龍夫　くに子、お前本當に戀してるの。

くに子　（うなづく）

龍夫　そしてさつき云つた樣な苦心をしても結婚したいのかね。

くに子　ええ。

母　わたしは無理もないと思ふ。

龍夫　さうですね。

くに子　姉さんは自分がオールドミスになつたもんだから嫉妬して、あんまりだわ、あたし結婚しても子供さへ作らなければいいと思ふんだけれど、兄さん、それでも罪惡でせうか。

龍夫　僕はいいと思ふ、ねえ、お母さん。

母　わたしには分らないけれど、惡い事ではないだらうねえ、一生一人身でゐて無理をするのもあんまりいい事ぢやないから。

龍夫　さうですよ。

くに子　お母さん、有難う、あたし助かります。

龍夫　しかしねえくに子、お前の戀人はもううちの遺傳について知つてるんだらう。

くに子　え。

龍夫　これだけは結婚前にはつきりと諒解を求めておかないと大變な事になるよ。

くに子　ええ。

龍夫　どんな事があつてもこれはかくしてはならない事だ、例へば正直に云つて戀人に捨てられるとしても、戀人は諒解しても兩親達が反對するとしてもだね、これだけは公明正大にするんだ、これは僕達の背負はされた十字架なんだ。

くに子　ええ。

龍夫　正直に打あけてもし戀人の熱情がさめたらくにさんはあき

らめがつくかい。

くに子　――

龍夫　苦しい事だけれどあきらめるんだね、くに子、男の心つてものを信じすぎてはいけないよ。

くに子　あたし大丈夫だと思ふの。

龍夫　さうかい――ぢやまだ打あけてないんだね。

くに子　え――でも云へなかつたの。

母　くに子、その人はどこの方かい。

くに子　あの――同じ學校の。

母　やつぱり先生だね、

くに子　（うなづく）

母　お前が正直に話して捨てられてもね、お母さんのゐる事を忘れてはならないよ。

くに子　え。

龍夫　さうだ、見苦しく取亂してはならない。

くに子　でも少しは話してるの、もしかしたらあの人は何もかも知つてらつしやるのか分らないわ。

母　さうだつたらいいがねえ。

（かつ子登場、目を泣きはらしてゐる、無言のまゝ納戸へ行つて袴をたゝみ始める、くに子靜かに啜泣く）

――幕――

――第二幕――

第一幕と同じ舞臺、第一幕より十日ばかり後の事、ある日曜日の夜、火鉢の前で龍夫が新聞をよんでゐる、臺所で母がごとごとと片付け物をしてゐる。

（間）

龍夫　お母さん、早く上つてらつしやい、「愛憎亂麻」をよんであげるから。

母の聲　さうかい、まあ一寸待つておくれ。

龍夫　ええ、早くなさい――此の頃はどうも自殺が多いなあ、五人の藝妓が自殺をはかる、退院出來ぬを悲觀してか、――此處にも、受持教師に叱られ自殺したか――（口の内でよむ）どうも氣の小さい生徒もゐるものだな。

母　（手をふきながら臺所から上つて來る）自殺が多いつて――

龍夫　ええ、春になつたもんだから、人間の神經も狂ふとみえてね。

母　いやだねえ、自殺なんて聞くとわたしは寒氣がして仕方がない。

龍夫　ぢやよみますよ――混血兒の怪盗、三、大義！だがそれなりで瑠璃幸は中々戻つてこない、浪右衛門、所在なさにチビリチビリと杯をなめてゐる、それを見た舞妓ども、お酌に立たうとした

けれども、浪右衛門が餘りむつつりしてゐるので取りつく島がなささうに互に目を見合して小さな欠伸・・・・。と、隣座敷の話聲が浪右衛門の耳に入つた「もとより我ら、この大義のためには疾くに身命を投げだしてゐるので御座る。」元氣滿々の聲である、どうやら血氣盛りの若侍らしい。――ほう西郷隆盛まで出て來たな。

母　面白くなつたね、――(聞き乍ら片よせてあつた縫物を出して初める。)

龍夫　お母さん、くに子は遲いですね。

母　遲いね、どうしたんだらう。

龍夫　僕は此の頃あれの事が氣にかゝつて仕方がない。

母　わたしだつて――何だか顔色が大變すぐれないしね。

龍夫　今日は何と云つて出かけたんです。

母　唯街に行つて來るつて云うて出たんだよ。だから夕方は早くお歸りつて注意したんだけれどね。

龍夫　何だか大變ふさいでますね、それに姉さんとはあれからちつとも口をきかないし。

母　困つたものだね、どつちも强情つぱりだから――わたしはどつちの氣持も分るんだけれど。

龍夫　仕方ありませんよ、もう暫くほおつとかなきや、しかしくに子の事あれからどうなつたのかしら、――お母さんは何か尋ねましたか。

母　いいや、氣がひけて何も尋ねられないんだよ、だつてあんまりふさぎこんでるから可哀さうでね、でも、昨日は一寸、姉さんに一言あやまる樣に云つておいたよ。

龍夫　さうでしたか、そしたら何て云ひましたか。

母　ではあやまりますつて、小さな聲で云つたけれどね、まだ詫びてはゐないやうだ。

龍夫　何もあやまらなくつたつていいさ。

母　だけれどね、人間つてものは誰にでもよくしておかないといつ何時どんな不幸な目に合ふか分らないからね、殊に兄弟なんかふだんは別々な暮し方をしてゐても、さあつていふ時助け合はなきや何にもならないよ――くに子がもし結婚するにしてもこんな家筋だから、もしもの時歸つて來る所がなくては心細いだらうと思つてね。

龍夫　お母さんは先まで考へてますね。

母　性分なんだね、わたしはどんな時にでも行きづまらない樣に、ぬけ道を考へておかないと生きてをれないんだよ、まあいはば臆病者なんだね。

龍夫　しかしその方が失敗はないでせう。

母　それはさうだけれど――(柱時計を見上げて)おや、もう八時をまはつたよ。

龍夫　どうしたんだらうな、くに子は――

母　どこかで氣分でも惡くなつたんぢやないかねえ――

龍夫　まさか。

母　けれど此の頃はどうも體の具合が惡いらしいから分らない

龍夫　さうですね、あんまり顔色が惡いやうだ、一度醫者に見てもらふ様に云ひませう。

母　――

龍夫　ひよつとしたら肋膜でもやつてるんぢやないかしら、

母　さあ――さうだといいんだがわたしはもつと惡い事を想像してゐる。

龍夫　え、何です。

母　――

龍夫　ねえ、惡い事つて何です――例の病氣でも出たんですか。

母　例の病氣つて――

龍夫　お父さんの様な――

母　いいえ、そんな事ぢやない。

龍夫　ぢや、何です――ねえ、お母さん。

母　それがねえ。

龍夫　ええ。

母　まだはつきりと分りやしないけれど――もしかしたらねえ――わたしの想像なんだけれど――

龍夫　ええ――どうしたんです。

母　――もしかしたら姙娠してるんぢやないかと思ふんだけれど、

龍夫　えつ――本當ですか。

母　いいえ、まだはつきりとは分らないんだよ、でも一人で胸に持つておくのが苦しいからお前にだけ打開けるので、決してまだかつ子には云つておくれでないよ。

龍夫　ええ、分つてます、ですが――くに子がさう云つたんですか。

母　いいえ、唯わたしの想像なんだよ――何だか大變大儀さうだし、それに此の間、はばかりで吐いてゐたやうだから。

龍夫　さう云へば僕も二三日前吐いてるのかしらと思ふ事があつた。

母　お前も見たのかい。

龍夫　いいえ、便所の中でよくは分らなかつたんです、その時は氣にもとめなかつたんですがね、今思ふとどうもさうらしい。

母　困つたものだ。

龍夫　ええ――しかし、まさか。

母　さうも思ふけれどね。

龍夫　神經のせいですよ――まさかそんな所まで進んではゐないでせう、くに子だつて馬鹿ではないから。

母　さあ――わからないね。

龍夫　神經ですよ、神經ですよ。
母　さうだといいが——
龍夫　もう止して下さい、そんな事考へただけでもたまらない。
（頭をはげしくふろ）
母　（龍夫の樣子を見ろ、暗い表情になつてうつむく）
（長い間）
（龍夫、立つて納戸に入り手拭など取つて來ろ）
龍夫　僕、一寸風呂に入つて來ます。
母　さうかい——ねえ、龍夫。
龍夫　え
母　今の事はまだはつきりしないんだから、あんまり心配しないでね。
龍夫　ええ、分つてます。
母　本當だつた所でどうにかなるからね。
（龍夫下手へ退場）
（長い間）
（母、縫物をしてゐろ手を時々止めてぼんやりなろ）
母　（ふと下手を見て耳をすます）かつ子。
かつ子の聲　何ですか。
母　ゐるのかい、あんまり靜かだから一寸氣になつてね、一體何をしてるの。
かつ子聲　明日の教材研究ですの。
母　勉強なの——あんまりつめてすると體にさはるよ、お茶でも入れるから來ないかい。
かつ子の聲　ええ、でももう直ぐすみますから。
母　では、すんだらおいで。
かつ子の聲　ええ、
（この場のかつ子の聲ははつきり聞えなくてもよい）
（間）
（母、又時計を見上げろ、その時下手で音がすろ、母耳をすます、違つたのかしらと思ふ頃、靜かに襖があく、くに子青い顏で登場）
母　お歸つたね、（思はず立上つてくに子の手の包を取り火鉢の所に坐らせろ）
くに子　唯今。
母　おそかつたね。
くに子　ええ。
母　何處へ行つてゐたの。
くに子　あちらこちら。
母　さう——お夕飯は—
くに子　すんだり。
母　お前何だか大變顏色が惡いよ。

くに子　さう――草臥れたせいよ。

母　用心しなきやあね。

くに子　ええ。

（間）

くに子　お母さん、あたし大層つかれてるやうだからやすんでいいでせう。

母　いいとも、ぢや蒲團しいてあげやうか（立つ）

くに子　あら、お母さんいいのよ（立つ）

（二人がかりでお納戸に床をのべる。くに子は着物をぬぐ）

母　（ぬいだ着物を室の隅にかけながら）後でわたしが疊んであげるから一寸此處にかけとくよ。

くに子　すみません（まるでのめりさうに床に入る）

（母、くに子の肩や足の邊りの夜着をよくしてやる）

くに子　有難う。

（母、火鉢の所へ來る）

母　お前お茶でも入れてあげようか。

くに子　さうね、ぢや濃いのを一杯頂戴。

母　お湯がよくたぎつてるよ（お茶を入れてくに子の枕元に持つて行く）

くに子　すみません（腹ばひになつておいしさうに二杯續けてのむ）ああおいしかつた。

母　のどがかはいてゐたとみえるね。

くに子　ええ（横になつて夜着をかぶる）

（間）

母　ねえくに子、お前此の頃體がどうかあるんぢやないかい。

くに子　（夜着の中で）なぜ。

母　何だか大層顔色が惡い樣だからねえ、

くに子　――さう。

母　何處でも惡い所があつたらお母さんにだけはかくさずに云ふんだよ

くに子　――

母　お前、昨日もはばかりで吐いてたやうだねえ。

くに子　――

母　ねえ、どこかどうかあるのだらう。

くに子　いいえ、何ともありません。

母　それならいいけれど――ねえくに子、おこつちやいけないよ、お前もしかしたら妊娠したんぢやないかい。

くに子　（起上りながら）お母さん、何て事を仰有るの、いくら、いくらあたしが馬鹿だつて――（床の上に坐る）

母　いいえ、さういふわけぢやないけれど――

くに子　あんまりよ、馬鹿な想像は大ていにして下さい。

母　そんなにおこらなくつたつて――

くに子　だつてあんまりだわ。

母　いいえ、さうでなけりやそれでいいんだよ。

くに子　お母さん、あたしね、實は少し胃腸をこわしてるのよ、でも心配かける程の事もないと思つてかくしてたの、だつてお母さんがそんな事を想像してらつしやらうとは夢にも思はなかつたから。

母　胃腸をこはしてるのだつて。

くに子　ええ、それで今日はね、街に行つてお醫者様に見てもらつてついでに活動館をのぞいて來たのよ、だからあの風呂敷包みの中にはお醫者様にいたゞいた粉藥がはひつてるわ。

母　くに子、そりや本當なのかい。

くに子　本當ですとも、お母さんは疑ひ深いのね。

母　本當だつたらお母さんはどんなに安心だかしれないよ。

くに子　いいわ、嘘だと思ふんだつたらあたし明日にでもお醫者様から診斷書をもらつて來てみせるから。

母　いいえ、嘘だなんて思やしないけれどね。

くに子　お母さんも變な人ねえ(笑ふ)

母　まあ、さうだつたのかい、だつてね、あんな話があつた後だからわたしは悪い方へばかり考へたんだよ。

くに子　さう、ほんとに心配かけてすみません――それはさうとお母さん、あたしねもう結婚は止しにしたの。

母　まあなぜかい。

くに子　だつてね、あたしあの人に捨てられたのよ。

母　ああ、やつぱり――

くに子　あたし、何もかも云つてしまふわ、實はね、あの翌日いつまでもかくしたつて駄目だと思つて、一か八かまるで大きなかけでもする様な恐しい心で、うちの病氣の事を打あけたのよ、そしたら、そしたら――一言で捨てられたわ(泣く)

母　一言で――何と言つて、

くに子　子供の作れないやうな結婚だつたらいやだつて、あたし、二人の強い愛だけであたし達の一生位充分でせうつて云つたけど――あたしの、いいえあたし達の樣な家筋の者の苦しい心持なんか、普通の人にはまるで分らないのよ――そしてあの人はなぜ最初から打あけなかつたつてそりやせめるの――あたし、やつぱり兄さんの想像通り捨てられつちまつたわ、あんなにもあんなにも信じてゐたのに――あたし、口惜しくつて口惜しくつて――お母さんだけはあたしの苦しい心が分つてくれるわね、ね、ね(母の膝にうつぶして泣く)

母　(うなづきながら)分るとも、分るとも(泣きじやくるくに子の背をさする)

くに子　だから、いいの、いいの、何でもないのよ、あたしにはお

母さんがあるんだから——

母　可哀さうに、なんで、なんでこんな目に合ふのか——

くに子　でも、もう何でもないのよ、心配しないで頂戴（頭を上げて）あたし、もうすつかりあきらめたのよ、これから生れかはつた氣で一生懸命働くわ。

母　さうしておくれよ、こんな家に生れたのが、因果なんだからね。

くに子　え、え、大丈夫よ。

母　お前達には何も云つてないけれど、わたしなんかお父さんの病氣の出るまでは、このうちの事はまるで知らなかつたんだよ。よその人は知つてゐても、わたしには何も話してくれなかつたのでね。

くに子　まあ、さうだつたの。

母　何もかもが運命なんだからね、お前もあきらめておくれ。

くに子　ええ、大丈夫よ——でも、お母さん、世の中つて淋しいものねえ。

母　淋しいものだよ。淋しさが年を取るに從つて心にしみ入るやうでね。

くに子　あたし、何だか生きる事が恐しくなつたわ。

母　けれどね、自分の心を一人でも分つてくれる者がある間は寂しい中にも、小さな生き甲斐があるんだよ。

くに子　さうかしら——（靜かに泣く）

母　さあ、もう何も考へないでおやすみ、寒くなるよ。

くに子　ええ（横になろ）お母さん、あたし姉さんに顔が合はされないわ。

母　そんな事があるものか。

くに子　本當にすまなかつたわ、あたしはいけない裏切者よ、ねえお母さん、お母さんから姉さんによく詫びて頂戴ね、でも姉さんは免して下さるかしら。

母　姉妹の間で免すも免さないもあるものか、そんな事を心配するものぢやないよ。

くに子　ええ、でもお母さんからよく詫びて下さいな、でないとあたし苦しくつて仕方がないから。

母　よしよし、では今夜にもさう云つとくからね、

くに子　本當にさうして頂戴、今直ぐにね。

母　さあ、もう何も心配しないでおやすみ。

くに子　ええ、ぢやあたし草臥れてるからもうねむつてよ。

母　よくおねむりよ。

くに子　ええ、有難う。

（母、茶器を取つて立ち、火鉢の所でお湯をさしかへて下手へ退場すろ）

（間）

（くに子、靜かに頭をもたげる、そつと起上つて床の上に坐る、靜かに靜かに啜り泣く）

くに子　お母さん　すみません、あたし嘘をついてしまひました。——でも、でもどうしても本當の事が云へなかつたんです。——姙娠してるなんて、姙娠してる——（身もだえして泣く）

（間）

（そつと立つて湯のみにお白湯をつぎ、風呂敷包をといて白い藥包を出し、一緒にね床の枕元におく）

くに子　ああ、あんなにも愛して下さるのに——でもあたし、行きづまつてしまつたんです。（呟く）お母さん、許して下さい（藥包を開いてじつと見つめる、又包む、じつと空間をみつめる）

（間）

（又藥包を開いて見つめる、とうとう思ひきつて白湯をぐつと飲む、強く自分の胸を抱きしめる）

くに子　（ヒステリカルに歔欷す）——貴方は何も知らないのだ。今あたしが死にかけてゐる事も、——貴方のはじめての赤ん坊が闇から闇へ葬られてしまふのもね、——ああ、あたしは貴方を憎みたい、——貴方を殺せる程強く強く憎みたい、——そしたら、そしたら——胸がどんなにすつきりするだらう（をえつをかみしめて泣く）

（間）

（下手で音がする、くに子急に床へ入つて夜着を引つかぶる。龍夫ぬれ手拭を下げて登場）

龍　夫　くにさん、歸つたね。

くに子　——

龍　夫　よくねむつてるな（手拭をかけ、鏡臺の前で髮をときつける、靜かに下手へ入る）

（間）

（くに子の歔欷が微かにもれる）

——幕——



[illegible]永小[illegible]

婦人彙報

△結核患者の收容所

元東京音樂學校敎授吉丸一昌氏の夫人　子さんは、長女恭子さんが肺結核に犯され專門の博士すら見放したものを美しい母性愛と周到な看護法によつて全快させたことから思ひ立ち、今度鎌倉の靜かな見晴しのいい海岸材木座に肺結核患者の改容所をつくり、すでに數人の知人の面倒を見てゐられるとのこと。

△數字から見た東京の藝妓

東京市内外の藝妓の數は年と共に增加してゆくが、殊に昨年は市内に六ヶ所の新許可地が出來その設備もいろ〳〵考慮されてゐるが、警視廳保安部における最近(昭和四年一月末)の統計(花柳界關係の大體)は、

	市内	郡部
藝妓屋		
假建築	二二六六	—
本建築	七四〇	九三一
計	三〇〇六	九三一
藝妓數		
小	六六〇	二五九
大	六九五三	二五四六
計	七六一〇	二八〇五
待合茶屋		
假建築	六八九	—
本建築	一四九四	四五九
計	一五六三	四五九

△婦人公民權撤回さる

五日衆議院本會議に於て望月内相は、この際議員提出婦人公民權附與に關する府縣制改正法案を撤回すると述べたので、民政黨側躍氣となつて猛烈な反對の彌次を飛ばしたが結局、撤回するや否やを採決に問ひ多數をもつて撤回に決定し原案婦人公民權は與黨代議士の變節により葬り去られた。

△婦人消費組合の市議戰示威

牛込區市ヶ谷本村町の婦人消費組合協會では市會議員選擧に際し、無產家庭婦人の立場から要求貫徹の示威運動を起すことになり、三月六日午前九時より奥うめお女史をはじめ全員總出で松坂屋、松屋、三越新宿布袋屋等の百貨店前に陣取り市會の改選に對する聲明書一萬枚を撒き大いに氣勢をあげた。

一、市營住宅の增設家賃の値下

二、市立病院產婆院結核療養所等の增設。

三、兒童健康相談所及び託兒所の增設、姙婦保護施設

四、婦人職業紹介所の擴張

五、方面委員に女を採用する事

奥うめお女史は語る『無產家庭婦人としての要求をひつさげ眞に一般市民のための生活のために鬪つてくれる候補者を推薦し全力をつくし應援したいと思ひます』と。

△市政淨化協議

婦選獲得同盟では三月七日午後一時から市議戰對策協議會を開催し市會淨化の方法について協議した。

△婦人ホーム設立

南米ブラジル・サンパウロ市がルボンプエー街に六年前から『聖州義塾』を設立し在伯同胞青少年百名に理想的敎育を施してゐる牧師小林登利氏は今度同地に『婦人ホーム』を設け在伯同胞の結婚難を解決しようとの計劃でこの程歸朝し目下下谷下車坂町三九禁酒ホテルに滯在して雄飛婦人を募集中

△新大統領婦人を祝つて

米國新大統領フーヴァー氏が今日の大成功をかち得た半面にはヘンリー夫人の隱れたる功績の數々が織込まれてゐる。かの歐洲大戰に米國避難民保護の大事業をフーヴァー氏と共に引受け第一戰に立つて活動し米人救濟を完全に成功した。この偉大な夫人の美徳をしのぶため、もう一つには白聖館第三十一代目の女主人公として納まつた夫人を祝する意味から日本少年赤十字社では今回美しい日本の振袖人形を送つて日本少年少女の赤心を披瀝することになつた。人形は全社員を代表するといふ意味から背丈一尺五寸、黑いふさ〳〵した髮、生きたやうな美しい眼、すべて日本乙女達を表徵したものである。

△日本の古着をアメリカに輸出

日本人の着古して最早役に立たぬ木綿の古着をアメリカが買ふ。夥しい勢で金額にして百五、六十萬ドル、目方にして凡そ五千五百萬ポンドの古着が昨年中に輸出されてゐる。古着の主な用途は雜巾で、工場の機械や大建築の窓硝子や全國に普及せる自動車の拭き掃除に使はれる。アメリカでは之をワイピングクローズといふ。ワイピングクローズを裁ち切つたあとの斷片は建築材料にするルーフィング・フエルトが卽ちそれである。

古着の對米輸出は五年前に始つたもので、その輸出が年々增加して昭和三年十月末迄すでに五千三

百萬ポンドを超えてゐる。大藏省の貿易表にはボロの輸出高として昨年は七千萬斤、價額は八百萬圓が示されてある。

△電話交換手のアクセントを統一

これまで兎角に電話交換手のアクセントの具合で、言葉の行違ひとなりいろ／＼面倒なことを引起してゐる實例が多いので、アクセントを統一するため今度中央電話局に語調の委員會を組織し調査をはじめた。まづ用語集を作りアクセントの統一定義を急ぐことになつた。

△知識婦人が新聞配達

市外杉並町高圓寺、田中むつゑ（二〇）さんは地方の女學校を卒業して上京し某大學の聽講生として勉學してゐたが、今度思ひ切つた自己革命を斷行して高圓寺の東京日日新聞出張所で婦人毎日新聞の配達を受持つてゐる。毎曉三時に起きて元氣な男子の配達夫の間に伍してヒケも取らずに働いてゐるので、附近一帶の人々が感嘆の舌を卷いてゐるとのこと。

△美人畫を描く聾唖生

小石川指ヶ谷の東京聾唖學校中等部日本畫科を卒業する上山りやう子さんは繪を描くことに天才的な技倆をもつてゐるので學校ではその前途を囑望してゐるとのことである。女の聾唖者には美人畫を描くものが多いといはれてゐる。

△英米の女學生は男子よりも多い

最近の調査によれば世界各國に於ける專門學校及大學の學生中女子の數は左の割合で英米に於ては女子の方が男子よりも多いといふ現象を呈してゐる。

一、	イングランド	六二%四
二、	米國	五八%六
三、	アイルランド	四八%七
四、	ロシア	四五%
五、	エスパニヤ	三八%五
六、	ニユージーランド	三七%
七、	ラトヴイア	三六%六
八、	フインランド	三五%七
九、	ポーランド	三二%
一〇、	カナダ	二八%六
一一、	メキシコ	二五%五
一二、	フランス	二四%四
一三、	イタリー	二一%三

以上の如く女子學生が北歐諸國に於て比較的多いのに反し、學生の本場といはれるドイツは遙かに下つて第三十二番目に落ち僅か八%八にしか當らず日本よりも少く支那と大差がないことになつてゐる。

△舞踏踊り子の取締り

近頃急激に發達したダンスホールは市內に四谷區の四ヶ所をはじめ、既に、十五ヶ所、隣接郊外に四ヶ所、合計十九ヶ所に達し、この歡樂の世界に活躍してゐるダンサーは百八十名であるが、過渡期の所產だけに風俗上の問題を起し易く、警視廳では昨年ダンスホール及びダンサーの取締規則を設けたが、いまゝでの規則では充分な取締が困難だといふところから根本的の取締令を考究してゐるが、大體眞面目な社交的意味に於ける舞踏は當局としても何等干涉しないが、ダンサーに對しては

一、舞踏に興味を持つ淑女たる事。

二、相當の教養と學力あるものを第一條件として許可すること

になつたが、尙ほ職業を始め本籍、現住所、氏名、年齡、經歷の大要と共に寫眞を貼付したダンサー『免許狀』を携帶させ、モーローダンサーを防止するとのこと。

△『窓』復活

休刊中であつた婦人文藝雜誌『窓』は、舊同人白石濟子、佐々木梅子、伊福部敬子の他、小林ふみ子、岡村須磨子、白石京子の新鋭を加へて四月より復活再刊することになつた。發行所は東京市外野方町新井三一三、定價一部十二錢。

△立正女子職業學校

東京府下荏原町中延旗ヶ丘にある立正女子職業學校は女子の職業教育に對する一施設として創設されたもので、晝間、夜間の二部に分れ、本科第一部、第二部、專修科、研究科等の各科を設け職業教育の徹底をはかる由、三月末日までに願書提出、試驗は簡單なる口頭試問のみであるとのこと。

△婦人公民權演說會

社會民衆婦人同盟と社會民衆黨巢鴨分會共同との主催による婦人公民權大演說會は二月七日午後七時から大塚終點の豐島亭に於て開催された。定刻既に滿員の盛況を示し、聽衆は堂に溢るゝばかりであつた。しかもその半數以上は婦人であつたことは、婦人の政治的自覺が急速に進んで來たことを雄辯に物語るものであつた。殊に子供を連れた相當の年配のおかみさんが多かつたことは多大の希望を與へるものであつた。八名の辯士が夫々熱辯を奮ひ、午後十時盛會裡に散會した。

編輯後記

團結力の尊さを私はしみ〲と感じた。それは今更の事ではないが、私達は個々切々に愈々磨きはげまなければならない、と共に、いよ〱密接に力を集めなければならない。それはもろ〱の方面に於てもさうである。そして謹しまなければならないのは、小我である。

「全女性進出の歌」については、各先輩雜誌社から非常な助力を頂き感謝してゐる。どうか全日本的な大きなものとして殘したい。といふより世界的にうたはれたいものである。

資本も實力も乏しい我々であるが、女人藝術を支持してゆくのは全國女性の心からなる應援と、社人の何事をも凌いでゆかうとする決意である。總ての女性の結束の力の現はれであるを誇るやうに早くなりたい。金力は貧しいが氣力は滿ち溢れてゐる。

講演部が成立して既報のごとく甲府へ出かける。あたしは八が嶽の裾が見たい〱といつてゐるので、馬にくりつけて連れてつてやるからと誘惑された。とても講演など出來はしないが、名前を書かせないと連れてゆかないと脅かして誰かが書いてしまつた。だから當日は壇上からおじぎだけをするつもり。（時雨）

元氣な若い人々が次々にとその新しい顏を見せてくれて、女人藝術社はつねに賑かだ。此頃では私なんかは隅の方で小さくなつてゐた方がいい氣さへもする。所謂サンパさんなる私のおやくめはもう濟んでゐるやうなものだ。しかし生れた子の生ひ立についてはその母人とともに多少の責任がサンパさんにもあるのだ。一票の貴さ、それを大切がつて私は今も將來も女人藝術社での一員だ。枯木も山のにぎはひ自ら貧して曰くこれで、私はなかなか、ねばりつよい女。（花世）

全女性進出の歌は素晴しいであらう。與謝野晶子女史五十年祝賀會は、そして愛讀者の會、講演旅行のことは——四月は何と希望の多い月だらうか。松村喬子さんの「地獄の叛逆者」は人々の注意を惹くものと思ふ。四五日まへ喬子さんは遊びに來られたが中々しつかりした感じの人だ。大阪から名古屋と娼妓の生活を送つて逃れてきただけに、永い苦しみの影が顏にうかんでゐた。かうした人々が實際の體驗の上にたつて公娼廢止の叫びをあげたら、百千の議論よりも力強いことであらう。（八木）

春が來たので私の家の周圍の野原にも青い芽がふき出た。野も芹も蕗の薹もまつ黑い土の下から頭をもたげ出した。生れ出るものがその精力をありつたけ發揮するのが春の自然界である。それに似てわが『女人藝術』の先月號の賣行はすばらしいものであつた。どこの本屋も品切れ。注文が殺到しても、社には一册もないのでそれに應ずることが出來なかつた。今月號は先月號に劣らない編輯方針の下に市場に送り出したから、注文殺到に『女人藝術社』では手傭人までが手ぐすね引いて待ち構へてゐる。御購讀下さい。（かど江）

郊外の邸つづきの小徑に、沈丁花の匂ひがたゞよひ初めた。畑は土が黑々と光つて、麥の穗が寸ばかりのびてゐよう。これから少し早く仕事を片付けて、みんなで夕方から散歩に出かけようぢやないの」と、こないだ時雨さんがおつしやつた。（しづか）

三月が來て埃の一ぱいな西南の風が街を走りはじめた。ぼかぼかと暖かい陽ざしに花のたよりも間近いだらう。三月號のすばらしい人氣に賣行に何とも云へないいい氣持が胸の中で渦卷く。

社においてある本が毎日〱少くなつてゆくその度に私は悲鳴をあげる悲しいんぢやない有がたいのだけれど後から申込んでくる讀者の申込みに應じられないと困るなあ、と思ふので。（みどり）

春が來てとても嬉しい。みんなの編輯後記を見たら、どれもこれも春の歡びの唄ばかりだ（素子）

女人藝術定價表

	定價	送料
一部	四拾錢	一錢五厘
六部	二圓參拾錢	
十二部	四圓五拾錢	

△誌代の拂込みは成可く振替を利用して下さい
△郵便切手代用は一割増の事。

昭和四年三月十七日印刷
昭和四年四月一日發行
（毎月一回 一日發行）

發行者 長谷川時雨
編輯者 素川絹子
印刷者 生田花世
印刷所 日清印刷株式會社
東京市牛込區左内町三十一
發行所 女人藝術社
電話牛込(34)一七八九
振替東京七一五八二五

大賣捌 東京堂 大東館 北隆館 東海堂



春!!
御洋装の御支度に!
薄地羅紗　絹織物等
豊富に取揃へて有ります


御洋裝と
脚の美觀？
それはたゞ
お靴の御撰擇に依ります
お靴の御用は
どうぞ
セキドへ
各宮家
セキドの靴と鞄
賜御用
本店
横濱市中区辨天通二丁目
電話本局 〇二四四番
合資會社
セキド靴店
出張店
京橋区彌左エ門町七番地
電話京橋 三七四六番



オリエンタル婦人帽子店
流行の粋！
春のお帽子
豐富にあります
オリエンタル婦人帽子店
本店 東京市麻布區六本木町十番地
電話 青山 二八六一番
支店 東京市京橋區數寄屋橋通銀座交叉點際
電話 京橋 三七四六番

長谷川時雨氏・神近市子氏・今井邦子氏序

生田花世小説集

（定價壹圓八拾錢送料拾貳錢）

燃ゆる頭

本書收むるところの小説二十數篇はいづれも近代婦人生活の痛切なる女性苦及び女性愛の諸相を描破する。**『燃ゆる頭』『或る秋の夕の事』**等は金と女の事を、**『淺草の鐘』『群集と母子』**等は虐げらるる子供とその環境を、**『獅子は抗しがたし』『三角關係の一端より』**等は二人の女と一人の男との苦しき關係を**『南方の桃源郷』『峠の木の枝』**等には農村を、其他都會と田園とに於ける女人生活を取扱ひて、態度質實、筆致强健、明治、大正、昭和の婦人文藝界における一異彩たることをうたがはない。

東京市小石川區
大塚上町十五

中西書房

振替七二〇五番

三上於菟吉長篇小說集

第二卷

黑髮

惡魔の戀

颱風

新潮社近刊



身も心も
長閑に暮しませう

どうも逆上氣味で頭痛や眩暈がしたりこしが下りて腰足が冷えたり子宮病血の道で悩の方は直ぐ召上れ中將湯を
身を健かに春を樂しく暮すには是非々々

婦人良藥
中將湯

朝夕にお忘れなく……

定價

主効

子宮病、血の道、こしけ、ヒステリー、月經不順、下腹痛
頭痛、眩暈、腰足冷込、不眠症、産前産後、つわり、血脚氣

本舗 津村順天堂

本店 東京市日本橋區通三丁目 電話本局六二、…
支店 大阪市…一丁目 電話…二五、…

第二巻 第四號

定價金四十錢（送料金一錢五厘）

昭和三年九月六日第三種郵便物認可
昭和四年三月十七日印刷納本
昭和四年四月一日發行（毎月一回一日發行）